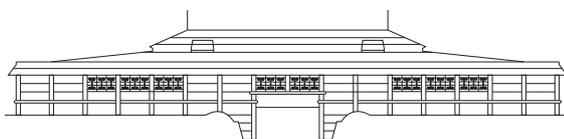


令和元年度 紀伊風土記の丘年報 第47号

紀伊風土記の丘研究紀要 第9号



和歌山県立紀伊風土記の丘

令和元年度

紀伊風土記の丘年報

第47号

目 次

I 施設の概要	1
II 博物館活動	2
1 展示	2
2 普及活動	14
3 研修・実習等	16
4 広報活動	23
5 ボランティア活動	23
6 管理運営・環境整備	25
7 特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業	26
8 和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画策定事業	30
III 入館者の動向	32
IV 紀伊風土記の丘協議会	33
V 調査・研究	33

I 施設の概要

当館は、特別史跡「岩橋千塚古墳群」の保全と公開活用をはかるため、1971（昭和46）年8月1日に設置された、県立の考古・民俗系博物館施設である（登録博物館1972（昭和47）年6月20日）。総面積672,988㎡（特別史跡629,944㎡）の園内には、約500基の古墳や文化財民家集落、万葉植物園、資料館などを整備している。

①古墳群

園内には約500基の古墳が点在している。石柵と石梁のある特徴的な構造を持った横穴式石室や、竪穴式石室・箱式石棺など14基の古墳の内部施設を見学できるように公開している。園内は、ハイキングコースをとまなっており、自然に触れながら文化財に親しめるよう整備している。特別史跡の面積は629,944㎡、管理団体は和歌山県である。

②移築民家

園内には県内各地より移築された国指定重要文化財「旧柳川家住宅 主屋・同前蔵」及び「旧谷山家住宅」、県指定有形文化財「旧谷村まつ氏住宅」及び「旧小早川梅吉氏住宅」を保存・公開展示している。国指定2件は日時を定めて床上の公開やイベント等を実施、県指定2件は体験学習の場として活用し、茅葺屋根の保全のため日常的にカマドやイロリを使った燻蒸を実施している。

③和船収蔵施設

館蔵の県指定有形民俗文化財「日高地域の地曳網漁用具及び和船」の一部は、屋外の和船収蔵施設で保存展示、その他の有形民俗資料や文献資料は資料館内収蔵庫にて保管（非公開）している。

④万葉植物園

万葉植物を中心とした植物園で、紀伊国と関連ある四季折々の万葉植物が鑑賞できる。万葉集に歌われた約170種の植物のうち約80種を植栽し公開している。敷地面積は1,650㎡、万葉歌碑5基を設置している。

⑤復元竪穴住居

和歌山市鳴神の音浦遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居跡をモデルに平成8年に復元し、古代体験学習の場として活用している。木造茅葺で、面積は23.40㎡である。

⑥資料館

弥生時代の高床倉庫をイメージして建てられた資料館では、岩橋千塚古墳群や県内の遺跡から出土した遺物を中心に考古資料及び民俗資料を常設展示し、季節ごとに開催する企画展・特別展で考古学・民俗学に関するテーマ展示を実施している。また、古代モノ作り体験などの体験学習の場としても供している。鉄筋コンクリート平屋一部地階で、延面積1,592.50㎡（展示室面積517.6㎡）である。

紀伊風土記の丘に関連する指定文化財 一覧

国指定特別史跡	岩橋千塚古墳群	面積 629.944㎡	
国指定重要文化財	旧柳川家住宅 主屋 前蔵	木造瓦葺 2階建 木造瓦葺 2階建	131.7 ㎡ 62.5 ㎡
	旧谷山家住宅 主屋部分 倉部分	木造瓦葺 2階建 木造瓦葺平屋建	89.25 ㎡ 19.2 ㎡
	和歌山県大日山 35号墳出土品		園内より出土
県指定有形文化財	旧谷村まつ氏住宅	木造茅葺平屋建	62.2 ㎡
	旧小早川梅吉氏住宅	木造茅葺平屋建	38.4 ㎡
	有本銅鐸 1点		和歌山市内より出土
	小松原銅鐸 1点		御坊市内より出土
	立野遺跡出土品 532点		すさみ町内より出土
県指定有形民俗文化財	日高地域の地曳き網漁用具及び和船 用具 87点 文献資料 3点 和船 1艘		日高町内より寄贈
	保田紙の製作用具 用具 54点		有田川町内より寄贈

II 博物館活動

1 展示

①企画展および特別展

春期企画展「縄文・弥生の「海の道」と「陸の道」－紀伊半島と東西交流－」

期 間：平成31年3月23日（土）～令和元年5月12日（日）

会 期：37日（当該年度分）【前年度38日間】

内 容：紀伊半島の西側に位置する和歌山県は、紀伊山地の深い山々に覆われ、悠々と流れる大河・紀ノ川や熊野川をはじめとする多くの河川が、紀伊水道や熊野灘に注ぎ、瀬戸内海や太平洋につながっていきます。先人たちは、この地の河岸段丘や、山地から開けた数少ない平野部に、逞しく生活を営んできました。

このような地理的特徴から、縄文時代より海路や陸路を通じて人々や文物が頻繁に行き交い、さらに弥生時代には稲作や鉄などの新しい技術や文化が西方から伝来しました。

県内の縄文・弥生時代の遺跡からは、こうした人々の交流を示す様々な遺物が出土しています。瀬戸内、近畿、東海、関東、東北地方各地の特徴をもつ土器や、北陸地方産の石器や玉類などは、紀伊半島と各地との地域間交流の歴史を物語ります。

例えば、弥生時代前期から中期における紀中・紀南地域では、東海地方や瀬戸内地方との海路を通じた交流が盛んであり、とりわけ現在の愛知県、三重県の各地から、人々が土器を携えてたびたびやって来ていたことが遺跡の出土品から明らかになっています。それは、稲作がはじまり、集落が大きくなり、刻々と社会が変化していくこの時代に、日本列島の広域で人々の往来が特に活発化する現象と、深く関係していると考えられます。

本展では、このような紀伊半島における縄文・弥生時代の交流史をひも解くため、和歌山県内から出土した考古資料を通じて、人々が行き交った「海の道」と「陸の道」を辿ります。

入館者数：5,089人【前年4,281人】 内有料入館者数：1,039人【前年747人】

遺跡名	資料名	時代	員数	所蔵
鳴神貝塚（和歌山市）	翡翠製 小玉（糸魚川産）	縄文時代	1	和歌山県教育委員会
船岡山遺跡（かつらぎ町）	翡翠製 大珠（糸魚川産）	縄文時代中期	1	和歌山県教育委員会
西飯降遺跡（かつらぎ町）	石棒（東北地方系 成興野型）	縄文時代晩期	1	和歌山県教育委員会
徳蔵地区遺跡（みなべ町）	縄文土器 深鉢（在地系、東海系、中部・関東系）	縄文時代中期	16	みなべ町教育委員会
	サヌカイト製削器、石匙、石鏃、搔器、剥片（二上山産）	縄文時代中期	7	みなべ町教育委員会
	サヌカイト製剥片（金山産）	縄文時代中期	2	みなべ町教育委員会
大水崎遺跡（串本町）	縄文土器 深鉢・注口土器（在地系、中部・関東系、北陸系）	縄文時代中期・後期	12	和歌山県教育委員会
丁の町・妙寺遺跡（かつらぎ町）	縄文土器（中津式）	縄文時代後期	5	かつらぎ町教育委員会
	定角式磨製石斧（蛇紋岩製 北陸地方系）	縄文時代後期	1	
	磨製石斧	縄文時代後期	2	
鳴神貝塚（和歌山市）	縄文土器 深鉢（滋賀里Ⅳ式）	縄文時代後期	1	和歌山県教育委員会
川辺遺跡（和歌山市）	縄文土器 深鉢（舟橋式） 浅鉢（滋賀里Ⅳ式） 深鉢（東北地方系 大洞式）	縄文時代晩期	4	和歌山県教育委員会
立野遺跡（すさみ町）	県指定文化財 立野遺跡出土品 木製品 竪杵、舟形容器、さじ、平鍬、斧柄、泥除、琴状木製品	弥生時代前期	19	和歌山県教育委員会

遺跡名	資料名	時代	員数	所蔵
立野遺跡（すさみ町）	遠賀川系土器 壺、突帯文土器 深鉢、条痕文系土器（東海地方系 水神平式）	弥生時代前期	7	和歌山県教育委員会
	石棒、打製石斧、磨製石斧	弥生時代前期	5	和歌山県教育委員会
徳蔵地区遺跡（みなべ町）	遠賀川系土器 壺・甕	弥生時代前期	4	みなべ町教育委員会
	突帯文土器 深鉢	弥生時代前期	11	みなべ町教育委員会
	横鍬 広鍬	弥生時代前期	2	みなべ町教育委員会
	石棒、打製石斧、石鏃、扁平片刃石斧、石庖丁、磨石	弥生時代前期	12	みなべ町教育委員会
	突帯文土器 深鉢（生駒西麓産）、条痕文系土器 深鉢（東海地方 馬見塚式）、浮線網状文土器 鉢（中部地方 氷I式）	弥生時代前期	8	みなべ町教育委員会
堅田遺跡（御坊市）	遠賀川系土器 壺、甕、鉢、蓋	弥生時代前期	7	御坊市教育委員会
	突帯文土器 深鉢	弥生時代前期	2	御坊市教育委員会
	遠賀川系土器 壺（和泉系）	弥生時代前期	1	御坊市教育委員会
	遠賀川系土器 壺・甕（瀬戸内地方系）	弥生時代前期	3	御坊市教育委員会
	遠賀川系土器 壺（東海地方系）	弥生時代前期	1	御坊市教育委員会
	条痕文系土器 壺・甕（東海地方系 水神平式）	弥生時代前期	2	御坊市教育委員会
	石鏃、石錐、打製石剣、小型扁平片刃石斧、大型磨製石斧、太型蛤刃石斧、磨製石庖丁、環状石斧、用途不明石製品、石棒	弥生時代前期	13	御坊市教育委員会
	竪杵	弥生時代前期	1	御坊市教育委員会
八丁田圃遺跡（田辺市）	突帯文土器 深鉢	弥生時代前期	1	田辺市教育委員会
	遠賀川系土器 壺	弥生時代前期	1	田辺市教育委員会
	櫛描文土器 広口壺	弥生時代中期	1	
	櫛描文土器 東海地方の影響を受けた壺	弥生時代中期	2	田辺市教育委員会
	櫛描文土器 直口壺	弥生時代中期	1	田辺市教育委員会
	突帯文系土器の系譜を引く甕	弥生時代中期	1	田辺市教育委員会
	条痕文系土器 広口壺・甕（東海地方系 岩滑式・続水神平式）	弥生時代中期	6	田辺市教育委員会
	貝殻描文土器 広口壺（東海地方系 朝日式）	弥生時代中期	1	田辺市教育委員会
	扁平片刃石斧	弥生時代中期	1	田辺市教育委員会
高見遺跡（みなべ町）	平沢型壺（東海地方東部・中部高地系）	弥生時代中期	1	みなべ町教育委員会
熊岡Ⅱ遺跡（みなべ町）	条痕文系土器 広口壺（東海地方系 岩滑式）	弥生時代中期	1	みなべ町教育委員会
大古Ⅱ遺跡（白浜町）	櫛描文土器 壺（在地系／東海地方系 朝日式・貝田町式）	弥生時代中期	8	和歌山県教育委員会
	絵画土器	弥生時代中期	2	和歌山県教育委員会
八反田遺跡（新宮市）	櫛描文土器 壺（在地系／東海地方系 貝田町式・条痕文系土器）	弥生時代中期	12	和歌山県教育委員会
笠嶋遺跡（串本町）	突帯文土器 深鉢	弥生時代前期	3	和歌山県教育委員会
	甕	弥生時代終末期	1	和歌山県教育委員会
	壺（東海地方系 東遠江菊川式）、高杯、甕（東海地方西部系）	弥生時代終末期	4	和歌山県教育委員会

遺跡名	資料名	時代	員数	所蔵
太田・黒田遺跡（和歌山市）	遠賀川系土器 壺、紀伊型甕、木製高杯	弥生時代前期	3	和歌山県教育委員会
井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡（和歌山市）	突帯文土器 深鉢	弥生時代前期	5	和歌山県教育委員会
	条痕文系土器 深鉢（東海地方 馬見塚式）、浮線網状文土器 鉢（中部地方 氷Ⅰ式）	弥生時代前期	2	和歌山県教育委員会
	遠賀川系土器 壺、甕、鉢	弥生時代前期	12	和歌山県教育委員会
	遠賀川系土器 壺（瀬戸内地方系）	弥生時代前期	1	和歌山県教育委員会
	紀伊型甕	弥生時代前期	1	和歌山県教育委員会
	石包丁、敲石、サヌカイト製剥片	弥生時代前期	3	和歌山県教育委員会
神前遺跡（和歌山市）	遠賀川系土器 壺・蓋	弥生時代前期	3	和歌山県教育委員会
	遠賀川系土器 壺・甕（瀬戸内地方系）	弥生時代前期	8	和歌山県教育委員会
	突帯文土器 深鉢（生駒西麓産）	弥生時代前期	1	和歌山県教育委員会
	紀伊型甕	弥生時代前期	2	和歌山県教育委員会
	石庖丁、打製石剣、太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧	弥生時代前期	6	和歌山県教育委員会
和歌山市有本出土	県指定文化財 有本銅鐸	弥生時代中期	1	和歌山県教育委員会
みなべ町晩稲出土	下の尾銅鐸	弥生時代中期～後期	1	和歌山県教育委員会
西飯降Ⅱ遺跡（かつらぎ町）	櫛描文土器 壺、甕	弥生時代中期	5	かつらぎ町教育委員会
	櫛描文土器 広口壺（生駒西麓産）	弥生時代中期	1	
	絵画土器（シカ）（大和産）	弥生時代中期	5	
	大和甕（大和産）	弥生時代中期	1	
	甕（瀬戸内地方系）	弥生時代中期	1	
	紀伊型甕	弥生時代中期	2	
	磨製石剣、打製石剣、石鏃、石庖丁、石庖丁未製品、柱状片刃石斧	弥生時代中期	8	

夏期企画展「すき・すき・からすき～田んぼにお水が入るまで～」

期 間：令和元年7月20日（土）～9月1日（日）

会 期：38日【前年度38日間】

内 容：今からおよそ50年前まで、和歌山の田んぼでよく使われた農具の一つに「カラスキ（犁）」があります。機械化する以前の稲作や畠の作業では、農家で飼われた牛にカラスキを引かせて、田んぼや畠の土をすき起こすことが行われましたが、じつはこの農具の歴史は古代にまで遡ります。

カラスキは、「大化の改新」が行われた7世紀中頃に、大和政権による農業技術改革により国大陸から日本へ本格的に導入されたことが、近年の研究によって明らかになってきました。もともと古代の渡来系農具であったカラスキは、その後、およそ1300年ものあいだ基本となる形が代々受け継がれ、紀州の稲作に欠かせない農具として定着していきました。

本展では、長いあいだ和歌山の農家の仕事の傍らにあり続けた鋤・鍬・犁などの農耕具について、県内の民俗資料および考古資料をあわせて展示し、知られざる紀州の農具の歴史を振り返ります。とくにカラスキについては、古い形とされる長床犁に焦点を当て、その地域的な特色や、技術の移り変わり、耕作や牛に関わるくらしや信仰などについて紹介します。

入館者数：1,693人【前年2,027人】 内有料入館者数：625人【前年794人】

市町村	遺跡名	資料 / 器種等	点数	時代	所蔵
【考古資料】					
すさみ町	立野遺跡	打製石斧（土掘具）	1	弥生時代前期	当館蔵
		曲柄平鍬	1		
		曲柄平鍬（大型）	1		
		直柄平鍬	1		
		石庖丁	1		
御坊市	堅田遺跡	直柄平鍬	1	弥生時代前期	御坊市教育委員会
		鋤（未製品）	1		
和歌山市	井辺遺跡	曲柄平鍬	1	弥生時代～古墳時代	和歌山県教育委員会
		又鍬（未製品）	1		
		田下駄	1		
		横槌	1		
	鳴神Ⅱ遺跡	鋤柄	1	古墳時代	当館蔵
		又鍬	1		
	田屋遺跡	平鍬	1	古墳時代	当館蔵
大日山 35 号墳	牛型埴輪	1			
大日山 43 号墳	U 字形鍬先	1			
有田川町	野田地区遺跡	犁（木製品）	1	平安時代 (11 世紀)	有田川町教育委員会
		犁（木製品）	1		
		土師器椀	1		
		台付皿	1		

市町村	地域	資料名	点数	時代	所蔵	
【民俗資料】						
和歌山市	岩橋	カラスキ（長床犁）	1	近現代（20 世紀）	当館蔵	
	上野	カラスキ（長床犁）	1			
	木ノ本	カラスキ（長床犁）	1			
		カラスキ（長床犁）	1			
	松江西	スキ	1			
		フロクワ	1			
かつらぎ町	花園	カラスキ（中床犁）	1	近現代（20 世紀）	かつらぎ町教育委員会	
有田川町	清水	カラスキ（中床犁）	1	近現代（20 世紀）	有田川町教育委員会	
		クワ（風呂鍬）	1			
御坊市		カラスキ（中床犁）	1	近現代（20 世紀）	御坊市教育委員会	
		カラスキ（中床犁）	1			
		スキ	1			
上富田町		カラスキ（長床犁）	1	近現代（20 世紀）	御坊市教育委員会	
		カラスキ（長床犁）	1			
		黒牛模型（モモちゃん）	1			
		飼い葉桶	1			
		牛のブラシ	1			
		オナグラ・シリガセ	2			
和歌山市	南畑	オナグラ・シリガセ・クラ	3	近現代（20 世紀）	当館蔵	
	和佐中	オナグラ	1			
新宮市	熊野川町篠尾	オナグラ	1	近現代（20 世紀）	当館蔵	
		オナグラ	1			
和歌山市	西庄	【木本八幡宮御田用具】				木本八幡宮
		カラスキ（儀式用）	1	近現代（20 世紀）		
		エブリ（儀式用）	1			
		クワ（儀式用）	1			
		ササラ	1			
		カマ（儀式用）	1			
		案	1			
三方	1					
かつらぎ町	上天野	【天野の御田祭用具】				天野の御田祭保存会
		一石（黒牛面）	1	近現代（20 世紀）		
		スキ（儀式用）	1			

市町村	地域	資料名	点数	時代	所蔵
かつらぎ町	上天野	クワ（儀式用）	1	明治時代	天野の御田祭保存会
印南町		カラスキ絵馬	1	明治時代	当館蔵
和歌山市		クツゴ（牛の口籠）	2	近現代（20世紀）	
		カラスキ（短床犁）	1		
	上野	カイガ（馬鍬）	1		
	岩橋	ヨツゴ（歯減らし馬鍬）	1		

秋期特別展「開かれた棺－紀伊の横穴式石室と黄泉の世界－」

期 間：令和元年9月28日（土）～12月1日（日）

会 期：57日【前年度56日間】

内 容：一昨年、古墳時代の紀伊最大級の前方後円墳である天王塚古墳の発掘調査が行われ、8本の石梁と2枚の石柵を有し、遺体を安置する墓室である玄室の高さが5.9mにも及ぶ壮大な横穴式石室が開かれました。国内2番目の高さを誇るこの石室は、結晶片岩の割石を積み上げ、玄室内に石棺や木棺を持たないいわゆる「開かれた棺」であること、玄室と通路である羨道の間が一段狭くなりその入口を板石で閉塞すること、玄室に石柵や石梁を有すること等の特徴を持つ岩橋型横穴式石室で、隣接する畿内地域の石室とは構造や埋葬方法が異なる一方、その源流は朝鮮半島の百済や九州に求められることが指摘されています。

紀伊では、この岩橋型の他にも、畿内系、九州系、折衷形の石室が存在します。石室の形は、古墳を造った各地の首長や集団の出自や政治関係、死生観をも反映しており、多様な石室は地域色豊かな紀伊の古墳文化をよく表しています。6世紀の初頭に岩橋千塚古墳群で岩橋型横穴式石室が出現すると、地域首長の在地支配の様相を反映するように、6世紀中葉の天王塚古墳の築造をピークに紀伊北部の各地の首長もこの石室を採用するようになります。一方、紀伊中部では、石材の一部に紀北の結晶片岩が用いられる例があるものの、海辺の古墳を中心に九州系の石室が造られるなど北部とは異なる様相が見られます。

前方後円墳の築造が終わる6世紀末以降は、岩橋千塚古墳群で継続して岩橋型が造られる一方、紀伊北部においても畿内系の石室や玄門に立柱石を備える新たな形態の石室が登場し、切石や版築など畿内の影響を受けた石室が県内各地に広がりを見せます。九州系の石室が単発的に造られていた紀伊南部でも、石室内に石棺を備え、埋葬方位が畿内と共通する石室が増加していきます。この時期は、これまでの地域首長による在地支配が弱まる一方で、屯倉の設置に見られるようなヤマト政権による新たな地域支配が強まると考えられ、石室の様相の変化にもこうした各地域の集団関係や政治動向の変化が映し出されているものと見られます。

そこで本特別展では、紀伊の北部・中部・南部を対象に、各地域における横穴式石室の様相をその導入期から終焉までを通じて紹介し、石室構造や石室出土資料とその変化に映し出される古墳時代後期の紀伊における集団関係とその社会について考えてみたいと思います。

入館者数：4,681人【前年4,161人】 内有料入館者数：722人【前年534人】

遺跡名	資料名	点数	所蔵・保管
序章 横穴式石室のはじまり－畿内と紀伊の様相－			
藤の森古墳	鉄鏃	4	大阪府教育委員会
	鉄釘	6	大阪府教育委員会
	鏃	4	大阪府教育委員会
	短甲片	6	大阪府教育委員会
	ガラス製小玉	2連	大阪府教育委員会
陵山古墳	須恵器 甗・壺 土師器 高杯・壺	4	橋本市教育委員会
	短甲 頸甲 小札 金銅装冑片 サルボ形鉄製品 蛇行状鉄剣 鉄槍 鉄鏃 鉄鉾 石突	20	橋本市教育委員会

遺跡名	資料名	点数	所蔵・保管
椒古墳	出土遺物絵図	1	個人蔵
第1章 岩橋型横穴式石室の出現			
高井田山古墳	鉄釘	4	柏原市立歴史資料館
	鏡	1	柏原市立歴史資料館
	熨斗	1	柏原市立歴史資料館
	須恵器 器台・台付壺・高杯・有蓋高杯・甗 土師器 壺	21	柏原市立歴史資料館
	横矧板鉾留衝角付冑	1	柏原市立歴史資料館
高井田山古墳	神人龍虎画像鏡	1	柏原市立歴史資料館
	金環	3	柏原市立歴史資料館
	玉類（頸飾り・手玉・足玉）	5連	柏原市立歴史資料館
大谷山6号墳	須恵器 器台・壺	5	和歌山県教育委員会
	鉄斧 鋤先 鉄鍬 馬具 鉄刀 管玉	17	和歌山県教育委員会
大谷山28号墳	須恵器 甗・蓋杯	2	和歌山県教育委員会
花山6号墳	銀製垂飾 金製空玉 銀製空玉 ガラス製小玉 碧玉製 管玉	37	和歌山県教育委員会
	装飾付須恵器 配像（鹿）	1	和歌山市
花山33号墳	土師器 壺・高杯 須恵器 甗・無蓋高杯・蓋杯	20	和歌山県教育委員会
	馬具 鉄鉾	3	和歌山県教育委員会
	ガラス製管玉 碧玉製管玉	9	和歌山県教育委員会
第2章 海の路がたぐ紀伊の石室と九州			
大谷山22号墳	須恵器 台付壺・有蓋高杯・蓋杯	12	和歌山市
	馬具 剣菱形杏葉	1	和歌山市
大日山35号墳	須恵器 高杯・器台・装飾付器台配像・壺	14	和歌山県教育委員会
	滑石製白玉 ガラス製丸玉 銀製空玉 銀製梔子玉 碧 玉製平玉 碧玉製管玉	69	和歌山県教育委員会
トピック① 双脚輪状文形埴輪			
荒蒔古墳	双脚輪状文形埴輪	1	天理市教育委員会
音乗谷古墳	双脚輪状文形埴輪	2	奈良文化財研究所
新内古墳	双脚輪状文形埴輪	1	神戸市教育委員会
大日山35号墳	双脚輪状文形冠帽をかぶった人物埴輪	2	和歌山県教育委員会
井辺八幡山古墳	双脚輪状文形埴輪	4	和歌山市蔵（同志社大学歴史資料館）
大谷山22号墳	双脚輪状文形埴輪	1	和歌山市
花山2号墳採集	双脚輪状文形埴輪	1	個人蔵
花山採集	双脚輪状文形埴輪	1	和歌山県立紀伊風土記の丘
トピック② 配像付高杯形器台			
井辺八幡山古墳	配像付高杯形器台	4	和歌山市蔵（同志社大学歴史資料館）
天王塚古墳	配像付高杯形器台 小像	13	和歌山県教育委員会
塚本古墳	配像付高杯形器台	1	長岡市教育委員会
物集女車塚古墳	配像付高杯形器台 小像	7	向日市教育委員会
音乗谷古墳	配像付高杯形器台	7	奈良文化財研究所
前山A58号墳	須恵器 蓋杯・壺 土師器壺 土製丸玉 滑石製白玉 ガラス製小玉 砥石 鉄鍬 馬具（轡）	50	和歌山県教育委員会
明楽2号墳	須恵器 蓋杯・短頸壺	4	和歌山市
	ガラス製丸玉 滑石製白玉 土製丸玉 碧玉製管玉	65	和歌山市
晒山10号墳	須恵器 蓋杯・装飾付須恵器小像（鹿）	7	和歌山市
	銀製有段空玉 ガラス製小玉	12	和歌山市
	金製垂飾	1	和歌山市
	水晶製三輪玉	3	和歌山市
室山5号墳	碧玉製管玉	4	海南市教育委員会
震島1号墳	須恵器 有蓋高杯・有蓋台付壺	5	有田市教育委員会
	ガラス製小玉 土製丸玉	25	有田市教育委員会
	円筒埴輪	4	有田市教育委員会
	装飾付須恵器	1	有田市教育委員会

遺跡名	資料名	点数	所蔵・保管
向山4号墳	須恵器 甕・提瓶・蓋杯 製塩土器	17	日高町教育委員会
	ガラス製小玉 土製丸玉	3連	日高町教育委員会
	鉄鏃 刀子 馬具 鉄斧	31	日高町教育委員会
	円筒埴輪	1	和歌山県立日高高等学校
吹上2号墳	鉄刀 ガラス製小玉 碧玉製管玉 土製丸玉 滑石製白玉	1個と1連	御坊市教育委員会
	須恵器 短頸壺・長頸壺・台付長頸壺・高杯・蓋杯・横瓶・提瓶	13	御坊市教育委員会
若野1号墳	馬具 鉄鏃 耳輪 鉄刀	8	個人蔵
	須恵器 蓋杯 高杯 把手付椀 提瓶	9	個人蔵
箱谷3号墳	製塩土器 須恵器 提瓶・蓋	4	日高川町教育委員会
	耳環 ガラス製小玉 碧玉製管玉 瑪瑙製勾玉 水晶製切子玉・管玉	4個と2連	日高川町教育委員会
	鉄鉗 金銅装馬具(鏡板) 鉄鏃 弓金具 鉄刀	16	日高川町教育委員会
	円筒埴輪	1	日高川町教育委員会
秋葉山1号墳	須恵器 短頸壺・高杯・蓋杯・提瓶 製塩土器	12	御坊市教育委員会
	青銅製空玉 耳環	3	御坊市教育委員会
	刀子 鉄鏃 鉄刀	5	御坊市教育委員会
祓井戸6号墳	須恵器 提瓶・甕・蓋杯・細頸壺	6	御坊市教育委員会
	勾玉状銅製品 ガラス製勾玉 土製丸玉 水晶製切子玉 碧玉製管玉	1連	御坊市教育委員会
	鉄鏃 鏢 刀子	6	御坊市教育委員会
オリフ古墳	須恵器 蓋杯・無蓋高杯 鉄製釣針 刀子 鉄鏃 ガラス製小玉 水晶製丸玉 碧玉製管玉 耳環	38	田辺市教育委員会
瑜伽平古墳	須恵器 短頸壺・蓋杯 鉄刀	3	白浜町教育委員会
上ミ山古墳	須恵器 高杯・鈴付高杯	3	すさみ町教育委員会
	埋木製棗玉 碧玉製管玉 水晶製切子玉 ガラス製管玉・小玉 碧玉製管玉	3	すさみ町教育委員会
第3章 天王塚古墳の出現と多様化する紀伊の石室			
天王塚古墳	土師器 壺	2	和歌山市
	須恵器 器台・高杯	3	和歌山市
	配像付高杯形器台・配像	3	和歌山市
	ガラス製丸玉・小玉・粟玉 滑石製白玉 瑪瑙製切子玉 銀製空玉	約5000	和歌山県教育委員会
	胡籙金具 円形步揺 針金 金銅製飾金具	7	和歌山県教育委員会
	金銅製飾金具	3	和歌山市 / 和歌山県教育委員会
	ガラス製小玉で装飾された金銅製冠片 銀製魚形步揺	約100	和歌山県教育委員会
将軍塚古墳	須恵器 蓋杯・高杯・台付壺・器台	23	和歌山県教育委員会
	ガラス製小玉・丸玉 水晶製平玉 銀製耳環	6	和歌山県教育委員会
前山A13号墳	水晶製切子玉 ガラス製小玉	26	和歌山県教育委員会
知事塚古墳	須恵器 有蓋高杯・器台	6	和歌山県教育委員会
トピックス③ 陶質土器			
前山A46号墳	新羅系陶質土器 有蓋高杯	5	和歌山市
花山地区採集	陶質土器 蓋	1	和歌山県立紀伊風土記の丘
花山地区	陶質土器 有蓋高杯	2	和歌山県立紀伊風土記の丘
伝岩橋千塚古墳群	陶質土器 壺	1	和歌山県立紀伊風土記の丘
大日山70号墳	鍛冶具 鉄鎚・鉄鉗・鑿 鉄刀 鉄鏃 陶質土器 壺	6	和歌山県教育委員会
寺内57号墳	須恵器 器台	1	和歌山市
前山A67号墳	須恵器 蓋・杯身・壺	4	和歌山県教育委員会
山東22号墳	トンボ玉 水晶製切子玉 碧玉製管玉 ガラス製小玉	1連	和歌山県教育委員会
	金製飾金具	3	和歌山県教育委員会
	鉄鏃	16	和歌山県教育委員会
園部丸山古墳	装飾付須恵器 子持器台	1	和歌山市
	圭頭大刀 金銅装大刀 鏢・鞘金具	10	和歌山市
	耳環	7	和歌山市
	金銅装馬具 鏡板・杏葉・辻金具・轡	7	和歌山市

遺跡名	資料名	点数	所蔵・保管
鳴滝1号墳	装飾付大刀 振環頭金具・単鳳環頭大刀柄頭	2	和歌山県教育委員会
	飾履 步揺	4	和歌山県教育委員会
	耳環 銀製梔子玉	18	和歌山県教育委員会
	馬具 杏葉・辻金具・雲珠・鏡板・引手	7	和歌山県教育委員会
前山A2号墳	土師器 埴・把手付椀・壺 須恵器 壺・蓋杯・短頸壺	8	和歌山県教育委員会
寺内18号墳	須恵器 器台 鉄鏃 玉類 勾玉・管玉	10	和歌山市
西庄4号墳	須恵器 製塩土器 耳環 玉類 棒状石製品		和歌山県教育委員会
小倉8号墳	鉄鏃	8	和歌山市
明楽4号墳	土師器 高杯 須恵器 蓋杯	2	和歌山市
明楽5号墳	馬具 兵庫鎖	2	和歌山市
明楽5号墳	土師器 高杯	1	和歌山市
船戸箱山古墳	鉄刀 刀子 刀装具 鉄鏃 鉄斧	10	和歌山県教育委員会
	瑪瑙製・碧玉製・ガラス製勾玉	3	和歌山県教育委員会
	耳環(5号横穴式石室) 魚形步揺(1号横穴式石室)	6	和歌山県教育委員会
船戸山6号墳	金環 銅鈎	2	和歌山県教育委員会
	須恵器 高杯・堤瓶・蓋杯・平瓶・壺	10	和歌山県教育委員会
船戸山3号墳2号石室	銀鈎 銅鈎 金環 銀製空玉 ガラス製丸玉 土製丸玉	22	和歌山県教育委員会
	須恵器 直口壺・有蓋高杯・無蓋高杯・蓋杯	8	和歌山県教育委員会
船戸山3号墳1号石室	馬具 辻金具・鏡板・引手 鉄刀 鉄鏃	17	和歌山県教育委員会
高尾山1号墳	土師器 高杯	1	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
北1号墳	刀子 ガラス製丸玉	41	紀の川市教育委員会
黒土古墳	装飾付大刀飾金具 耳環 銀製梔子玉 銀製有段空玉	6	和歌山県立紀伊風土記の丘
馬瀬1号墳	耳環	3	海南市教育委員会
	須恵器 杯蓋	1	海南市教育委員会
馬瀬2号墳	耳環	1	海南市教育委員会
	鉄鏃	6	海南市教育委員会
	須恵器 提瓶・台付細頸壺	3	海南市教育委員会
室山1号墳	須恵器 直口壺・蓋	3	海南市教育委員会
	鉄鏃	5	和歌山県立紀伊風土記の丘
山崎山1号墳	須恵器 蓋杯	8	海南市教育委員会
	耳環 ガラス製丸玉 U字形鋤先 鉄刀 石突	16	海南市教育委員会
宮原古墳	碧玉製管玉 ガラス製丸玉 耳環	18	有田市教育委員会
	須恵器 短頸壺・杯蓋・台付長頸壺	5	有田市教育委員会
岡峯古墳	須恵器 短頸壺・高杯・蓋杯・台付長頸壺 土師器 台付壺	15	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館
天田2号墳	鉄鏃	1	御坊市教育委員会
	須恵器 短頸壺・蓋杯・提瓶・横瓶	8	御坊市教育委員会
岩内9号墳	須恵器 蓋杯 鉄鏃 刀子	11	御坊市教育委員会
崎山14号墳	製塩土器	1	御坊市教育委員会
	刀子 鉄鏃 針状鉄製品	5	印南町教育委員会
	碧玉製・琥珀製勾玉 碧玉製管玉 耳環 水晶製切子玉	11	印南町教育委員会
	須恵器 蓋杯・提瓶・平瓶	17	印南町教育委員会
葉糸古墳	須恵器 蓋杯・高杯・蓋 耳環 馬具 鉄鏃	16	田辺市教育委員会
第4章 横穴式石室の終焉と変容する社会			
井辺1号墳	土師器 台付壺・壺 須恵器 台付長頸壺・壺	4	和歌山市
寺内32号墳	須恵器 蓋杯	10	和歌山県教育委員会
寺内35号墳	須恵器 短頸壺・蓋杯	9	和歌山県教育委員会
鳴滝2号墳	蔵骨器	1	和歌山県教育委員会
	土師器 壺 須恵器 台付長頸壺・高杯・蓋杯・短頸壺・細頸壺	16	和歌山県教育委員会
鳴滝10号墳	須恵器 短頸壺・蓋杯 土師器 皿	7	和歌山県教育委員会
小倉1号墳	土製丸玉 ガラス製小玉 水晶製算盤玉 滑石製白玉	81	和歌山市
	須恵器 蓋身・蓋・高杯	4	和歌山市
	金製飾金具	1	和歌山市
	棒状鉄製品	1	和歌山市

遺跡名	資料名	点数	所蔵・保管
城ノ前1号墳	ガラス製小玉	2	和歌山市
	須恵器 蓋・杯身	2	和歌山市
具束壺3号墳	須恵器 蓋杯	3	個人蔵
具束壺2号墳	須恵器 杯身	1	個人蔵
七ツ塚8号墳	須恵器 高杯・蓋杯	7	個人蔵
寺山2号墳	須恵器 蓋杯	13	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
寺山1号墳	耳環	2	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
寺山12号墳	須恵器 杯身	1	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
寺山13号墳	須恵器 短頸壺・提瓶	2	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
寺山14号墳	須恵器 壺	1	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
寺山15号墳	須恵器 高杯・蓋杯	2	和歌山大学紀州経済史文化史研究所
女良1号墳	金環	4	海南市教育委員会
市脇東膳那1号墳	須恵器 蓋杯・高杯・短頸壺	6	橋本市教育委員会
	鉄鏃	14	橋本市教育委員会
天満1号墳	第1次床面出土 須恵器 杯・高杯・台付壺・甗・平瓶	7	有田川町教育委員会
	第1次床面出土 金環 ガラス製小玉 刀子 不明鉄器	8	有田川町教育委員会
	第2次床面出土 銅製帯(丸軋・巡方)	1	有田川町教育委員会
	第2次床面出土 土師器 杯・皿 須恵器 杯	5	有田川町教育委員会
	歯	一式	三浦市教育委員会
岩内1号墳	銀装蛭卷大刀	1	御坊市教育委員会
	須恵器 水瓶・杯 土師器 皿	3	御坊市教育委員会
	漆塗木棺片	数片	御坊市教育委員会
	棺飾金具 鉄釘	6	御坊市教育委員会
崎山15号墳	須恵器 短頸壺	1	御坊市教育委員会
崎山18号墳	須恵器 杯身	2	御坊市教育委員会
後口谷1号墳	鉄鏃	2	田辺市教育委員会
火雨塚古墳	須恵器 蓋杯	2	熊野三所神社
終章 開かれた棺と黄泉の世界			
鳴滝1号墳	鍔座金具	2	和歌山県教育委員会
崎山14号墳	鉄釘	5	御坊市教育委員会
女良1号墳	鉄釘	5	海南市教育委員会
後谷1号墳	鉄釘	2	田辺市教育委員会
天満1号墳	鉄釘	5	有田川町教育委員会
東国山1号墳	須恵器 蓋杯・高杯・短頸壺・甗・提瓶 土師器 杯・壺	11	岩出市立岩出中学校(岩出市立歴史民俗資料館保管)
	鉄鏃 鉄刀 刀子 鉄鎌 鋤先 鉄釘	16	岩出市立岩出中学校
船戸山3号墳2号石室	ミニチュア炊飯具	3	和歌山県教育委員会
船戸山6号墳	ミニチュア炊飯具	2	和歌山県教育委員会
後口谷1号墳	ミニチュア炊飯具	4	田辺市教育委員会
船戸箱山5号石室	土師器 長頸壺 須恵器 裝飾付壺・子持器台・有蓋鉢・蓋	5	和歌山県教育委員会

冬期企画展「古墳から古代寺院へー紀伊における儀礼の変遷を探るー」

期 間：令和2年1月18日（土）～3月1日（日）

会 期：38日【前年度38日間】

内 容：3世紀中頃よりはじまる古墳時代は、前方後円墳に代表される古墳が大王や地域首長によって数多く造られた時代です。本県においても和歌山市岩橋千塚古墳群をはじめとして、大小様々な規模・形の古墳が4世紀から7世紀にかけて多数築かれており、これらは地域首長やその下位の階層に属する人々の墓と考えられます。古墳は亡きがらを葬る墓としての意味だけではなく、権力者の政治的な身分や力を表すモニュメントとしての性格や、死者が赴く他界を擬えたものとしての機能をもつと考えられています。そこでは死者の魂を他界へ送り届けるために、墳丘の上や埋葬施設で様々な儀礼が執り行われたことが、出土する埴輪や土器から明らかになっており、紀伊では特色ある古墳文化が展開していました。

しかし、古墳時代の終末期（飛鳥時代）である7世紀になると古墳は規模が小さくなるとともに、政権の地域支配強化に伴ってその性格が変貌していきます。古墳のもっていた政治的な身分を表し社会を統合するという機能は失われ、儀礼も衰退し、やがて古墳は終焉を迎えます。

一方、6世紀中頃に日本に伝来した仏教が、古墳に替わり死者の魂の冥福を祈る機能をもつものとしてしだいに普及するとともに、仏教思想よって社会や国を統合する役割を果たすようになります。畿内で始まった古代寺院の建立が、7世紀中頃より政権の政策として全国的に展開していくなかで、紀伊の各地においても寺院が建立されるようになります。これらを担ったのも、各地域の権力者・氏族たちであり、現在県内では7世紀中頃から終末にかけて造営を開始した15カ寺の存在が推定され、その多くが南海道や熊野古道沿いに立地していることが注目されます。

本企画展では、6世紀末から8世紀における時代の過渡期に焦点をおいて、紀伊における古墳の儀礼から仏教の儀礼への移り変わりを古墳の出土品や分布、古代寺院の瓦をはじめとする出土品や伽藍配置から考えるとともに、背後にある古代国家の成り立ちのなかで、この地域の社会がどのように変化し、またどのような特色をもっていたのかを考えます。

入館者数：1,255人【前年1,206人】 内有料入館者数：316人【前年309人】

遺跡名	資料名	点数	所蔵
第1章 古墳の終焉と岩橋千塚古墳群			
船戸箱山古墳5号石室	須恵器 裝飾付壺・子持器台・有蓋鉢・蓋、土師器 長頸壺	6	和歌山県教育委員会
寺内35号墳	須恵器 蓋杯	4	和歌山県教育委員会
七ツ塚古墳群8号墳	須恵器 蓋杯・高杯	7	紀の川市教育委員会
具足壺古墳群2号墳	須恵器 蓋杯	3	個人蔵
具足壺古墳群3号墳	須恵器 蓋杯	1	個人蔵
鳴滝2号墳	須恵器 台付長頸壺・短頸壺・高杯・蓋杯・蔵骨器、土師器 長頸壺	18	和歌山県教育委員会
鳴滝10号墳	須恵器 短頸壺・蓋杯 土師器 杯	8	和歌山県教育委員会
岩橋千塚古墳群前山B225号墳	須恵器 長頸壺・蓋・坏蓋	3	和歌山県教育委員会
岩橋千塚古墳群大谷山38号墳	鉄釘・壺・銅銭（富壽神寶）	6	和歌山県教育委員会
岩橋千塚古墳群大谷山13号墳	須恵器 蓋坏	3	和歌山県教育委員会
第2章 紀伊における仏教のはじまり ～西国分廃寺・佐野寺跡・上野廃寺の建立～			
西国分廃寺	須恵器 高坏・臚・蓋坏	9	和歌山県教育委員会
	道具瓦（隅木蓋瓦・鬼板・鴟尾）	6	
	須恵器 硯（円面硯）	1	
	丸瓦・平瓦	2	
	軒丸瓦・軒平瓦	16	

遺跡名	資料名	点数	所蔵
北山廃寺・北山三嶋遺跡	須恵器 提瓶・高坏・捏鉢・皿・蓋坏 土師器 甕	15	和歌山県教育委員会
	炉壁・樹脂の付着した土器	6	
	焼歪みのある須恵器の甕	2	
	丸瓦・埴	2	
	須恵器 相輪	1	
	軒丸瓦・平瓦	12	
	軒丸瓦・平瓦	15	
最上廃寺	軒丸瓦・平瓦	4	和歌山県教育委員会
	六尊連立埴仏	1	
	ガラス製小玉	1	
	須恵器 蓋・杯身	2	個人蔵
佐野寺跡	平瓦	2	和歌山県教育委員会
	軒丸瓦・軒平瓦	7	
	鴟尾	1	
	軒丸瓦・隅木蓋瓦	2	かつらぎ町教育委員会
	六尊連立埴仏・三尊埴仏	6	
	風招・佐波理椀蓋		
神野々廃寺	軒丸瓦	1	和歌山県立紀伊風土記の丘
名古曾廃寺	軒丸瓦・軒平瓦	3	和歌山県教育委員会
薬勝寺廃寺跡	須鴟尾	1	和歌山県立紀伊風土記の丘
田殿廃寺跡	軒丸瓦	4	和歌山県立紀伊風土記の丘
道成寺	軒丸瓦・軒平瓦	2	個人蔵
三栖廃寺	石製天蓋（塔の相輪）	1	田辺市教育委員会
	軒丸瓦・軒平瓦	5	個人蔵
	軒丸瓦・軒平瓦	5	
堂ノ谷瓦窯跡	鴟尾（複製品）	1	和歌山県立紀伊風土記の丘
	軒丸瓦・軒平瓦	2	田辺市教育委員会
	軒平瓦	1	個人蔵
上野廃寺跡	鉄釘・不明金銅製品	3	和歌山県教育委員会
	隅木蓋瓦	3	
	埴	1	
	軒丸瓦・軒平瓦	6	
	緑釉陶器 広口壺	1	
	鴟尾	1	
荒見廃寺	軒丸瓦・軒平瓦	4	紀の川市教育委員会
	鴟尾	2	
山口廃寺	軒丸瓦	1	個人蔵
第3章 紀伊国分寺の建立と奈良時代の墓			
紀伊国分寺跡	軒丸瓦・軒平瓦	3	和歌山県教育委員会
	軒丸瓦・軒平瓦	4	
紀伊国分寺跡	緑釉陶器	4	和歌山県教育委員会
	埴	1	
	鬼瓦	1	岩出市立岩出中学校
青木古墓	銅銭（和同開珎）	11	和歌山県教育委員会
	銅製帯（鉈尾）	16	
	須恵器 杯蓋	3	
	木炭・骨	2	
後口谷1号墳	ミニチュア炊飯具	4	田辺市教育委員会
丸橋丘火葬墓	須恵器 蓋杯・短頸壺	7	個人蔵
	蔵骨器	1	
	銅銭（和同開珎・神功開寶）	20	
大同寺墳墓	銅製蔵骨器（蓋・身）	2	大同寺

春期企画展「埴輪と須恵器～きのくにの窯跡からみえる古墳時代～」

期 間：令和2年3月21日（土）～5月10日（日）

会 期：9日（当該年度分）【前年度8日間】

内 容：現代にもつづく陶工技術や窯で土器を焼き上げる技術は、今から約1600年前の古墳時代中頃に朝鮮半島から日本列島にもたらされました渡来文化の一つです。その結果、これまでにない、硬く青灰色をしたうつわ「須恵器」が生まれ、古墳の祭祀儀礼や日常雑器として用いられました。須恵器窯の導入は当初、西日本各地の首長層によって導入され多角的に始まりますが、ヤマト政権膝下の陶邑窯跡群（大阪府堺市）を除いてほとんどが定着せず衰退していきます。その後、5世紀後半以降における各地域の古墳造営の活発化により、ヤマト政権主導のもと、陶邑系の須恵器製作を行う窯が各地域に定着し、地域の首長の管理・運営のもと継続的な生産が行われていくと考えられています。

一方、紀元後3世紀中頃である古墳時代前期から続く埴輪生産は、5世紀前半に須恵器製作技法や窯焼成の技術を取り入れた埴輪が製作されるようになり、各地域首長のもとで生産を展開して地域的な特色を開花させていきます。

紀伊地域では、どのように窯が導入され、定着していったのでしょうか。この地域では、これまで「森小手穂埴輪窯跡」（和歌山市）や「吉礼・砂羅谷須恵器窯跡」（和歌山市）など主に6世紀の窯跡が部分的に確認されています。加えて、埴輪窯では、近年県内で初めて「平井遺跡埴輪窯跡」（和歌山市）で本格的な発掘調査が行われ、埴輪の製作技法の変化や供給先の古墳などについて、新たな事実が判明してきています。

本展では、平井遺跡埴輪窯跡出土品を含めた紀伊における古墳時代の窯出土品などを紹介し、生産された製品やその製作技法、供給先の時期的な変化などから、この地域の社会変化やまたその特色について、ひも解いていきたいと思えます。

入館者数：149人【前年228人】 内有料入館者数：31人【前年97人】

（※資料一覧は、次号に掲載）

和歌山県立埋蔵文化財調査成果展「紀州のあゆみ～発掘された郷土の歴史」

期 間：令和元年6月2日（土）～7月1日（日）

会 期：24日【前年度22日間】

内 容：公益財団法人和歌山県文化財センターによる展示で、近年実施された埋蔵文化財発掘調査の最新成果をいち早く公開します。

入館者数：707人【前年891人】 内有料入館者数：245人【前年299人】

ミニ展「ジュニア考古学研究応募作品展」

期 間：令和元年12月17日（火）～令和2年1月13日（月・祝）

会 期：20日

内 容：ジュニア考古学の応募作品を一堂に会して展示します。

入館者数：318人【前年355人】 内有料入館者数：123人【前年126人】

【ジュニア考古学について】

趣 旨：考古学に関する小中学生の研究成果を募集・表彰し、その成果を発表する場を設けることで、小中学生が考古学の楽しさを知るとともに、資料をまとめたり、プレゼンテーションする力をつけるなどの研究活動を推奨する機会とする。

応募内容：和歌山県内の考古学や歴史学など社会科歴史的分野に関係する研究成果で、学校外で未発表のもの。レポート・作品・歴史新聞など形態は問わない。

対象：和歌山県内の小学校・中学校および特別支援学校の小学部または中学部のいずれかに在籍する児童・生徒、または和歌山県在住の児童・生徒。

応募点数：16点

【個人研究部門・小学生の部】応募総数5点

最優秀賞 「滑石で縄文時代のそう身具を作る」 河野仁宥（和歌山市立川永小学校2年生）

優秀賞 「祝!!百舌鳥・古市古墳群世界遺産決定!!天皇陵古墳～和歌山に天皇陵古墳は!?～」

岩橋直也（和歌山市立西和佐小学校6年生）

奨励賞 「江戸時代の紀州」 宮本璃香（和歌山市立浜宮小学校5年生）

【個人研究部門・中学生の部】応募総数6点

奨励賞 「大日山35号墳と翼を広げた鳥形埴輪」 玉置陽飛（和歌山市立日進中学校2年生）

奨励賞 「刀剣について」 永田優翔（和歌山市立日進中学校2年生）

【団体研究部門・小学生の部】応募総数5点

奨励賞 「調査隊古墳時代へ!」 中谷悠生、中川舜亮、須山央太、山下穂華、保井美友、上野凌聖

（和歌山市立直川小学校6年生）

奨励賞 「倭ノ国存在の証」 中谷松生、北井道夫、田村翔太、佐々木みそら、露峯詩夢、間美緒

（和歌山市立直川小学校6年生）



2 普及活動

①モノづくり体験

タイトル	実施日	参加人数
勾玉づくり（学校・団体）	春秋遠足等	2,263
埴輪づくり（学校・団体）	春秋遠足等	1,820

②催しもの

	タイトル	実施日	参加人数
展 示 ・ 公 開	春期企画展	縄文・弥生の「海の道」と「陸の道」 －紀伊半島と東西交流－ 3/23（土）～ 5/12（日）	5,317
	夏期企画展	すき・すき・からすき ～田んぼにお水が入るまで!～ 7/20（土）～ 9/1（日）	1,693
	秋期特別展	開かれた棺 －紀伊の横穴式石室と黄泉の世界－ 9/28（土）～ 12/1（日）	4,681
	冬期企画展	古墳時代から古代寺院へ ～紀伊における儀礼の変遷を探る～ 1/18（土）～ 3/1（日）	1,255
	春期企画展	埴輪と須恵器～きのくにの窯跡からみ える古墳時代～ 3/21（土）～ 5/10（日）	149
	古墳公開	9/22（日）	89
	常設展	上記特別展及び企画展を除く	—

	タイトル	実施日	参加人数		
講	学芸員講座①	岩橋千塚⑩	7/28(日)	15	
	学芸員講座②	岩橋千塚⑪	9/15(日)	21	
	学芸員講座③	岩橋千塚⑫	1/26(日)	32	
	学芸員講座④	熊野②	12/1(日)	19	
	学芸員講座⑤	熊野③	3/15(日)	中止	
	展示講座①	春期企画展	4/14(日)	17	
	展示講座②	文化財センター	6/16(日)	21	
	展示講座③	夏期企画展	8/18(日)	6	
	展示講座④	冬期企画展	2/2(日)	27	
	民家ガイドツアー		4/21(土)	45	
	古墳現地ガイドツアー①		4/27(土)	30	
	古墳現地ガイドツアー②		10/27(日)	27	
	古墳現地ガイドツアー③		3/8(日)	中止	
	館長講座①	世界の博物館①	5/15(土)	15	
	館長講座②	世界の博物館②	8/24(土)	8	
	館長講座③	世界の博物館③	9/21(土)	15	
	館長講座④	世界の博物館④	3/21(土)	中止	
	座	ボランティア養成講座①		5/11(土)	5
		ボランティア養成講座②		5/25(土)	4
		ボランティア養成講座③		6/8(土)	3
		ボランティア養成講座④		6/22(土)	4
		おしゃべり考古学①		5/15(水)	18
		おしゃべり考古学②		7/10(水)	7
		おしゃべり考古学③		9/11(水)	7
		おしゃべり考古学④		11/15(金)	9
		おしゃべり考古学⑤		1/17(金)	8
		おしゃべり考古学⑥		3/13(金)	中止
		特別展講座①		10/5(土)	34
		特別展講座②		11/2(土)	26
		特別展記念シンポジウム①		10/20(日)	86
		特別展記念シンポジウム②		11/17(日)	58
		県立自然博物館学芸員による昆虫観察会①		7/23(火)	14
		県立自然博物館学芸員による昆虫観察会②		8/8(木)	13
		岩橋千塚古墳群の実物大埴輪を作ろう①		6/15(土)	7
前山 A58 号墳の実物大埴輪を作ろう②			9/7(土)	11	
第 10 回 HANI-1 選手権			5/12(日)～ 6/23(日)	131	
風土記まつり			11/3(日祝)	2,180	
モノ作り体験①		カラーまが玉づくり	4/20(土)	17	
モノ作り体験②		うなりごまづくり	12/22(日)	17	
G Wモノ作り体験		ハニワ	4/28(日)～ 5/2(木・祝)	421	
G Wモノ作り体験		まが玉	5/3(金祝)～ 5/6(月休)	393	
夏休みモノ作り体験		ハニワ	8/3(土)・ 8/4(日)	395	
夏休みモノ作り体験		まが玉	8/11(日・祝)～ 8/12(月休)	270	
埴輪づくり		全 23 回	10/12(土)～ 3/14(土)	153	
ふどきっず①	田植え	5/26(日)	34		
ふどきっず②	火起こし器づくり	6/30(日)	28		
ふどきっず③	石包丁づくり・稲刈り	10/6(日)	27		
ふどきっず④	竹馬づくり	11/10(日)	25		
ふどきっず⑤	土器炊飯	12/8(日)	26		
ふどきっず⑥	正月遊び・もちつき	1/19(日)	25		
ふどきっず⑦	卒業制作	2/16(日)	24		
特別展関係ワークショップ	ビーズアクセサリーをつくろう	11/24(日)	9		

	タイトル	実施日	参加人数
他	ジュニア考古学研究発表	12/15(日)	24
追加イベント	なぜ?なに?考古学質問コーナー	7/25(水)	1
	なぜ?なに?考古学質問コーナー	7/31(火)	1
	なぜ?なに?考古学質問コーナー	8/8(水)	0

〈HANI-1選手権 第10回〉

概要：令和元年5～6月に、113作品のエントリー。人気投票（433票）により埴輪王を決定。

- 小学生の部：「今年の主役♪」（おつかさん）40票
- 中・高生の部：「二面相風神雷神」（雷神さん）117票
- 一般の部：「歯庭」（夏みかんさん）64票
- ヘビー級：「おこじよと楽しい仲間たち」（おこじよさん）79票



今年の主役♪
小学生以下の部



二面相風神雷神
中・高生の部



歯庭
一般の部



おこじよと楽しい仲間隊
ヘビー級

3 研修・実習等

(1) 博物館実習

○令和元年度博物館学芸員実習

期 間：令和元年8月20日（火）～8月24日（土）

参加者：6名（うち1名は令和元年8月11日（日）～8月24日（土）他インターンシップ2名、計8名で実施）

同志社女子大学1名、東京学芸大学1名、龍谷大学1名、和歌山大学3名

内 容：紀伊風土記の丘の博物館活動（講義） 考古資料・民俗資料の保存と活用
教育普及事業、岩橋千塚古墳群の整備事業

展 示（考古展示4名、民俗展示4名に分かれて実施）：

考古：スポット展「そうだ、遺跡へ行こう！ー見習い視点の考古学入門展ー」

8月25日～9月22日に係る企画・立案・調査・展示

民俗：展示資料の清掃、整理・台帳作成、ピロティー展示民具（踏車）の説明パネル作成

(2) 職場体験実習（インターンシップ）

当館では、県教育委員会実施の「中学生職場体験学習」や「和歌山県教育庁等におけるインターンシップ」による高校生の受け入れを行った。

○中学生インターンシップ

和歌山市立紀之川中学校	期日	令和元年9月25日(水)～27日(金)	対象：2年生 4名
	内容	園内の維持管理業務	
和歌山市立日進中学校	期日	令和元年10月29日(火)～31日(木)	対象：2年生 4名
	内容	園内の維持管理業務	
和歌山市立東中学校	期日	令和元年11月13日(水)～14日(木)	対象：2年生3名
	内容	園内の維持管理業務	

○支援学校中学部インターンシップ

和歌山盲学校	期日	令和元年12月11日(水)～12日(木)	対象：2年生 1名
	内容	園内の維持管理業務	
和大附属特別支援学校	期日	令和元年11月19日(火)～21日(木)	対象：2年生 4名
	内容	園内の維持管理業務	
県立紀伊コスモス支援学校	期日	令和元年12月6日(金)	対象：3年生17名
	内容	園内の維持管理業務	

○高校生インターンシップ

県立桐蔭高等学校 県立海南高等学校 和大附属特別支援学校	期日	令和元年7月23日(火)～25日(木)	対象：桐蔭 2年生1名、海南高校大成校舎 3年生1名 和大附属特別支援 3年生1名
	内容	園内の維持管理業務、イベントの開催補助	
県立和歌山商業高等学校	期日	令和元年11月12日(火)～14日(木)	対象：2年生 2名
	内容	園内の維持管理業務、学芸員の業務補助	

○大学生インターンシップ

和歌山信愛女子短期大学	期日	令和元年8月20日(火)～24日(土)	対象：2回生 1名
	内容	博物館実習と同内容	
龍谷大学	期日	令和元年8月20日(火)～24日(土)	対象：3回生 1名
	内容	博物館実習と同内容	

(3) 教員対象の研修

当館の学校向けプログラム等の理解を図るため、教員対象の研修（中堅教諭等資質向上研修：教育センター学びの丘と連携、地域社会体験研修）を受け入れている。

10年経験者研修 (学校との連携協力による授業作り)	期日	令和元年8月29日(水)	対象：中堅教諭等資質向上研修対象教員14人
	内容	総合的な学習の時間、社会科の授業において活用できる指導案作り、古代の生活(考古)および昔の暮らし(民俗)に関する体験学習の実際を学ぶ	

(4) 博学連携

来館により、古墳、民家、展示室及び広い園内の見学や考古・民俗資料を利用した古代生活体験及び昔のくらし体験などの幅広い学習活動を行っている。

移動博物館により、当館に来館できない学校へ職員が赴き、地域の歴史や昔のくらしの解説、昔のくらし体験・モノ作り体験の指導を行っている。

○来館校数、来館者数

来館校数は121校、来館者数は6,285人(引率教員593人を含む)。校種別では小学校が105校と約86.8%を占めている。また、月別来館校数では5月に52校(43.3%)、4月に20校(16.7%)、10月に16校(13.3%)、11月に8校(6.7%)、6月に9校(7.5%)と続き、春(4,5,6月)、秋(10,11月)の遠足シーズンで105校と全体の約9割を占めている。

(校種別来館校数・来館者数)

校種	校数	割合 (%)	来館者数	割合 (%)
幼稚園・保育所・こども園	6	5.0%	185	2.9%
小学校	105	86.8%	5,947	94.6%
中学校	4	3.3%	99	1.6%
高等学校	0	0.0%	0	0.0%
特別支援学校	3	2.5%	12	0.2%
短大・大学・専修学校	3	2.5%	42	0.7%
計	121	100.0%	6,285	100.0%

(月別来館校数)

月	幼・保	小学校	中学校	高等学校	特別支援	短大・大学	計	割合 (%)
4月	1	18			1		20	16.7%
5月		51				1	52	43.3%
6月	1	7			1		9	7.5%
7月		1	1				2	1.7%
8月							0	0.0%
9月		2	2			1	5	4.2%
10月	2	14					16	13.3%
11月	1	7					8	6.7%
12月	1	1	1		1		4	3.3%
1月		1					1	0.8%
2月		3					3	2.5%
3月							0	0.0%
計	6	105	4	0	3	2	120	100.0%
割合 (%)	5.0%	87.5%	3.3%	0.0%	2.5%	1.7%	100.0%	

(月別来館者数)

月	幼・保	小学校	中学校	高等学校	特別支援	短大・大学	計	引率(大人)	合計	割合 (%)
4月	66	1,130			7		1,203	107	1,310	19.1%
5月		2,845				19	2,864	193	3,057	44.7%
6月	4	299			1		304	32	336	4.9%
7月		23	14				37	5	42	0.6%
8月							0		0	0.0%
9月	98	53	50				201	51	252	3.7%
10月	11	550					561	63	624	9.1%
11月	6	839					845	65	910	13.3%
12月		16	35		4		55	27	82	1.2%
1月		54				23	77	7	84	1.2%
2月		138					138	11	149	2.2%
3月							0		0	0.0%
計	185	5,947	99	0	12	42	6,285	561	6,846	100.0%
割合 (%)	2.9%	94.6%	1.6%	0.0%	0.2%	0.7%	100.0%			

来館団体一覧

来館日	団体名称	人数
4月4日	奈良労山	5
4月10日	年金者組合日高支部	19
4月16日	みどり幼稚園	78
4月16日	浜宮小学校	97
4月16日	紀伊小学校	78
4月19日	泉佐野市立長坂小学校	56
4月19日	山崎北小学校	123
4月19日	田中小学校	84
4月19日	笠田小学校	44
4月19日	根来小学校	78
4月19日	東貴志小学校	46
4月20日	NPO 法人大阪ワッソ文化交流協会	25
4月23日	大谷小学校	26
4月23日	城山小学校	45
4月23日	堺市立錦西小学校	60
4月24日	和歌山盲学校	23
4月25日	学文路小学校	61
4月25日	新南小学校	39
4月25日	高野口小学校	36
4月26日	粉河小学校	96
4月26日	堺市立八田荘小学校	112
4月26日	田鶴小学校	53
4月26日	堺市立新金岡小学校	75
4月28日	散策の会	3
4月28日	和歌山県ウォーキング健脚同好会	48
5月8日	藤戸小学校	158
5月8日	野崎西小学校	80
5月9日	木本小学校	97
5月9日	紀見小学校	64
5月9日	あやの台小学校	60
5月9日	橋本小学校	44
5月9日	西部小学校	52
5月9日	野崎小学校	45
5月10日	広瀬小学校	56
5月10日	鳴滝小学校	21
5月10日	中之島小学校	66
5月10日	伏虎義務教育学校	87
5月10日	岩出小学校	64
5月10日	湊小学校	18
5月10日	和歌浦小学校	52
5月10日	宮北小学校	28
5月10日	雑賀小学校	133
5月10日	恋野小学校	15
5月14日	岡崎小学校	77
5月11日	岡崎小学校	86
5月11日	恋野小学校	16
5月14日	三田小学校	64
5月14日	高松小学校	74
5月15日	砂山小学校	74
5月16日	和佐小学校	45
5月16日	田殿小学校	34
5月16日	太田小学校	54
5月16日	貴志小学校	63
5月17日	宮前小学校	125
5月17日	中野上小学校	45
5月17日	川永小学校	66

来館日	団体名称	人数
5月17日	有功小学校	64
5月17日	楠見小学校	67
5月18日	帝塚山学院大学	20
5月21日	芦原小学校	6
5月21日	楠見東小学校	62
5月21日	小倉小学校	60
5月22日	智辯学園和歌山小学校	168
5月22日	松江小学校	88
5月24日	今福小学校	24
5月24日	名草小学校	58
5月24日	福島小学校	26
5月24日	三田小学校	75
5月24日	八幡台小学校	92
5月24日	貴志南小学校	67
5月24日	楠見西小学校	22
5月24日	直川小学校	33
5月24日	山東小学校	39
5月28日	四箇郷小学校	69
5月28日	江川・和佐・山野小学校	24
5月30日	河辺西小学校	30
5月30日	四箇郷小学校	53
5月30日	隅田小学校	49
5月31日	西脇小学校	72
5月31日	西脇小学校みらい分校	2
6月4日	三百瀬小学校	13
6月5日	こうま保育園	7
6月7日	湯川小学校	53
6月7日	内原小学校	55
6月11日	安原小学校	88
6月11日	みはま支援学校	3
6月13日	大新小学校	20
6月14日	由良町教育研究会6年生交流会	61
6月27日	志賀小学校	31
7月3日	きのくに子どもの村小学校	26
7月24日	附属中学校	16
8月21日	民間学童保育 ほうかごキッズ	5
8月21日	放課後等デイサービス わんだふる	5
9月11日	多機能型事業所 夢おれんじ	14
9月11日	清流小学校	17
9月13日	河南中学校	51
9月14日	朝日旅行	12
9月18日	多機能型事業所 夢おれんじ	13
9月20日	打田中学校 仙溪分校	11
9月27日	印南小学校	43
9月28日	和歌山大学	32
10月3日	上南部小学校	40
10月4日	箕島小学校	53
10月9日	大阪文学振興会	31
10月11日	箕島小学校	48
10月11日	安謐小学校	16
10月16日	西和佐幼稚園	89
10月18日	泉南尻新家小学校	32
10月18日	泉南市立鳴滝小学校	34
10月18日	南広小学校	42
10月19日	Y M C A	20
10月22日	日高川町中央公民館	18

来館日	団体名称	人数
10月23日	御霊小学校	38
10月24日	宮原小学校	42
10月25日	保田小学校	59
10月27日	大阪文学振興会	22
10月29日	竜門小学校	39
10月29日	藤田小学校	30
10月30日	藤並小学校	106
10月30日	うま保育園	19
10月31日	和田小学校	24
11月1日	泉南市立信達小学校	124
11月1日	泉南市立日根野小学校	149
11月2日	ジェイコムウエスト	19
11月7日	泉南市立砂川小学校	85
11月7日	紀の川市身体障害者連盟	21
11月8日	西和佐小学校	388
11月8日	西ヶ峯小学校	8
11月12日	南部小学校	50
11月13日	アンキッズアカデミー	35
11月15日	明治大学博物館友の会前方後円墳研究会	22
11月20日	こうま保育園	21
11月20日	歩こう会	13
11月21日	付属小学校	90
12月11日	和歌山ろう学校	8
12月12日	上芳養小学校	20
12月12日	貴志川中学校	51
12月15日	西富田公民館	21
12月20日	第二こじか園	9
1月17日	白浜町老人クラブ連合会	65
1月25日	滋賀県立大学人間文化学部	26
1月26日	中貴志小学校	58
2月4日	咲楽小学校	26
2月6日	史遊会	8
2月13日	付属小学校 1年	66
2月21日	西和佐小学校	57

○小学校等の活動内容

来館校とは事前に打ち合わせを行い、古墳巡り（オリエンテーリング）、民家、展示室見学及び広い園内や考古・民俗資料を利用した各種の活動プログラムを組み合わせ、発展段階に応じて様々なねらいや内容を設定し学習している。

- ①資料館展示や古墳・民家の見学、ドングリ拾いや植物観察などの園内散策、モノ作り体験。
- ②教科書に対応した体験学習。（小学校6年生の古代生活体験、3・4年生の昔の暮らし体験など）
- ③地域調べ等の「総合的な学習の時間」でのグループ学習他。

4・5月は小学校6年生の社会科に対応した『古代生活体験』、10・11月と1月は小学校3・4年生の社会科に対応した『「昔の暮らし」体験学習』を行う学校が多い。

『古代生活体験』のプログラムとしては、以下のプログラムを実施している。

- ・**古代学習：**
資料館の展示や古墳の見学、火おこしや竪穴住居での体験をとおして、古代の人々の生活について学ぶ。
- ・**古墳めぐり：**
古墳群をめぐり、古墳の大きさや形、多さ、石室の中の広さや暗さ、体感温度などを実際に肌で感じる。
- ・**風土記の丘オリエンテーリング：**
園内にある古墳と江戸時代の移築民家をグループ行動でまわり見学と調べ学習を実施する歴史体験学習。
- ・**モノ作り体験：**
モノ作りの歴史や方法などの解説を聞きながら、石や粘土から勾玉やハニワを作る体験をする。

『「昔の暮らし」体験学習』のプログラムとしては、以下のプログラムを実施している。

- ・**昔のしごと・あそび体験：**
センバコキで米の脱穀・背負い梯子や天秤棒で物を運ぶ・石臼でキナコを引くなどの昔のしごと、竹馬・竹とんぼ・ゴム鉄砲など昔あそびを体験学習する。
- ・**民家見学・体験**
園内に移築された民家で、昔の生活の場所の見学及びカマドの火吹き体験をする。

また、遠足・社会見学では古代生活体験・古墳巡りなどフィールド活動やモノ作りに重点を置き、後日移動博物館（出前授業）として日を設定し学校周辺の遺跡等を単元とした講義を実施する学校もある。岩橋千塚の古墳を広く知ってもらいたい当館としては、体験学習と講義を合わせた系統的な学習となり、よりよいプログラムの組み合わせである。

令和元年度の来館校の主な活動プログラムの利用状況は、次表のとおりである。

（主な活動プログラム利用状況一覧）

	考古・歴史学習			民俗・民家学習
	古代生活			昔の暮らし体験 (民具と民家 ワークショップ、 昔のしごと、 昔のあそび体験)
	古代生活体験	モノ作り体験		
火おこし	勾玉	埴輪		
4月	8	8	5	
5月	35	26	20	
6月	5	6	4	
7月			1	
8月			1	
9月		1	2	
10月	6	4	1	7
11月	4	2		1
12月				
1月				
2月				1
3月				
計	58	47	34	9

○移動博物館（出前授業）

遠方の学校や交通機関を利用しての来館が困難な学校、遠足で古墳巡りを実施後講義を希望する学校、カリキュラムにおいて時間数確保のため来館して学習することが困難な学校や団体を対象として移動博物館（出前授業）を実施している。職員が直接出向き、モノ作りや昔のくらし体験活動を行う他、「和歌山の歴史」「学校周辺の歴史」など「ふるさと学習」に係る講義や本物の土器や装身具に触る体験など、学校のニーズに応じて学習支援を行っている。また、小学校のPTA・育友会・子どもセンター学童保育等の活動や公民館・資料館等の生涯学習活動においてもモノ作り体験等を実施している。

実施にあたり、県内公立学校の教育課程に位置づけた学習については県教育委員会総務課の「エキスパート職員派遣事業」を活用している。依頼の時期や地域によっては直接相談に応じている。

和歌山市立直川小学校	対象：小学生32名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年6月12日(水)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験
橋本市立隅田小学校	対象：小学生47名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年6月28日(金)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験
県立はまゆう支援学校	対象：小学生19名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年7月10日(水)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験等
橋本市立三石小学校	対象：小学生28名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年8月23日(金)
		内容	埴輪づくり体験
県立紀北支援学校 いきいき交流会	対象：その他51名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年8月23日(金)
		内容	埴輪づくり体験
海南市立日方小学校	対象：小学生16名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年8月27日(火)
		内容	埴輪づくり体験
海南市立下津第一中学校	対象：中・高生等8名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年8月28日(水)
		内容	郷土の歴史に関する講義、火おこし体験等
県立たちばな支援学校	対象：高校生23名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年9月4日(水)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験等
学校法人みどり幼稚園	対象：園児等75名	期日	令和元年10月18日(金)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験等
宮前小学校区 子供センター	対象：小学生等35名、一般21名、園児1名、その他7名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年10月19日(土)
		内容	まが玉づくり体験
海南市歴史民俗資料館	対象：小学生26名、一般18名、園児1名、その他3名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年10月20日(日)
		内容	まが玉づくり体験
県立紀北支援学校	対象：小学生12名	期日	令和元年10月30日(水)
		内容	埴輪づくり体験
なかよしキッズ	対象：小学生2名、中学生19名、一般3名、園児1名 (エキスパート職員派遣事業活用)	期日	令和元年11月4日(月)
		内容	まが玉づくり体験
和歌山市立東中学校	対象：中学生21名、その他1名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年11月12日(火)
		内容	まが玉づくり体験
県立紀北支援学校	対象：小学生15名、高校生14名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年11月17日(日)
		内容	郷土の歴史に関する講義、まが玉づくり体験
県立和歌山工業高等学校 定時制	対象：高校生21名 (エキスパート職員派遣事業)	期日	令和元年11月15日(金)
		内容	埴輪づくり体験
泉南市立砂川小学校	対象：小学生83名	期日	令和元年11月22日(金)
		内容	埴輪づくり体験
泉南市立鳴滝小学校	対象：小学生32名	期日	令和元年12月5日(金)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験

県立紀伊コスモス支援学校	対象：中学生 5 名	期日	令和 2 年 1 月 21 日 (木)
		内容	まが玉づくり体験
和歌山大学教育学部付属特別支援学校	対象：小学生 8 名	期日	令和 2 年 1 月 23 日 (土)
		内容	埴輪づくり体験
県立さくら支援学校	対象：中学生 12 名	期日	令和 2 年 1 月 31 日 (金)
		内容	郷土の歴史に関する講義、まが玉づくり体験
安原幼稚園	対象：園児 4 8 名、その他 1 名	期日	令和 2 年 2 月 4 日 (火)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験
西和佐保育所	対象：園児 16 名	期日	令和 2 年 2 月 6 日 (木)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験
和歌山市立貴志中学校	対象：中学生 224 名	期日	令和 2 年 2 月 6 日 (木)
		内容	郷土の歴史に関する講義、まが玉づくり体験
県立和歌山さくら支援学校	対象：中学生 1 名、高校生 3 名	期日	令和 2 年 2 月 7 日 (水)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験
印南町立切目小学校	対象：小学生 15 名、その他 2 名 (エキパート職員派遣事業)	期日	令和 2 年 2 月 12 日 (水)
		内容	郷土の歴史に関する講義
紀の川市立丸栖保育所	対象：園児 18 人	期日	令和 2 年 2 月 13 日 (木)
		内容	郷土の歴史に関する講義、埴輪づくり体験
印南町立稲原小学校	対象：小学生 11 人、その他 2 人	期日	令和 2 年 2 月 14 日 (金)
		内容	郷土の歴史に関する講義
和歌山市立西和佐小学校	対象：小学生 55 人、その他 2 人	期日	令和 2 年 2 月 20 日 (木)
		内容	郷土の歴史に関する講義
児童発達支援センターひまわり園	対象：園児 11 人、その他 4 人	期日	令和 2 年 3 月 4 日 (水)
		内容	

○他組織イベントへの参加

- ・サマー遊 ing (和歌山県立図書館文化情報センター) 令和元年 7 月 24 日 (水)：勾玉づくり
- ・令和元年度共育支援メニューフェア (県立情報交流センター big・U)
令和元年 7 月 28 日 (日)：紀伊風土記の丘 PR
- ・むきばんだまつり (鳥取県立むきばんだ史跡公園) 令和元年 12 月 1 日 (日)：埴輪パズル・ペーパークラフト銅鐸づくり
- ・第 40 回労働福祉祭り (和歌山城砂の丸) 令和元年 10 月 26 日 (土)：缶バッジ作り
- ・紀北農芸まつり (紀北農芸高校) 令和元年 11 月 23 日 (土・祝)：紀伊風土記の丘 PR
- ・関西文化の日 2019 (大阪府立弥生文化博物館) 令和元年 11 月 16 日 (土)：缶バッジ作り・埴輪パズル

4 広報活動

①資料提供（展示やイベント毎にチラシ等の資料を提供する。）

県教育記者クラブ 25 件 新聞記事等掲載数 123 件（新聞等 85 件・刊行物 48 件）

②情報提供（定期刊行物に展示やイベント等の情報を提供する。）

「県民の友」（毎月発行：和歌山県広報課）

「紀州浪漫」（季刊：公益社団法人和歌山県観光連盟）

和歌山文化情報誌「ワカピー」（隔月発行：和歌山県 編集：一般財団法人和歌山県文化振興財団）

「博物館研究」（毎月発行：公益財団法人日本博物館協会）

「日本歴史」（年 2 回：日本歴史学会）

「わかやま探検ミュージアム」（隔月発行：白光印刷株式会社）

「輝く紀の国の教育」（年 2 回：和歌山県教育広報紙：和歌山県教育委員会）

「M ネットかわら版」（年 2 回：泉州・紀北ミュージアムネットワーク）

③情報提供（不定期）

「相互ニュースてまり」（相互タクシー株式会社）

「泉州ぼど SWing」（泉州広告（株））

「1 DAY アート」（朝日旅行）

「おとな旅プレミアム」（TAC 出版）

「まっぷる ペットといっしょ」（株式会社チョーク）

「まっぷるマガジン和歌山」（株式会社昭文社）

「るるぶドライブ関西ベストコース」（ライフプランニング株式会社）

「らくり・まいなあが」（株式会社 中広）

「ワンコとワクワク旅行 西日本編」（株式会社 創碧社）

④インターネット・データによる情報提供

「ホームページの公開（<http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp>）

「るるぶ.com、JTB サイト「るるぶ観光データベース」（<http://rurubu.com>）

「まっぷる観光ガイド」（<http://www.mapple.net>）（株式会社昭文社）

「イベントバンクプレス」（<https://www.eventbank.jp/>）（株式会社イベントバンク）

「博物館研究」（毎月発行：公益財団法人日本博物館協会）

⑤テレビ・ラジオによる情報提供

テレビ番組 16 件 / ラジオ番組 4 件

⑥パンフレット・チラシ等による情報提供

・令和元年度イベントガイドの配布・・・・・・・・・・・・・・・・約 30,000 枚

・特別展「開かれた棺」のチラシ配布・・・・・・・・約 20,000 枚

・各イベントのチラシの配布（随時、学校・各種団体等へ持ち込み）

5 ボランティア活動

紀伊風土記の丘ボランティア（平成 23 年 4 月設置）は、利用者に対して園内の古墳・民家・万葉植物園等の解説や、資料館の展示解説、学校遠足や体験教室における補助・助言・指導等の活動を行っている。

令和元年度のボランティア登録者は 33 名である。

令和元年度に実施したボランティア関連事業及びボランティア活動は、以下のとおりである。

1 ボランティア養成講座

令和元年 5 月 11 日・25 日、6 月 8 日・22 日に開催。受講者 6 名 うち 修了者 4 名

2 ボランティア 研修会

夏期・冬期・春期企画展及び秋期特別展に係る展示ガイド研修

館外研修（海南市で予定するも、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

3 ボランティア活動

①古墳等・資料館解説

令和元年度事前申込みガイド実績団体等

活動日	活動内容	申込者	申込者所在地	来園者数	対応人数
4月4日	古墳・資料館ガイド	奈良勤労者山岳連盟	奈良県奈良市	5	3
4月20日	古墳・資料館ガイド	大阪ワッソ文化交流協会	大阪府大阪市	25	5
4月28日	古墳・資料館ガイド	散策の会	兵庫県西宮市	8	1
4月28日	古墳・資料館ガイド	和歌山県ウォーキング健脚同好会	和歌山市	60	4
6月1日	古墳・資料館ガイド	歴史教育者協議会和歌山市支部	和歌山市	10	4
7月24日	古墳・資料館ガイド	和歌山大学附属中学校	和歌山市	10	4
9月8日	古墳・資料館ガイド	道くさクラブ	有田市	25	4
10月9日	古墳・資料館ガイド	大阪文学振興会	大阪府大阪市	30	8
10月27日	古墳・資料館ガイド	大阪文学振興会	大阪府大阪市	35	2
11月2日	古墳・資料館ガイド	Jcom ウェスト和歌山	和歌山市	25	6
11月9日	古墳ガイド	北九州市立大学OB会	和歌山市	28	3
合計			11件	253名	43名

令和元年度資料館待機ガイド実績個人等

活動日	活動内容	申込者	申込者所在地	来園者数	対応人数
4月7日	資料館ガイド	個人	愛知県	3	1
4月7日	資料館ガイド	個人	岩出市	3	1
5月4日	古墳・資料館ガイド	個人	和歌山市	6	1
5月5日	古墳・民家ガイド	個人	大阪市	3	1
5月6日	資料館ガイド	個人	東京都	2	1
5月26日	古墳・資料館ガイド	個人	大阪府	2	1
6月1日	資料館ガイド	個人	紀の川市	2	1
6月1日	資料館ガイド	個人	和歌山市	3	1
6月9日	資料館ガイド	個人		4	2
6月16日	古墳ガイド	個人		1	1
6月16日	資料館ガイド	個人		10	2
6月22日	資料館ガイド	個人		3	1
6月30日	資料館ガイド	個人	橋本市	4	2
6月30日	資料館ガイド	個人	和歌山市	2	1
7月7日	古墳ガイド	個人		2	2
7月7日	資料館ガイド	個人		2	1
7月28日	資料館ガイド	個人		2	3
8月11日	古墳・資料館ガイド	個人	上富田町	3	1
8月11日	資料館ガイド	個人	有田市	3	1
8月18日	資料館ガイド	個人		12	3
9月1日	古墳ガイド	近畿大学附属和歌山高等学校	和歌山市	7	3
9月29日	資料館ガイド	個人		6	3
10月6日	資料館ガイド	個人		24	3
10月22日	資料館ガイド	個人		21	2
11月20日	古墳・資料館ガイド	個人		13	3
1月28日	資料館ガイド	個人	韓国・日本	2	1
合計			26件	145名	43名

②学校遠足・体験教室における補助等

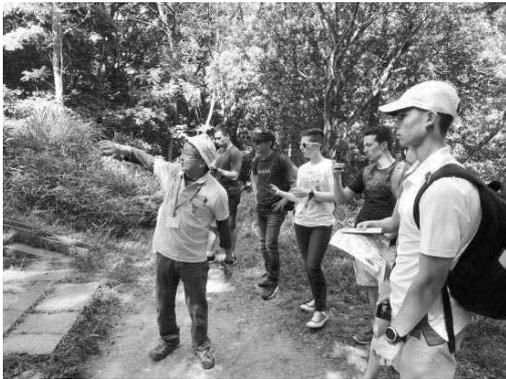
ゴールデンウィーク モノづくり体験、夏休みモノづくり体験、学校遠足の埴輪・勾玉づくり・昔のくらし体験において、ボランティアによる体験補助・指導・助言が行われた。

③その他

古墳ガイドツアー（4月27日、10月27日）、古墳公開：前山A67号墳（9月22日）、第10回風土記まつり（令和元年11月3日）、において、ボランティアが運営に参加した。

この他、ボランティア有志による曜日別勉強会（水・土曜日）、令和2年度に実施予定の「ボランティアの会創設10年イベント」の計画等を行った。

令和2年2月下旬、日本各地で流行した新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、当面のあいだ、ボランティア活動等を中止した。



6 管理運営・環境整備

(1) 文化財の維持管理

特別史跡「岩橋千塚古墳群」周辺の整備及び重要文化財民家等の維持管理

①古墳群周辺の整備

- ・園内笹草等除去処分業務（990千円）

公園内の最高所にある将軍塚古墳群をはじめ、公開古墳の周辺や小古墳群が見学できる地域及び周辺などを入園者を安全かつ快適に利用できるように面積100,000㎡の笹草除去を業者委託により行う。（令和2年1月～令和2年3月）

- ・天王塚古墳笹草等除去処分業務（1,122千円）

天王塚古墳調査作業の安全確保及び調査環境を整備するために面積4,730㎡の笹草除去を業者委託により行う。（令和元年10月～令和2年1月）

②重要文化財民家等維持管理

- ・民家防虫防除等（178千円）

重要文化財民家（旧柳川家、旧谷山家）、県指定文化財民家（旧小早川家、旧谷村家）、復元竪穴住居に薬剤処理を行う。（令和元年12月）

(2) 資料館及び史跡公園内の管理・環境整備

来館者・来園者の安全、快適性・利便性を確保するため、職員による進入路、園路の補修、樹木剪定、草刈り・落ち葉清掃等史跡公園内の管理環境整備を行っている。また、業務委託により警備、清掃、防火設備管理等資

料館及び公園内の維持管理並びに危険木伐採等の補修整備を行っている。

①史跡公園内の管理・環境整備

- ・幹線園路及び公開古墳の清掃、園内周辺の落ち葉清掃及び芝草刈り、樹木の剪定
- ・園内の倒木の撤去、排水路の浚渫
- ・移築民家4軒及び和船展示施設の管理、茅葺民家と竪穴住居の燻蒸、防火用水の管理、石垣
- ・竹垣の管理補修
- ・進入路、万葉植物園等の植物への水遣り及び万葉植物園の竹柵等設置
- ・毛虫発生時の殺虫剤散布、ハチの巣駆除

②資料館及び園内の施設・維持管理

- ・資料館及び園内の警備業務委託（4,469千円）
- ・資料館清掃及び園内トイレ清掃の業務委託（2,398千円）
- ・電気保安管理、浄化槽維持管理、防火設備管理及び貯水槽清掃の業務委託（416千円）
- ・建築基準法12条に基づく定期点検業務（54千円）

③資料館及び園内の主な修繕整備

- ・駐車場看板修繕（77千円）（5月）
- ・駐車場トイレ漏水修繕（36千円）（7月）
- ・受付窓口修繕（216千円）（7月）
- ・園路（歩道）修繕（186千円）（10月）
- ・排水管修繕（141千円）（10月）
- ・駐車場トイレフロア修繕（55千円）（10月）
- ・園路修繕（197千円）（11月）
- ・U字溝修繕（85千円）（11月）
- ・古墳管理歩道修繕（172千円）（12月）
- ・陶芸館電気設備修繕（33千円）（12月）
- ・駐車場浄化槽用ブローア配管修繕（99千円）（1月）
- ・消防ポンプ（発動機）設備修繕（29千円）（3月）

④園内工事

- ・連絡道路建設工事（11,740千円）（令和2年2月～令和2年12月）

7 特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業

(1) 岩橋千塚古墳群歴史活き活き！史跡用総合活用整備事業（国庫補助事業）

a 総事業費 36,904,247円（平成30年度繰り越し事業）

①天王塚古墳連絡道路設置工事

天王塚古墳の公開活用のために必要な管理用道路の設置工事を実施した。平成30年度は既存園路から東へ100m（NO.5）地点まで実施した。

②前山A58号墳墳丘等整備工事

平成28・29年度に実施した墳丘の復元工事に引き続き、埴輪設置にかかる基礎工事及び周辺園路の舗装工事を実施し、墳丘整備工事を完了した。

③前山A58号墳説明板製作・設置等、復元埴輪等製作業務

平成28年度から墳丘の復元工事を実施してきた前山A58号墳において、市民参加により製作した埴輪及び委託業務により製作した須恵器大甕を現地に設置した。また、陶板製の説明板の製作及び墳丘近くへの設置を委託により実施した。

④天王塚古墳覆屋設置等整備業務

天王塚古墳の石室周辺部保護を目的として、覆屋の設置並びに法面及び石積み部への崩落防止施設の設置を委託により実施した。

⑤整備検討会

(2) 岩橋千塚古墳群歴史活き活き！史跡用総合活用整備事業（国庫補助事業）

a 総事業費 39,638,160 円（一部次年度に繰越）

① 古墳修景工事

毀損の進む石室を保護するため砂・真砂土で埋め戻しを行うとともに、削平された墳丘に対して盛り土による保護・修景を行った。令和元年度は、前山 B156 号墳の石室の埋め戻し、真砂土による墳丘の復元、種子ネットによる緑化を図った。また、石室の埋め戻しに際しては、簡易実測作業を実施した。

② 危険木伐採委託業務

前山 B 地区の古墳の墳丘上に繁茂し、墳丘や石室に影響を与える 38 本の樹木の伐採を委託により実施した。

③ 整備検討会

④ 天王塚古墳連絡道路設置工事

天王塚古墳の公開活用のために必要な管理用道路の設置工事を実施する。令和元年度は No.5 から No.18 + 10.0 地点までの 270m の区間を実施する。

⑤天王塚古墳整備基本計画の策定 *国庫補助対象外

天王塚古墳の石室安定性解析を京都大学大学院工学研究科に委託して実施した。また、この結果を盛り込み天王塚古墳整備基本計画（案）の作成を行った。

(3) 県内遺跡発掘調査等事業（岩橋千塚古墳群出土遺物整理事業）（国庫補助事業）

a 総事業費 1,888,554 円（一部次年度に繰越）（紀伊風土記の丘分）

① 天王塚古墳出土遺物整理事業

平成 29 年度及び平成 30 年度に実施した史跡整備に伴う天王塚古墳の墳丘調査及び横穴式石室の調査に係る出土遺物等整理を実施した。報告書は令和 2 年度に刊行予定。

②出土玉類自然科学分析委託業務

平成 29 年度及び平成 30 年度に辞した史跡整備に伴う天王塚古墳の横穴式石室出土の玉類のうち、ガラス玉について蛍光 X 線による成分分析を委託により実施した。平成 29 年度及び平成 30 年度に実施した史跡整備に伴う天王塚古墳の墳丘調査及び横穴式石室の調査に係る出土遺物等整理を実施した。

(4) 特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議

第 1 回整備検討会議 令和元年 6 月 29 日 於 紀伊風土記の丘資（和田委員・増淵委員）

令和元年 7 月 3 日 於 奈良県立橿原考古学研究所（菅谷委員）

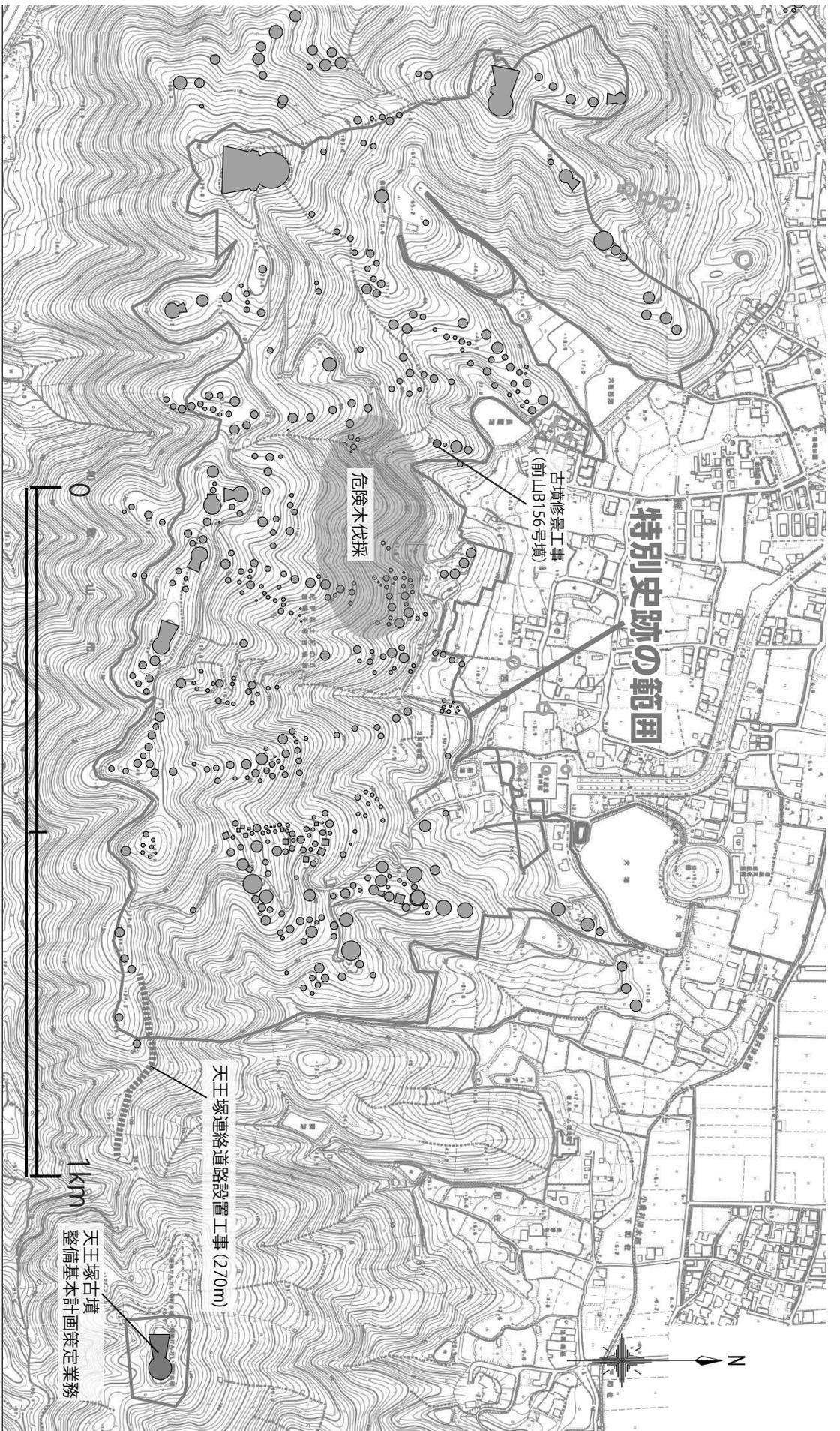
令和元年 7 月 4 日 於 和歌山大学（小野委員）

令和元年 7 月 10 日 於 国立歴史民俗博物館（松木委員）

第 2 回整備検討会議 平成 31 年 2 月 4 日 於 紀伊風土記の丘（和田委員・増淵委員・小野委員）

検討会の構成

氏名	所属等	専門等
小野 健吉	和歌山大学教授	遺跡整備
菅谷 文則 (平成31年4月～令和元年6月)	奈良県立橿原考古学研究所所長	考古学
禰宜田 佳男 (令和元年7月～)	大阪府立弥生文化博物館館長	考古学
増淵 徹	京都橘大学教授	遺跡整備
松木 武彦	国立歴史民俗博物館教授	考古学
和田 晴吾	兵庫県立考古博物館館長	考古学



令和元年度 特別史跡岩橋千塚古墳群 整備事業

 天王塚連絡道路設置工：天王塚古墳に至る道路設置をH30～R3年度のカナ年で実施
 令和元年度工事は延長270mを対象、令和2年度に繰り越し
 危険木伐採：前山B地区の古墳上の危険木38本を伐採

 古墳修景工事：前山B156号墳 (41㎡) の石室埋戻し及び修景を行った
 天王塚古墳整備基本計画策定業務：天王塚古墳の石室安定性解析を委託、令和2年7月に策定予定



古墳修景工事前



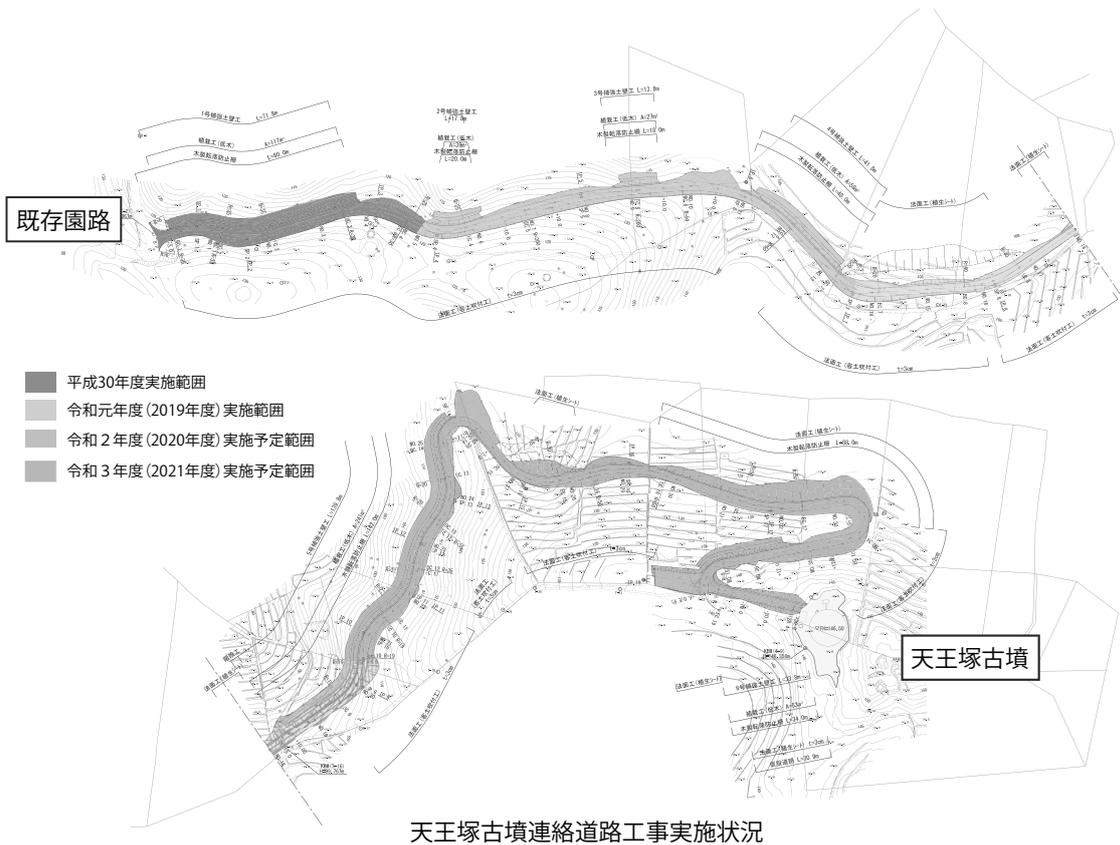
古墳修景工事後



天王塚古墳連絡道路設置工事状況 1



天王塚古墳連絡道路設置工事状況 2



8 和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画策定事業

（1）経緯

和歌山県は平成29年4月に和歌山県長期総合計画（2017年度～2026年度）を策定し、このうち「文化遺産の保存と活用」に係る主な施策の中で「県立紀伊風土記の丘資料館を考古博物館に再編し、特別史跡「岩橋千塚古墳群」出土遺物を中心とした県内の考古資料の保存と活用を図ります。」と記載した。また、平成30年3月に策定された和歌山県教育振興基本計画（2018～2022年度）でも同様に、「文化遺産の保存の活用と推進」に係る施策の中で「特別史跡岩橋千塚古墳群の整備・活用及び紀伊風土記の丘の再編整備」について明記している。これに基づき、上記の施策を実現するために現資料館の再編整備について検討することとなり、平成30年度に有識者の指導、助言を得ながら「和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本構想」を策定した。

令和元年度は、和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画の策定に向けて、同有識者会議を設置し、理念、事業活動、展示、施設、運営に係る具体的な計画内容の検討を実施することとなった。検討にあたっては、有識者会議を設置して4回の会議を開催し、考古学、民俗学、古代史、遺跡整備、教育、報道の各有識者から指導を及び助言を得た。

（2）和歌山県立考古民俗博物館（仮称）基本計画策定有識者会議

①新館基本計画策定有識者会議の経過

第1回会議 開催日時 令和元年8月22日（木） 13:30～15:30

場 所 紀伊風土記の丘研修室

協議内容 基本構想の概要説明等 基本理念（素案）の検討

事業活動計画（素案）の検討 展示計画（素案）の検討

施設計画（素案）の検討 管理運営の現状と課題

第2回会議 開催日時 令和元年10月18日（金）13:30～16:00

場 所 紀伊風土記の丘研修室

協議内容 基本理念・全体コンセプトの検討 事業・活動計画の検討

展示計画の検討 施設計画の検討 管理・運営計画の検討

施設の全体像の検討

インクルーシブデザインについての方針の提示・検討

第3回会議 開催日時 令和元年12月24日（火）13:30～15:30

場 所 紀伊風土記の丘研修室

協議内容 基本理念・全体コンセプト及び各計画（修正案）の検討

基本計画（中間報告）案の検討

インクルーシブデザインワークショップ実施報告

第4回会議 開催日時 令和2年3月24日（火）

協議内容 基本計画案の検討

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止とし、書面による指導・助言を得た。

②基本計画策定有識者会議 委員名簿

氏名	所属等	専門分野
和田 晴吾	兵庫県立考古博物館館長・立命館大学名誉教授	考古学
松木 武彦	国立歴史民俗博物館教授	考古学
佐古 和枝	関西外国語大学英語国際学部教授	考古学
森 隆男	元関西大学教授	民俗学
加藤 幸治	武蔵野美術大学教授	民俗学

小野 健吉	和歌山大学観光学部教授	史跡整備
増淵 徹	京都橘大学文学部教授	古代史
笠野 衣美	フリーアナウンサー	報道
小藪 千秋	和歌山県立たちばな支援学校校長	教育
中村 浩道	和歌山県立紀伊風土記の丘館長	博物館学

③基本計画策定にかかる助言者

氏名	所属等	専門分野
塩瀬 隆之	京都大学総合博物館准教授	I学・インクルーシブデザイン
染川 香澄	ハンズオンプランニング代表	博物館学

(3) ワークショップ等の開催

① ワークショップ1

内 容 インクルーシブデザインに係るワークショップ

開催日時 令和元年12月11日(水) 13:00～17:00

実施場所 和歌山県立紀伊風土記の丘

講 師 塩瀬隆之(京都大学総合博物館准教授)

小林大祐(一般財団法人たんぼぼの家)

協 力 和歌山県立和歌山盲学校

② ワークショップ2

内 容 小学校第4学年を対象にしたワークショップ「紀伊風土記の丘 夢計画」

※「社会科及び総合的な学習の時間」の一部に当館職員が講師として出席

開催日時 令和2年2月20日(木) 13:35～15:10

2月21日(金) 9:30～12:00

実施場所 和歌山市立西和佐小学校(2月20日)

和歌山県立紀伊風土記の丘(2月21日)

協 力 和歌山市立西和佐小学校

作品展示 令和2年3月21日(土)～令和2年4月7日(火)

展示場所 和歌山県立紀伊風土記の丘

Ⅲ 入館者の動向

年度別資料館入館者及び園内利用者数

年度	(年目)	開館日数	資料館入館者					園内利用者	
			有料			無料	合計		
			個人	団体	小計				
46	1	199	48,684	23,825	72,509		72,509		
47	2	301	42,409	27,003	69,412		69,412		
48	3	305	26,924	26,038	52,962		52,962		
49	4	293	22,950	26,937	49,887		49,887		
50	5	295	19,878	30,365	50,243		50,243		
51	6	294	14,937	24,339	39,276		39,276		
52	7	295	12,334	29,302	41,636		41,636		
53	8	291	10,870	24,200	35,070		35,070		
54	9	303	9,667	25,231	34,898		34,898		
55	10	304	10,831	27,300	38,131		38,131		
56	11	294	10,262	22,140	32,402		32,402		
57	12	292	8,760	21,687	30,447		30,447		
58	13	295	8,021	21,065	29,086		29,086		
59	14	295	8,386	23,343	31,729		31,729		
60	15	263	7,428	23,782	31,210		31,210		
61	16	294	6,313	18,245	24,558		24,558		
62	17	295	5,993	15,998	21,991		21,991		
63	18	291	5,629	14,533	20,162		20,162		
1	19	295	6,244	16,559	22,803		22,803		
2	20	296	6,409	13,987	20,396		20,396		
3	21	293	6,216	14,209	20,425		20,425		
4	22	296	6,615	11,723	18,338		18,338		
5	23	290	5,883	11,153	17,036		17,036		
6	24	290	4,370	10,498	14,868	800	15,668		
7	25	288	3,966	8,809	12,775	3,621	16,396		
8	26	297	5,457	8,220	13,677	3,112	16,789		
9	27	305	5,670	8,169	13,839	3,773	17,612		
10	28	296	5,524	8,355	13,879	4,256	18,135		
11	29	296	4,520	7,606	12,126	3,988	16,114		
12	30	281	3,817	8,121	11,938	3,454	15,392		
13	31	306	4,963	8,733	13,696	4,182	17,878		
14	32	305	4,530	8,266	12,796	3,606	16,402		
15	33	307	4,741	8,448	13,189	3,991	17,180		
16	34	300	3,555	364	3,919	19,695	23,614	3,173	(民家利用者数)
17	35	122	2,052	156	2,208	17,270	19,478	15,006	(民家利用者数)
18	36	290	3,688	60	3,748	17,946	21,694	12,125	(民家利用者数)
19	37	309	3,017	535	3,552	17,007	20,559	11,292	(民家利用者数)
20	38	308	3,756	380	4,136	17,374	21,510	208,074 3,260	(園内利用者数) (民家利用者数)
21	39	307	3,128	297	3,425	15,715	19,140	210,235 2,730	(園内利用者数) (民家利用者数)
22	40	308	4,667	236	4,903	16,315	21,218	206,579 3,058	(園内利用者数) (民家利用者数)
23	41	301	3,326	346	3,672	15,865	19,537	210,368 2,395	(園内利用者数) (民家利用者数)
24	42	301	3,580	392	3,972	14,893	18,865	209,743 2,519	(園内利用者数) (民家利用者数)
25	43	300	3,580	302	3,882	15,554	19,436	208,844	(園内利用者数)
26	44	300	3,758	184	3,942	14,130	18,072	195,303	(園内利用者数)
27	45	300	3,140	87	3,227	13,185	16,412	198,511	(園内利用者数)
28	46	300	3,791	180	3,971	14,042	18,013	186,367	(園内利用者数)
29	47	300	4,026	143	4,169	15,207	19,376	191,821	(園内利用者数)
30	48	302	3,073	93	3,166	12,907	16,073	187,899	(園内利用者数)
元	49	302	3,515	49	3,564	14,327	17,891	215,072	(園内利用者数)
合計		14,290	414,853	581,993	996,846	286,215	1,283,061		

* 無料入館者 平成6年11月3日から、65歳以上及び障害者等を無料とする。平成16年4月1日から、高校生以下を無料とする。平成16年度から高校生以下の団体の人数は「無料」の人数に含む。

* 園内利用者 平成16年10月20日から民家（文化財民家4棟および復元竪穴住居）の利用者を集計（19年度で終了）。平成20年4月1日から自動利用カウンターにより、紀伊風土記の丘全体の園内利用者の集計を開始。平成20年度以降の民家利用者数は、行ったイベント参加者を集計した。

Ⅳ 紀伊風土記の丘協議会

和歌山県博物館協議会条例に基づき、紀伊風土記の丘の博物館運営に関し、館長の諮問に応じ、館長に意見を述べる機関として、紀伊風土記の丘協議会を設置している。令和元年度は、2回開催した。

①開催状況

期 日：令和元年6月29日（土） 会 場：紀伊風土記の丘 研修室

議 題：（1）平成29年度事業実施内容について （2）令和元年度予算及び事業内容について
（3）平成31年度以降の特別展・企画展案について

期 日：平成31年2月4日（金） 会 場：紀伊風土記の丘 研修室

議 題：（1）平成31年度イベント案について （2）平成31年度特別展・企画展について
（3）平成31年度岩橋千塚古墳群整備事業等について
（4）新館建設基本構想について （5）その他

氏 名	所属・役職等
和田 晴吾	兵庫県立考古博物館 館長
高瀬 要一	元紀伊風土記の丘 館長
酒井 千佳	和歌山市立広瀬小学校 校長
千森 督子	和歌山信愛女子短期大学 教授
鳥居 賀柄子	元和歌山市立宮前小学校 校長
平野 真理	一般社団法人ガールスカウト和歌山県連盟 監事
福田 光男	元和歌山市立雄湊小学校 校長
増淵 徹	京都橘大学 教授
松木 武彦	国立歴史民俗博物館 教授
森 隆男	元関西大学 教授
山神 達也	和歌山大学 准教授
山田 みゆき	株式会社テレビ和歌山 報道制作本部 制作部長待遇 アナウンサー

Ⅴ 調査・研究

（1）文化財の収集・調査に関すること

①考古資料等に関すること

ア 資料の寄贈

*菅谷文則氏より寄贈（平成31年4月18日寄贈）

岩橋千塚天王塚古墳他調査原図15巻

*小賀直樹氏より寄贈（令和元年8月29日寄贈）

書籍263点

*巽淳一郎氏より寄贈（令和元年12月25日寄贈）

巽三郎氏所蔵考古資料247件

イ 調査研究活動

*佐々木宏治

○発表等

・「水軒堤防の構造と価値」『講演会 地域の宝が国の宝に 水軒堤防の価値を知る』玉津島保存会・名勝

和歌浦クリーンアップ隊・トンガの鼻自然クラブ、於：和歌山県立図書館 文化情報センター（令和元年9月8日）

○執筆等

- ・「江戸時代の石積み堤防－水軒堤防－」『国指定史跡水軒堤防 PRパンフレット』

2019

- ・「岩橋千塚古墳群の横穴式石室構造と雨水対策」『紀伊風土記の丘研究紀要 第8号』和歌山県立紀伊風土記の丘 2020

*萩野谷正宏

○発表等

- ・「岩橋型石室からみた群集墳と首長墓」『秋期特別展関連シンポジウム②』於：和歌山県立紀伊風土記の丘（令和元年10月20日）
- ・「古墳から古代寺院へ」『冬期企画展講座』於：和歌山県立紀伊風土記の丘（令和元年2月2日）

○執筆等

- ・「実物大の埴輪づくり」『ももって、そだてる 和歌山県の博物館活動』和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会 2019
- ・「特論 市民とともに、古墳の復元整備に取り組むこと」『ももって、そだてる 和歌山県の博物館活動』和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会 2019
- ・「岩橋型石室からみた群集墳と首長墓」『秋期特別展シンポジウム②予稿集』県立紀伊風土記の丘 2019
- ・「古墳を舞台としたワークショップの実践 -前山A 58号墳埴輪設置式・完成記念セミナー開催報告-」『紀伊風土記の丘研究紀要 第8号』和歌山県立紀伊風土記の丘 2020
- ・「学校教育における紀伊風土記の丘の活用について」（武部典和と共著）『紀伊風土記の丘研究紀要 第8号』和歌山県立紀伊風土記の丘 2020

*瀬谷今日子

○発表等

- ・「県内最大級の首長墓を掘る・54年ぶりに開かれた横穴式石室－和歌山市天王塚古墳の発掘調査－」『地宝のひびき』（公財）和歌山県文化財センター、於：和歌山県立図書館（令和元年7月13日）
- ・特別展シンポジウム「発掘された天王塚古墳とその遺物」於：和歌山県立紀伊風土記の丘（令和元年11月17日）
- ・「黄泉国訪問－紀伊の古墳とあの世の入口－」『あさもよし歴史講座』於：橋本市あさもよし歴史館（令和2年2月16日）

○執筆等

- ・「県内最大級の首長墓を掘る・54年ぶりに開かれた横穴式石室－和歌山市天王塚古墳の発掘調査－」『地宝のひびき -和歌山県内文化財調査報告-』（公財）和歌山県文化財センター 2019
- ・「考古フォーカス 和歌山市天王塚古墳の発掘調査」『考古学研究』考古学研究会 2019
- ・「発掘された天王塚古墳とその遺物」『秋期特別展シンポジウム』予稿集、和歌山県立紀伊風土記の丘 2019

*金澤舞

○発表等

- ・「和歌山県立紀伊風土記の丘の取り組み」『考古形態測定学研究会』於：横浜市歴史博物館（令和元年6月3日）
- ・「楽しい考古学一学んで。さわって、調べてみようー」『匠講座』於：和歌山大学（令和元年10月19日）
- ・「古墳と博物館⑧-岩橋千塚古墳群と紀伊風土記の丘ー」『連続講座』於：八尾市立しおんじやま古墳学習館（令和2年1月11日）

○執筆等

- ・「和歌山県立紀伊風土記の丘の取り組み」『第2回考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロン』予稿集、考古形態測定学研究会2019
- ・「湯川氏一族発祥の地-田辺市 道湯川集落跡の発掘調査」『地宝のひびき-和歌山県内文化財調査報告-』（公財）和歌山県文化財センター2019
- ・「紀伊地域における前・中期古墳の土器儀礼」『紀伊風土記の丘研究紀要』第8号、和歌山県立紀伊風土記の丘2020

②民俗資料等に関すること

ア 資料の受け入れ

- *巽淳一郎氏より寄贈（令和元年12月25日寄贈）
巽三郎氏所蔵民俗資料84点
- *西本富美子氏より寄贈（令和2年1月8日寄贈）
和歌山市内の生活用具等17点
- *打谷正晴氏より寄贈（令和2年1月8日寄贈）
紀の川下流域の二毛作用具等5点

イ 調査研究活動

*蘇理剛志

○発表等

- ・「紀南地方の祭礼・山車の祭り」『鬮鶏神社ふるさと教室』於：鬮鶏神社（令和元年6月25日）
- ・「映画・映像フィルムに見る熊野」『令和元年度 第2回 世界遺産セミナー』和歌山県世界遺産センター、於：世界遺産熊野本宮館（令和元年7月7日）
- ・「すき・すき・からすき～田んぼにお水が入るまで！～」『夏期企画展講座』於：県立紀伊風土記の丘（令和元年9月7日）
- ・「入門 熊野信仰 Vol.2 一人々は、熊野で何を感じたか？」『学芸員講座「熊野」』於：県立紀伊風土記の丘（令和元年11月10日）

○執筆等

- ・「郷土芸能探訪（12）那智の扇祭り」『文部科学 教育通信』No.462、（公社）全日本郷土芸能協会2019
- ・「紀伊風土記の丘ボランティアの会」『まもって、そだてる 和歌山県の博物館活動』和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会2019
- ・「和歌山県指定有形民俗文化財「日高地域の地曳網漁用具及び和船」の保存と活用について」『和歌山県立紀伊風土記の丘研究紀要』第8号、和歌山県立紀伊風土記の丘2020

職員名簿

職 名		氏 名
	館 長	中 村 浩 道
	副 館 長	南 正 人
	専 門 員	細 川 猛 志
	専 門 員	迫 間 素 啓
課 名	職 名	氏 名
総 務 課	総務課長	味 村 泰 幸
	主 任	前 田 昌 孝
	主 査	川 崎 康 弘
	主 査	竹 内 宏 治
	主 事	沖 直 弥
	教 諭	武 部 典 和
	非常勤嘱託	森 岡 久 雄
	非常勤嘱託	林 智 津 子
	非常勤嘱託	松 本 誠
	非常勤嘱託	奥 山 容 子
	非常勤嘱託	植 松 裕 太
非常勤嘱託	森 田 恵 子	
学 芸 課	学芸課長	佐々木 宏 治
	主査学芸員	萩野谷 正 宏
	主査学芸員	蘇 理 剛 志
	主査学芸員	瀬 谷 今 日 子
	学 芸 員	金 澤 舞
	非常勤嘱託	松 下 太
	非常勤嘱託	富加見 泰 彦
	非常勤嘱託	立 岡 瑞 穂

紀伊風土記の丘研究年紀要

第9号

紀伊国境の南海道駅路	大岡康之・・・1
70年ぶりに里帰りした陵山古墳の蓋形埴輪 —令和2年度 秋期特別展からの忘備録—	河内一浩・・・11
熊野本宮備崎経塚について	中村 浩・・・15
岩橋型石室の終焉についての覚書	萩野谷正宏・・・25
パブリック・アーケオロジーの観点から岩橋千塚古墳群を考える ～天王塚古墳と大日山35号墳の近現代期のバイオグラフィーからみた地域と古墳～	瀬谷今日子・・・29
岩橋千塚出土異形埴輪の解釈について —井辺八幡山古墳・大日山35号墳出土の埴輪—	富加見泰彦・・・35
宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』—花山地区編— 石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・仲原知之・・・41	
沖ノ島見学記—踏査を終えての覚書—	河内一浩・・・61
東紀州踏査記（抄）—踏査を終えての覚書—	河内一浩・・・63
子どもが描く未来の博物館と岩橋千塚 —西和佐小学校「紀伊風土記の丘 夢計画」の取り組み—	萩野谷正宏・竹内宥介・・・67
【資料紹介】 柳川コレクション資料目録（2）—漆器類を中心に—	蘇理剛志・・・99
和歌山県立紀伊風土記の丘の植物について（概要）	松下太・・・103

発掘調査報告

前山A13号墳及び大日山35号墳の排水溝発掘調査報告	・・・77
----------------------------	-------

執筆者一覧(五十音順)

石丸 彩	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 技師	考古学
大岡 康之	橋本市郷土資料館・橋本市あさもよし歴史館 館長	考古学
金澤 舞	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学
河内 一浩	羽曳野市立陵南の森総合センター 主幹	考古学
佐々木 宏治	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸課長	考古学
瀬谷 今日子	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	考古学
蘇理 剛志	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	民俗学
竹内 宥介	和歌山市立西和佐小学校 教諭	
富永 里菜	和歌山市産業交流局文化スポーツ部文化振興課 主査	考古学
中村 浩(浩道)	和歌山県立紀伊風土記の丘 館長	考古学
仲原 知之	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主査	考古学
萩野谷 正宏	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	考古学
富加見 泰彦	和歌山県立紀伊風土記の丘 嘱託職員	考古学
松下 太	和歌山県立紀伊風土記の丘 嘱託職員	植物学

紀伊国境の南海道駅路

大岡 康之

1. はじめに

南海道は五畿七道の一つで、紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐の各国が含まれる。当時の国々には国府と呼ばれるそれぞれの国を治める機関が置かれ、都と各国府を結ぶ道、駅路が通じていた。駅路は都から太宰府までの山陽道と西海道の一部が「大路」、東海道と東山道が「中路」、それ以外が「小路」とされ、南海道は小路に含まれた。南海道駅路（以下「南海道」と記す）は平城京からは下ツ道を南下し、巨勢路を経て真土山に至り、紀伊路に入る。紀の川北岸を紀の川に並行して西進し、加太の渡津から海路を淡路、そして四国へと至る。

このように、南海道は和歌山県の北部を西流する紀の川北岸を通っていたとされる。しかし、南海道の具体的なルートが明らかにされておらず、大規模な土木工事が施されているにもかかわらず、その痕跡さえ発見されていない。駅路にはその設定条件や経由地が知られているが、実態は明らかにされていないことなど、実在し、これまでの研究でその性格が示されているにもかかわらず、具体的なルートが明らかにされていない。そこで、本考では南海道のルート解明について考察を進めた。対象フィールドとしては、ルートをある程度絞って考えることができる紀和国境付近を選んだ。

また、本稿では先学の研究成果に加え、空中写真を用いて南海道の痕跡の発見に努めることとし、明治期の陸軍陸地測量部の地形図や公図等により補填するという新たな手法によりこの研究を進めた。諸兄のご批判をお願いする次第である。

2. 南海道研究と南海道の変遷

(1) 南海道の研究

駅路としての南海道については、詳細な資料がほとんど残されていない。これまでに発見された駅路では道幅は12mが多く、特に地形にあまり左右されず、直進性が強く指向されていることが指摘されている。これだけの道幅を保ちつつ、直進性が強く、

目的地への速達性が重視されたという。ところが、古代に造られたとはいえ、道は長く人々に利用され続け、道そのものが今日に残され、その形跡や痕跡が今に伝えられていなければならないところであるが、当時の駅路の多くは地上に残されていない。

近江俊秀氏は、「幅の広い道路は中央の権力を示すという重要な役割を担っていた」が、「10世紀後半後に（中略）他の道路とほぼ同規模となり、地盤の悪い部分など、維持・管理に手間がかかる部分を避けるように付け替えられたため、直進性を失い、「また沿線の官衙もそれと同時期に廃絶するなど、駅路本来の目的は完全に失われ、地方の道路網の中に埋没してしまうのである。」と述べている【註1】。

中央権力の誇示と、中央と地方官衙を直結する交通網としての駅路の目的が失われ、不必要な幅の広さや、地形を無視した直線ルートを持つ駅路は中央権力の衰退とともに消えていく運命となったようである。そのため、今日に駅路がそのまま残されることはほとんどなく、道幅は必要な広さに狭まり、直進していた道路も地形にあわせて迂回し、安定したルートに付け替えられて最低限の維持・管理で済むように変化していった。そして、当初の規模、経路からは大きく様変わりしたものとなり、近年の宅地化による市街地化も手伝って、現況から南海道の跡を復元するには難しい状況となっていたようである。

これまで、和歌山県下においても歴史地理学を中心に諸先学が南海道の復元という問題に取り組まれてきたが、残念ながら、未だ定説化には至っていない。そのような中で、南海道研究に大きな足跡を残したのは、昭和55年(1980)の『歴史の道調査報告書(Ⅱ)－南海道・大和街道他－』の刊行であろう【註2】。この中で、足利健亮氏は「Ⅱ南海道の復元－古代・中世」の「一、南海道の変遷」において南海道のルートの変遷を5期に分けて考察し、続いて、「二、紀ノ川北岸縦貫南海道の復元」にお

いて、南海道の確実な通過地点から具体的に南海道の駅路について復元を試みている。さらに、南出真助氏は同書のなかで加太の入江の復元から「三、渡津としての賀太駅」について、陸路と海路の接点の賀太の渡津の位置に迫ろうとした。

続いて、中野栄治氏は著書【註3】の中で、南海道は直線で結ばれるのが基本であるが、紀伊国に入って真土山から渡津の加太までの間では8か所で屈折しているとする。それは沿道にある条里や国府、古墳、古代寺院等の位置が南海道のルートに影響しているとする。真土山と加太の間の屈折する8地点に挟まれた直線9区間について、それぞれ概要を示しているが、それも未だ定まっていない状態となっている。

その後の南海道研究は、主にここに掲げた研究を土台に検討が加えられ、研究が進められている。

(2) 南海道の変遷

南海道はそのルートに数度の変化が起きているとされる。『紀伊続風土記』【註4】には次のように記されている。

續日本紀曰 文武天皇大寶二年春正月始置紀伊國賀陀驛家日本紀略曰 桓武天皇延暦十五年二月 勅南海道驛路迢遠使令難通因廢舊路通新路後記曰 嵯峨天皇弘仁二年八月廢紀伊國萩原名草賀太三驛以不要也又同三年四月廢紀伊國名草驛更置萩原驛延喜式曰紀伊國驛馬萩原賀太各八匹と見ゆ以上の文を考ふるに 桓武帝の朝より以前には本國に萩原名草賀太三驛（割注）「今萩原驛の跡は伊都郡の村名となる名草驛は名草の郷名に驛家といふあり是なり其趾詳ならず意を以て推案するに名草郡山口莊にあるへし」を置れしなり平安の京となりて官道迂遠なるを以て四國より直に攝津に至りて本國を經る事を廢せらるよりて弘仁に三驛とも皆廢せるなり幾程なく驛家なくては不便なるより又更に名草加太二驛を置き又名草驛を廢して萩原驛を置く此より萩原加太二驛と定りしならん此延喜式に萩原加太二驛とある是なり加太驛より名草驛に至る其間五里許名草驛より萩原驛に至る間六里餘なり（割注）「厩牧令に三十里置驛とあるに應せり」名

草驛廢する後は加太より直に萩原に至る其間道路甚遙遠なり意ふに平安の京の後は本國の往還希少にして驛舎の間遙遠にても事足りしならん

ここでは、『續日本紀』、『日本紀略』、『日本後紀』、『延喜式』から引用して、南海道に関する記事を拾っている。そこには遷都による都の位置の変化に伴い、南海道に変更が生じた変化などが記されている。その内容を箇条書きにすると、以下のとおりである。

大宝2年(702)1月 初めて紀伊国加太驛家を置く。

延暦15年(796)2月 南海道驛路の旧路を廢して新路を通す。

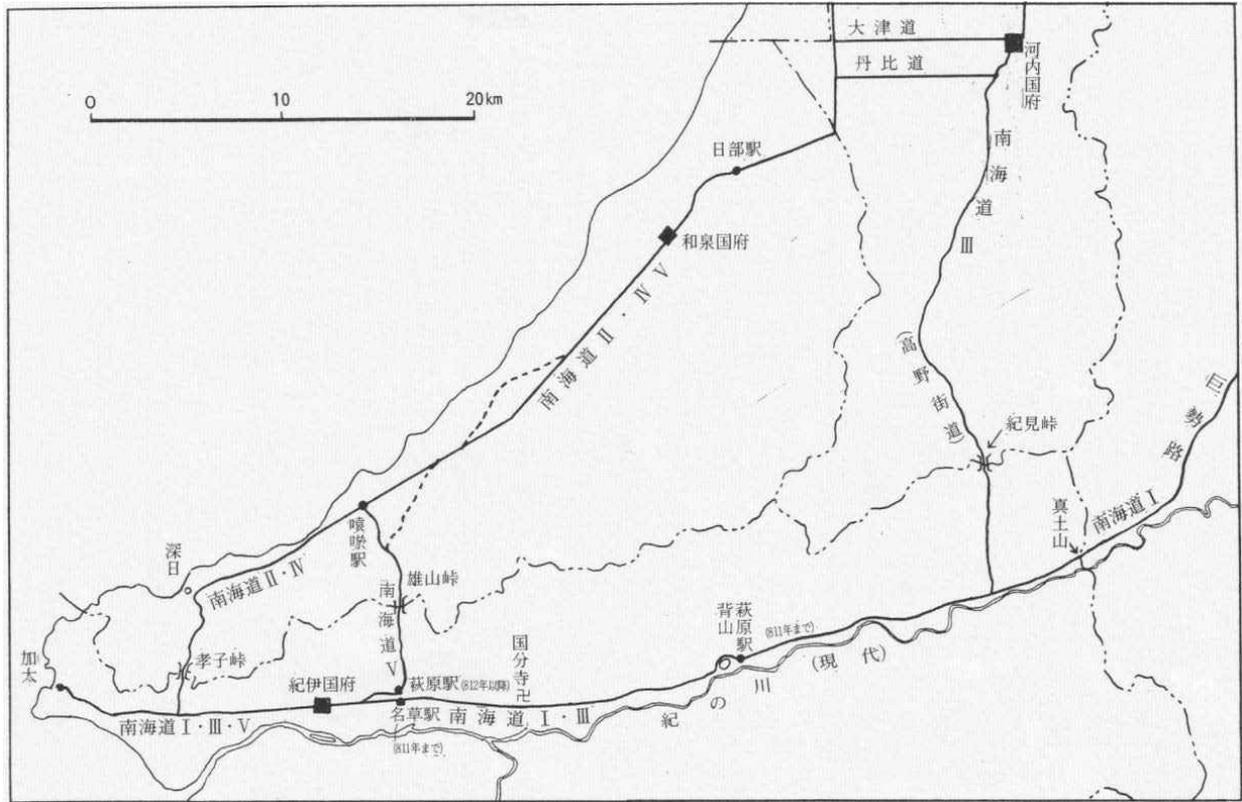
弘仁2年(811)8月 不要となったため、紀伊国萩原・名草・加太の3驛を廢す。

弘仁3年(812)4月 紀伊国名草驛を廢し、萩原驛を置く。

延喜(901-23) 紀伊国の驛馬は萩原・加太にはそれぞれ馬8匹。

の記事があり、桓武朝に旧道を廢して新しい南海道を通し、紀伊国に萩原・名草・加太の3驛が置かれていたが、摂津から直接四国へ渡るようになったため紀伊を經由しなくなったことから、弘仁2年の3驛廢止となった。間もなくそれでは不便とのことで名草・加太2驛を置いたが、弘仁3年に名草驛を廢して萩原驛を置いた。『延喜式』に萩原・加太の2驛家が記されているのはこのためであると記している。

足利氏はこれについて、前掲書のなかで「紀伊国を通過した官道は南海道であったが、この国が都に近いだけに、都の動き（遷都）によって、この国を通過する道筋に変化が生じる場合があった」と説明し、都から淡路・四国への渡津である加太までの南海道の変遷を次のように述べている(第1図)。「南海道Ⅰ」は、「都が奈良盆地にあった時代」で、下ツ道から巨勢路を経て和歌山市の加太まで「紀の川北岸を縦走するルート」とし、これをまた「原初南海道」とした。「南海道Ⅱ」は、聖武天皇の天平16年(744)2月26日から同年中のわずかな期間、難波京の時代で、難波京から海岸に沿って南下して孝子峠から紀伊へ入り、貴志付近で南海道Ⅰに合して



第1図 南海道の変遷（『歴史の道報告書(Ⅱ)－南海道・大和街道他－』から）

賀太へ向かう、もしくは、途中の深日から淡路へ渡海するというもの。「南海道Ⅲ」は、長岡京・平安京初頭の時代で、長岡京の南で淀川を渡り、生駒山西麓で後の東高野街道を南下し、紀見峠を越えて橋本で南海道Ⅰに合する。「南海道Ⅳ」は、『日本後紀』の弘仁2年(811)の8月15日の条にみえる「紀伊国萩原、名草、賀太三驛を廃す」の記事と、翌4月20日の条の「紀伊国名草驛を廃し、更めて萩原驛を置く」の記事から、前者の3驛を連ねて通る南海道Ⅲが廃止されて、紀伊国府を経由しなくなったことから、翌年、後者により紀伊国府経由が復活したとする。この場合、萩原驛がどこにあたるのが課題となった。「南海道Ⅴ」は、「平安時代の、多分かなり早い時期から以降」、南海道Ⅲの生駒山西麓から近世の長尾街道(竹之内街道)へ入って西へ向かい、泉州の海岸線に沿って進み、雄ノ山峠を越えて南海道Ⅰ・Ⅲに合する。これは『延喜式』の駅家の記載にみえる「河内楠葉・槻本・津積・和泉日部・■喉、紀伊萩原・賀太」のルートである(■は「口」偏に「袁」)。

『紀伊続風土記』の説をさらに一歩進めた足利氏

の説は、その後これを大きく否定する異論は出されず、南海道の変遷はこれを基本に研究が進められている。これらは古代の南海道に関する記事をどのように解釈するかを念頭に、歴史地理学からのアプローチによるものであった。しかしながら、この研究は南海道の概観に止まり、具体的な経路の位置にまで及ぶものではなかった。

3. 紀和国境と隅田の南海道

(1) 紀和国境の真土山

紀伊と大和の国境にあったとされる真土山と南海道、それに隅田条里遺構との関係、さらには当時のこの地域の復元について検討していきたい。ここでいう南海道は、足利健亮氏のいう「原初南海道」もしくは「南海道Ⅰ」にあたり、都が大和国にあった時期の駅路を言う。

隅田を含む和歌山県橋本の地は、かつて、飛鳥・奈良時代に都があった奈良県から和歌山県に入る入口にあたり、特にその玄関口とされる真土山を詠み込んだ8首の歌が『万葉集』に残されている。真土山からは都のある大和国を離れ、他国に足を踏み

入れる感慨や、南海道諸国からようやく都のある大和国へ帰って来た思いを歌にして詠み、幾多の旅人がそれぞれの事情を胸に当地を通過していった。その内容は当時の様子を教えてくれるとともに、真土山の状況をうかがう手懸りを与えてくれるものとなっている。

特に『万葉集』に収められている笠朝臣金村の歌【註5】は、当時をうかがう資料として注目される。

大君(おおきみ)の 行幸(みゆき)のまにま
物部(もののふ)の 八十伴(やそとも)の雄
(お)と 出で行きし 愛(うつく)し夫(つま)
)は 天(あま)飛ぶや 軽(かる)の路(みち)
)より 玉禰(たまたすき) 畝火(うねび)を
見つつ あさもよし 紀路(きち)に入り立ち
真土山 越ゆるむ君は 黄葉(もみぢば)の
散り飛ぶ見つつ 親(むつま)しみ われは思
はず 草枕(くさまくら) 旅をよろしと 思
ひつつ 君はあらむと あそそには かつは
知れども しかすがに 黙然得(もだえ)あら
ねば わが背子(せこ)が 行(ゆき)のまに
まに 追はむとは 千重(ちへ)に思へど 手
弱女(たわやめ)の わが身にしあれば 道守
(みちもり)の 問はむ答を 言ひ遣(や)ら
む 術(すべ)を知らにと 立ちてつまづく

神亀元年(724)、聖武天皇の玉津島(和歌山市)行幸の供をする良人(夫)に贈る歌で、冒頭、道中の経路を追い、真土山を越えようとする君は残された妻のことなど意中になくなっているだろうと不安に感じ、夫の行く後を追おうと何度も思う。しかし、女の身であり、道の番人に問われた際にどう答えようとその度に思い返す。そんな妻の夫を思ういじらしい姿が浮かんでくる。

そこには良人への思いを歌として鑑賞するのとは別に、南海道研究にとって重要な記述が認められる。一つは都から紀伊国玉津島へ行くルートに関する記述である。「天飛ぶや」、「玉禰」、「あさもよし」はそれぞれ「軽」、「畝傍山」、「紀伊国(紀路)」を導く枕詞とされ、「軽」は古代の下ツ道と阿倍山田道の交差点で、現在の国道169号と県道124号の「丈六」交差点【註6】にあたる。「畝火」は周知のように香久山と耳成山と併せて大和三山と称される畝

傍山、そして大和と紀伊の国境にあったとされる「真土山」が登場している。すなわち、当時の聖武天皇の玉津島行幸は平城宮から下ツ道を南下して西側に畝傍山を望みつつ、阿倍山田道と交差する「軽」を経て、巨勢路をさらに南下して真土山に至り、紀路に入って紀の川沿いに西進して玉津島に至る。概ねこのようなルートを採ったことが記され、当時の駅路としての南海道を辿ったことがうかがえるのである。

もう一つは、「あさもよし 紀路に入り立ち 真土山」とあって、真土山から紀路に入るという文意から、これまで真土山が紀和国境であったと常識のように唱えられてきたが、この表現により真土山が大和と紀伊の国境であったことが裏付けられるのである。

さらに、もう一つ注目したいのは、「道守」の存在である。女一人が良人を追いかけて真土山にさしかかった際に、道守に問われたらどう答えようと身もだえする様子が記されているが、紀和国境の真土山には関所があって、関所を守る役人がいたことを示している。紀和国境の真土山には国境を警備する施設等があったと考えられ、これに従事する役人が配置されていたことがうかがえるのである。

ちなみに、紀和国境は後世に変更された形跡があり、後に真土山のある丘陵の西側の谷を流れる落合川に国境が移されている。江戸時代の史料ではすでに境川(落合川)を国境としており、江戸時代初頭には国境が変更されていたとみられ、現在の奈良・和歌山の両県境も江戸時代の国境を踏襲している。なお、元来の国境が現県境の東側の尾根沿いに設定されていたことは、これを裏付ける史料が今日に残されており【註7】、紀和国境が変更されたということは明らかである。『紀伊国名所図会』では、「古國郡の堺を定むるとき、此山の東を大和とし、西を紀伊とす。故に笠朝臣金村の歌にも『木道に入りたつ真土山』とよめるならん。〔粉河寺縁起〕【註8】にも其證あれども、文繁きを以て略けり。又峠の西の麓に木原・畠田等の村ありて、今大和に属すれども、天正以前の文書に二村を我隅田莊とす。益證とすべし。かゝれば真土山は、古は紀和兩國堺の山、今は大和國の地なり。」【註9】と例をあげて説明し

ている。

(2) 紀和国境の南海道ルートをめぐる各説

上に述べた真土山が当時の紀和国境に存在したことは大方で認められているところであるが、真土山と称する山が今に伝わっていない。そのため、南海道が紀和国境付近のどこを通過していたかが詳らかにされておらず、伝承や地形からいくつかの説が提起されている。次にその主な説を紹介する。

① 車越説 国道 24 号の県境から北方約 650 m に「車越」という所があり、かつて称徳天皇がここを車で越えたとの伝えが残されている。『紀伊続風土記』に「不動石の西の山を神倉山といふ其邊に車越といふ所あり 稱徳天皇神龜行幸の時御車の越江し所といふ意ふに古道は此邊に有しならん」【註 10】とあり、古道を南海道として、南海道が車越を通過していたとする説。落合川の東西両側に山が迫った山間であり、具体的に南海道がどこを通過していたのか。また、真土山はどの山なのか。他の推定地に比べると北に偏っており、東の大和側、西の紀伊側のどこにどのように通じていたのか、など広く理解を得るには難がある。

② 伊勢(大和)街道踏襲説 伊勢(大和)街道(以下「街道」と記す)がほぼ南海道を踏襲しているという説。山間部は道が通る場所も限られてくることから、紀和国境付近においては街道の経路が最も容易に山越えできたとする。ただし、『紀伊国名所図会』には「今の堺川の東、官道にある山を待乳山といひて、大和國に隸けり。古は峠より少し南の方を越ゆるを南海道とす。〔萬葉集〕に所謂真土山是なり。上世この海(「街」の誤り?)道を木戸と名く。帝都より紀伊國に出づる門の義なり。」【註 11】とある。官道は街道のことであり、現在の国道 24 号の通じる峠で、ここに待乳山があり、この書物の編纂された江戸時代後期には大和國に属していたとする。そして、古くは峠より少し南を南海道が越えていたという(飛び越え説か)ことなので、街道踏襲説とは矛盾することになる。

③ 飛び越え説 国道 24 号の南約 100 m に「飛び越え岩」と呼ばれる一跨ぎで落合川を越えること

のできる場所(第 2 図)があり、これを南海道とする説。前掲の『紀伊続風土記』に「川底の岩石敷か如し」【註 12】との記述があって、飛び越え岩を表現しているものと思われる。飛び越え岩を通るルートは②の街道の少し南を並行する道で、前掲『紀伊国名所図会』の「古は峠より少し南の方を越ゆるを南海道とす。」【註 13】はこのルートを指しているものと考えられる。ただし、飛び越え岩は落合川を挟んで両側の山が迫った掘割のような地形となっていることから、南海道を飛び越えに比定するにはこの地形をどのように克服するか検討が必要である。



第 2 図 飛び越え岩

④ 紀の川沿い説 前掲の各説は山間であり、『万葉集』の「角田河原に独りかも宿む」と弁基が歌うように【註 14】、河原を仮寝の宿とするとあり、角田河原は紀の川(吉野川)の河原と考えられることから、紀の川際を南海道が通じていたとする。しかし、紀の川際となると、この辺りは丘陵から断崖が一気に紀の川へ落ち込む地形であり、南海道を通す余地があるのかどうか、検討課題が残される。

上述のように、すべての条件を満足する説は未だ見受けられない。

(3) 隅田条里遺構と南海道

現在の県境から約 1km 西には隅田地区の平地が広がり、ここに条里遺構が残されている。条里遺構が残る平地では、北東から南西に隅田川(宮川)が流れ、河川周辺では遺構が崩れているものの、ほぼ 6 町四方の条里遺構が確認できる(第 3 図)。条里は

1町(約109m)四方の正方形の地割(「坪」と呼ぶ)の並びをいい、これが縦横6町ずつ計36坪を「里」とするとともに、里の中を「一の坪」から「三十六の坪」までの坪付けが行われていた。

一般に条里遺構は東西南北の方位を意識し、方位にのせて設定されている場合がよく知られているが、隅田条里遺構の場合は南北ラインの北が西方へ約28°傾いて設定されている。傾いて設定されている場合は、当地域の地形に制約される場合が推測されるが、その場所を通る南海道の設定角度に左右される場合も想定される。

現在、当条里遺構の残る範囲の南部を東西に北から国道24号、街道、JR和歌山線が通じている。このうち、街道のみが条里の方格線にのせた形で設定されており、他は条里を意識せずに設定されている。街道は条里遺構6町四方の東西方格線の南端から2番目のラインを貫いており、街道は南海道を踏襲しているという見方が強かった。条里は街道に合わせて設定されており、方格線を通る街道は条里設定時もしくは条里設定前に遡る古い道であると考えられ、それは取りも直さず南海道にほかならない。

これまでの研究成果では条里遺構のいずれかの方

格線を駅路が通じている場合、駅路の両側にある坪が広がっていることが報告されている。通常より広がっている部分は余剰帯と呼ばれる部分で、当時10mを越える道幅の駅路がやがて廃絶した場合、また、道として残っても道幅が狭くなった場合に両側の坪はこれを取り込んで大きくなったもので、逆に言えば、この余剰帯が確認されれば、ここを駅路が通っていたことになる。隅田条里遺構では街道の北側と南側の各坪は他に比べると南北が長く余剰帯を含んでいるとみられ、ここを南海道が通っていたことはほぼ疑いない。

以上のことから、隅田条里遺構では街道が南海道を踏襲しているということが言えるのである。南海道が設定され、これを基準に条里が展開され、その後南海道が衰退すると、道幅が狭くなり、やがて道としての機能は街道に受け継がれ、現況の形となって今日に残されてきたといえる。

(4) 真土に残る南海道の痕跡

一般に南海道を含む駅路の最も大きな特徴として、一つは直進指向が強いということ。二つ目に道路幅が約12mと不必要に幅広であったことが指摘されている。このうち、一つ目の直進志向が強いということに着目して、紀和国境から隅田地区に当て



第3図 隅田条里遺構と南海道推定ルート

はめて検討してみたい。直進指向が強いということであるので、前述の隅田条里の方格線のなかで南海道であったことがほぼ確実な街道が通るラインを紀和国境のある東方へ延長してみることとする。

隅田条里の街道の通る方格線は国道24号合流点以東、国道が大越峠まではほぼ直線的に通じているが、大越峠から国道はやや北へ方向を変える。大越峠から仮に南海道が直進していた場合、国道の南側を並行して進むことになる。大越峠からの地形は落合川に向かって低くなっていくが、直進延長部分だけが北側、南側の両側に比べ幅10数mにわたってさらに堀割状に低くなっており(第4図)、そのまま県境の落合川へと続いていく。

大越峠からはまず池があり、そして両側より低くなった段々の耕地が5区画程度続き、最下段は蒲の穂が繁る湿田、そして湿田を横切るように落合川に沿って里道が通じ、数mの段を介して落合川河床に落ち込んでいる。

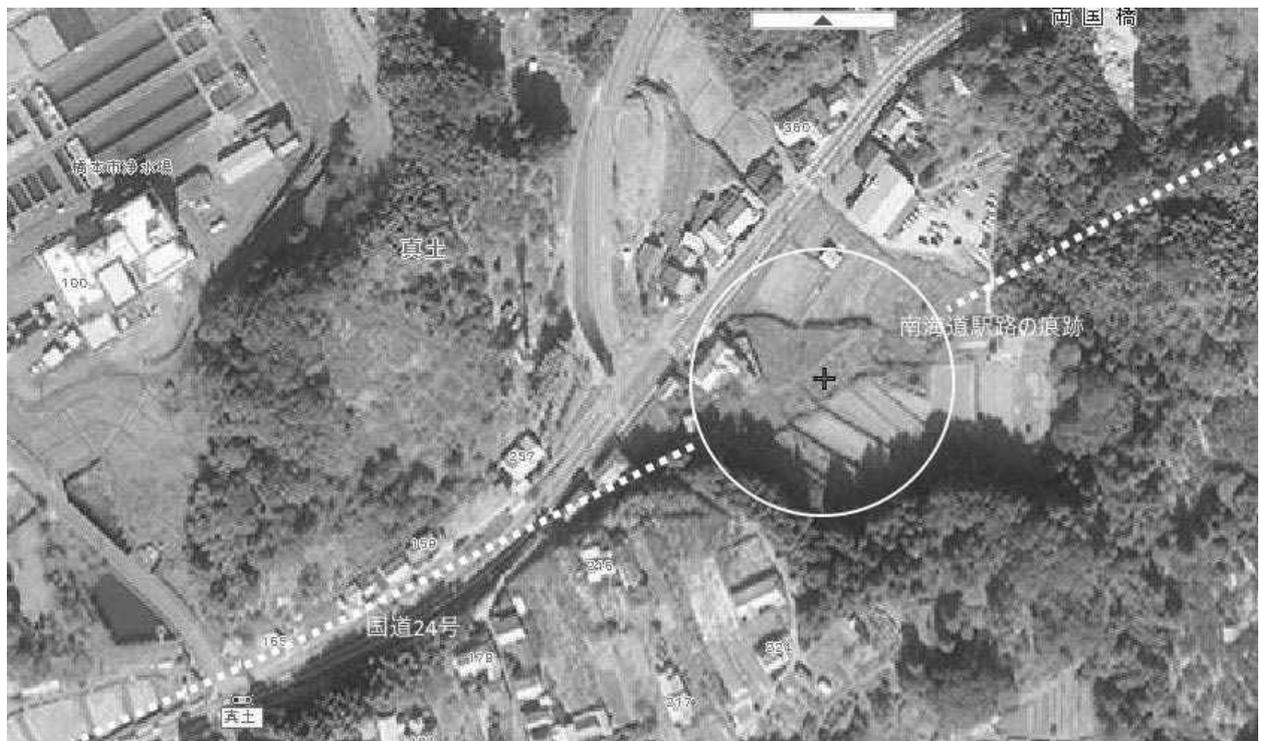
落合川の東側は堀割状の延長上に限って、河床から和歌山県側ほどの大きな段差はなく、上り坂となって小さな池に突き当たる。池の手前(西側)に堤が築かれ、堤の上を南北に道が通じる。池から先は北側・南側の両側から切り込んだ堀割状の地形が峠



第4図 南海道痕跡(東から)

に向かって形成されつつ登っていくが、すぐ東側にある工場の造成により、これ以東の旧地形は残されていない。さらに直進すると現在の国道24号の待乳峠頂上に至る。

大越峠から堀割状に残る地形は南海道の痕跡とみられ、落合川を越えて奈良県側にも直線的に続き、国道の峠頂上に向かっていく。道幅も南海道が12mであったとすれば丁度よい規模であり、隅田条里遺構の街道のラインの延長上にあたり、駅路の直進性に適合する(第5図)。また、堀割状の遺構の幅は最も狭い底の部分で約12mと駅路の道幅に合致



第5図 南海道痕跡の位置とそのルート

し、南海道の痕跡としての可能性が非常に高い。以上の和歌山県側の隅田条里方格線の街道ライン・大越峠・溜池・堀割状遺構、奈良県側の河床からの緩やかな上り傾斜・溜池・堀割状遺構・国道24号待乳峠が一直線上に並ぶことになり、位置から見ても、一直線上に並ぶことから、上記の痕跡は南海道のものであるとして疑いないと考える。

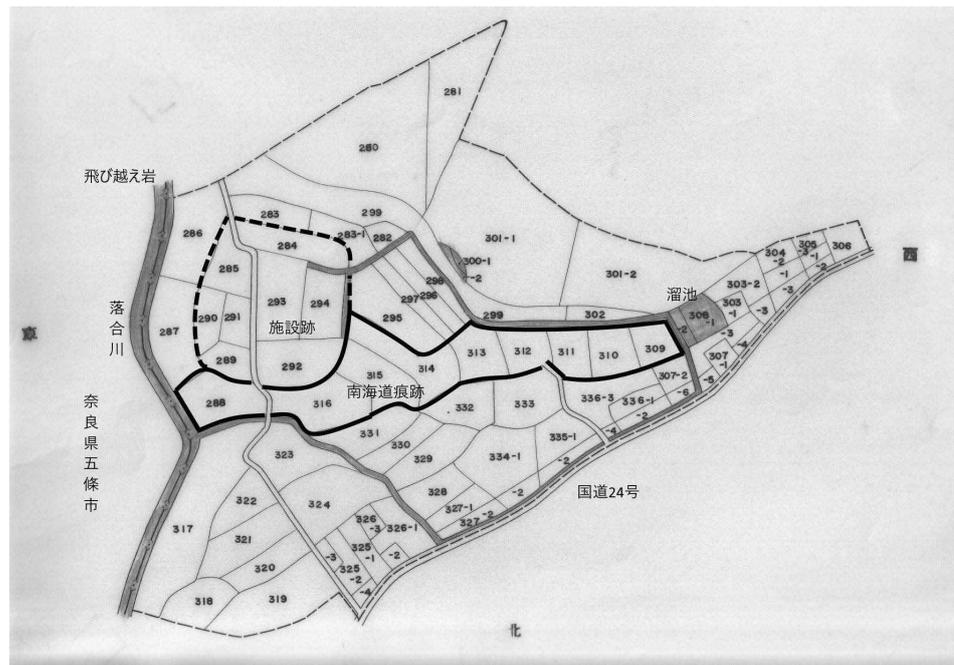
駅路は直進指向が強いため地形により迂回したりすることがないため、凹凸のある山の斜面に駅路を通す場合、凸部は堀割状に掘削するとともに、凹部には盛土するなど傾斜を緩やかに均一化している状況が報告されており、当地でもその工法が用いられたものと考えられる。落合川の和歌山県側は、現況では肩部を里道が通じ、河床から数メートルの段差が生じているが、南海道は河床に近い高さまで、堀割を下げていたものと推定される。対岸の奈良県側に大きな段差を作っていないことから推測されるもので、後にこの部分が耕地化された際に現在の里道の部分に堤防を築き、現況の高さまで埋められたものと考えられる。また、大越峠からここまでの部分は、駅路であった斜面の高い部分の路面を切り取って、低い部分に押し出して水平面を造り出し、耕地化することによって、現況のように段々の耕地が生まれ出されていったものと思われる。最上部にある池は恐らくこうして造られた水田に水を供給するためのもので、堀割状になっていた南海道斜面の低い部分に堤防を築けば簡単に池となる。落合川対岸の奈良県側にも溜池があり、同様に築造されたものであろう。

(5) もう一つの痕跡

以上の考察を公図(第6図)から見てみよう。南海道の痕跡が残る場所は橋本市隅田町真土の字「南谷」で、前項で指摘した南海道の痕跡がきれいに

並んでおり、地番も303番から306番、308番から316番と連番で付されている。公図が作成された際にもこの部分が意識されていたことがうかがえる。

ところが、南海道の痕跡に接して南側にほぼ正方形に台地状の地形があり、上面がほぼ平面になっている部分が認められる。南東角から少々下ると飛び越え岩に至る。富加見泰彦氏、高橋智也氏からこの地形について指摘を受け、検討してみると、正方形の区画は方位を意識しているように感じられ、一辺が約60mの規模であった。さらに、308番から316番へと带状に南海道駅路の痕跡が並ぶなか、314番・315番は道路敷きの部分から上述の正方形の台地に取り付く带状の部分が突き出していることを発見した。それも突き出した部分も含めて一筆地番で表現されている。この一筆地番の主体は南海道であったと考えられるので、突き出した带状の部分も道であったことが考えられる。すなわち、南海道から正方形の台地への導入路であったことが想定されるのである。現況は段々に造成された耕地となっているが、前述の南海道が耕地化されたように、導入路でも同様に耕地化されたものと思われる。315番は正方形の台地上との段差が大きいので、むしろ314番が導入路に当たるものと考えている。本体の南海道と導入路が一筆で登録されていると



第6図 南海道痕跡付近の公図

いうことは、南海道部分と突き出した帯状の部分の両者が同時に存在したということであり、正方形の台地へ取り付いているのであるから、南海道・導入路・正方形の台地が同時に存在したことになる。とすれば、正方形の台地は南海道から引き入れる導入路を持つことから、南海道と強い関わりのある施設であったものとみられる。正方形台地東方約 400 m には紀和国境の真土山があったことは間違いないので、国境に関わる施設、または駅路に設置されたという駅家等が推定される。

『養老令』には「凡諸道須置駅者。每卅里置一駅。若地勢阻險。及無水草処。隨便安置。不限里数。」【註 15】と見えて、30 里 (約 16km) 毎に駅家を置き、もし、その場所の地勢が阻険の場合、水や草がない所であれば、他の条件の良い場所に置くようにと規定している。真土山では水の確保が難しいと考えられ、富加見氏はここであればすぐ近くの飛び越え岩で水を確保できることを指摘、水に不便することはなく、牧草もそれなりに得られたものと考えられる。飛び越え岩はこれまで自然形成によるものと考えられてきたが、このような施設への水の補給を考えるならば、取水に便利のように岩を水路状に穿った人工物として考えてもよいのではなかろうか。地勢阻険の度合いは丘陵頂上の真土山に比べるとこの地は良好であり、立地からみても駅家であった可能性は高いと考えられる。

次に平城京からの距離について考えてみたい。平城京の中心は言うまでもなく平城宮であり、平城宮の玄関口に当たるのが朱雀門である。南海道の起点をどこに求めるかは異論もあると思われるが、仮にこの朱雀門を起点とした場合、現在の道路でなるべく当時のルートに近いと考えられる国道 24 号で橿原、国道 169 号で高取、県道五條高取線で吉野口から北宇智に至り、再び国道 24 号で五條からこの正方形の台地状地形のある奈良県と和歌山県の県境付近まで Google Map で計測したところ、48.2km の数字が示された。これはちょうど前述の駅家間の設定距離 30 町 (16km) のほぼ 3 倍にあたる距離であり、朱雀門前を起点とすれば、この正方形の台地状地形が駅家跡である重要な裏付けとなる。

また、仮に平城京の南端の羅城門を起点とすると

40.9km と、16km の 2.5 倍となり距離的には半端な数字となる。蛇足ではあるが、朱雀門から機械的に計算すると、1 つ目の 16km は現在の田原本町役場付近、次の 2 つ目の 32km 地点は高取町の市尾墓山古墳付近、次の 3 つ目の 48km 地点がここ橋本市の真土、その次の 4 つ目の 64km 地点はかつらぎ町役場付近、5 つ目の 80km 地点は紀の川市の国分寺付近、6 つ目の 96km 地点は和歌山市の大谷古墳付近、そして最後が加太で、仮に加太中学校前までとすると朱雀門から約 106km に及ぶ。16km の 7 倍の 112 km には及ばないが、陸路と海路の接点である加太には駅家が設けられたことは後の史料に見える【註 16】。

ちなみに、『日本後紀』、『延喜式』にみえる南海道に設置された駅家として萩原駅(かつらぎ町萩原)が知られており、かつらぎ町萩原から橋本市の真土まで京奈和自動車道経由で約 20km と、規定の距離よりは幾分長い。上記両書の記述は平安遷都後のものであり、平城京を起点とした本考とは起点が異なっており、足利説による南海道Ⅳの時期となるため、萩原駅は原初南海道(南海道Ⅰ)の駅家ではないものと解せられる。

4. おわりに

以上、南海道について万葉歌に見える南海道と真土山の位置についての諸説、条里遺構と南海道の関係、真土における南海道の痕跡、南海道に付随する施設の痕跡について順にみてきた。本考では南海道の痕跡と南海道に付随する施設の痕跡を新たに発見したことにより、諸説あった紀和国境付近の南海道の位置をほぼ決定的なものにできたものと考えられる。さらに、真土山は南海道の紀和国境にあったことは自明のことであるので、どこで紀和国境を越えていたかという問題に対し、これまでの主な説を 4 つ掲げたが、南海道の痕跡の発見により、これら 4 説と異なり、別のルートであったことが判明した。隅田地区からの南海道のルートは隅田条里方格線の街道ラインを延長して東方へ直進し、大越峠から現在の国道 24 号の県境と飛び越え岩の間を抜け、県境の落合川を越えて国道 24 号と街道が通じる待乳峠へ出る直線ルートであり、これまで想像もされな

かった経路をとっていたことが明らかとなった。

そのうえ、南海道に関わりをもつ施設の痕跡を発見、方位を意識した一辺が約 60 m の正方形の台地は、南海道から直接導入路を引き入れているとみられることから、紀和国境に関する施設、もしくは駅家の可能性を指摘した。なかでも平城京朱雀門からの距離が約 48km と、駅家間の規定距離 30 里 (約 16km) の 3 倍 90 里の距離となり、距離からみても駅家であった可能性が濃厚となった。

紀和国境をどこで越えるかが確定すると、南海道の紀和国境にあったとされる『万葉集』に歌われた真土山はいったいどの山を指すのかということになるが、『紀伊国名所図会』には「今の堺川の東、官道にある山を待乳峠といひ」【註 17】とあって、真土山と待乳峠を同一視しているように見える。山は連なる尾根の最も高い場所をいい、峠は人間が尾根を越える際に辿る、いわば連なる尾根の鞍部の最も低い場所を指すと解されるので、真土山と待乳峠は相容れない存在と思われるが、現在の地形に照らし合わせてみると、南北に尾根が連なっている低くなった鞍部が待乳峠であり、現在は国道 24 号で掘り割られているが、かつてはもっと高くなっていたと考えられるので、両者が同一視されるほど至近距離にあったと解すれば、待乳峠のすぐ北、もしくは南側の山であったことになる。真土山には国境を守る施設があったと考えられるので、発掘調査によって、遺構が発見される日が来るかもしれない。

以上、南海道は隅田条里の一つの方格線から東へ延び、大越峠を越え落合川を渡って奈良県の待乳峠へ、幅 12 m でまっすぐに続き、現在の真土集落の南の台地上では駅家があって、せっせと馬の荷物を積み代える人の姿、長旅を続けてきた旅人が休憩する姿などが想起され、今から 1,200 年以上も前の紀和国境から隅田条里のこの辺り一帯の様子が想像される。

なお、本考は先に『橋本市郷土資料館報』に発表した考察【註 18】に手を加えたもので、紀和国境以外の橋本地区、高野口地区、かつらぎ地区、加太地区の南海道ルートについての考察はそちらを参照されたい。

【註】

- 1 近江俊秀『道が語る日本古代史』朝日選書 2012
- 2 和歌山県教育委員会『歴史の道調査報告書(Ⅱ) —南海道・大和街道他—』1980
- 3 中野栄治『紀伊国の条里制』古今書院 1989「第一章 紀伊の条里呼称と南海道」の「第三節 南海道と条里」及び「第四節 南海道の直線指向と条里」
- 4『紀伊続風土記』海部郡加太荘加太村賀陀駅家趾
- 5『万葉集』巻 4 — 543
- 6 奈良県橿原市石川町
- 7 隅田文書 (隅田家文書) 北条時兼袖判下文 (弘安 11 年) に「紀伊国隅田庄木原畠田」とあり、大和国 (奈良県) となっている木原と畠田が紀伊国隅田荘であったことが見える。
- 8『粉河寺縁起』第二 沙門良心粉川田因縁第四
- 9『紀伊国名所図会』巻之二 紀和兩國古堺
- 10『紀伊続風土記』伊都郡隅田荘上夙村
- 11『紀伊国名所図会』巻之二 紀和兩國古堺
- 12『紀伊続風土記』伊都郡隅田荘上夙村待乳山
- 13 註 10 に同じ
- 14『万葉集』巻 3-298
- 15『養老令』厩牧令 14 条
- 16『続日本紀』文武天皇大寶二年春正月始置紀伊國賀陀驛家
- 17『紀伊国名所図会』巻之二 紀和兩國古堺
- 18 拙稿「紀和国境の南海道」(『橋本市郷土資料館報』第 35 号「紀伊国の南海道駅路—痕跡からみた南海道駅路—」2020)

70年ぶりに里帰りした陵山古墳の蓋形埴輪

—令和2年度 秋期特別展からの忘備録—

河内 一浩

1. はじめに -

令和2年10月3日から同年12月6日まで和歌山県立紀伊風土記の丘資料館で令和2年度秋期特別展「埴輪が語る古墳の祀り」が開催された(和歌山県立紀伊風土記の丘2020)。

展示は、王権と墳丘祭祀に視点をあて、紀伊の墳丘祭祀を考察したものである。冒頭、大和を中心した埴輪を例に挙げ、祭祀の場の変化も述べられている。そのうえで①紀伊の埴輪の出現、②岩橋千塚古墳群の墳丘祭祀を概観し、③紀伊各地に広がった埴輪祭祀と終焉を考察する。展示資料は、岩橋千塚古墳群の埴輪のほか、紀ノ川上流域や下流域の北岸の埴輪、紀中や紀南の埴輪も提示され、その資料は膨大な量である。中でも目玉の一つ、昭和27年に金谷克己氏によって調査された橋本市の陵山古墳出土の蓋形埴輪が國學院大學博物館で昭和30年代に復元され、そのまま博物館で公開されている。今回70年ぶりに和歌山へ里帰りすることとなった。

この蓋形埴輪については、平成30年12月1日と平成31年1月27日に國學院大學博物館にて実見している。そこでその際に得たデータを提示し、陵山古墳の蓋形埴輪を筆者なりの新たな知見を交えて私見を述べる。以下、若干追記をして忘備録とする。



図1 展示風景(令和2年10月)

2. 陵山古墳の蓋形埴輪

昭和27年に出土した蓋形埴輪は、『紀伊の古墳』1に「円筒列の2層内側で発見されている」という記述と出土状況の写真が掲載されている(生地1955)。ただし、蓋形埴輪の図や写真が全くない。『橋本市史』上巻には図2に提示した埴輪位置図が掲載され、蓋形埴輪の出土位置については参考となる(橋本市史編さん委員会1974)。この図には円筒形埴輪の位置は明確に示されていないが、末永雅夫氏の『古墳航空大観』には形象埴輪の外側に圍繞されている(末永1961)。推測ではあるが、図2に黒丸で明示されている“きぬがさ埴輪”が國學院大學博物館に復元展示されている蓋形埴輪と考えている。

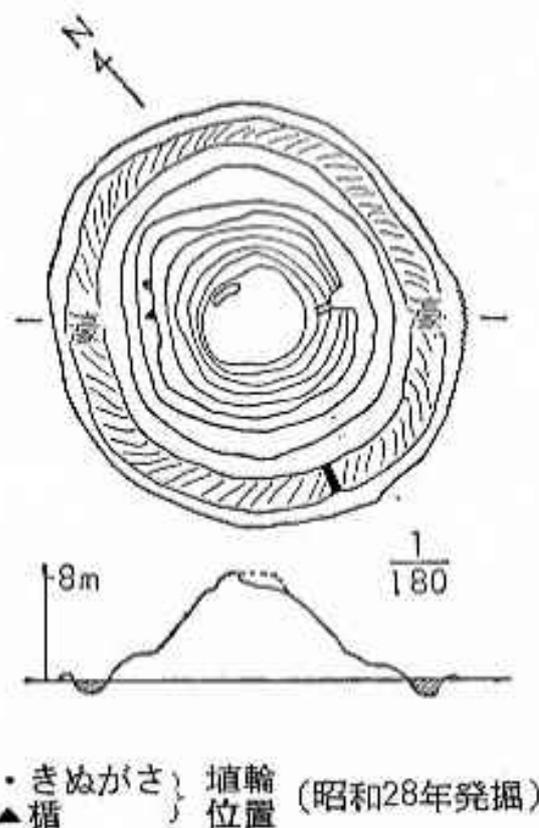


図2 昭和27年の埴輪位置図

蓋形埴輪については、令和元年に橋本市教育委員会から刊行された『陵山古墳の研究』で初めて紹介された（橋本市教育委員会 2019）。

同書の写真図版 10 には蓋形埴輪の立飾り部の飾り板片 4 点（図 3）と軸 2 点（図 4）が掲載されている。飾り板には梯子文の線刻が認められる。単線の内郭に二重線で外郭が構成される。筒状の軸は飾り板受部が欠損している。

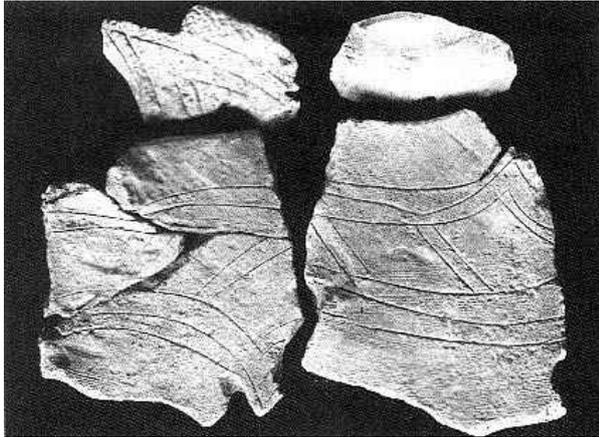


図 3 昭和 27 年出土蓋形埴輪（飾り板）

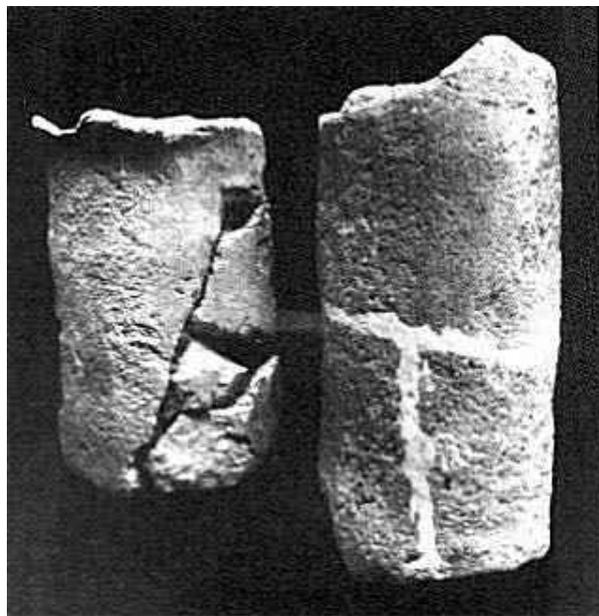


図 3 昭和 27 年出土蓋形埴輪（軸）

なお、2019 年 1 月 26 日に同博物館の見学に際して、蓋形埴輪の破片数点を確認している。復元された蓋形埴輪の残欠と思われる。復元された蓋形埴輪以外の破片の存在が明らかとなった。今後、図化を含めて資料公開の必要があろう。

3. 陵山古墳の蓋形埴輪

國學院大學博物館には陵山古墳の蓋形埴輪が常設展示されている。その大きさは高さ 75cm、笠部径 85cm で、破片を用いて石膏で欠損部を補っている。その形態は、大和北部の佐紀古墳群に見られる蓋形埴輪を意識したと思われる。

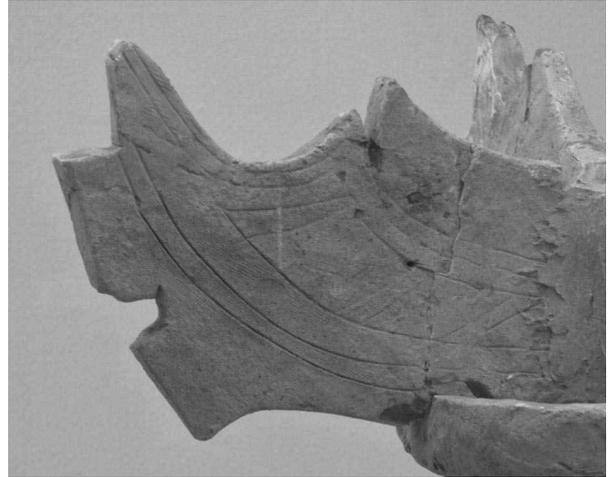


図 5 復元された蓋形埴輪（立飾り部）

立飾り部は飾り板受部がすべて復元であるが、博物館に収蔵されている破片の中に飾り板受け部の破片が存在し、その破片の形とは齟齬は無い。飾り板の文様は内外二重に囲郭する構成で、図 3 に提示した線刻とも合致する。

縦 21cm、横 24cm、厚み 2.5cm ～ 3.0cm の大きさである。

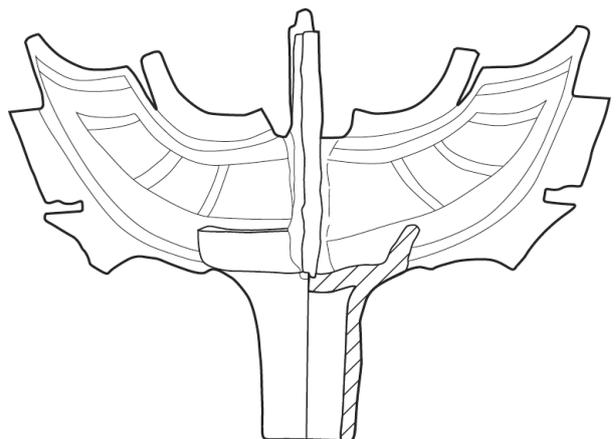


図 6 蓋形埴輪実測図

図 5 に見られる飾り板部の復元から少し修正を加え私は図 6 のような形態と考えている。

小栗明彦氏によると立飾り部は II e 型式に該当し、

その飾り文様は f 2 類文様が施されている (小栗 2007)。



図7 復元された蓋形埴輪

笠部については、軸受部がすべて石膏による補修部分である。

笠部を見ると幅 2 cm、高さ 1.5 cm の突帯が 2 条廻り三分割している。笠端部に幅 2 cm、縁幅 2.5 cm の突帯が貼り付けられ、3 条の線刻が認められる、笠下半部に見られる線刻と合致する。笠部の中位突帯も確実ではない。

また、軸受部から笠縁部に四方に石膏による突帯復元され、先端には飾り板がある。突帯幅は 3 cm。ただ飾り板は一部欠損が認められるものの線刻が良好に残る破片もある。

その先端には図 8 のような線刻のある飾り板

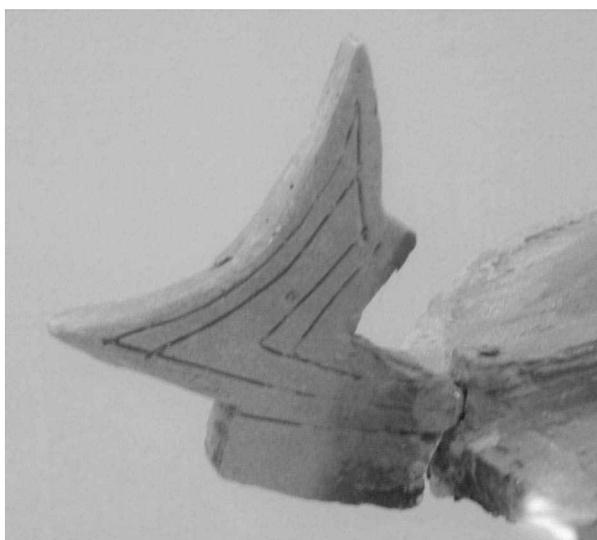


図8 復元埴輪(肋木風の先端飾り)

が付けられている。縦 12 cm、幅 4 cm、厚み 2.8 cm を計測する。形態と文様構成から本来は飾り板の頂辺の部位と考えている。

台部は、突帯 3 条が廻り 2 方向に円形のスカシ孔を穿っている。底面附近に 3 cm の幅広の粘土帯が廻っている。台部もまた破片を散りばめられているが石膏による復元部分が多い。その法量は底径 50 cm、高さ 30 cm である。下から 10 cm、23 cm の突帯間隔であるが、突帯の位置は確定できない。

以上、陵山古墳の蓋形埴輪の形態に類似する埴輪は今のところ例を見ない。おそらくは前述したように昭和 20 年代に全容がわかる資料は奈良市の佐紀陵山古墳の復元埴輪が存在しそれを参考にしたと推察される。復元された蓋形埴輪の形態は、國學院大學博物館の『考古学資料集』に写真入りで紹介されている。説明には「笠部の縁の四ヶ所につけられた飾り付けは特異なものである」と記載されている (國學院大學博物 1961)。現知見では笠部についての復元は再検討を要すると考えている。ただし、復元部分が比較的少なかった飾り部については問題なく、この飾り部が組み合わさる笠部を考える必要性がある。

その可能性が高い資料として和歌山県教育委員会が所蔵する昭和 48 年の発掘で周濠から出土した蓋形埴輪の破片に見出せる (橋本市教育委員会 1974)。その破片とは図 9 に提示した笠縁端部で、その上辺には突帯を廻らしている。このタイプには笠部に布張り表現と考えられる線刻が施されている。破片は 3 点の破片を確認しているに過ぎない。



図9 昭和 49 年出土埴輪

4. 陵山古墳における二つの蓋形埴輪

陵山古墳における蓋形埴輪については、すでに『陵山古墳の研究』で二つの蓋形埴輪の存在を報告している(河内 2019)。

肋木風の突帯を付ける陵山古墳の蓋形埴輪は、現状では立飾りをもつ肋木が無い笠部をもつ例と立飾りを持たずに笠縁が垂下する例である。

後者の蓋形埴輪は図 11 のような笠部の縁である。同じような例は大阪府の古市古墳群や百舌鳥古墳群、奈良県の佐紀古墳群で類例のある形態である。所謂天蓋形と呼ばれる埴輪に属する。破片から復元すると笠部縁の直径が 42cm であった。胎土や色調から同一個体と考えられる破片は、そのほかに軸受け部や軸受け先端部、台部の破片も存在する。外面はハケメによって調整されている。軸受け部の存在からの同笠部に伴う立飾り部の存在も考えられるが現在のところ伴う立飾り部については不明である。天蓋形埴輪の多くは立飾りが伴わないので、陵山古墳の例も飾り部が存在しなかったと考える。



図 10 陵山古墳の天蓋形埴輪

5. まとめにかえて

本稿は、國學院大學博物館に展示されている陵山古墳の蓋形埴輪についての観察忘備録とした。復元を見直したところ中期的な畿内型の蓋形埴輪が存在することが判明した。時期的には古墳時代中期にあたり、埴輪編年のⅣ-1 段階である。この立飾り部と組み合わされる笠部の全体像は不明ながらも突帯が笠縁端部に巡る破片が存在し、須恵器編年でいうと TK 2 1 6 型式以降の蓋形埴輪となる。

垂下する笠縁部も誉田御廟山古墳やウワナベ古墳に新相の天蓋形埴輪が存在するので概ね蓋型埴輪の同時期と考えて良いであろう。紀伊の蓋形埴輪研究に今後活用される資料であると評価できる。

最後になりましたが、掲載にあたり和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員の金澤舞さんに大変お世話になった。國學院大學博物館の蓋形埴輪の見学に際し同博物館の准教授の深澤太郎さんに便宜をはかっていただいた。記して感謝の意を表します。

【参考文献】

- 生地亀三郎・金谷克己 1955 『紀伊の古墳』 1 (考古叢書)
小栗明彦 2007 「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考 I』 大阪大谷大学博物館
河内一浩 2019 「紀ノ川上流域の埴輪について - 陵山古墳出土埴輪の位置づけ」『陵山古墳の研究』 所収
國學院大學博物 1961 『考古学資料集』 第 3 集
末永雅雄 1961 『日本の古墳』
橋本市教育委員会 2019 『陵山古墳の研究』
橋本市史編さん委員会 1974 『橋本市史』 上巻
和歌山県立紀伊風土記の丘 2020 『埴輪が語る古墳の祀り』 (秋季特別展図録)

熊野本宮備崎経塚について

中村 浩

はじめに

備崎経塚が本格的に知られたのは、平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した、国庫補助事業・東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査によって得られた成果が最初である。(黒石・1990) この調査でA、B両地点に経塚の可能性のある遺構の分布が確認され、とくにA地点は標高158mの頂上付近に位置し、約10m余りの平坦地が見られる。さらに周辺には20～30cmの川原石が散乱し、須恵器の破片なども採集されたことから、備宿の建物跡の可能性も考えられている。C地点からは瓦質の経筒或いは外容器などが採集された。

また大黒石と呼ばれる巨大な洞窟の割れ目からは瓦質の土器が採集され、修験関係の修法場と推定されている。また同時に丘陵の高所で、平坦面が確認され、備宿の可能性も指摘した。(中村・2002) その後、当該地域が世界遺産登録のコアゾーンに含まれることから、本格的な調査が行われることとなった。平成13年12月11日から14年2月15日の間、大阪大谷大学によって調査を実施し、第一地点で32遺構、及び第三地点7遺構以上、少なくとも39カ所の経塚遺構を確認した。

とくに検出遺構は、上部を攪乱で損なっていたが、基礎部分は、ほぼ整然とした形で残されており、貴重な情報を得ることができた。やがて周辺を踏査された山本義孝氏によって備崎の磐座遺構の紹介などがあった。(山本・2006) さらに時枝勉氏により、備崎経塚についての紹介があった。既に調査報告書は刊行されているが(中村ほか・2002)、なお詳細な部分で十分な理解が得られていない。以下、それらを紹介していきたいと思う。

備崎経塚の調査

概観

今回調査の対象としたのは備崎丘陵に所在することが確認された7地点の経塚遺構群の内第一、第三地点の2カ所である。第一地点は備崎丘陵先端部に位置する経塚遺構群である。ただし周辺に散乱していた川原石は、いずれも丘陵裾を流れる熊野川からもたらされたものであり、丘陵地山は本来岩盤質である。

調査開始段階には、散乱状況から相当な攪乱が予想され、積石の攪乱は表面上は確認できなかった。さらに石の堆積状況の検討から旧状が大きく損なわ

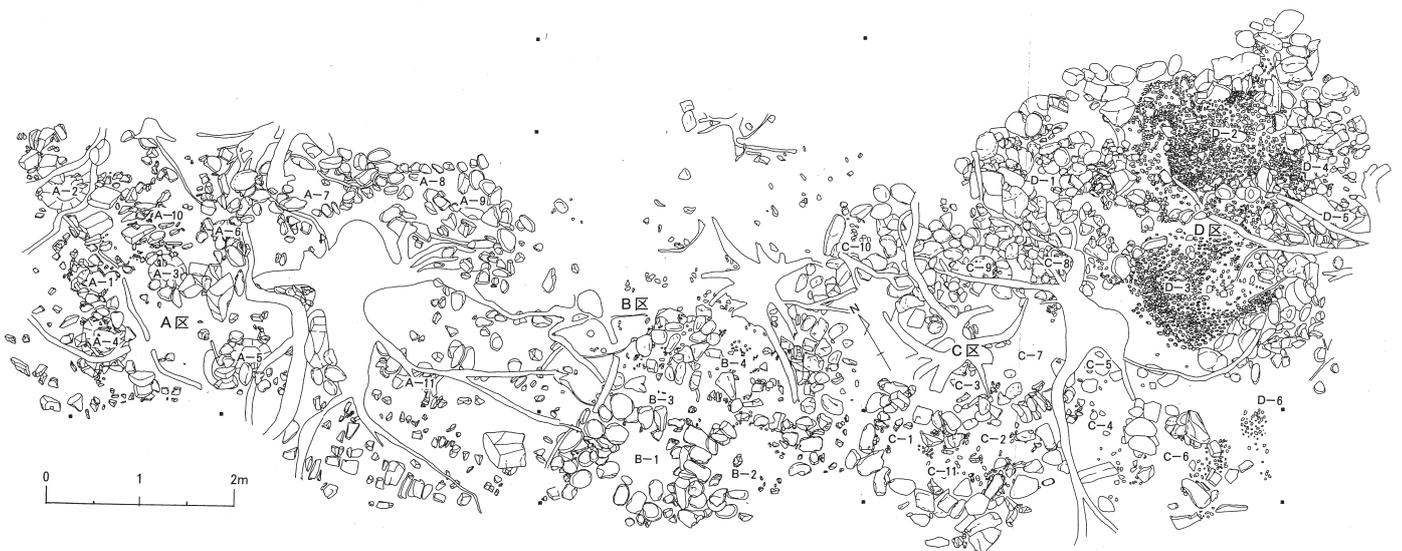


図1 備崎経塚第一地点遺構実測図

れているとみられるものについては適宜除去しながら進めていった。これらの検討の結果、丘陵先端から4群のこれら積石群を区として理解し、先端から順に、すなわち北から南へのA、B、C、D区としてブロックを区分して調査を進めた。

第一地点では、下層遺構の確認数に差が認められた。内訳はA区—11、B区—4、C区—12、D区—5か所及び第三地点7遺構、内訳はA区—2、B区—5か所以上、少なくとも39カ所の経塚遺構を確認した。

第三地点では、丘陵鞍部に位置しており、大きく3ブロックに区分されるが、調査の対象としたのは、丘陵先端部のA区と中間部のB区の積石群についてであり、A区で2カ所、B区で5カ所の積石群の確認があった。A区については西側に分布する遺構群の調査を実施し、全体の石材清掃、除去などの精査は、今後の遺跡保存を考慮して実施しなかった。

遺構各説

第一地点、A区

A—1号経塚—備崎丘陵先端部、すなわち北部端に構築された遺構で、丘陵鞍部からわずかに下がる稜線部分に位置する。南北45cm、東西36cm前後を測る円形に近い平面系を成し、中央には地山を彫り込んで作られた土抗がある。抗の周囲には川原石、智山石を用いて数段積み上げたのち天井石を配置していたものとみられる。遺物の出土は見られなかった。

A—2号経塚—1号居塚の東、1mにあり、丘陵先端部の北東端に位置する。とくに丘陵先端部分を方形に整形している角部に当たる。南北60cm、東西35cm、深さ30cm前後を測る円形の土坑を穿っている。遺物の出土は見られなかった。

A—3号経塚—1号経塚の南西0.8m、丘陵鞍部に位置する。南北40cm、東西30cm、深さ32cmを測る円形の平面形をなし、径15～25cm前後の川原石が土坑を囲むように配置している。遺物の出土は見られなかった。

A—4号経塚—第一地点A区の北西端部に位置する。南北40cm、東西45cmをはかる楕円形に近い平面形の土坑を穿つ。土坑の周囲には径15～25cm

前後の楕円形に摩耗した川原石が配置されている。なお当該遺構の積石は西、南側の残存状況から一辺50cmの正方形に配置され、かつ一部で二段以上に積み上げられていることがわかる。

A—5号経塚—3号経塚の西南1.3mに位置する南北40cm、東西35cm、深さ15cm前後をはかる円形に近い平面形の土坑を穿っている。土坑の周囲には川原石が積み上げられており、とくに北側部分では二段以上に及ぶ。遺物の採集はなかった。

A—6号経塚—3号経塚の南75cmに位置する、南北30cm、東西25cm、深さ15cmを測る円形に近い不整形な土坑である。どこの周囲には川原石が配置されており、周囲には一辺50cmの正方形を呈する石列が残存している。なお南、西側は上部を木の根で覆われており、詳細は明らかではない。遺物の出土は見られない。

A—7号経塚—3号経塚の南2.3mに位置する遺構で、A区では最南端に該当する。丘陵鞍部裾に直線的に石列を配置し、さらに両端から直角に石列を配置し、その中央部を僅かに窪めたというものである。石列の先端部はいずれも木の根で覆われており、詳細は明らかにできない。

A—8号経塚—7号経塚の南北列に接して位置する。南北25cm、東西20cm前後をはかる円形に近い平面形をなす部分を川原石の積石で囲んでいる。中央部の本来この位置する土坑部分の上部を木の根で覆われており、詳細は明らかにできない。

A—9号経塚—8号経塚の南1mに位置し、南北30cm、東西70cmの範囲を川原石が取り囲んでいる。中央部の本来この位置する土坑部分の上部を木の根で覆われており、詳細は明らかにできない。

A—10号経塚—2号経塚の南80cmから検出された遺構である。当初の積石群の除去によって残された石の内、二石の可能性の濃い径40cm前後をはかる丸い石に注目してそれを除去したところ下方から経筒の破片が確認されたものである。注意深く観察すると南北35cm、東西40cm前後をはかる円形に近い平面形を成す範囲を取り囲むように川原石が配列されていることがわかる。なお6号経塚の北側を東西に走り、3号経塚の東を南北に伸び、北側ラインは2号経塚の南側を東西に走る配石である。出土

遺物は経筒底部、大部の破片である。

A-1 1号経塚—5号経塚の南東 1.5m で確認された遺構である。南北 23cm、東西 25cm 程度の石室を構成しているとみられるが木の根が覆っており、詳細は不明である。遺物は見られない。

B 区

丘陵鞍部に沿って西側斜面に展開していた積石群は南北 3m、東西 2.4m に及ぶ。一部は数段にわたって積み上げられていたが、その大半は後世の攪乱以後に形成された可能性が濃いことが確認された。また当該積石群下層からは 4 基の経塚遺構が確認されたが鞍部中央には大きな檜が茂っており、根の下方部分にも存在の可能性がある。

B-1 号経塚—B 区北西部端に位置し、長径 1.7m、短径 1.5m を図る楕円形の積石経塚である。積石はいずれも川原石で、10～30cm 前後をはかる縁或いは楕円形に摩耗した石が三段以上に積み重ねられている。積石の中央部付近に長径 65cm、短径 55cm の素掘りの土坑が見られる。出土遺物には山茶碗、経筒の破片などが採集されている。

B-2 号経塚—B 区南東部丘陵鞍部に位置する遺構で、上部の積石を除去するとわずかに遺構の底部とそれを囲む石が確認されたものである。長径 1.3m、短径 1m 前後をはかる長方形に配列された石列によって囲まれている。石列中央部にはわずかに礫が散布しており、経筒破片及び土師器坏などが採集されている。

B-3 号経塚—B-1 号経塚の南に接して位置する。上層部の積石を除去すると 1 号経塚に近似する形状の遺構が確認される。北側部分は 1 号経塚と共有しており、周囲を楕円形に川原石が囲んでいる。長径 1.2m、短径 1m をはかり、中央部に土坑が見られるが特に大きくは掘り下げられていない。なおわずかながら細かな礫が散布する。遺物は確認されていない。

B-4 号経塚—B-2 号経塚北側に接して位置する。いくつかの川原石が配列されている角の部分が確認されたもので、大半は木の根によって覆われている。現状の長径 1m、短径 0.6m をはかり、石列の内側に礫の散布が見られる。遺物は確認されていない。

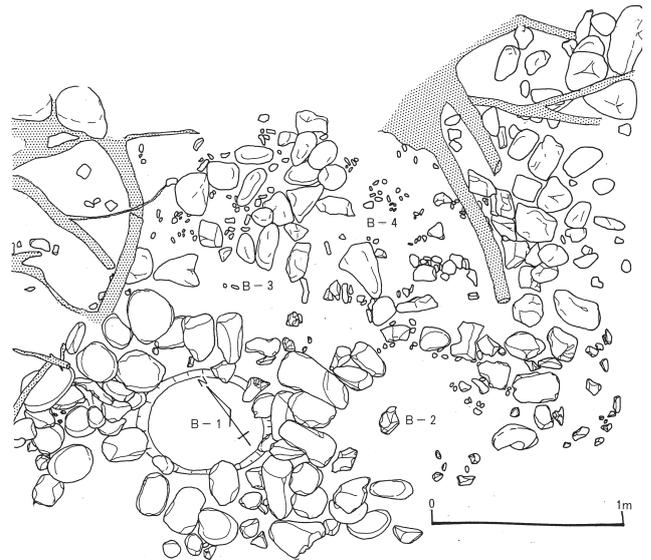


図2 備崎経塚第一地点 B 区遺構実測図

C 区

第一地点の丘陵基部に近い部分に位置する遺構群で、北側斜面では D 区との区別がつきにくい。位置関係から丘陵先端部（西）側に C 区、東側に D 区が位置し、標高はわずかに D 区が高い。

C-1 号経塚—C 区先端（西）に位置し、一辺 1m の方形をなす川原石で囲まれている。東側には C-11 号経塚および C-2 号経塚が位置し、とくに 11 号経塚は当該遺構の東側部分を破壊して形成されている。なお石列で方形に囲まれた部分は細かな礫の散布が確認される。東端から影青合子の破片が採集されている。

C-2 号経塚—C-1 号経塚の東 0.5m に接して位置する。C-1 号経塚と同様、一辺 1m の方形を成す川原石の配石が見られる。周囲の積石の状況から二段以上に積み上げられていたものと考えられる。方形の範囲内には細かな礫が散布している。西側部分を C-11 号経塚が破壊している。遺物には常滑壺破片などが見られる。

C-3 号経塚—C-2 号経塚の北に接して位置する。大半が木の根で覆われており、詳細は明らかでない。なお川原石で囲まれた部分に細かな礫が散布しており、常滑壺底部が採集されている。

C-4 号経塚—C-2 号経塚の東側にほぼ接して位置する一辺 1m 前後をはかる正方形の川原石配石が

見られるが、南側部分の大半はすでに失われている。なおそれらで囲まれた部分に細かな礫が散布する。陶器の破片が採集されている。

C-5号経塚—C-4号経塚の北に接して位置する。大半が木の根に覆われており、詳細は不明であるが、川原石で囲まれた遺構であることは疑えない。陶器壺底部の破片が採集されている。

C-6号経塚—C-2号経塚の北西、丘陵鞍部に位置する。C-2号経塚の北側積石を共用するような形状で、さらに内側に石列の痕跡が見られる。石列の延長は65cmで、遺構の大半は木の根で覆われている。なおこれら遺構の北部で火切り鎌の破片が採集されている。

C-7号経塚—C-3、C-5号経塚に囲まれた範囲に位置し、大半が木の根に覆われており、詳細は明らかにできないが、周辺状況から経塚の可能性が濃い。C-8号経塚—C-7号経塚の北側、丘陵鞍部北側斜面に位置する。径20cm前後の川原石がほぼ正方形に石列を形成する。石列の一边は1m前後で、一部二重になっている部分が見られる。南側部分は木の根の覆われており、中央部付近から陶器片が出土している。

C-9号経塚—C-8号経塚の西に接し、丘陵鞍部から北側斜面に位置する。径20cm前後の比較的整った大きさの川原石で、ほぼ正方形の石列が形成されている。最大三段に積み重ねられた中央部には径55cmの土坑が穿たれている。土坑部から陶器片が採集されている。

C-10号経塚—C-9号経塚の南西50cm、丘陵鞍部に近い斜面に位置する。今回調査対象とした第一地点では最も中腹部分に近い。径80cmの円形に川原石が積み上げられたもので、中央部には径40cm前後の土坑が見られる。土坑底部には細かな礫が散布している。

C-11号経塚—C-1、C-2号経塚の中間部分に位置するもので、1、2号のいずれにも属さない細かな礫の散布が確認され、わずかに周囲を囲んでいた川原石が北側に2個、南側に3個が確認される程度である。内部から陶器経筒の蓋の破片が採集されている。

C-12号経塚—C-1、112号経塚の南、丘陵谷川斜面

に位置する。東側側壁とみられる石の積み上げられた部分と西側部分が残存するが、谷川側部分の石材は失われている。わずかに細かな礫の散布が確認される。

D区

第一地点では丘陵の基部に近く、東端部分に構築された経塚群である。調査段階で表土除去後まもなく当該遺構の多くが露呈しており、攪乱が予想された。しかし踏査の結果、他の群と同様であり、むしろ保存状態が良好な部分も見られた。また当該遺構の東側、および北側斜面には多くの川原石が露出しており、それらが経塚遺構となる可能性も十分ある。今後に期待したい。今回の調査では6基の遺構を確認した。とくに2,3,4,6号経塚は、他の区に見られない細かな礫が多数散布する形態であった。

D-1号経塚—丘陵鞍部からやや下がった北側斜面に位置する。南北80cm、東西65cmをはかる長方形に

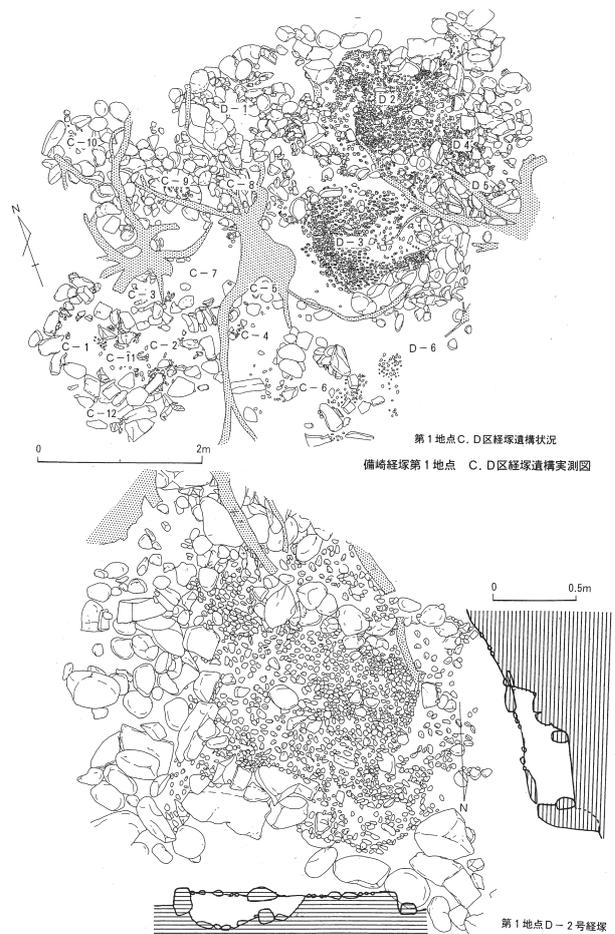


図3 備崎経塚第一地点C・D区遺構実測図

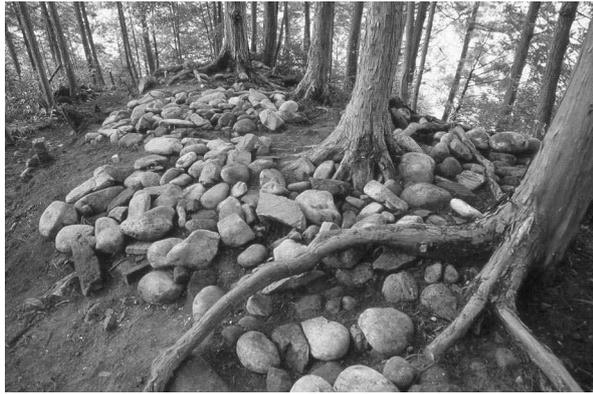


写真1 備崎経塚第1地点

川原石による石室状の積石がめぐらされている。中央部にはとくに石の配置は見られず、当該部分に経筒などを収めたものと考えられる。川原石の径10～30cmと大小さまざまなものがあり、最大四段の積み上げが残されている。陶器の破片が採集されている。

D-2号経塚—D-1号経塚の東1mに位置する。丘陵の裾部側には大きな地山石を石垣状に土留めを行い、両側面には川原石でほかの遺構と結界している。なお石列で囲まれた範囲は長径（東西）1.9m、短径（南北）1.1mで、攪乱の少ない部分には細かな礫が多く、意識的に埋められたことがわかる。なおこれらの石が経石ではないかという指摘があり、注意深く石材の水洗作業などを実施したが、何ら墨書などの痕跡を確認することはできなかった。なお下層に先行するD-4号経塚があり、上下に重複する珍しい遺構である。また南に接してD-3号経塚が位置するが、それらとの重複関係は認められない。なお2、3号に関しては共存していた可能性がある。内部から陶器の破片が多く採集されている。

D-3号経塚—D-2号経塚に接して南側、丘陵鞍部側に位置する。丘陵裾側に川原石による石列を配置して、D-2号経塚と区分している。2号経塚と同じく長方形に石列で囲んでおり、その長径1.8m、短径1.4mをはかる。なお西側端部は木の根で覆われており、長径がわずかに延長される可能性がある。南側及び東側については径20～40cmの川原石で二段程度積み上げられたものと見られる。石列内部には細かな礫の散布が見られる。礫の部分の東側に径80cm、短径60cmの土坑が穿たれ、その底部から陶

器外容器の破片が採集された。D-4号経塚—D区の東端に位置する。D-3、2号経塚がともに上層に構築されており、その全容が明らかにできない遺構である。残存部から長径（東西）1.75m、短径（南北）1.5mをはかる長方形の範囲に囲まれた遺構である。中央部をD-2号経塚で攪乱されているが、南東部分や北東部分は旧状が残されている。なお北東部分から陶器壺、土師器などが採集されている。

D-5号経塚—丘陵鞍部南側斜面に位置する。とくに石列などの残存は確認できないが、不自然に細かな礫が散布しており、当該部分にもD区の2、3、4号経塚と同様な構造を持つ遺構が所在したものと考えられる。これらの細かな礫の上面から陶器片が採集されている。

第三地点A区

第三地点では丘陵鞍部に僅かな平坦面があり、それらが約1m前後の標高差で遺構が所在する。丘陵先端部分をA区とし、合計2基以上の遺構が確認されたが、調査は良好な石敷が残存していた部分の南側のみを対象とした。

A-1号経塚—丘陵先端尾聘端部に位置し、最大三段に積み上げられた積み石遺構である。南側の積石の間から陶器製外容器が採集されている。

A-2号経塚—A-1号経塚の北側に位置する、石列を伴う遺構であるが、時間的な制約のため調査は行っていない。

B区

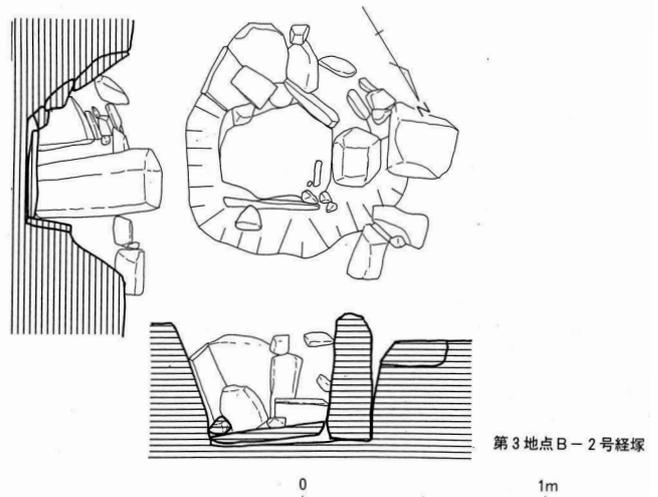


図4 備崎経塚第三地点B-2号経塚遺構実測図

A区より標高で1m前後高い位置に形成されている。当初は全体を方形に石列が囲んでいるように見えたが、調査の結果中央部および周辺部に土坑が存在することが明らかとなった。

B-1 経塚遺構—B区の北西側に位置し、南北1.5m、東西1.5mをはかるほぼ正方形に川原石で囲まれた遺構である。中央部付近には細かな礫が多数散布しており、これらの下層から陶器及び土師器の破片が採集されている。

B-2 経塚遺構—B区の中央、B-1号経塚遺構の南東角に接して、一辺1m前後の正方形の土坑が確認された。土坑内部には地山の石が投げ込まれたような状態が観察され、当初から攪乱が予想された。しかし下層へ掘り進むに従って土坑の周囲に川原石が配置され、さらに地山石の扁平なものや川原石を使用した石室様の造作が行われているのが明らかとなった。とくに北側中央部には一辺の径20cm、深さ45cmの方形の川原石が建てられた状態で検出された。おそらく何らかの標示石ではないかとみられる。さらに土坑底部には全体を覆う板石が置かれていた。内部床面からの遺物採集は見られなかったが、土坑内からは影青合子と、ほかの近似する合子及び黄釉陶合子がそれぞれ採集された。さらに先の立石及び板石下層から青銅製薬師如来小立像1点が出土した。

B-3号経塚—B-1号経塚の東に接して位置した、一辺50cmをはかる正方形の配石遺構である。東側の配石は失われ、中央付近に礫の散布が見られる。遺物は確認されていない。

B-4号経塚—B区の南側斜面に位置し、径50cmをはかる範囲を川原石が囲んでいる。とくに土坑は見られず、内部下層から陶器片が採集されている。

B-5号経塚—B-3号経塚の西に接して位置するもので、3号経塚と同じく川原石、地山石を用いて形成された遺構である。周囲の石の配置は一辺1mをはかる正方形であり、土坑の掘り込みは確認されていない。内部からは陶器片が採集されている。

出土遺物との関連

確認した経塚遺構について、位置関係などについて詳細に検討してみると、第一地点については、A,B,C,D区がそれぞれグループとして捉えられると

いう特徴を持つ。さらにB,C区とD区の構造には大きな差異が認められる。また出土遺物からも第一地点のB,C区とA,D区には大きく採集遺物に差があることがわかる。すなわちA-10号経塚とD-2号経塚には青銅製の経筒の出土がみられるのに対し、他の区ではそれらが全く見られない。またA区についてはA-10号経塚以外に遺物の出土が見られない。このことはA区の遺構の攪乱が著しかったことを物語っている。B区では土器皿(B-2)、瓦質経筒(B-1)山茶碗(B-1,2)などが採集されている。しかしB区では全体に出土遺物が少ないという特徴があり、A区と同様に攪乱が著しいという検討結果がある。

C区については攪乱痕跡が見られたものの、下層面では土坑の確認などがあり、比較的残存度合いが良好であった。とくにC区では須恵質経筒が2点以上出土し、陶器(四耳壺)、大型陶器甕(外容器)などが見られる。

一方、D区では常滑壺2点のほか土師質経筒、須恵質経筒をはじめ大型の陶器甕(外容器)などが出土している。

第三地点ではA区で、陶器外容器(A-1)、影青合子、陶器経筒、陶器外容器(A区)の出土、B区では、陶器片、土師器(B-1)、陶器外容器底部2点、影青合子、青銅製小仏像(B-2)、瓦器皿(B区)、陶器片(B-4,5)が採集されている。

これら採集された陶器の破片はいずれも経筒、あるいは外容器を形成していた陶器の一部であり、現状では接合不能なものについてもかつては完全な製品であったものと考えられる。

遺構の残存状況と遺物の採集状態当該経塚の攪乱状況を考えると次のようになるだろう。

まず丘陵先端部分に位置した第一地点A区の各遺構は上層部分を覆っていた石材が大半排除された状態であり、経塚の核心部分の攪乱が十分に考えられた。このことは採集遺物が著しく少ないことから証明されるだろう。B区についても丘陵鞍部ということもあり、覆っていた石材の流出が見られたが、先端部分のA区よりは攪乱が少ない。C区、D区については丘陵基部及び斜面部分であることから、攪乱の及んでいた可能性はA、B区よりは少ないこと

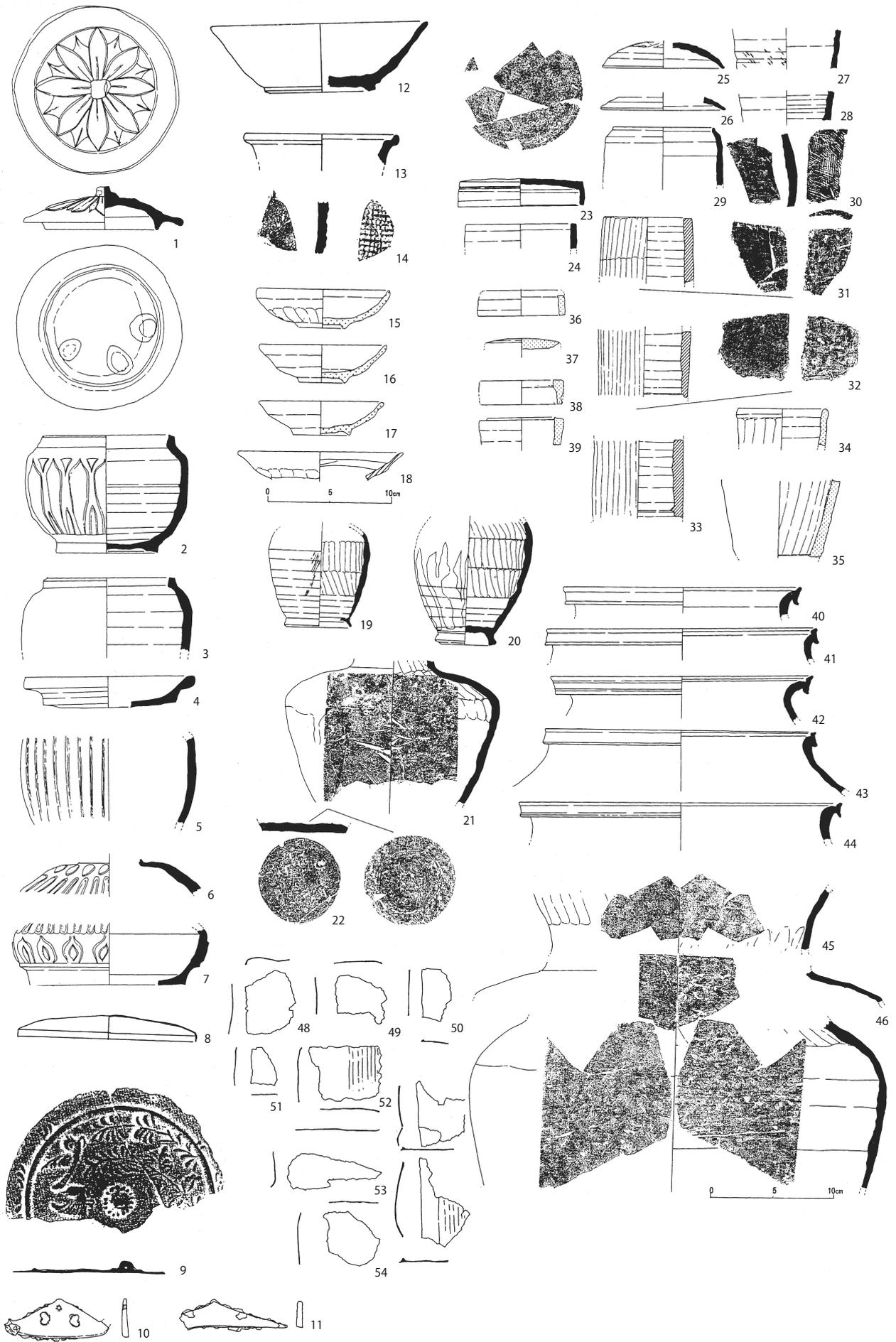


図5 備崎経塚第一・三地点出土遺物実測図

1・2: 第三地点B-1号、3・5・7・8: 第一地点D区、4: B-1、9: D-2、10: C-6、11: C区、12: B1・2、13: 第3地点B-2、14: 第3地点A-1、15-17: D区北側、18: 第3地点D区、19・20: D区、21: C-1、22: 第3地点B区、23-25: C区周辺、26: D1、27-29: C区周辺、30: B区北側 31: 32: B-1、33: D-2、34・35: D区、36-38: D区、39: D-2、40・44・47: D区、41-43・45: C区、46: C-3、48-54: A-10 (とくに地点表記のないものはいずれも第一地点)

がわかる。

第三地点は、丘陵のわずかな平坦部分に構成された経塚であったこともあってB区については多くの石材が除去されていた。しかし、幸い石室の底部に敷かれた底板の存在が、B-2号経塚の小仏像採集という偶然を呼んだものと考えられる。

以上、今回確認された経塚遺構について記述してきた。当初から攪乱は予想されていたとはいえ、予想以上に攪乱されていることから、少なからず落胆を禁じえなかった。

しかし調査を進めていくにしたがって、攪乱の目的が遺物の奪取にあり、その達成後は放置されており、一定以上に攪乱されていないことがわかった。明らかに攪乱行為によって旧位置を移動した遺物の確認は残念なことではあったが、当該遺構群が経塚群であることのへの証明でもあった。攪乱を受けた上層部分の撤去後は、経塚単位の確認も可能となり、それらの形成過程の考察も可能となった。いずれにしても今回の調査が、備崎経塚の存在確認のためであり、本格的な遺構の調査は後日に委ねざるを得なかったのはいささか残念ではあったが、文化財の保存を考慮すればそれもやむをえないものであり、大方の支持は得られるであろう。

経塚の設置状況

備崎経塚について調査検討を行った丘陵先端の第一地点、第三地点を中心に記述してきた。これらが時期的に見て一時期の短い期間に形成されたものでないことは明らかであり、長時間にわたって地道に形成されてきた遺構であることが理解される。

とくに第一地点ではA区からD区まで遺構そのものの構成状態が異なっている点、注目される。A区については単純に経筒の周囲に川原石を配置したもので、土坑は地山を掘り込んで構築されている。おそらく上部を覆っていた川原石があったとみられるが、地山直上まで除去されていたものである。B区について見れば、A区と同様覆われていた石材はほぼ除去されている。ただし基礎に収められた石材までは除去されず、残存していたものが多いとみられる。円形の土坑の周囲に配石された構造を持っており、これによる限りA区とB区については基本的に似た構造を持っているといえる。

C区では、C-1は、周囲を長方形に囲む配石があり、その一方に土坑が見られる。さらにその南端を切るようにC-11、さらにその東にC-2が設置されている。とくにC区については表面を覆っていた石材が大半除去された状態であり、基礎部分の残存が確認されたものである。これらの、構造を持つとみてよいだろう。

一方、C区とD区については近接していながら極端に構造が異なっており注目される。D区については、D-2, 3遺構は長方形に配石された内部に細かな礫を配置するもので、丘陵斜面に設置された独特な形態のもので、平面的に見た場合異なる構造を持つように思える。とくにD-2, 3, 4号遺構は、礫の散布が著しく、他とは異なった印象を与える。さらにD-3号遺構は攪乱が少なく、D-2号は、東南隅でD-4号と切り合い関係が見られるが、状況からD-4号遺構が後出段階である。なおD-1号遺構については、C-8, 9号に近接しており、C区に分類するのが妥当かもしれない。

以上のように位置関係を検討することにより、A区、B区、C区、D区ごとにそれぞれの遺構が配置されているように見える。第3地点、第二地点については丘陵の位置に大きく隔たりがある。これらについてもAからD区と同様構築域に差異を認めざるを得ない。

このように遺構の構築地域に差異が存在する事実から、その地域ごとの設置域が約束されていた可能性があると考えられる。すなわちそれらの地域ごとに経塚設置の斡旋者がいたのではないかという推定がされるのである。備崎丘陵に位置する経塚群は、相当数に上るが、それらが無為無策にどこにでも設置されていたのではなく、一定の約束に従って設置されていたと考える。

以上の分類について再検討を加えられたのが時枝勉氏であるが(時枝・2011)、筆者とは見解を異にする部分も多く見られる。とくにd形態についていずれも保存状態が極めて悪く平面プランを想定することは難しいとされるD区の経塚遺構については明らかにほかの区域の状況とは大いに異なっていることが確認できる。その構造は地山を僅かに掘り窪め、周囲に川原石を積み上げるもので基本的にb

形態と同様である。いずれにしても保存状態が極めて悪く、平面プランを確定することは難しい。とされるが、実測図を見る限りその指摘は当たらないだろう。このように図面から想定する平面プランの復元は残念ながら難しくはないのである。上部を覆う積み石の復元によって、基礎的な石の配列を見失っている場合もあろうが、少なくとも実測図に当たれば、この問題は解決されるはずである。このほかにも事実とは異なる解釈をされている点が多々見られるが、いずれ時が解決すると思うのでこれ以上の詮索は行わないことにする。

熊野御師との関係

これら経塚の設置については基本的に本宮大社自体が直接設置を行うことはない。すなわち大社は経塚を設置する土地の所有者であり、その管理を行う。しかしそれらの設置、および管理運営には大社の下部に組織されている御師が実務に当たっていたと考えられる。

そこには大社との仲介者〔紹介者〕の存在が考えられる。この仲介者は大社側との交渉はむろんのこと経塚を構築するための材料の調達、さらに場所の斡旋等を行うものである。

これらの役割を果たしたのが御師である。平安時代頃に登場した御師は、京都賀茂社、近江日吉社、京都石清水社のほか、とくに知られているのが熊野三社に属する御師である。平安時代以降、熊野詣が京都貴族階層の中で流行したが、その熊野詣でに関する宿泊の世話や加持祈祷、および山内の案内などを行ったのが御師であった。

永島福太郎氏によると「御師は御祈祷師、先達は参詣の先導者をいい、もともとは御師先達の両職兼帯が通例だったが、士庶の熊野詣がさかんになると、御師は熊野三山に宿坊を持つ供僧（御祈祷師）、先達は地方から信者（檀家）を御師のもとに引率する役職となった。」（永島・1994）とされる。

熊野では当初は参詣の都度両者間で契約を交わしていたが、次第に御師を「師」とし、先達が率いてきた参詣者を「檀那」とする師檀関係が恒常化していった。とりわけ平安時代には貴族階層にとどまっていた参詣者が、鎌倉時代以降には武家階層、鎌倉時代後半には農民、庶民階層までを檀那とするよう

になっていった。

ここでいう檀家とは壇越という意味で、寺や僧侶（神社や神官）を援助する庇護者のことである。なお檀家という言葉自体は鎌倉時代にはすでにみられるが、荘園制の崩壊によって寺院（神社）の経済的基盤が変化して以来、頻りに登場する。

ただし江戸時代に設置された宗教統制政策の一環でもあった寺請け（寺壇）制度とは異なる性格を持っており、個々の檀家が寺院（神社）の経済的な支援者として位置付けられている点には大きな差はないといえる。

熊野御師は、山伏や一般の信者たちが修行のために山へ入る際の指導者であり、道案内人でもあった。彼らを先達と呼ぶが、檀家と御師の間に立つ中間層でもあった。

筆者は、備崎経塚第一地点のA区からD区について詳細を見てきた。その結果、各区ごとに構築手法が近似しており、おそらく各区ごとに見れば同一のグループによる構築と考えられた。そのグループを担当していたのが、先達であり、さらにその上部にいた御師であったと考える。

ところで経塚の設置者については名前の判明しているケースが少ないが、本宮地域では、東京国立博物館収蔵品がある。これについては坂田宗彦氏による検討があり、詳細はそれを参照されたい。（阪田・2002）敢えてそこに刻まれた銘文を再録する。なおこれについては経塚遺文93号でも再録されている。（関・1985）

（陶製外筒 筒身刻銘）

熊野山如法経	銘文
大般若経一部六	百卷 白瓷箱十二合
箱別五十卷	
保安二年	歳次辛丑十月日
願主沙門良	勝
檀越 散位	秦親任

これは銘文によると、保安二年十月に散位秦親任の依頼によって沙門良勝が大般若経一部六百巻を白瓷箱十二合、箱別五十巻を収めて熊野に埋納したというものである。その経塚が文政八年滝沢馬琴によって兔園小説で紹介された。すなわち「乙酉の春、熊野本宮社川除の堤を築かんとて、社境内の川上た

る大黒島といふ岩山より、大石を引き出す。」とあり、偶然の崩落によって当該遺物群が出土した内容である。なおこれらに紹介された遺物群が東京国立博物館所蔵品と同じであることは、阪田氏も示されている。(阪田・2002) なお杉山洋氏に指摘によると(杉山・1982)ここに示されている散位秦親任は、山城松尾社の神主です。すでに永久3年(1115)銘の松尾寺一切経の内の奥が氣に願主としての名前があり、保安2年の経塚造営時には53歳であった。願主沙門良勝については、静岡県熱海市伊豆山神社経塚出土の永久5年銘銅鑄製経筒に名前がある。とくに伊豆山神社は熊野三山の影響のみられる本宮、中本宮、新宮の三所講式を持ち、信仰を担った僧たちの往来が見られる。さらに杉山氏は「人的交流に海上交通の利用を考える」ことができるとされた。(杉山・1982)既に遺物の記述でも明らかのように、出土陶器の大半は東海系の産品であることからその指摘は当を得ていると考える。

むすびにかえて

以上、調査後、20年にならんとする備崎経塚について、再考してみた。この間、熊野本宮周辺は世界遺産に登録され、多くの参詣者、観光客を集めている。熊野三山に対する関心も熊野詣でや参詣道、経塚、西国巡礼(三十三度詣り)など多種多様な研究の展開が行われている。しかし経塚に関する研究は、とくに本宮経塚については全く緒についたばかりの段階であるといわざるをえない。そこには資料、情報の不足が関係していると思われるが、那智山経塚との大きな差異も関係していると考えられる。(三宅・1985)

なお今回改めて確認できたことに東海地方との交流がある。経塚構築にとって重要なものである外容器、あるいは経筒として用いられたと考えられる陶器の大半が東海系の産出品が占めていることがある。それらは科学的分析を通じても明らかであり、(三宅・2002)和歌山県の陶器の流通を知る上でも重要な問題でもある。とくに紀北地域とくに根来寺などにおける瀬戸内系陶器(備前焼)の流通とは全く対照的な傾向を示しており、興味深い問題となる。

【参考文献】

- 黒石哲夫『東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査概報』和歌山県教育委員会、1990(黒石・1990)
- 永島福太郎「中世の紀州」『和歌山県史・中世』和歌山県、1994(永島・1994)
- 阪田宗彦「東京国立博物館収蔵熊野本宮経塚出土品が語るもの」『熊野本宮備崎経塚発掘調査報告書』大阪大谷大学博物館調査報告書第46冊、2002(阪田・2002)
- 関秀夫「経塚遺文93号」『経塚遺文』1985、東京堂、(関・1985)
- 杉山洋「熊野三山の経塚」『文化財論叢』奈良国立法文化財研究所創立30周年記念論文集、1983(杉山・1982)
- 中村浩「検出遺構、出土遺物」『熊野本宮備崎経塚発掘調査報告書』大阪大谷大学博物館調査報告書第46冊、2002(中村・2002)
- 中村浩「備崎第一地点、第三地点の経塚遺構とその復元的考察」『熊野本宮備崎経塚発掘調査報告書』大阪大谷大学博物館調査報告書第46冊、2002(中村・2002)
- 三辻利一「出土陶器と周辺岩石の蛍光X線分析」『熊野本宮備崎経塚発掘調査報告書』大阪大谷大学博物館調査報告書第46冊、2002(三辻・2002)
- 中村浩「熊野本宮備崎経塚について——兎園小説所載記事の検討——」『堀田啓一先生古稀記念献呈論文集』2004(中村・2004)
- 三宅敏之『那智経塚遺宝』東京国立博物館、1985(三宅・1985)
- 山本義孝『修験道』『鎌倉時代の考古学』2006、高志書院(山本・2006)
- 山川公見子「経塚と如法経の関係」『経塚考古学論攷』2011、磐田書院(山川・2011)
- 時枝努「熊野本宮備崎経塚考」『経塚考古学論攷』2011、磐田書院(時枝・2011)
- 小山修三『那智山経塚—その発掘と出土品—』1970、熊野那智大社
- * 本稿のなるに当たっては県立風土記の丘富加見泰彦、佐々木宏治、迫間素啓、金澤舞、大阪大谷大学池田千尋各氏の協力、助言を得たここに記し、感謝する。

岩橋型石室の終焉についての覚書

萩野谷 正宏

はじめに

和歌山市岩橋千塚古墳群では、須恵器編年のTK47～MT15型式期以降に、岩橋型石室と呼ばれる特徴的な構造をもつ石室が展開する。当該石室については多くの先行研究の蓄積があるが、須恵器編年TK209型式期以降の様相については、石室の残存状況が良好な事例が少なく十分な検討が進んでいない。一方、近年の和歌山市教育委員会や和歌山県による調査の実施により、断片的な情報ではあるものの当該期の資料が蓄積されつつある。本論ではこうした調査成果と、関西大学等による既往の発掘調査成果から、岩橋型石室の終焉についての検討を予察的に行いたい。

1. 岩橋型石室の終末に係る資料

以下に、岩橋千塚古墳群のうちTK209型式期以降の可能性のある岩橋型石室の事例を取り上げ、その特徴を概観したい。

①井辺1号墳（関西大学考古学研究室 1967）

上辺17m、下辺36mの大型方墳で（和歌山県教育委員会 2021）、石室は玄室の長さ4.15m、奥壁幅2.7m、前壁幅2.3mで平面プランは羽子板形を呈する。石柵・石梁を有するほか、石柵下に屍床が付設される。玄室前道は長さ1.1m、幅1.23m、羨道は長さ1.43m、幅1.6mである。岩橋型石室で最も新しい5型式の指標とした（萩野谷 2019）。玄室幅指数（玄室幅／玄室長×100）は、奥壁幅をとる場合は65.0である。

5型式の特徴は、(1) 左右袖部が各々平積み1段1石積みの袖部d類、基石の幅が前壁幅を超える基石d類で、4型式と同じ構造をとる、(2) 奥壁は天井部付近に厚みのある石材を1段積んだ奥壁b類となり、5型式における天井高の低下と相関する、(3) 平面形態は両袖式であるが、玄室が4型式までの長方形ではなく、羽子板形を呈する、(4) 玄室前道は最も発達した様相を呈し4型式に比して幅広

となる一方で、袖幅が縮小する、などである。

②前山A77号墳（和歌山県教育委員会 2010）

1辺4m×6mの方墳で、石室の現況実測調査が実施されている。床面は未検出のため正確な規模は不明であるが、確認範囲では玄室長1.75m、奥壁幅1.20m、前壁幅1.00mと羽子板形の玄室平面プランをもつ。玄室前道は長さ0.4m、幅0.6～0.8mで幅広である。また玄室前道入口に化粧石をもつ。玄室幅指数は68.5である。小型石室のため単純な比較は難しいが、以上の特徴は井辺1号墳の玄室と類似し岩橋型石室の5型式（萩野谷 2019）に併行するとみられ、TK209型式期に帰属する可能性が高い。

③大谷山38号墳（和歌山県教育委員会 2004）

直径10mの小型円墳で、石室実測図は未公表である。玄室の平面プランは長方形で、長さ2.25m、幅0.95m、玄室前道は長さ0.35m、幅0.8m、羨道は長さ1.0m、幅0.82mである（写真1）。特徴は(1) 玄室幅指数は42.2で幅狭の長方形である、(2) 玄室前道幅が著しく広く、袖が極めて短い、(3) 基石は、従来の基石c2類のように前壁の石積みに明確に組み込まれる技法は顕著ではなく、幅が前壁の幅に近くなる、(4) 玄室幅と羨道幅が比較的近似した数値を示すなどで、これらはより新相の型式学的特徴である可能性がある。遺物は、耳環、ガラス製小玉、鉄釘、平安時代の須恵器壺底部片、袴帯、銅銭（富壽神寶）などで、平安時代に石室の再利用があったとみられる。

当該石室は、上記(3)の基石の特徴が基石c2類に後出する可能性があり、従来の4型式・5型式併行の石室よりも新相に位置付けうると考え、特徴(1)(2)(4)と合わせて飛鳥I～II期に帰属する石室の特徴である可能性を指摘したい。

④寺内87号墳（和歌山市教育委員会 2020）

直径9mの円墳か。玄室は長さ約2.1m、幅約1.1mである。玄室前道の基石は幅1.1m、長さ

0.25～0.4mで、玄室前道幅は遺存状況が悪く不明だが、基石の幅よりも狭いと推測される。羨道の規模は不明であるが、西側側壁の位置より羨道幅は玄室幅と大きな差異がないとみられる。玄室幅指数は47.6で幅狭の長方形の平面プランを呈する。上記は寺内38号墳の特徴(1)、(3)、(4)に類似し、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期に帰属する可能性がある。

⑤ 寺内56号墳（和歌山市教育委員会2020）

直径11mの円墳である。玄室の長さ3.3m、幅1.78mで、玄室前道は長さ約0.6m、幅は不明である。写真より基石の幅は玄室前道幅より大きい基石c2類の構造か。羨道は長さ2.2m以上、幅1m以上である。また玄室前道入口に化粧石が存在したと推定される。当該石室は玄室長より大型石室に分類されるが、玄室幅指数は53.9と幅狭の長方形の平面プランを呈する。玄室より飛鳥Ⅲ～Ⅳ期とみられる須恵器杯蓋、杯身、長頸壺が出土し追葬が想定される。石室はTK209型式期から飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の構築と推測され、玄室の長方形プランから後者の帰属である可能性が高い。

⑥ 寺内85号墳（和歌山市教育委員会2020）

墳丘規模は不明である。玄室は長さ約2.5m、実測図面から奥壁幅約2.0m、前壁幅約1.8mの羽子板形のプランの可能性ある。玄室前道の基石は幅1.5m、長さ0.4mで、玄室前道幅は遺存状況が悪く不明だが、基石幅より狭いと推測される。玄室幅指数は76.0である。石積みは小口積みを主体し、一部大振りの石材を平積みとする。遺物はTK209型式以降の須恵器甕の破片が出土している。石室はTK209型式期から飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の構築と推測される。

⑦ 寺内59号墳（関西大学考古学研究室1968）

直径11～12mの円墳である。玄室は推定長さ2.25m、奥壁の幅2.02m、前壁の推定幅1.93mで、玄室前道、羨道の構造は不明であるが、羨道幅は約0.9mと推定されている。玄室幅指数は89.7と方形に近いプランである。遺物は耳環、管玉、須恵器蓋杯、高杯のほか、装飾付須恵器の子持壺の小壺が出土している。須恵器はTK209型式から飛鳥Ⅰ～Ⅱ期とみられ一定の時間幅をもつことから、TK209型式期に構築され、その後追葬された可能性が想定

される。

⑧ 寺内60号墳（関西大学考古学研究室1968）

直径16～17mの円墳である。礫床や排水溝などの位置から、玄室は推定長さ3.17m、推定幅2.17mで、玄室前道と羨道の構造は不明であるが、羨道幅は1.25mと広い。玄室幅指数は、68.4である。床面西側に、板石と礫を敷いた長方形の施設が付設され屍床とみられ、鉄刀等の出土した床面東側にも並行して遺骸が埋葬された可能性が指摘されている。遺物は玄室より鉄刀と鉈、須恵器高杯、杯身、土師器高杯が出土し、須恵器はTK209型式とみられる。

⑧ 寺内6号墳（関西大学考古学研究室1972）

直径約15mの円墳である。玄室は長さ2.42m、幅1.85m、玄室前道は長さ0.45m、羨道は長さ2.05m、幅0.94mである。玄室前道基石は幅1.0mであり、玄室前道幅はこれより狭いと考えられる。玄室幅の指数は76.4である。

床面東側には屍床とみられる板石を敷いた長方形の施設があり土器が副葬される。遺物は、須恵器杯身等が出土し、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

⑨ 寺内32号墳（関西大学考古学研究室1972）

直径約8mの円墳である。玄室は長さ約2.1m、推定幅約1.7mで、玄室前道は長さ約0.5m、推定幅約0.8m、羨道は長さ約1.6m、羨道幅約0.9～1.0mである。玄室幅指数は80.9である。遺物は、玄室、羨道（1次・2次床面）、墳丘盛土、周溝より須恵器蓋杯、土師器甕が出土しており、飛鳥Ⅰ～Ⅳ期の帰属とみられ一定の時間幅をもつことから追葬が想定される。

⑩ 寺内35号墳（和歌山県文化財研究会1968）

直径10～12mの円墳で、岩橋型石室のほか箱式石棺が付設される。岩橋型石室は玄室が長さ2.6m、幅2mで、羨道が長さ5.6m、幅は不明である。右袖幅約0.6mで、左右対称であるとするれば、玄室前道幅は約0.8mと推測される。玄室幅指数は、76.9である。遺物は須恵器蓋杯、短頸壺が出土しており、飛鳥Ⅰ～Ⅳ期の帰属とみられ一定の時間幅をもつことから追葬が想定される。

2. 石室構造の検討

つぎに、石室の構造と時間的変遷を検討する。

(1) 玄室前道基石の構造について

岩橋型石室の大型石室における基石の構造は、まず1型式の玄室前道幅に比して幅狭で不整形な石材を用いる構造(基石a類)から、2型式に幅が玄室前道幅に等しいか(基石b類)、前道幅を超えるもの(基石c類)へと変化し、3b型式で基石の幅が玄室の前壁の幅を超える大形の石材を用いる構造(基石d類)が成立し、4・5型式に継続する。一方で中・小型石室は、4型式併行に至るまで基石c2類が多数採用される(萩野谷2019)。

今回の検討対象とした石室では、大型石室の井辺1号墳が基石d類、寺内56号墳が基石c2類であり、中・小型石室の寺内85号墳、寺内6号墳、寺内32号墳も基石c2類の可能性がある。一方、大谷山38号墳や寺内87号墳では、基石の幅が前壁の幅により近く、基石c2類よりも型式学的に後出する可能性のある構造が認められた。このことからTK209型式から飛鳥I～II期への石室の変遷において、基石が前壁の石積みに明確に組み込まれる基石c2類から、新たにそれが簡略化した構造が派生して、小型石室の一部に採用されたことが推測される。

(2) 玄室の平面プランについて

玄室幅指数からは、寺内59号墳のように89.7と正方形に近いプランもあるが、おおむね65～80の幅に収まるものが多い。このうち玄室の正確な平面プランを確認できる良好な事例は少ないが、井辺1号墳、前山A77号墳、寺内85号墳などは5型式に特徴的な羽子板形のプランを呈している。

一方で、玄室幅指数42～53の寺内56号墳や同87号墳、大谷山38号墳は幅狭の長方形プランとなる例である。平面プランは個体差が大きく多様な形態が併存したとみられるが、少なくとも幅狭の長方形プランとなる石室は、5型式に後続する別型式に帰属する可能性があり、飛鳥I～II期に至り類型の一つとして顕在化する可能性がある。

(3) 石室の遺骸配置について

岩橋型石室は石室主軸に対し直交方向に屍床が付設され、主軸直交の遺骸配置を基本とするが、主

軸平行の遺骸配置となる例や、TK43型式期の山東22号墳や和佐南垣内1号墳のように奥壁側の主軸直交配置と入口側の主軸平行配置の埋葬空間が併存する例も存在する(黒石2007)。

寺内60号墳や同6号墳では、板石を敷いた長方形の屍床とみられる施設が主軸平行配置で付設される。寺内60号墳は山東22号墳・和佐南垣内2号墳と同様に直交と平行配置が併存する可能性があるが、6号墳は主軸平行の2体の遺骸を配置することを想定した埋葬空間である可能性が高い。また、玄室が幅狭の長方形のプランをとる寺内56号墳や同87号墳、大谷山38号墳は、主軸平行の遺骸配置に対応した石室形態とみられる。したがって、TK209型式期から飛鳥I～II期の岩橋型石室では、特に後者の時期において平行配置が増えないしは主体となる可能性が高く、玄室の平面プランや石室構造の変化の大きな要因となった可能性を指摘しておきたい。

おわりに

以上、TK209型式期以降の岩橋型石室の検討を行った。その結果、従来の5型式と捉えた一群よりも新相の型式学的特徴をもつ石室を抽出できる可能性が高いことを指摘した。前述した特徴からは5型式に後続する型式として岩橋型石室の最終型式を捉えることができる可能性がある。紙幅の都合で十分な検討ができなかったことから、現状では覚書としてその見通しを示すにとどめた。今後精査して再検討する機会をもちたい。

【参考文献】

- 関西大学考古学研究室 1967『岩橋千塚』和歌山市教育委員会
- 関西大学考古学研究室 1968『和歌山市森小手穂 寺内59・60号墳調査報告』『関西大学考古学研究年報』2
- 関西大学考古学研究室 1972『和歌山市における古墳文化—晒山、総綱寺古墳群・楠見遺跡調査報告』和歌山市教育委員会
- 黒石哲夫 2007『紀伊の横穴式石室』『研究集 紀伊の横穴式石室』
- 萩野谷正宏 2019『岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の展開過程』『古代学研究』219 古代学研究会
- 和歌山県文化財研究会 1968『和歌山県文化財調査報告書3』
- 和歌山県教育委員会 2004『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成14年度』
- 和歌山県教育委員会 2010『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書1』
- 和歌山県教育委員会 2021『井辺1号墳現確認調査地説明会資料』
- 和歌山市教育委員会 2020『岩橋千塚古墳群寺内地区確認調査報告書』

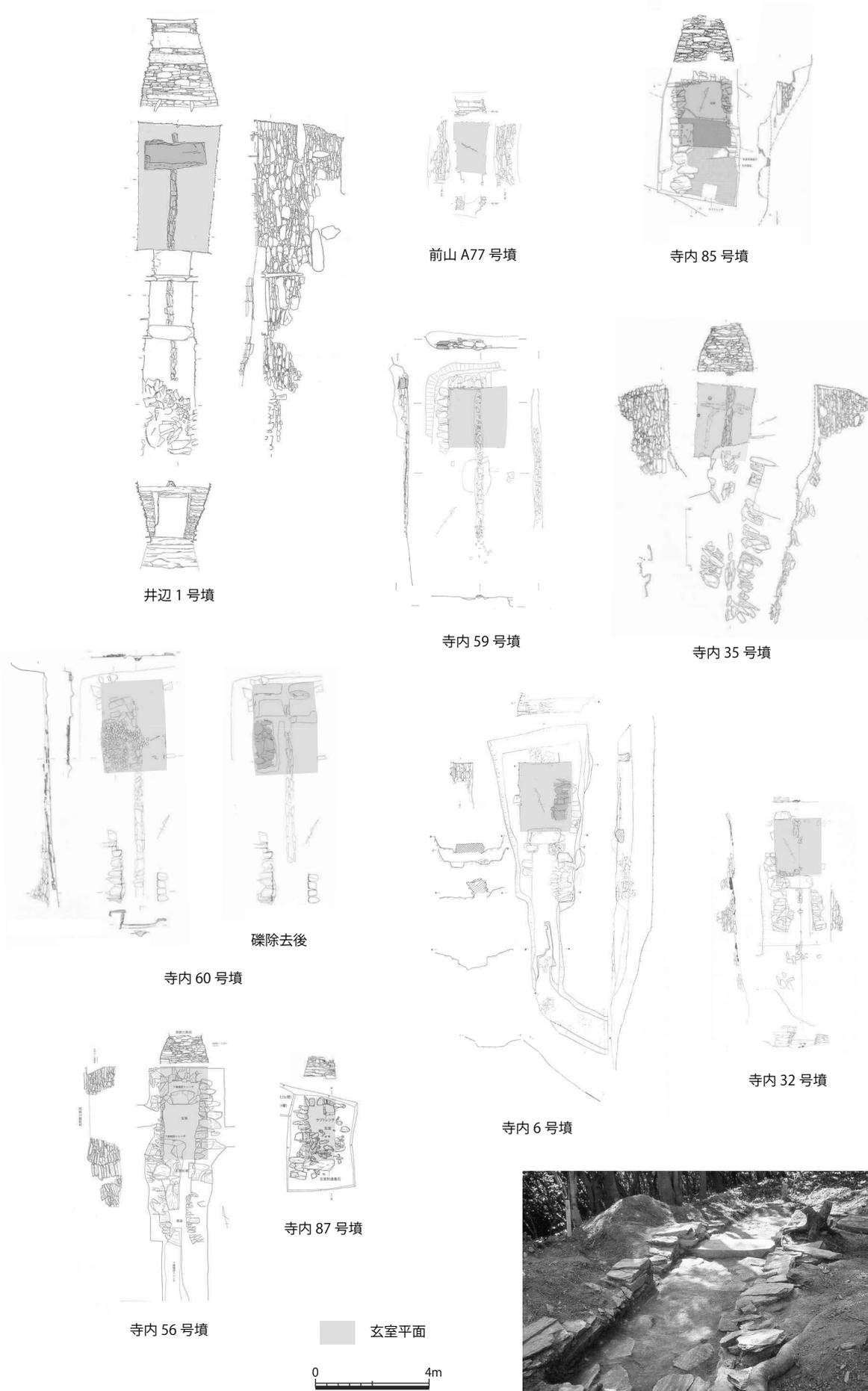


写真1 大谷山38号墳 石室検出状況

図1 岩橋千塚古墳群 岩橋型石室実測図 (S=1/200)

パブリック・アーケオロジーの観点から岩橋千塚古墳群を考える

～天王塚古墳と大日山 35 号墳の近現代期のバイオグラフィーからみた地域と古墳～

瀬谷 今日子

はじめに

本稿では、特別史跡岩橋千塚古墳群の2つの首長墓（天王塚古墳と大日山 35 号墳）の近現代期における地域や人々との関係をもとに、古墳に付加された考古学的枠組みにとどまらない価値について紹介、そこからみえてくる古墳が保存されるために必要な要素や価値について整理するものである。さらに、こうした視点を活かした今後の文化遺産マネジメントについても考察を行いたい。

1. 天王塚古墳における調査と盗掘の歴史

天王塚古墳は、岩橋山塊の最高所に 6 世紀中葉に築造された首長墓である。墳長 88m の県内最大級の前方後円墳で、後円部中央には玄室高 5.9 m、石柵 2 枚と石梁 8 本を有する岩橋型横穴式石室を持つ。

天王塚古墳は、山の巔にある塚、巔の塚が訛って天王塚という名称になったとのことである（和歌山縣海草郡役所 1926）。

明治 39 年（1906）の紀州藩主徳川頼倫による岩橋千塚古墳群の踏査後、明治 40 年（1907）に東京帝国大学人類学教室の大野雲外により天王塚古墳の調査が実施され、石柵・石梁を持つ特異な形態の横穴式石室で

あることが報告された。さらに翌年には、イギリス人の N.G. マンローの著書『PREHISTORIC JAPAN』に掲載されたことから、天王塚古墳の存在は広く海外に

まで知られることとなった。尚、明治 39 年（1906）の

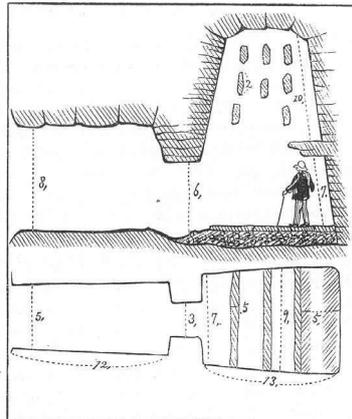


図 1 明治期に描かれた天王塚古墳の横穴式石室 (N.G. マンロー 1908)

大野の報告にはすでに「天王塚」の名称が用いられている。

ところで、天王塚古墳の横穴式石室は大野雲外の調査時にはすでに開口していたことから、徳川頼倫の踏査のために一時的に開口されていたと推定されている（関西大学考古学研究室 1967）。大野の調査の数年後には入口が閉ざされたようであるが（関西大学 1967）、「明治 42 年 5 月 18 日和佐村岩橋天皇塚出土」と記録された須恵器や、「明治 43 年 4 月 28 日海草郡和佐村前山「天乃塚」ヨリ発掘」の記録が残る鉄刀 3 本が伝えられている。【註 1】また、明治 42 年（1909）の『紀州名所案内』にも「天王塚は凡そ五坪ばかりでもある、なかなか奥深く見え、火の光がなければ進むことが出来ぬ、著者がいった時は 7 月のことで暑さに耐えられなかったが、此の塚の中に入って 30 分も経たぬ間に汗が蒸発、凝結して白く見え、冷気は膚を犯し寒さを感じ、久しく居られなかった…略…天王塚の外は悉く出入りするに困難で…」（紀伊名所案内発行所 1909）とも記載されている。宮田啓二によるの聞き取り記録によると、明治 45 年（1912）には盗掘が行われ、約 2 か月間入場料 5 銭をとって公開し、又、案内料として池付近にて 5 銭をとり、相当の収入があったという。その際であろうか、「天王塚はその扉をたたき割り入り…略…中は長い羨道(正面)の中に石室があり、石梁 8 本巨壁の柵まで梯子をかけ漸く届き、百メローソク二本つけて天井をみせた」ともある（宮田啓二による昭和 29 年（1954）の聞き取り記録）。さらに別の聞き取りにおいても「天王塚は□□（個人名）等に依り発掘され、羨道南面は確実と見当をつけ真直ぐに羨道に掘り当てたが何分幅 8 尺餘高さ 2 尺の大石（※羨門扉石か）は何とも出来ず、大ゲンノーにて一所を連打し、羨道に入ることができたが、更に羨道玄室の境界に扉石あり（※玄門扉石か）、その一角を割って中に入ったところ何分にも暗い燈をつけ玄室内を見渡したが、これ

また予想外のことに床底の敷石は中央に山盛にされ、土器一片もとどめない。天井の石梁には梯子をかけて搜したがこれまた何一つ残していない。かすかに上方に月光の筋差入るを見て、封土上辺を調査したところ、ここに狭き溝を掘ってそこから玄室東上方に人の出入りできる程度の穴を開けずでこの石組みは元通りに差し入れて付近は篠竹、落ち葉が堆積しているので初めて既掘墳なるを知った。すでにこの以前に於いて、盗掘され床底の土はフルイに懸けていたのである。要するに出土遺物はこうした経過による散逸か私蔵の為、我々には未だにその一片の存在すら聞かない。但しこれは古い時代の盗掘にかかるものではなく、その近き時代であること、前後の事情により判明するのである。」とある（宮田啓二による昭和 27 年（1952）の聞き取り記録）。

大正元年（1912）8 月には梅原末治と谷井済一が岩橋千塚古墳群一帯を調査し、特に天王塚について興味を持って精査したことが記録されている（田中 1955）が、詳細は明らかではない。

このように、天王塚古墳の存在は少なくとも明治期には広く知られており、横穴式石室内にも明治期から調査や盗掘等によって、多くの人の出入りがあったようである。

昭和 6 年（1931）には岩橋千塚古墳群が国史跡に、昭和 27 年（1952）には特別史跡に指定されるが、天王塚古墳はこの範囲には含まれなかった。

天王塚古墳における本格的な学術調査は、昭和 39 年（1964）に和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学により実施された。この調査で墳丘や横穴式石室の規模や構造が明らかとなり、発掘調査の現地説明会には約 500 名もの参加者を得た。調査後、横穴式石室入口は完全に埋め戻された。

平成 27 年（2005）に



写真 1 昭和 39 年調査の
現地説明会の様子

は、和歌山県教育委員会が墳丘の測量及び発掘調査を実施し、墳長 88m の県下最大規模の前方後円墳であることが明らかとなった（和歌山県教育委員会 2016）。こうした成果を受け、平成 28 年（2016）10 月 3 日に、天王塚古墳は特別史跡岩橋千塚古墳群に追加指定された。平成 29～30 年度（2017～2018）には県立紀伊風土記の丘が今後の保存整備を目的とした発掘調査実施し、54 年ぶりに横穴式石室内部を公開した。この調査では、玉類、金銅製品、新羅系土器、須恵器など多数の出土品を確認した（和歌山県教育委員会 2020）。現在、天王塚古墳は紀伊風土記の丘の園内となり、整備に向けて作業を進めている。

2. 天王塚古墳の近現代期のバイオグラフィー

近現代期にはすでにその考古学的価値が知られていた天王塚古墳であるが、地元の人びとは天王塚古墳をどのように認識し、どのように付き合いきたのだろうか。以下、聞き取り調査の結果をもとに、近現代期における天王塚古墳と地域との関わりを示す 3 つのエピソードを紹介する。

(1) 蜜柑畑と銀色のタンク

昭和 30 年代に岩橋山塊における蜜柑栽培が盛んになると、天王塚古墳でも墳丘北側の一部が開墾され蜜柑畑の一部となった。蜜柑畑が盛んだった頃は、麓の下和佐地区から天王塚古墳までの作業用の道があり、子供たちもよく山へ遊びに行っていたという。昭和 39 年（1964）には前方部裾に大型の貯水タンクが設置された。銀色に輝く貯水タンクは、麓からもよく見え、地域の象徴のようだったという。貯水タンクの設置工事の時期と関西大学による天王塚古墳の発掘調査時期が重なっていたため、工事の際に多くの地元の人たちが発掘調査の見学や調査時の物資運搬に協力をしたという。

しかし、昭和 40 年代には蜜柑の作付けが行われなくなり、その後は篠竹が生い茂る状態となり、山に出入りする人もいなくなったとのことである。そうした中、麓から山を見上げるとタンクが目に入り、その横にある天王塚古墳を思い出すことがあったという。（筆者による下和佐地区住民への聞き取り調査に基づく）

(2) 現代のコドワタシと古墳への恐れ

昭和 39 年度の関西大学による発掘調査では、調査終了後に横穴式石室を埋め戻す際に

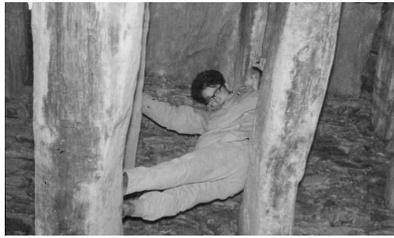


写真 2 昭和 39 年調査時の横穴式石室内部（石室へは天井からロープをつたって降った）ある行為が行われた。

発掘調査開始時、横穴式石室は開口しておらず、墳頂トレンチで天井石が現れ、盗掘を受けている隙間から石梁が数本見えたという。石室内部には、玄室前壁最上部の盗掘穴よりロープを伝って入り、その後、羨道入口を発掘して石室を開口したという。ところが、横穴式石室を開口すると地元の人たちからは祟りがあるのではないかと懸念する声があがったという。そこで調査担当者は、調査終了後に石室入口を土砂で丁寧に埋め戻し、その土にツルハシを突き刺し石室を封印する現代のコドワタシのような行為を行ったとのことである。さらにその後、地元の人々の手により厚さ 3m 以上にも及ぶ土砂で埋め戻され、石室入口は完全に閉ざされた。

平成 29 年（2017）、実に 54 年ぶりに開口した横穴式石室の内部は、嚴重な埋め戻しにより人間はおろか小動物一匹さえ侵入することなく保たれていた。横穴式石室羨門の埋め戻し土からは、土に突き刺さったツルハシも出土した。



写真 3 出土したツルハシ

（筆者による発掘調査担当者への聞き取り調査に基づく。）

(3) 天王塚を守る地元の想いと動き

昭和から平成になる頃には天王塚古墳周辺はすっかり荒れてしまっていた。そんな状況を危惧し立ち上がったのは、下和佐在住の元小学校教諭の鴨口正紀氏であった。鴨口氏は幼少期より遊び場として天王塚古墳に出入りし、中学 1 年生の時には関西大学による天王塚古墳発掘調査現場で天井からロープを伝って石室を見学したという。中学・高校時代から郷土史クラブや発掘調査に参加し、大学時代には考古学も専攻した。地元で教員となってからも、天王塚古墳を麓から見守っていた。鴨口氏曰く「昭和 30 年代に花山地区や大谷山地区の古墳がブルドーザーで壊されていく中で、古墳を守る会が発足し、ブルドーザーの前に立って遺跡を守った地元郷土史家の姿を見てきた。その経験から、荒れていく天王塚古墳を放っておけなかった。たくさんの遺跡が壊されていった時代を経験し、天王塚が二の前にはならないという気持ちが大きかった。」という。平成 23 年（2011）、鴨口氏の想いに賛同した西本健氏と松江茂樹氏の 3 名は、約 1 年間毎週のように地権者や地域住民への呼びかけに奔走した。やがて地元住民を中心に約 50 名の有志が集まり『岩橋千塚を守る会』が発足すると、岩橋千塚古墳群についての勉強会や荒れてしまった天王塚古墳への道の切り開き、天王塚古墳保存のための署名活動を行った。

西本氏は「小学 1 年生の時、天王塚古墳の発掘調査を見に行った。荒れて見向きもされなくなった天王塚古墳を気にしている人がいて、繋ぐ必要があった。想いを持つ世代が少なくなっていき、最後のチャンスと思っ



写真 4 彦地峠に立てられた案内板

関心があった訳ではないが、地元から声をあげないと、という自負があった。」と語る。(筆者による鴨口氏、西本氏への聞き取り調査に基づく)

『岩橋千塚を守る会』が切り開いた天王塚古墳への道は、その後の発掘調査や現地説明会で多くの人を天王塚古墳へと繋ぐ道となっている。

3. 大日山 35 号墳の近現代期のバイオグラフィー

大日山 35 号墳は、大日山山頂に 6 世紀前半に築造された墳長 86m (全長 105 m) の県内最大級の前方後円墳である。平成 15 年度～18 年度(2003～2006) に和歌山県教育委員会が発掘調査を実施し、基壇や墳丘各段の平坦面から円筒埴輪列、東西造り出しからは翼を広げた鳥形埴輪や両面人物埴輪など多種多様な形象埴輪が出土した。

以下、文献記録及び聞き取り調査の結果をもとに、近現代期における大日山 35 号墳と地域や人々との関わりを示す 3 つのエピソードを紹介する。

(1) 大日堂と大日如来像

現在、大日山 35 号墳横穴式石室入口前には、小さな祠が建っており、大日如来像と不動明王、役行者が祀られている。これは平成元年(1989)に設置されたもので、それ以前は横穴式石室の玄室石棚上に大日如来像が安置されていた。

『海草郡誌』には「完全に発掘せられたものが一つあるが今山下の大日堂の奥の院として保存されている。」(和歌山懸海草郡役所 1926) と記載されており、少なくとも大正 15 年(1926)には石室内に大日如来像が設置されていたようである。また、「大日堂というのがある耳に疾に靈驗あらたかなりとて参詣するものが相当に多い此の大日堂から約 3 町登ると山上に奥の院というのがある実は発掘せられた古墳即ち塚穴の中へ設けたものであるが此処へも参拝する者が多いので・・・」(勝田 1932) とあり、石室内にはかなりの人の出入りがあったことがわかる【註 2】。また、同報告の中で、東方隣接地に参拝者の休憩所を設けるための整地作業中に石室から鏡 1、刀身残欠、須恵器高坏、杯 1、埴 1、盃 1、長頸壺 2、馬具残欠が出土し、そのときすでに遺物は散逸していたと報告されているが、これが大日山 35 号墳であるかについては判然としなない。

大日山 35 号墳の石室が初めて調査されたのは、和歌山県教育委員会の委嘱を受けた関西大学による調査(昭和 38 年(1963))で、墳丘の測量と石室の実測が行われたが、発掘調査は実施せず遺物は出土していない。

平成元年(1989)に大日如来像を石室入口前面の建物基礎に安置することとなり、その際、石室開口部の鉄扉を施錠し、以後、紀伊風土記の丘が鍵を管理している。

(2) ウォーキングと参拝

昭和 46 年(1971)の紀伊風土記の丘開園以来、一周 3km に及ぶ主園路及び各古墳の間を散策するための副園路が整備された園内には古墳の散策の他、自然観察、健康のための日々のウォーキングなどを楽しむ人が年間約 20 万人訪れている。

ウォーキングを楽しむ人の多くは、古墳を見学するための副園路ではなく、主園路を利用しているが、主園路から少しはずれて坂を上る必要がある大日山 35 号墳にも、早朝から夕刻まで常に行き来している。そして多くの人が横穴式石室入口前に設置された大日如来像の前で手を合わせている姿を目にすることができる。



写真 5 大日山 35 号墳横穴式石室入口前に安置された大日如来像

石室入口前に設置された大日如来像の前で手を合わせている姿を目にすることができる。

大日如来像への参拝は、毎日のウォーキングにおけるポイント地点やルーティーンとして位置付けられ、その結果、主園路から外れた大日山 35 号墳にも多くの人が往来する結果となっているのである。

(3) 市民参加の古墳整備

紀伊風土記の丘では、平成 15 年度(2003)から平成 26 年度(2014)にかけて大日山 35 号墳の墳丘の復元整備や石室保存処理、復元埴輪の設置等を実施した。

このうち東造り出しに設置された復元埴輪は、一



写真6 大日山 35 号墳での埴輪設置式と埴輪製作者のみなさん

部は業者委託によって制作したが、大部分は埴輪制作イベント「大日山 35 号墳の実物大埴輪を作ろう」において市民の手によって制作されたものである。イベントは平成 20 年（2008）から平成 26 年（2014）までに計 23 回開催し、総数 124 個体の円筒埴輪や形象埴輪が制作された。平成 27 年（2015）3 月 7 日には「埴輪設置式」を開催し、埴輪制作にかかわった市民が制作した埴輪を自らの手で現地に設置した。現在も墳丘には、製作者の名前が刻まれた復元埴輪が並んでいる。

ところで、こうした墳丘への復元埴輪の整備を行っている各自治体の中で悩みの種となっているのが、心無い悪戯等により復元埴輪が破損される問題である。大日山 35 号墳では埴輪設置から 5 年以上が経過する中で、そうした被害が一度も確認されていないが、筆者は大日山 35 号墳にはウォーキング等で常に人が往来している状態であることが一つの抑止力になっていると考えている。

4. 古墳と地域との関わりからみた文化遺産マネジメント

天王塚古墳と大日山 35 号墳における近現代期のバイオグラフィーから、両古墳にみられる考古学的価値と考古学的価値以外の価値について図 2 に整理した。

ここで注目したいのは、これまで古墳の保存についてどちらかといえばマイナスの要素と考えられていた近現代期に付加された考古学的価値以外の価値も、古墳の保存に一定の役割を果たしているということである。

例えば、天王塚古墳の開墾や貯水タンクの設置は、墳丘の一部を削平する行為であった一方で、その存

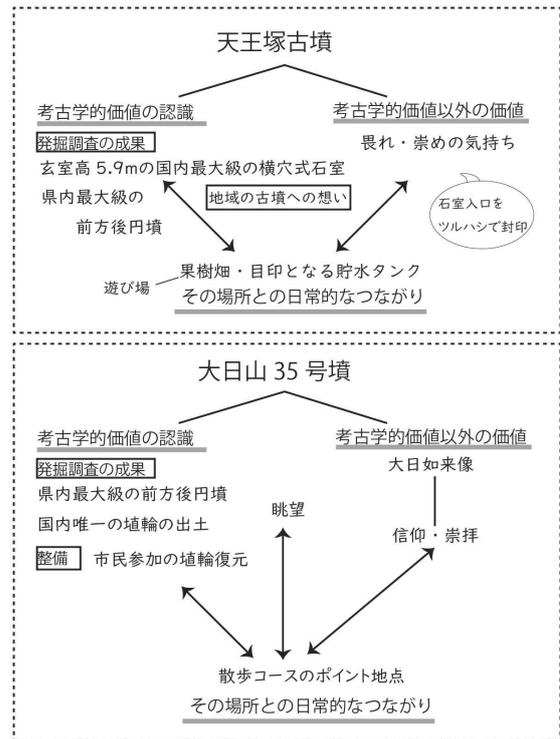


図 2 天王塚古墳・大日山 35 号墳と地域・人々との関係

在によって人々と古墳の存在が繋がっていた。大日山 35 号墳の大日如来像は、参拝や散歩コースの目標地点となり多くの人が古墳に足を運びきっかけとなり、さらに悪戯防止の抑止力となっている可能性もある。もちろん考古学的価値以外価値は、どんなものでも意味があるのではなく、崇りや信仰、誇りなど文化財保護の観点ではないが「壊してはいけない」感情を生み出すものが効果的である。そしてそうした感情は、古墳と地域、人々が日常的につながっているからこそ生み出されているのである。天王塚古墳に見るように、畑の作付けが終わり山に出入りする人がいなくなると、古墳そのものへの認識も失われてしまうからである。

つまり、両古墳が約 1500 年前に築造され、今日まで保存されてきた要因には、①古墳そのものの考古学的価値が発掘調査や研究により正しく認識されている、ことに加えて、②畏れや崇拝などの古墳を壊してはいけないという感情が人々の中に存在すること、③その場所が人々にとって身近な場所、日常的に関わりがあることが挙げられる。

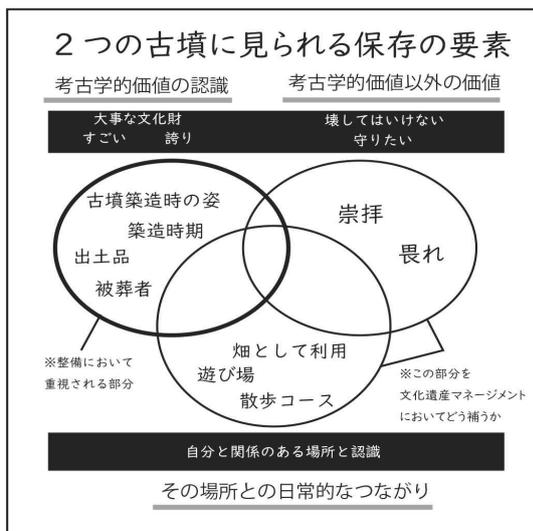


図3 2つの古墳に見られる保存の要素

今日、文化財指定を受けた古墳は、行政主体で考古学的価値に基づき整備が行われているが、文化財指定や整備は保存のゴールではない。古墳の永続的な保存のためには、古墳が今日までの間に地域の中で新たな認識や価値を付加されながら、地域の中で維持されてきたという認識を持ち、保存のためにもいかに地域とつながり、地域を巻き込むかという視点を持った文化遺産マネジメントが必要であろう。ただしそれは行政主体の整備の中で「崇り」や「信仰」をつくり出そうというものではない。古墳への様々な認識や価値は、古墳と日常的なつながりを持つ中で、地域や人々の中から自然に生まれてくるものである。だからこそ、地域や人々が古墳と日常的に関わる仕組みをつくり、古墳に対する各々の付加価値を生み出されるようにすること、文化財指定や整備によって古墳と地域が切り離されることがないようにすることが重要なのではないだろうか。

最後になりましたが、本稿執筆にあたり聞き取り調査に御協力いただきました故菅谷文則氏、鴨口正紀氏、西本健氏他、関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

【註1】 現在紀伊風土記の丘に寄贈されている。

【註2】 平成15年度からの発掘調査でも、石室内から蠟燭立てや賽銭等が出土している。また、瓦器碗片も出土しており、中世にも石室への人の出入

りがあったことがわかる。

【参考文献】

大野雲外 1907 「紀伊国古墳の石槨構造に就いて」『東京人類学雑誌』第23巻259号
 岡崎農業補習学校 1930 『郷土調査』
 岡村勝行 2014 「現代考古学とコミュニケーション：日本版パブリック・アーケオロジーの模索」『地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報6』
 勝田良太郎 1932 「大日ノ古墳」『和歌山県史蹟名勝天然近物調査会報告第十二輯』和歌山県
 関西大学考古学研究室 1967 『岩橋千塚』
 紀伊名所案内発行所 1909 『紀伊名所案内』
 田中敬忠 1955 「岩橋千塚古墳群」『紀伊考古図録』和歌山県教育委員会
 丹野拓 2009 「岩橋山塊の祭祀関連遺跡と本土決戦準備遺構—岩橋千塚と重複する遺跡の抽出と分析—」『和歌山地方史研究』第57号 和歌山地方史研究会
 中村貞史 2018 「天王塚古墳の調査と研究の歩み」『紀伊考古学研究』第21号 紀伊考古学研究会
 松田陽・岡村勝行 2012 『入門パブリック・アーケオロジー』同成社
 松田陽 2014 「⑥古墳とパブリックアーケオロジー」『古墳時代の考古学10』同成社
 松田陽 2017 「古墳と地域社会の近現代史」『遺跡学研究』第14号
 宮田啓二 1952～1954 『昭和27年秋冬岩千塚古墳群調』（※宮田啓二氏のご家族より紀伊風土記の丘の寄贈された資料）
 和歌山懸海草郡役所 1926 『海草郡誌』
 和歌山県教育委員会 2013 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書3—大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳—』
 和歌山県教育委員会 2016 『大谷山22号墳、天王塚古墳—特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書』
 和歌山県教育委員会 2020 『特別史跡岩橋千塚古墳群—天王塚古墳 2次・3次発掘調査報告書—』
 NEIL.GORDON.MUNRO 1908 『PREHISTORIC JAPAN』

岩橋千塚出土異形埴輪の解釈について

—井辺八幡山古墳・大日山 35 号墳出土の埴輪—

富加見 泰彦

1. はじめに

和歌山市東部の丘陵の岩橋丘陵には、約 850 基に及ぶ古墳が存在する。花山古墳群、岩橋千塚古墳群、大日山古墳群、大谷山古墳群、井辺総綱寺古墳群、寺内古墳群、井辺前山古墳群、和佐古墳群、山東古墳群からなる古墳群で岩橋千塚と称される。およそ、4 世紀末～7 世紀前半にかけて古墳が築造され続け、我が国最大規模の古墳群を誇る。

その主たる被葬者については、先学の研究によって紀伊に盤踞した紀氏一族の奥津城であることが明らかとなっている。なかでも大日山 35 号墳は岩橋千塚古墳群、井辺八幡山古墳は井辺前山古墳群における 6 世紀前半の有力首長の墳墓である。

2020 年 10 月 18 日に「紀伊風土記の丘ボランティア活動 10 周年」にあたり講演する機会を得たので「井辺八幡山古墳・大日山 35 号墳出土の埴輪」について話をする事となった。本稿はその内容を文章化したものである。

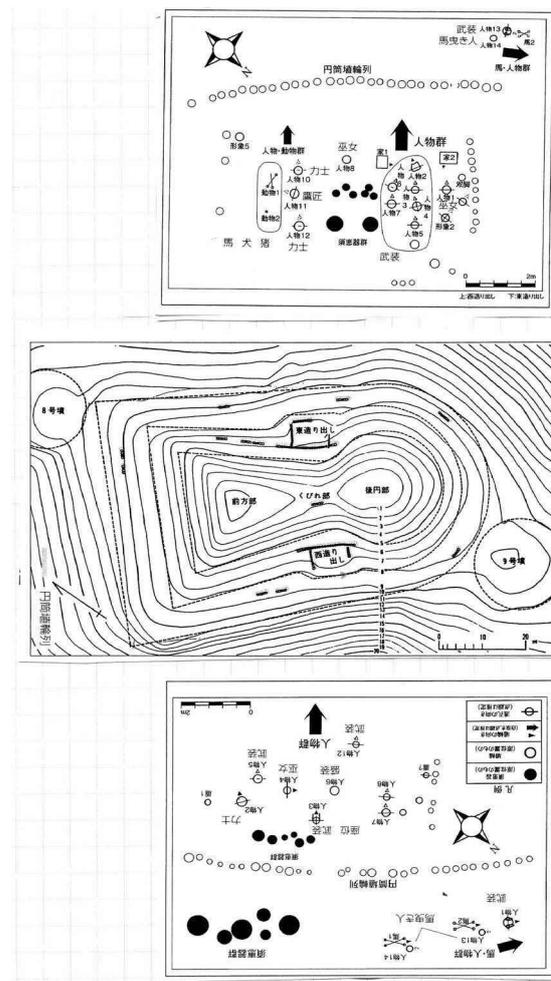


第 1 図 岩橋千塚 (紀伊風土記の丘 2011)

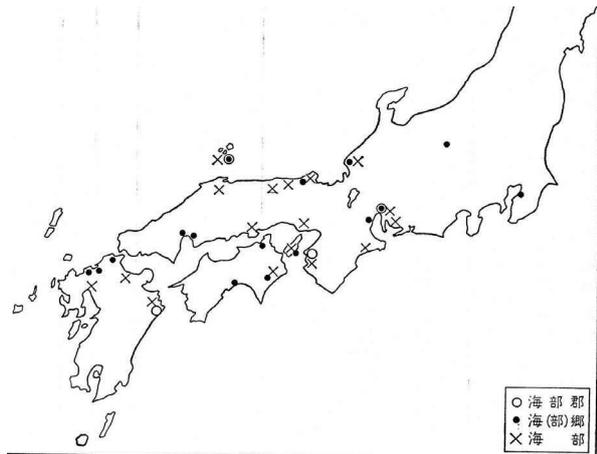
2. 井辺八幡山古墳について

岩橋山塊の西南に位置する独立丘陵、福飯ヶ峰に 5 基の前方後円墳 (井辺前山 6 号墳は消滅) と 66 基の円墳が丘陵上に築造されている。井辺八幡山古墳 (井辺前山 10 号墳) は、この丘陵に築造された

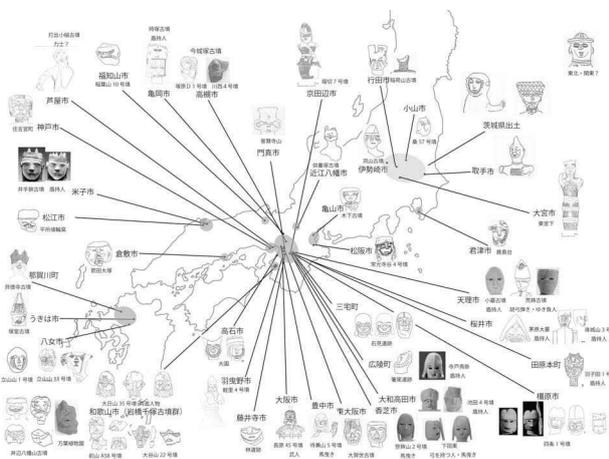
古墳で、通称「八幡山」と呼ばれる標高 54 m の山頂にあり、旧地形を巧みに利用して北西に前方部を向けた 3 段築成の前方後円墳である。全長 88m、後円部径 45m、前方部幅 57 m を測る和歌山では最大級の古墳の一つである。裾部の輪郭は、盾形を呈し、周湟の痕跡は認められない。2 段目は、前方部が後円部より開き、その両側のくびれ部に、長さ 10m、幅 7 m、高さ約 1.5m の方形の造り出しを付設し、埴輪による祭祀が行われている。3 段目の最上面は、全長 60 m、後円部径 26 m、前方部幅 29 m で前方部の方が後円部より大きく、高さも前方部 12 m、後円部 8 m と 4 m 高い。後述する大日山 35 号墳とは墳形、規模、さらに埴輪の



第 2 図 井辺八幡山古墳埴輪配置状況



第5図 海部の分布 (園田香融 1970)



第6図 鯨面埴輪 分布図 (瀬谷今日子氏作成)

襷を締め、顔、掌に赤土を塗布し、四股を踏む海幸彦が記されている。現在人物埴輪には赤色顔料が肉眼では観察できないが『井辺八幡山古墳』には「翼形の内部に黒ずんだ赤色顔料を塗っているが、発掘調査当時の鮮やかさがかなり褪せた

との記述があり、この海幸彦の状況を示していると解釈でき、海人説を裏付ける大きな根拠といえよう。こうしたいくつかの事例から、この埴輪を力士ではなく海人埴輪とすることに矛盾はない。海人を具現化した海人埴輪と結論付けたいのである。

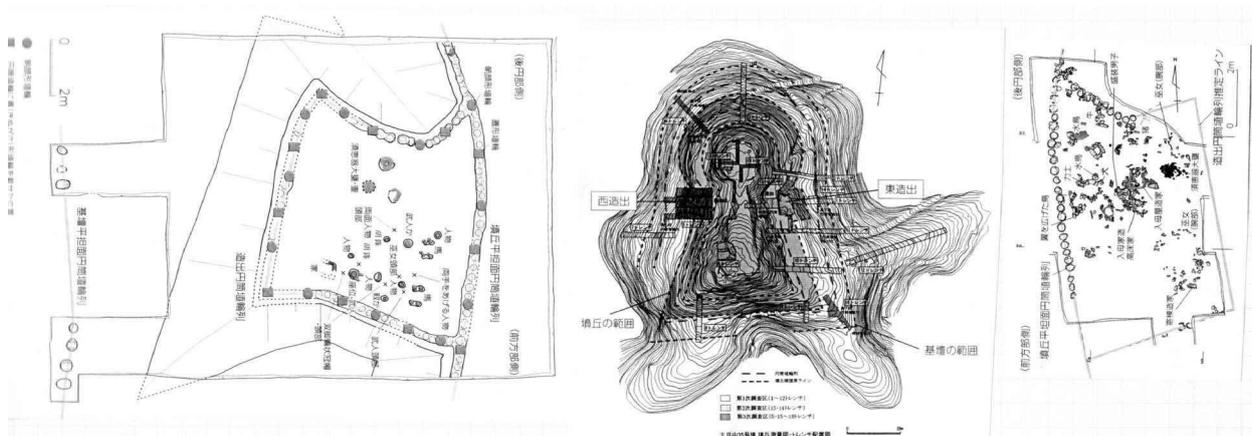
続いて大日山 35 号埴出土埴輪についてみることにする。

4. 大日山 35 号墳について

大日山 35 号墳は、岩橋山塊の西端、大日山（標高 141m）の山頂に築造された前方後円墳で、墳丘は、盾形状を呈する基壇上に二段築成された基壇を含めると全長 105 m、墳長は 86 m の規模を有する最大級の前方後円墳である。基壇、墳丘の各段からは円筒埴輪列が巡り、くびれ部には東西に造り出しの施設が付設されている。東西の造り出しからは良好な状態で埴輪群、須恵器群が出土した。埋葬施設は、後円部西側に開口する岩橋型横穴式石室で、古墳は日前宮平野を眼下に見下ろせる場所に築造されていることから、日前宮平野（日前・国懸神社）、紀淡海峡など西を強く意識していることが容易に推測できる。築造時期は、出土した須恵器から陶邑編年の TK10 型式に相当し 6 世紀前半と考えられる。

5. 大日山 35 号墳出土埴輪

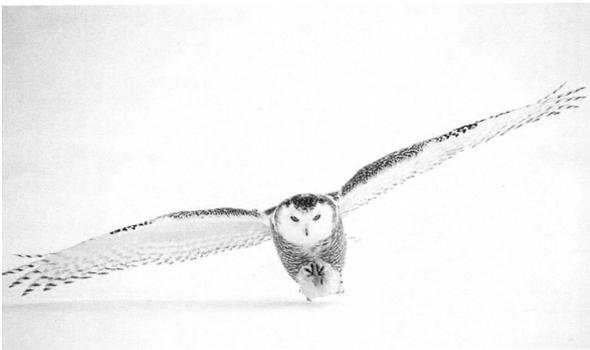
東側造り出しから滑空する鳥形埴輪、西側造り出しからは両面人物埴輪、胡録形埴輪は全国的に見ても唯一の存在で異彩を放っている。今回、特に異彩を放つ鳥形埴輪と両面埴輪の二体の埴輪の持つ意味について考えてみる。鳥形埴輪は愛くるしい顔立ちで



第7図 大日山 35 号墳埴輪配置状況 (紀伊風土記の丘 2011 を改変)



第8図 滑空する鳥形埴輪



第9図フクロウ（参考資料）

体形はぼっちゃりとしている。しかし滑空する姿、くちばしの表現からは猛禽類と考えるのが妥当である。この愛くるしいメタボな鳥形埴輪を梟とみると状況は一変する。梟帥（きゅうすい）、梟雄（きゅうゆう）は荒々しい人、盗賊の頭目を意味し、『日本書紀』では朝廷に従わない地域の長を意味する「八十梟帥（やそたける）」に梟帥の字をあてている。

6. 葛城氏と紀氏の動向

5世紀末頃に忽然と滅亡した葛城氏の動向は紀氏を考えるうえで無視できないので少し触れることにしたい。葛城氏は、5世紀の倭王権の内政、外交を主導し、倭国王と並ぶ権勢を誇った一族であり、紀氏とは武内宿禰を共通の祖とすることが知られている。葛城氏は一族の女性を次々と入内させ大王家の外戚として政権中枢部を差配するほどの力を保持した豪族である。信ぴょう性について語る力は持ち合わせていないが、武内宿禰・葛城襲津彦関係の系譜伝承からは葛城氏が最も親密な関係であったのが紀

氏であることが知られている。葛城氏の本拠地内に、紀氏の有力な同族である檜原造、大坂直の本拠があったことも葛城氏、紀氏の積極的な人的な交流、鴨神遺跡から紀路につながる人工的な大規模な道路遺構の存在からも物的な交流をうかがうことができる。紀の川上流の奈良県下市町には岡峯古墳、大淀町には槇ヶ峯古墳といった石柵を持つ岩橋型の横穴式石室を有する古墳があり大和南部との深いつながりを示す事例もある。武内宿禰を祖とする血族関係はともかく、外交面において紀の川を媒体とした重要なパートナーであったことは想像に難しくなく、葛城氏の滅亡は紀氏にとって心中穏やかではなかったと推測される。考古学的にも紀の川を媒体とした初期須恵器、製塩土器、魚介類（クエ）の出土などからも友好的な関係であったことが証明されるであろう。

雄略天皇（倭王武）が葛城氏を滅ぼしたことで、葛城氏政権が崩壊し倭王権自体も混迷を迎え、雄略天皇の歿後、より激化することとなった。『記紀』によると、雄略天皇のあとを継いだ清寧天皇には后や子がなく、倭王権は天皇位が断絶する危機に陥ったその中で登場するのが葛城氏出身の飯豊皇女である。フクロウのことを古語で「いひとよ」というらしく、この名を持つ皇女の存在は極めて重要であると考えるのである。飯豊皇女は葛城の忍海の高木角刺宮で一時的に倭王権の政務を執行したと伝えられる人物である。その後、顕宗、仁賢天皇として即位するが仁賢の没後、武烈天皇が即位するが悪逆暴政の限りを尽くした武烈には子がなく、5世紀の天皇家一族は途絶える。やむなく応神天皇五世孫男大迹王が継体天皇として即位することでヤマト王権は存続が可能になった。岩橋千塚では6世紀前半から中ごろにかけてその隆盛を極めるが5世紀末から6世紀にかけての混乱は紀伊の首長にとって大きな命運となったと考えている。天王塚古墳の築造をピークとしてボディブローのようにその影響が効いてくるのではないかと考えている。

7. 両面人物埴輪について

両面人物埴輪を彷彿とさせる話に『日本書紀』仁徳天皇 65 年の条に飛驒の両面宿禰の話がある。畏



第 10 図 両面埴輪 (紀伊風土記の丘 2020)

敬の人と言われており日本書紀には身の丈七尺あまり(2m)、顔の前後に二つの顔を持つ。手足が4本あったと記す。両面宿儺は上古、仁徳天皇の時代に飛騨に現れたとされる異形の人、鬼神である。『日本書紀』においては武振熊命に討たれた凶賊とされる一方で、飛騨地方の在地伝承では毒龍退治や寺院の開基となった豪族であるとの逸話も残されている。王権がその勢力を全国に拡大しようとした頃、飛騨には独特な文化を持った先住民族が暮らしていたとされ、両面宿儺はその首領と言われる。仁徳紀の記述は、大和王権が飛騨地方の豪族と接触し、5世紀における征服の事実を反映していると考えられる。

滑空する鳥形埴輪、両面人物埴輪この二体の埴輪の持つ意味は王権に対峙する滅ぼされた一族、従わない地方の長という共通点でつながることが確認できるのである。

大日山 35 号墳の 2 点の埴輪が意図するものはなにか。ニワトリは夜明けを告げる鳥なのに対し、フクロウは夜行性でいわば夜の支配者である。まさに 35 号墳の両面埴輪の示す表情(明と暗)は暗→明、夜から明け方にかけて執り行われた首長継承儀礼を示すものと考えられる。紀氏の聖域と目される大日



第 11 図 大日山 35 号墳出土埴輪群

山麓の湧水池を見おろす位置に両面埴輪が設置されていることも大きな意味がある。古墳は単なる墓ではなく、各地の首長が首長の継承を確認する重要な場である。

大日山西側山麓の緩斜面には古墳時代中期初頭に大日山 I 遺跡が出現する。大日山中腹の水源からは 2 本の旧流路があり、流路に挟まれた範囲には 5 世紀初頭に祭祀的色彩が強い竪穴住居群と掘立柱建物群が検出されている。旧谷川 2 に接する竪穴 14・15 号は、周囲を溝で囲み、谷川に降りる仕組みの階段が付設されている。鳥形土器、小型丸底土器、双孔円盤、勾玉、剣形などの石製模造品のほか、文様が描かれた新羅系とみられる陶板(硯か)なども出土し祭祀の場としての性格が強い遺跡で、紀氏にとって重要な祭祀場であり聖域であったことは容易に推察できる。

時代は降るが『日本霊異記』(787) 下巻第 34 話に「怨病忽に身に嬰り、之に因りて戒を受け善を行ひて以て現に病を癒すことと得し縁」は興味深い話である。「巨勢皆女は、紀伊国名草郡植生の里の女なりき(略)その里の大谷堂に住む。」と記される。登場する巨勢皆女は許勢雄柄宿禰の子孫とされている。

巨勢氏は奈良盆地南西部御所市古瀬を本拠地とした有力古代豪族でその祖、巨勢小柄宿禰は、武内宿禰の子と伝承されており、蘇我氏、波多氏、葛城氏らとともに、武内宿禰の後裔と称している。巨勢氏の本拠地は、曾我川の上流に近い山間で(コセの地名は、こうした地形に基づく)、紀伊に至る紀路が走る要衝である。葛城氏の本拠地とも近く、紀路沿いであることが、武内宿禰を共通の祖と仰ぐ同族意識を育んだと思われる。

植生の里は、花山古墳群がかつて「はにやま」と呼ばれ、埴輪が出土することからその名がついたのであろう。大谷堂はおそらく大日山湧水地周辺にあったと考えて大きくは外れていないであろう。この地に、後の世のこととはいえ葛城氏、紀氏と同族の巨勢の名前がみられるのは大和南部の豪族との深い繋がり示すものと理解されよう。

まとめ

井辺八幡山古墳の埴輪が海人とすれば海幸彦の話からは服従、隷属が見えてくる。6世紀前半の紀伊を代表する二基の古墳にみられる王権に従わない地方の長と、隷属、服従する長の話は単なる偶然とは考えにくい。大日山35号墳、井辺八幡山古墳の埴輪の共通点が倭王権への特別な感情を埴輪祭祀の中で表現していた可能性は高いのではないか、前者は従わないという暗黙の抵抗の意思表示、後者は隷属し服従を示すための意思表示と考えたい。両古墳の築造時期はわずかに大日山35号墳が先行すると考えられる。雄略以降、地方支配制度を進めようとする大和王権に対して、常々危機感、軋轢を感じていた紀伊の首長は、埴輪祭祀の中でそのことを表現したのではないかと推測している。

『日本書紀』安閑二年（535）五月、西は筑紫から東は駿河まで全国に26の屯倉を設置したという記事の中に、紀伊の経湍屯倉、河辺屯倉が含まれる。さらに欽明十七年（556）十月には海部屯倉を置いたとある。和泉—紀伊の交通の要衝である河辺屯倉、その対岸の経湍屯倉は水陸交通の要衝地である。海部屯倉は海民集団を掌握するために設置されたとみられる。これらの倭王権の施策は紀集団を抑えこむための設置であることは言うまでもない。大和王権が国造制という新たな地方支配制度を進める中で、起こったとみられる磐井の乱（527）の平定をきっかけに地方支配がより強力に進められることになる。6世紀中頃に河辺屯倉、経湍屯倉を見おろす岩橋山塊の東端の丘陵に県下最大級の前方後円墳天王塚古墳が築造されるのはその力を誇示するとともに簡単には服属しないという意思表示を示しているのかもしれない。

紙面の関係で要約としたのであらためて別稿に委ねることにしたい。（2021.01.31 校了）

【参考・引用文献】

- 藪田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」『古代の日本』
5 近畿 1970
金 基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版 1980
中田祝夫『日本霊異記』（下）講談社学術文庫 337
1980

- 篠川 賢『大王と地方豪族』日本史リフレット5
2001
『大王の埴輪紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和
歌山県立紀伊風土記の丘 2011
平林章仁『謎の古代豪族葛城氏』2013 祥伝社
『埴輪が語る古墳の祀り』和歌山県立紀伊風土記の
丘 2020
拙稿『生産の考古学Ⅲ』「井辺八幡山古墳出土の鯨
面埴輪」 駒澤大学考古学研究室編 2020

宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』

—花山地区編—

石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・富永里菜・仲原知之

1 はじめに

宮田啓二氏は和歌山県有田郡有田川町金屋出身で、和歌山市内の中学校で教鞭をとる傍ら、『麻裳』を刊行するなど、主に県内の考古資料を対象に研究を進められた郷土史家である^{註1}。

考古資料をはじめとした宮田氏関連資料は、昭和49年（1974）から平成26年（2014）にかけ紀伊風土記の丘に寄贈された。今回紹介する『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群 調』（以下、「当資料」という。）も、このうちのひとつである。

当資料は、昭和27～29年（1952～1954）に宮田氏が岩橋千塚古墳群などの踏査や聞き取りを行った際の記録を書き留めたものである。当時やそれ以前の岩橋千塚古墳群などの状況を知る大変貴重な資料であることから、今回有志5名で当資料の書き起こしを行った。なお、編集は金澤が行った。

当資料の総頁数^{註2}は182頁にもおよび、目次は表1にまとめたとおりである。本稿では、与えられた紙面上すべての書き起こしを掲載することは難しいため、花山地区について記載している25～48、110～113、118、121～124、127～129、134～137、150～158頁を対象とし掲載した。なお、書き起こしは、およそ各頁数ごとに分けて掲載し、旧字やくずし字^{註3}、誤字もすべて原文のままとした。文字が判別できないものは、『□』と表記している。また、補足が必要と思われる箇所には、注記《*》を付記した。

今後、今回掲載できなかった頁の書き起こしについても、順次公開していく予定である。

表1 当資料目次一覧

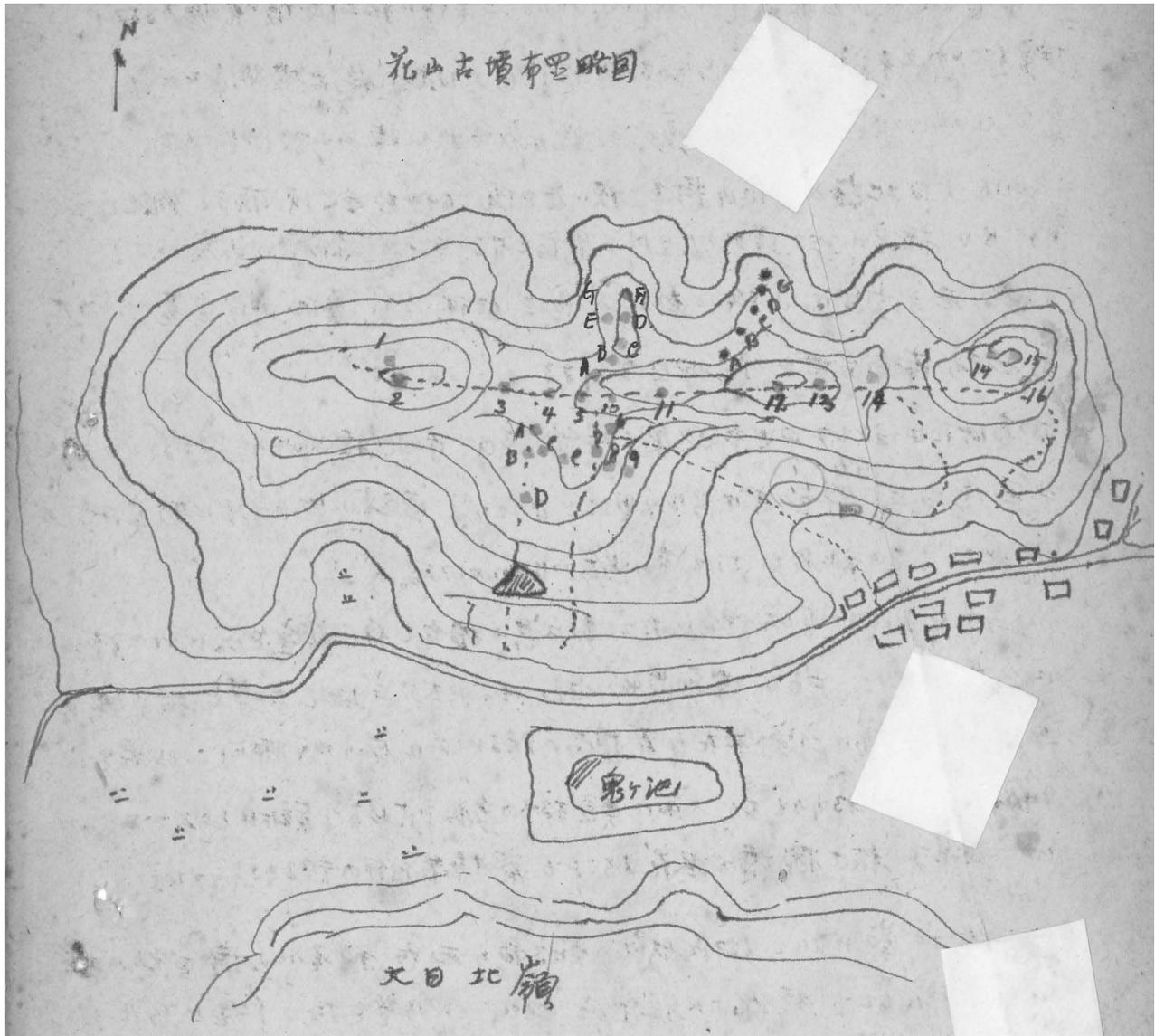
表題	頁数	表題	頁数
大日北嶺（御殿山）図	1	西和佐古墳調査 昭和27.1.4 午後	114
大日北嶺調査 昭和27.1.13 午後	4	昭和27.1.5 午前 長尾山にて書抄	118
大日北嶺第Ⅰ稜実調 昭和27.1.26	18	〇〇〇〇氏書抄 昭和27.1.12 午後	120
花（植山）山古墳実調 昭和27.1.27	25	山城の古墳	125
花山古墳調査 昭和27.2.9（土）	43	昭和29.6.11 日（金）午後5時	127
大日南嶺第Ⅱ稜 7号墳	49	参考 地理と古墳文化 藤岡謙次郎	131
昭和27.1.7 午後実調 寒冷地	56	大日南嶺 第Ⅲ稜 昭和27.1.7 午後	133
大日南嶺 第Ⅱ稜 昭和27.1.9 午後3時出 一日没迄調査	61	昭和29.5.30（日曜）	134
昭和27.1.5 午前中調査	64	29.7.2 No.1	139
大日山略図 第Ⅱ稜調査	69	鳴神貝塚 西和佐古墳 和歌山考古学会 昭和廿五.十一.十九見學	143
昭和26.12.25 午後調 晴後曇細雨	71	《*大日山北嶺》	146
大日南嶺第Ⅱ稜 昭和27.1.4 午後 3号墳	79	《*花山古墳》	150
大日南嶺第Ⅲ稜 昭和27.1.10 午後調査 午前中寒冷午後□《*稍?》緩ム	89	第三伸	157
大日山北嶺古墳分布図 昭和26.12.20 調	97	《*ぎ取り》	158
大日山南嶺 第Ⅰ稜調査	102	須佐入江の範囲	162
昭和26.12.13 日調 花山古墳調査《* 聞のくずし字》書抄 NO.1	110	《*梅原先生侍史》	182

2 宮田啓二『昭和二七年秋冬 岩橋千塚古墳群
調』書き起こし

【P.25】

花（埴山）山古墳 實調

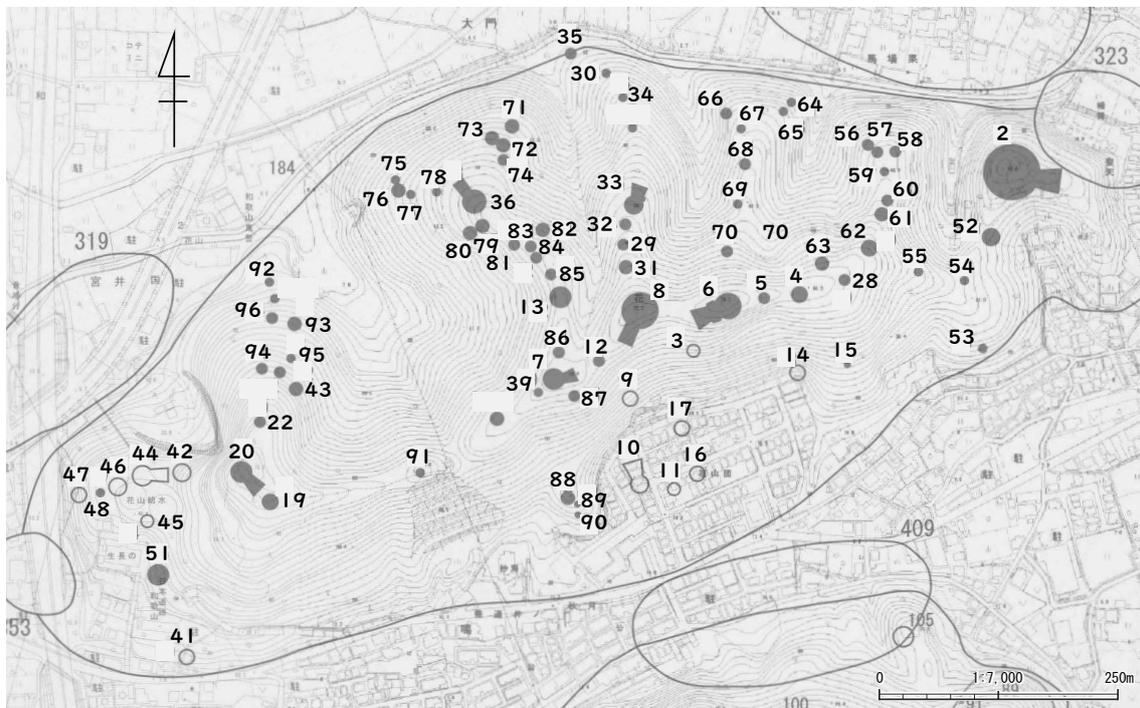
昭和27. 1. 27. 宮田 全日



《*当資料には、文章中に記載されている内容と一致する上記地図のほか、頁間に別の花山地区の地図及びメモ書きが挟まっていた^{註4}。

また、上記地図に掲載されている古墳の番号は、現在の和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図（和歌山県教育委員会 2007）と異なっている。そのため、当資料での古墳の記載内容や地図の位置から、現在の花山地区の古墳群との対応関係について整理を行

った（表2）。ただし、すべての対応をとることは難しかったため、確定的でないものについては？を付記している。》



和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図（県教委 2007 一部改変）

表 2 花山地区の古墳対応関係

当資料番号	現古墳番号	当資料記載概要	当資料番号	現古墳番号	当資料記載概要
1	花山 20 号墳	前方後円墳。石槨の露出なし。前方部で 埴輪 出土。	A	—	当資料番号 3・4 南側。南向第 1 稜。戦争末期防築工事の余剰土砂の堆積で古墳ではない。
2	花山 19 号墳	径約 20m、高さ 3～4m の円墳。石槨の露出なし。	B	—	
			C(西側)	—	
3	花山 91 号墳?	防築壕あり。その東側に石積材料があるが、石槨と見るほどの量でない。	C(東側)	—	
4	花山 39 号墳?	高さ 2～3m。墳丘中央に発掘の凹みあり。石槨の露出なし。	D	花山 88 号墳?	当資料番号 3・4 南側。南向第 1 稜。墳丘に凹みあり。石槨の露出なし。谷間に位置。
5	花山 7 号墳	前方後円墳 。東西主軸。東西約 30m。石槨の露出なし。防築壕あり。	A	花山 86 号墳?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。高さ 2～3m の小円墳。
6	花山 9 号墳	高さ 10m の大円墳。 横穴式石室 あり。玄室より 人骨 、羨道より 土器 、 環頭大刀 1 振 出土。その他、 環頭釧 出土か。	B	花山 13 号墳?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。稜線中の大塚。墳丘に掘割等あり。
7	花山 10 号墳	地区中最大規模の前方後円墳 。周濠あり? 石槨の露出なし。未発掘調査墳。	C	花山 85 号墳?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。B に 5m 程度近接して存在。
8	花山 11 号墳	径 21m、高さ 3～4m。	D	?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。高さ 4m。中央北へ壕が走る。
9	花山 16 号墳	円墳。未掘墳。	E	?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。D の西に近接。墳丘に壕あり。
10	花山 12 号墳?	円墳。高さ 3m。	F	花山 36 号墳?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。高さ 4～5m。墳丘に凹みあり。
11	花山 8 号墳	前方後円墳 。後円部径約 20m。高さ約 6m。南北主軸。後円部? に 粘土槨 あり。 鏡 4 面 (うち 1 面 神獸鏡)、 玉類 、 滑石製刀子 15 点 出土。	G	—?	当資料番号 5・10 北側。北向第 1 稜。古墳ではないか?
12	花山 6 号墳	前方後円墳 。後円部に 横穴式石室 あり。 埴輪 採集。 鏡 1 面 、 玉類 60 、 土器数十個 出土。	A	花山 31 号墳?	当資料番号 11・12 北側。北向第 2 稜。径 10m 以内。
13	花山 4 号墳?	前方後円墳? 高さ 5～6m 程度。防築堤あり。	B	—?	当資料番号 11・12 北側。北向第 2 稜。形不明瞭だが A と同様規模か。
14(西側)	花山 28 号墳?	径 6～7m、高さ 1m 程度。石槨の露出なし。	C	花山 29 号墳?	当資料番号 11・12 北側。北向第 2 稜。径 10 数 m、高さ 1.5～2 程度。
14(西側)	花山 52 号墳		D	花山 32 号墳?	当資料番号 11・12 北側。北向第 2 稜。 横穴式石室 あり。
15	花山 2 号墳	円墳。東西主軸。 横穴式石室 あり。 埴輪 採集。玄室より 人骨 、 鏡 、 土器 など出土。	G	花山 33 号墳?	当資料番号 11・12 北側。北向第 2 稜。当資料文章 E? 前方後円墳 。
16	不明		花山山麓古墳	不明	当資料 118 頁。 横穴式石室 あり。 くつわ 、 管玉 、 多数の鏃 、 土器 出土。羨門扉? を割って橋梁材に運ぶ。
17	花山 15 号墳?		15 西隣墳	不明	粘土槨 あり。 鏡 1 面 、 玉類 出土。

【26 頁】

花山古墳は西和佐古墳群中、初期形式、少くともこの群中に粘土槨墳の発掘あるより推察することか出来る。只だし 私の只今の調査段階は大日南北嶺古墳調査を一應完結したのみであつて、判然とした時代関係に就ては勿論云ふべき限りでもない。

この山は大日北嶺とは花山街道の狭い谷を隔てたのみで全く関聯なく独立してをり 且つ 標高に於て、僅か 77. 2 M を最高とする東西に細長の山容である。主として西方 1 / 3 半は 山脚に南北両面共 松林、竹藪、墓地、日前宮墓地となり、最西端南角台地を鳴神貝塚とする。

古墳所在は主として中央部以東の稜線及び南北稜線に位置するものである。寧 △△△ 《*小字で確認できない地名。おそらく現在の花山丘陵南東裾附近とみられる。なお、以降、同様の地名は同じ記号で表示する》上方東向斜面或は今日畑地となつている東端に近き部分に数点所在したことは古老の言に於て、さして遠い過去ではないのである。

但し 現在私の調査した限りに於て多くは其の墳丘を存し、玄室を留めるもの僅かに一基であつて、中には埋蔵遺物に於て、環刀《*頭?》太《*大》刀を出土した車谷上方の墳即ち 第 6 号墳《*現花山 9 号墳》の様に玄室の存在は発掘者の語るところに依り明瞭にして、現在すで埋没の状態にあるものもあり。これに類するもの多数を占める 7 《*事》、疑はぬところがあると共に その中に粘土槨墳の混在することも発掘者自身の語るところである。

大日南北嶺についてすでに我々の知る通り西向斜面に古墳を認めがたく 又 あるにしても稜線上に位置して西向の眺望を持つ位置に存在するにとゞまり その大部分は東向稜線並に その斜面に布置するものである。花山に於ても東半に集中する 7 全くこれらの例と軌を一にするものである。

この一群中いづれを編年の初期に置くべきかは勿論明らかでないが粘土槨を以て先行するものとすれば 東部稜線最高部に位置するものであり 又 これは東半より築造を開始したものとすれば常識に於ても當然の 7 と思はれるのである。

大様以上の如き概観の下に其の一々に就て現状を記す。

【27 ~ 30 頁】

第 1・II 号墳 《*第 1・第 2 号墳：現花山 20・19 号墳》(この墳については調査の結果を別記する《*当資料 42 ~ 44 頁に記載あり》)

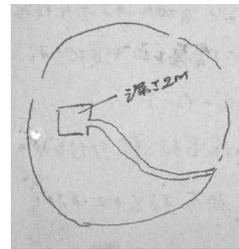
現状に於てこの両墳は二つの古墳と想像されるにとゞまる。中部以西稜線頂辺に位置するものであり、東西に通ずる稜頂の逕が II 号墳の頂上を通り I 号墳に達して、それより西は西斜面の降下に移る 故にこの地点は西方、日前宮方面より望み 花山最高頂の様に見受けられる地点であり、眺望として和歌山市河北一帯を瞰望するものである。又この地点南斜面は直ちに花山遊園の一劃に相當し、この位置より北に伸びる稜線及び西方降下斜面には古墳の存在を認めない。

墳丘は凡そ 10 M 径のものであり、頂点より掘鑿のあとが径 2 M の円を凹地の形に於て止めているのみで 勿論 石槨の存在は認められない。

要するにこの両墳は地形的に當然肯定さるべく 又 封土の人工を認めるものである。

第 III 号墳 《*第 3 号墳：現花山 91 号墳?》

I・II 号墳の稜頂が東に降下して再び隆起する頂点に位置するものであり久理丹羽(向水)《*久野丹波守?》の墳墓ある位置より登る逕は直ちにこの墳に倒達する。北面下に I 号墳と、私の所謂北向第 1 稜とのなす山曲をつくり、数枚の水田と宮堰を瞰下し、栗栖を眞北脚下に瞰望、現在阪和鉄橋、河北への展望を持ち 南は大日北嶺第 1 稜と相對し、和歌浦方面を望む。



I・II 号墳同様 墳丘の人工を留めで 石槨の認めがたいものである。

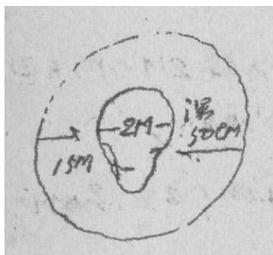
現在、深さ 2 M、1 辺 1 M 餘の石槨様に掘り込まれているが 岩石を切り込んだ 7 は明らかであり 勿論戦争防築壕の残形である 7 は一見して明らかである。

石槨に使用された石材は この壕壁には認める 7 が出来ない 但し この地点より更に東に降下する稜線逕辺に石材の積まれているのは石槨の材料であつたのかも知れないが これを以て直ちに石槨材料

と見るだけの量とも認めない。地形的に一墳の存在を認めらるべきものとして姑く誌し第Ⅲ号墳とする。

第四号墳《*第4号墳：現花山39号墳?》

第Ⅲ号墳の東に降下し再び隆起する地点にあり。明らか古墳として墳丘を有するものである。封土高さ2M~3Mで稜上山逕はこの南辺及頂上を通



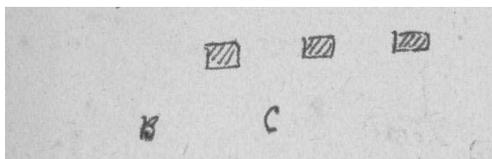
過する。中央発掘の凹地を残す 図示する通りであり、勿論現状石槨を露出しない。

A・B・C墳（假定）

第四号墳下南斜面にあたかも主塚に對する倍《陪》塚の様にA墳がある。

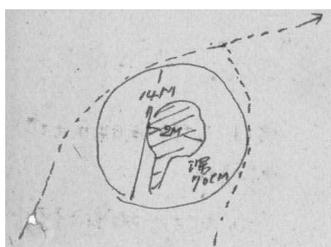
径5M~10Mばかりの墳丘状をなしているが、これは私には古墳と認めがたい 堆積土砂の新しい 及び B・Cに見られると同様戦争末期防築工事の餘剩土砂の堆積と見るのか適當と思ふ以下、□《*終?》戦後数年の経過に於てかく判別に困難なるは實地にこの工事に関係した人の見出しがたく、且つ、土地の人に於て、多数の墳丘を實地に於て説明を求めぬ限り、指示することの出来ない理由に依る。

B墳は Aの直下に位置し、小池の直上に位置する径3M許りの墳丘状東西に連り 中間に2Mの溝を以て両分するものであるが、これ又土新しく且つ、池に臨む急斜の状況等 並に Cの背後に防築濠三個の存在と考含、古墳ではない。之等は将来不明となる時ある声高に記す。



D号墳《*現花山88号墳?》

花山最大墳第7号《*現花山10号墳》前方後円墳の西斜面下にあり、逕は前記小池を挟んで道路より この墳丘に達し



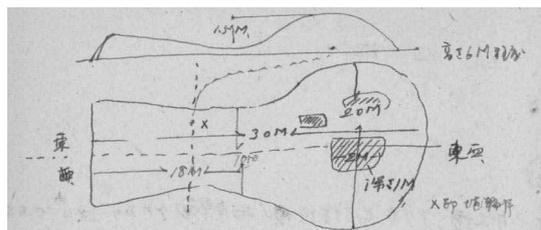
こゝにて合して 7号墳前方部の端に達する。これは明らかな古墳である。

眺望、塩屋和歌浦方面 近くは□□《*鳴神?》方面に展く図示する通り発掘の痕をとゞめ石槨を露出しない。

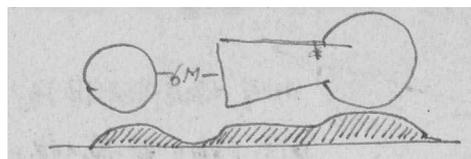
この位置の特色とするところは後に山稜を負封土2M許りに低く、谷間に位置することである。地形的に第7号墳に關係する様に見受けられる。

第5号墳《*現花山7号墳?》

第四号墳東方稜線上に位置し、四号墳より高く位置する。この墳は私の所□《*謂?》南向第1稜に降下し、直ちに前方後円の前方に當面し、右に下つて前記D号墳に至る。現在、逕はその南丘下を通過し、更に墳頂を通る逕もこれら稜頂各墳に共通するところである。殊にこの墳にあつては北向第1稜に通ずる逕とのクロスする地点にあり、一見円墳の様に見受けられるが實は前方後円形の前部部の崩れた形なのである。



東西を主軸とするものである。約東西30M 発掘の痕跡径2Mの凹地をつくつているが石槨を認めない。又防築壕の掘り添えられた とも明らかである。

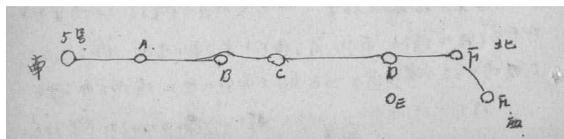


北向第1稜

この稜上にA.....Gに至る7基を遺存する。右のうちG号は古墳として確認するには多少疑念を持つものである姑く記す。

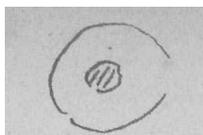
防築壕構築工事は昭和20年 最末期にあたり敲土隊決戦を予想し、この山などは紀の川平地に對する第一線陣地とし屈強と想定され殊に北向稜線は頂上古墳の原形を壕構築の利用角としているのである。故に墳丘とし《*て?》は存在し、これをつな

ぐ現状の土帯と丘上の掘割は、この工事の附帯である。

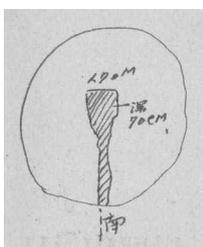


【31 頁】

A号墳 5号墳より少々降下してA号墳の中央を通過する。2M～3Mの高さの小墳である中央発掘の凹地を為す。



B号墳 この稜線中の大塚である。この墳頂にある掘割は北辺に1.7Mの幅を持つが発掘当時の痕跡でありその南に延びるものは防築壕であり直ちに墳丘外に延びて堤状をなし更にこれは北にも延びているのである。

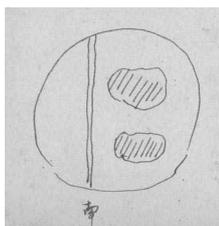


C号墳 B C間5M許り近接して存在し、B同様堤はこの墳丘上に延びて更に北に延びる。

D号墳 中央北へ壕が走り 封土4M位の高さ確實に一墳。

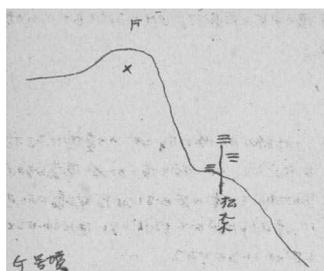
E号墳 Dの西に近接する 深さ70CM、幅1.20M、長幅1.70Mの穴を認めるがこれは壕と見るのが正しいのである。但し、1墳の形成は、確實と思はれる。

F号墳 径2M位の凹地を持ち発掘の形跡をとらめている。高さ4M～5M。堤はこの墳頂に達し この北斜面は急降下直ちに小低丘をなし宮堰川に落ちる。



【32 頁】

G号墳 Eと同様壕開鑿の跡と見るべく。古墳と見るには疑を存する。

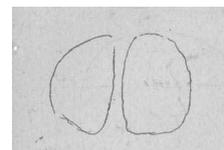


【33 頁】

第6号墳 (別に記す《*当資料47・48、121頁に

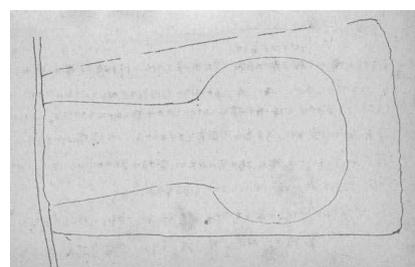
記載あり》)《*現花山9号墳》

花山△△△西辺より上方に谷間を為す 即ち車谷の最上辺に位置する古墳である。本墳の特徴とするところは谷間に位置することである。現在、この墳はあたかも頂上稜線と南向第1稜の間に目立たず而も隆然と占めた位置は別記す書物に記す環頭太刀を出土した先づ花山古墳中最も整然たる構造と遺物の優秀であつたは著しく発掘者の語るところである。



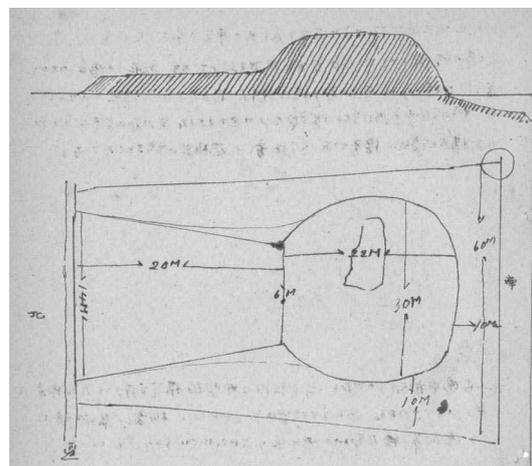
第7号墳《*現花山10号墳》

花山古墳中最大のものであり 前方後円の典型的構築を持つこと大日南嶺頂上墳に比すべき



である。正にこの位置は花山中央部に相當し、鬼ヶ池上方にあたり、南向第1稜全部がこの墳に依り占められているといつてもいゝ。

【34・35 頁】



前方後円で主軸160°午巳の間南々東、後円部の高さ3M～4M相達する。南面東面少々カーブを持つた平地を持つ。南辺60M許り後円部東辺よりこの端に東西間5M(左右)この平地は勿論塚丘構築にあつてこの土を盛りあげたものである。いづれも東南面に傾斜し、前方部に幅員をせばめてい

る。この墳塚は中央部を逕が南に降下している。中央稍々東にあたつて、発掘の跡をとどめて深さ 1.26 M 幅 1.1 C 《*M?》、長さ 2 M を掘り込んでいるが石室に触れていない。

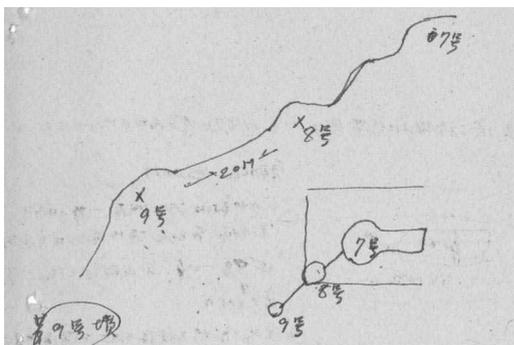
この地点からは和歌山市南半を、秋月、津秦、鳴神を瞰下し、和歌浦を望む。

大日北嶺第 1 稜と正対し 2 稜 3 稜をも望む。東方は高積山 宇陀高橋神社 葛城 川永村以東を望む。

いづれにしてもこの古墳は最大の規模を有し、未発掘墳であり、他例に倣し、羨道は西面するのでないかと思ふ。

8 号墳 《*現花山 11 号墳》

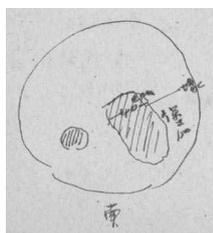
第 7 号墳後円部東南角から（主墳より辰の方角）に位置する。一見この主墳の陪塚の如きに位置し、この巨《*距?》離約 15 M である。即ち主墳下方部東南角に位置する。径 21 M 許り東南に傾斜 高さ約 3 ~ 4 M。



第 9 号墳 《*現花山 16 号墳》

第 8 号東南下 20 M に位置する未掘墳である。

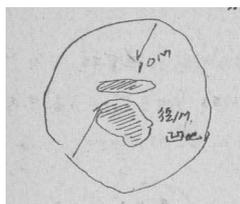
松 笹 自丈を凌する。この墳より東へ急降下して△△△人家に達する地形。下方は□《*對?藪?》に接する。



【36 頁】

第 10 号墳 《*現花山 12 号墳?》

5 号墳より 4 M 東に位置する円墳である。高さ 3 M。



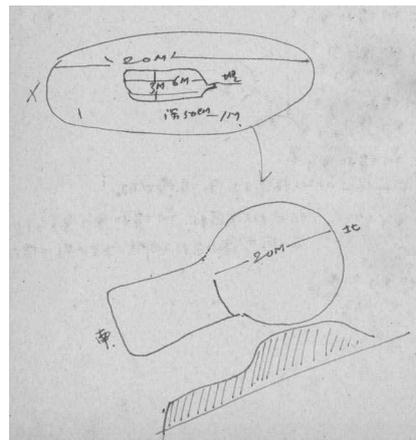
第 11 号墳 《*現花山 8 号墳》

第 10 号墳の東、頂上稜線上に位置 逕は 10 号 11 号共に墳丘南辺及び頂上を通過する。

東西に長い、約 20 M。この地点よりは河北河南 一帯の眺望 和歌山市 花山△△△西部は見えない 四□《*国?》一望。前山西部を除く一望。高さ約 6 M。防築壕堤を残存 その上を逕通ず。

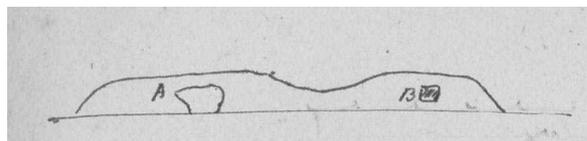
南北主軸。

この墳も頂稜角利用の前方後円墳である。



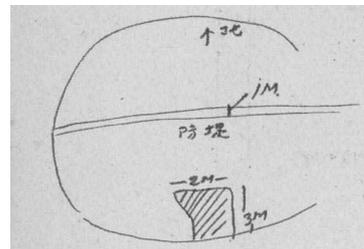
【37 頁】

第 12 号墳 《*現花山 6 号墳》 8 号 《*後に振りなおされた番号か》 前方後円墳である。11 号と間約 17 M。



瓢形と見るので妥當か。前方後円の形が明瞭でない。

(A) 墳丘南面に発掘の地がある。上辺より 2.50 M に約 2 M の長さ 10 C M の厚さに層石の層をなしているが何のためか明瞭でない。



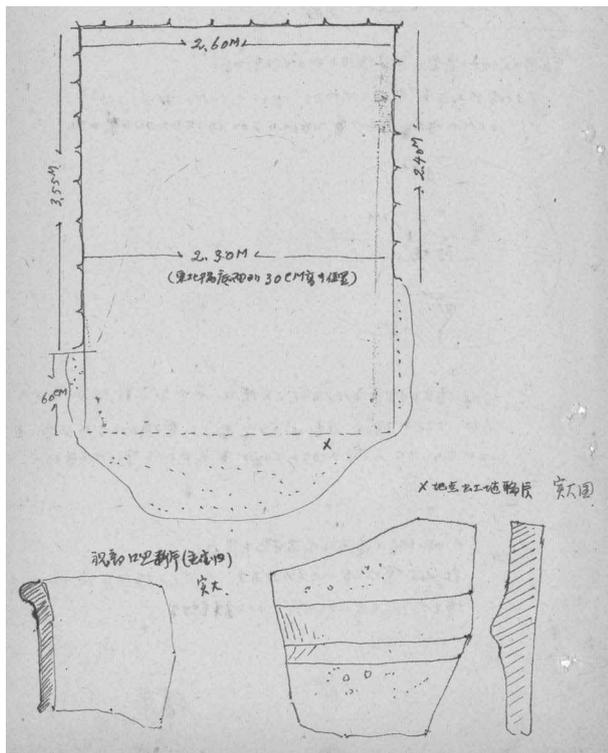
B B の墳丘を後円部と見れば この墳は A を前方部と認めねばならぬ 上記の様に A 部は約 1/4 南方より発掘しているが 石室に達していない。もし石槨があるとすれば 羨道の位置に相當する箇所

であるか？

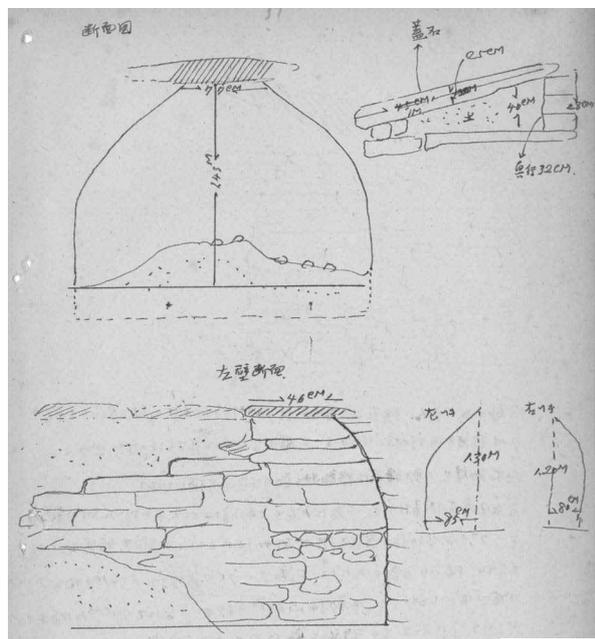
Bの地点に南面して石槨を遺存し
花山古墳中唯一のものである。且つ その構
造は他の大日各墳とは趣を異にする故 これ
を詳記する。

【38 頁】

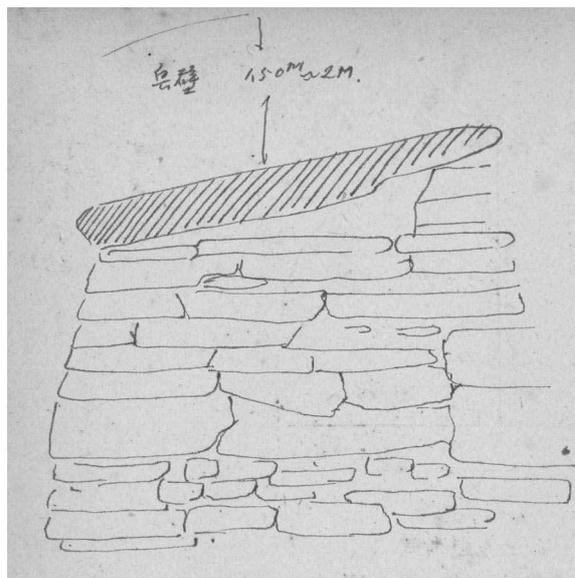
8号墳石槨《*振り直された番号とみられる。当
資料の他頁記載から花山12号墳：現花山6号墳の
ことと考えられる》



【39 頁】



【40 頁】



左壁をほぼ完存し、現在その南端約60CM許りを
欠き土壁をなしているから4M程度の原形の様に
思はれる 右壁は半分餘りを残存することになる。
且つ左右両壁共 上部石積は移動され、居るは図
示する通りである。

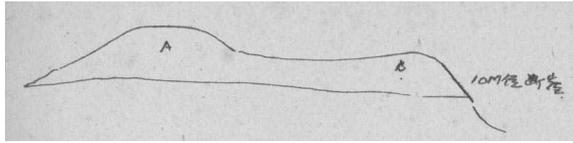
石組は古拙素朴にて、下底に小石を上部にしたが
い、大石を用いたるは持送りカーブの急なるに依り、
當然の手法であるが 他にこの様な顕著特異の例証
を見ない。隅石は交互差入にして、上湾カーブの急
なるに 1.30Mの間に85CMの開きあり したが
つて 底部径2.60Mのものが上辺にて77CM
に幅をせばめているに於て その程度を察するに
が出来、玄室内にて、カーブの重圧に不安の感を抱
く。蓋石は発掘の際に傾斜、東に高くなっているか
その下部に込石をなして 原形は ㄣ の形をな
していたとも想像される。 石組最大96CM 厚
さ16CM。

床面敷石 海石の白きもの 黒きもの 5CM内
外を布きつめていたが分り、この点 大日南嶺頂
上墳と同様である点 注目すべきとす。

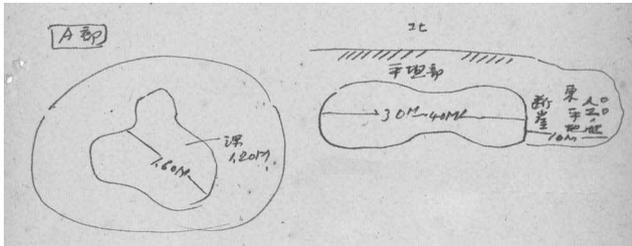
【41 頁】

第13号墳《*現花山4号墳?》

12号墳と同様 前方後円形? 瓢形?



A部

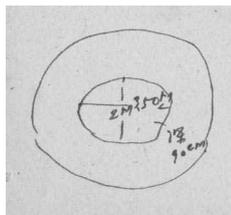


墳頂を通ずる逕 南丘下を通ずる逕は 12号墳より連続してこの墳東端に□《*盡?》く。防築堤地幅 1M。高さ 5M~6M程度 of 封土。

第 14号墳《*現花山 28号墳?》

13号墳より逕は降下してその稜角にあたる地点の一墳を 14号とす。

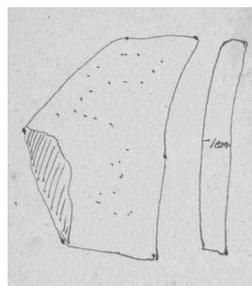
径 6M~7Mの墳 高さ 1M程許り石礫なく 笹密生す。逕はこの墳より 東に急降下し、北にのびて 1稜をなす。この稜線上に二基位は存在したのではないかと思ふ 殊にその先端に近き東西相對して存在の形蹟もあり 又 後ろよりの発掘の凹地をものこす。



【42頁】

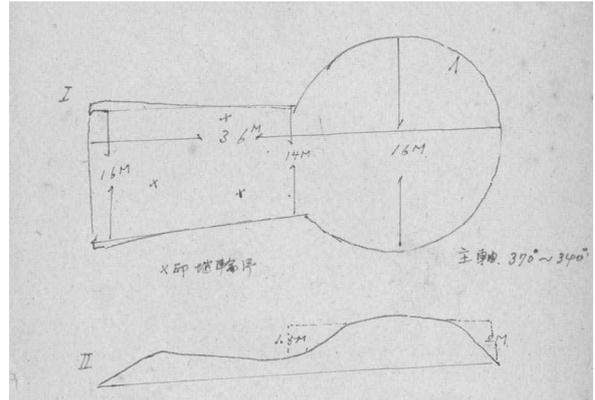
1号墳《*現花山 20号墳》

前方部埴輪断片 堅締りの焼 紋様不明 復原径 30CM程度



【43・44頁】

花山古墳調査 昭和 27. 2. 9 (土) 宮田啓二
花山古墳の配置を第 1回調査の時 私はこの第 1号墳《*現花山 20号墳》を円墳の様に見認っていたのである。今日 再度調査してみると、前記第 7号《*現花山 10号墳》 第 5号《*現花山 7号墳》と同じく前方後円墳であることが明らかとなり 而も 第 5号墳とは極めて類似の形にあるは 本



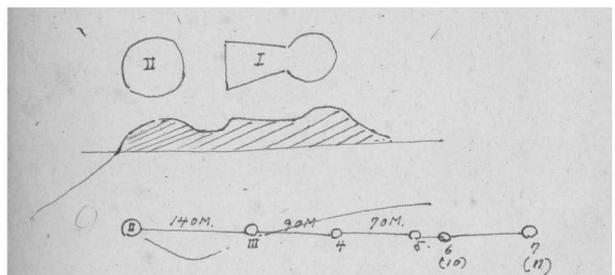
日の最大収穫である。

後円部の後方は 2M程度の高さであり、岩石の露出しているのを見受ける。頂上は発掘の跡らしく芝生となつてはいるが 目立つた凹みをみせていない。×印の地点に細片となつた埴輪片を認める。共通して花山古墳には殊に前方後円形の墳には埴輪の存在があるである。山頂を通じる逕は墳頂を通じて この地点からの眺望は和歌山市全体に及び 日前宮、鳴神神社、全貝塚を眼下にみる。これより西は頂上稜線が降下して、二稜角をつくつて貝塚後方に下る。

山頂の自然の形を利用して形成されたものであつて、後円部はその頂点に當るため高く 前方部はしたがつて低く II図の様になるのは意図した構築といふよりは自然の形に準據した為である。本墳の南側下に防築堤の残角があり、これは勿論 本古墳には関係がない。但し、この堤に至る 7、8Mの間の平端部は本墳の構築にあつて この土を利用したと考えられ、人工の跡をとゞめるものである。

第 II号墳《*現花山 19号墳》

I号墳前方部東端より 8Mにて 第 II号墳がある。これは径約 20M 高さ 3、4Mの円墳で、墳頂は平坦になり、第 I号墳と同様 既掘の痕跡が顕著でない。I号墳との関係は殆んど 1直線上にあ



り この布置は偶然とは受取れない。

II～4 防築堤を以て連続し古墳は宛もその連点の様に利用されている。この上が通路となり したがつて墳塚の上を通ずる徑となつていのである。

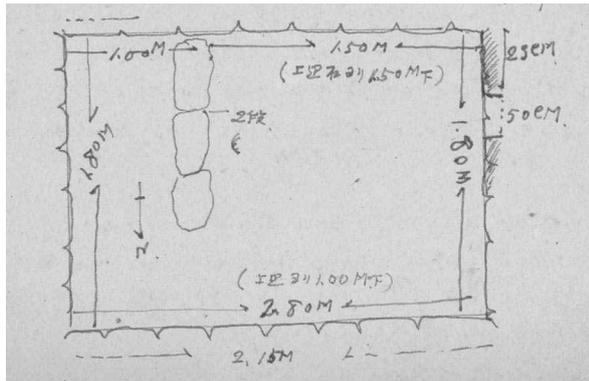
【45 頁】

A 墳《*現花山 31 号墳?》 11 号墳北斜面は降下して 1 丘をなす。A 号墳である。封土の限界不明であるが、径 10M を越えるものではなさそうである。墳丘北辺は断丘となり、B 号墳と対しているが、これは人為的のものであり、当初よりのものではない。墳頂に 50CM 四角の穴があるが、これも兵の工作に依るらしくあまりに整然としている。

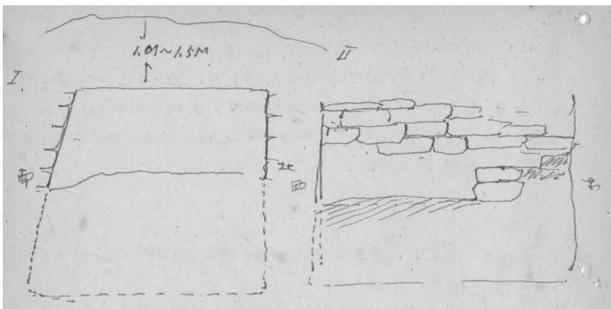
B 墳《*-?》 これも AB 間の採掘作業に依り形を明瞭にしないか A 墳程度のものであるが看取される。

C 墳《*現花山 29 号墳?》 B 墳より 5M ばかりにして C 墳があり、径 10 数 M 程度、高さ 1.5～2M 程度、頂上に径 2M 位の発掘の痕跡があり、兵の工作の痕が認められる。

D 墳《*現花山 32 号墳?》 C 墳円部より 3M ばかりにて相接して D 墳があり、大きさは C と同程度である。これには珍しく玄室が其の儘保存されてをり、この稜及び相対する第 1 稜の石槨構造を類推する好資料である。



【46 頁】

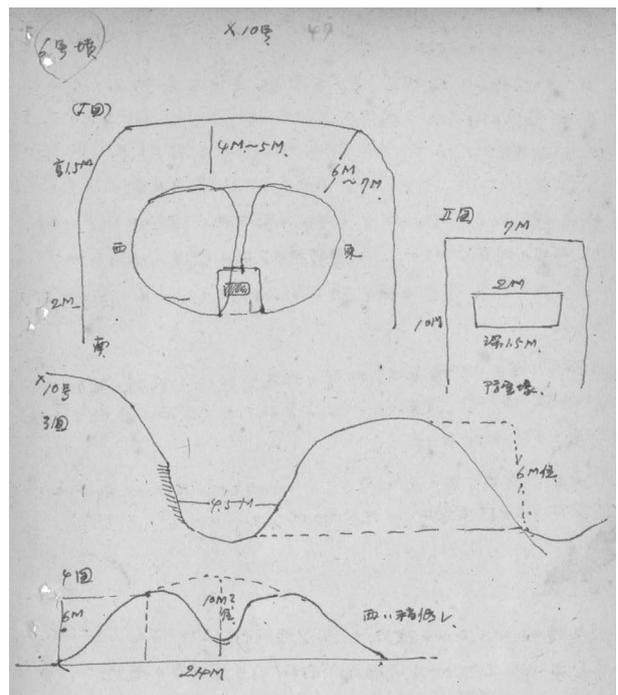


I. 玄室はあまりカーブの急でない。大日北嶺第 I 稜中に見られる如き傾向強く 現在その半ばを埋没している様であるが、南壁は土圧に依り内面に押し出されたと見るべく、由来は東西を主軸として長軸 2.80 短軸 1.80 の整形のものであった様である。石組も四隅交互差入で整形に近く別に特徴が認めがたい。羨道は西面にあつたと見るべく 図示する通り西南角に 50CM の空間のあるのが羨道上辺でないかと思う。

床面に径 10CM～2CM の白、黒灰の川原石を布いた様でこれは羨道附近南壁下に散見するが、比較的細粒のものを多く使用した様である。二段に石の中央東寄に積まれ、こゝで玄室の両分された格好になつていのは当初より隔壁として作られたか、後にこの形をなしたか不明である。たゞし、車谷、6 号墳の書に依る両分の形があるし羨道の反対壁に近く存在するが隔壁とも見得るのである。

E 墳《*G 墳のこことか。G 墳：現花山 33 号墳?》 後円部径 10 数 m、高さ 1.5M、北に前方形に突出てをり、くびれた部分の上部で 1M 位であるが、底径は少くとも 3M はある 前方後円形を模したものとみていゝ。前方長さ 10M 許り。その両側の下方に構築に當つて平坦部を作つてい。

【47・48 頁】



10号墳《*現花山12号墳?》下にある6号墳《*現花山9号墳》本墳は中央部に谷状をなして両分してその南面には、戦時中の防空壕上記Ⅱ図の様に掘り込まれているがこれは古墳玄室の位置とは認めがたい。

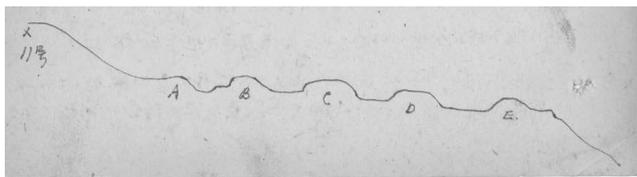
東北面より墳丘を見るに6M位の高さを現存し、若し東西1つにしたものか、本墳本来の姿とするなれば高さ10Mは優に認め得る大円塚である。本塚出土品は前記書抄に記す通り、環頭の太刀を出したものであり、それに相當する規模を存するものである。

車谷の最上方に位置し、10号墳下(第Ⅲ図斜線)を施した部分は約5M許りけづりとられて築造の際この土を墳塚にもりあげたは明らかであり、且つ墳丘の西側北側東側の三方は共に同様に斜面の土を削つて封土をなした形跡がはつきりしてをり、こゝに塚をめぐつて4M~6Mの溝状をなしているは他の斜面墳に於ても封土の上方に溝をつくるものがあると同様自然の形成であるが、この墳程大規模に顕著に保存されているものはないあたかも墳丘を囲む垣の様になつてゐるは第1図示す如くである。

第1回調査の際はこの墳南下方より登つた為谷深く且つ荆棘の繁茂に遭つて実に困難であつたが、調査にあつては上方よりするか乃至西北角よりするか最も容易であるを附記する。

私は帰途8号前方部の逕を東に下りこの墳を仰いだが隆然として空間を領する威容は正に他の墳の比でない。

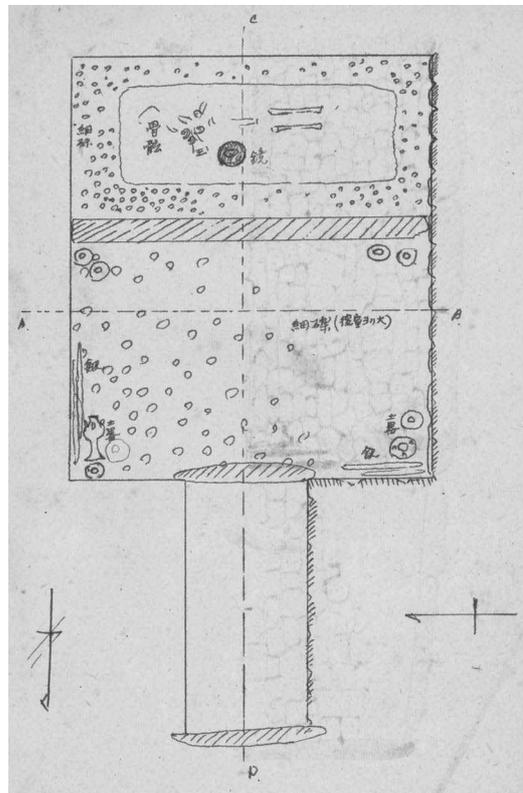
北第Ⅱ稜 11号墳から北に延びる稜線で北第Ⅰ稜と平行するものである。頂上線を歩む者にとり見失はれ易い稜線であるが、11号墳頂の築堤上を北に下ると自然この稜線に通ずる様になつてゐるこの稜線に5基の墳を認める。



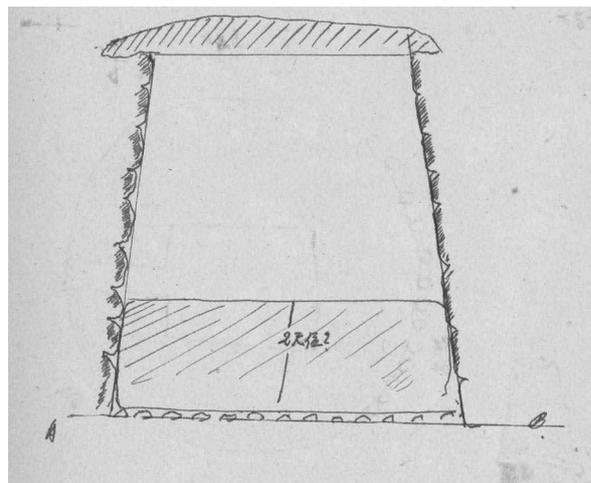
【110頁】

昭和26.12.13日調 花山古墳群調査書抄NO.1

第27号墳《*後に14号墳に訂正している。ただし、154頁の記述から花山15号墳：現花山2号墳の記述とみられる》(現在畑地) 所在地点：海草郡西和佐村花山 番地



【111頁】



【112頁】

昭和26年、12、13日、夕刻 花山東半、山頂古墳《*花山15号墳：現花山2号墳?》を精査して岩橋△△△上方畑地の一角は地形的に古墳所在地点の如く見込みをつけ、附近精査中、私が前回来附

近山中を調査しているのをずき知つた 同村○○○
○○氏《*個人名。以下、同姓同名には同じ記号を用いる》(才)が□□《*態々》麓より来て、指示して下さつたのである。

私は附近精査中、A地点に於て既に埴輪断片二片を採集していたので 古墳所在を確めてをり 偶々同氏の説をすくに及んで開墾以前の地形を知るにいたつたから之を記し置く。現在大根畑となつている山頂平坦地の中央あたりに位置していたものが、実はその西□《*角?南?》にちかく玄室の存在していた₁を確め得た。

こゝには麓から通ずる細い道が通じてをり、その左方に一枚の畑地があり それが、そこが本古墳の玄室を存していた地点なのである。開墾當時は現在より少しく広くその一角が崩え去つた為 今日見る如く丘頂の西端に近くなつていのである。

指示された地点は農作物なく、多少凹地をなしているのは 玄室を埋めた跡を明らかにとゞめてをり、同氏の語るどころ及びその実地につき前掲想定図を得たのである。

これに依るに 主軸を東西とする、西向古墳であつて、開墾前は他と同様の円墳であり 埴輪を図示する通り遺存していたのである。清水氏所蔵埴輪はこの古墳の物である₁も同氏よりすく₁に依り明瞭となつたのである。鳴神村清水氏所蔵埴輪については、明治41年人類学雑誌23、259号 大野雲外氏 紀伊國海草古墳石槨について報告中

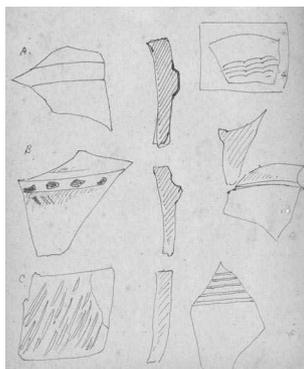
斎甕(人誌258号口絵)埴輪円筒、同土偶、小持勾玉、埴甕

とあり、同氏所蔵中、この□《*既?詳?》の土器は本古墳出土のものである₁が分かつたのである。

今 清水氏についてこれら遺品をみるに埴輪

【113頁】

私の採集した埴輪断片には 発掘の年次については正確な記憶を逸しているが この報告に依れば明治41年10以前にあつた₁は確実である。



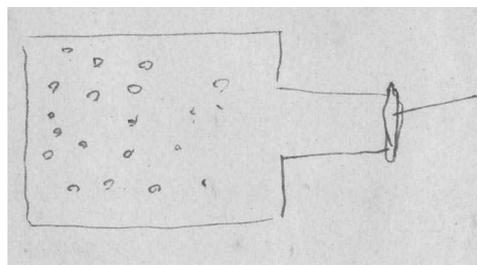
この地点は花山東端に近く すでに附近は開墾されてをり 又地形的に一段低くなつてをり、28号墳は図示する如く mの間に併立していたものである。

【118頁】

昭和27.1.5午前 長尾山にてす書抄

Ⅲ. 花山山麓古墳について

大正六、七年頃 花山人家入口上方にある(當時土取場にて和歌山へ運ぶ)馬力ひき日給3円位のと き☆☆☆氏《*個人名》にすけば更に詳細判明すると謂う。



五尺幅 長さ2間位の石を眞すぐに立てゝいるのに掘りあてた。

玄室は敷石にて出土品、くつわ一和師へ持つていつた、頭骨4、5個他は腐朽してなしといふ。鏡なし 管玉あり 鏃、多数あり 皿、壺  型 一対 この石は最近割つて橋梁材に運ぶ。

【121頁】

花山古墳三例

I例《*花山6号墳：現花山9号墳》

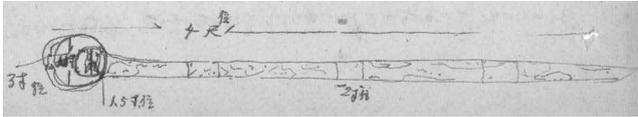
池の上方 下方上円墳 右上方谷間にある円塚、谷は車谷という。は同氏等に依り発掘されたところである。明治31年7月である。當時の状況としては、30年頃より数年間は発掘が₁すき、1時は附近村をあげての仕事のようになる状態 大抵は3人以上5人位の1団をなしたものである。

この墳は現状にては南方より発掘している様に思うが 頂より発掘した₁は氏の語るどころであり、古墳構造、普通墳たる₁はこれ又 氏が語るどころである。す書構造

第×図参照 即ち

玄室三分之二程度の所に高さ1.5尺~2尺位の板石に依る仕切りがあり、その奥壁に接して長方形

板石を敷いて遺骸を載せ、骨片腐頭蓋歯等大たい骨片をとどむるのみ。副葬品に鏡なく、土器は羨道面二隅に多数配置されてをり、羨道右壁に沿つて下に図示する長剣直刀一振を埋没していたものである。



これはその先端を西向し横に寝せてをり、その一端が露出していた為上土を去つて、その形の儘を得たものである。

【122 頁】

図は同氏の語るところにしたがい、大要を描写したものであるが、柄頭は径3寸の□《*外?》縁の両側方より二龍の対向図様があり その内円に経1.5寸のマリ状をなした球面に鬼面を刻していたが但しこの鬼面といふのは一見鬼の如く見えるけれども鬼頭でないが、寧ろ、虎と見るべきがすでに定説であり。この□□《*切合?》龍虎の表現であるがは當然のがの様に思うのである。マリ状のものは中空であつた。

刀身は眞直であり且つ錆化していたが折れてをらず 幅2寸許りの青銅鍍金の帯が3ヶ所にあり 総長は四尺許り。

私の様に面白く思い且つ氏の注意に感謝したいが、この带状鍍金は偏六角形をなしていたが実及その下に木片の腐朽付着していたがである。勿論 鉄の錆化は形状の大要を留めるのみとなつていたが帯金は當初の儘であり、の形をなしていたがは附着の木質と共にサヤの木で作られていたが偏六角形（多分これを中断してはぎ合わせたものであらう。）ことを示しているのである。□《*鐔?》については記憶なく且つ こじり《*鞘の先端》にあたる部面の金具は無かつたと語っている。西和佐古墳群出土の数□《*多?》く見ずしてきたがこれ程完全にして立派な意匠のものゝ無かつたがも氏の附記するところである。土器については 形の大き八寸位位のもの及蓋付のつまみあるもの多数を語るから大要、その要領を会得するがができる。

敷石は灰色、黒色の川原石、約1寸位までの粒のそろつたものをしきつめ、一部に崩土の薄き埋積を

見た。

※本墳については調査記録 を参照記

【123・124 頁】

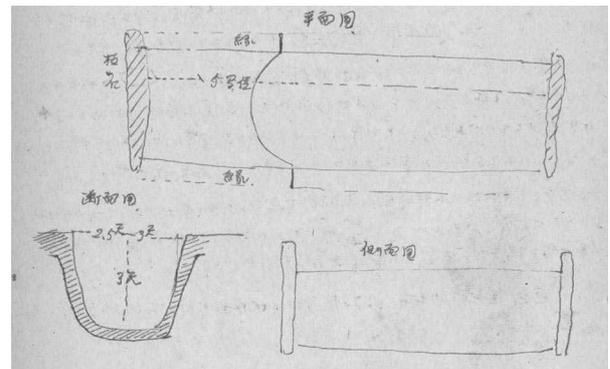
Ⅱ例《*花山11号墳：現花山8号墳》

古式古墳 粘土棺

花山山稜中央東部に位置する最高個所にある。図録 号がそれである。

この古墳発掘に関係ある同氏は、普通の円塚であるけれども一向に石槨なく、南斜面より掘り初めて、南北を主軸とする粘土棺であつたことを語っている。このがは後に記す、○○○○○氏《*個人名》の話と対象されたい。

即ち○○氏の語るところ

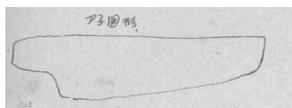


発掘にしたがつて羨道の扉の様な板石があらはれそれを除くと土の相違硬軟に依つて粘土棺であるが明瞭となり充滿する土を除くにしたがつて青石片（この地の通有岩質緑泥片岩）が棺中に敷かれた形になつてをり 最初勾玉5個発見、ついで径8寸の鏡の上に径六寸の鏡の重ねあるを発見。更に8寸6寸の鏡（これは重ねず）を発見。青瑯玕2個を発見。土色異なる為 その線に沿つて掘りすゝみ北辺にて 石製模造刀子長さ7cm、幅2.5cm、15個を発見した。この模造刀子のあつたところで粘棺は終り再び石を□《*建?》てて南北両端を石を以て囲つた形であつたがを知つた。

この墳に於ても私は氏の注意に感謝したいが、その二個重ねた鏡である。これは布を以て巻いていたが明らかで、その鏡面に細かい布片の痕跡をとどめていたといふ一がはこの種発見の新しい知見として尊重したい。刀子は灰色ロー石であつたも

の>様である。

同墳内発見勾玉一部を氏は所蔵する。勿論これは今日迄我々の見方の範囲に無かつたものである。詳細実測図は別に記す。



	長さ (cm)	厚さ (cm)
勾玉	3.1	1
	1.5	—
	1.8	1
	1.8	1
	3	1.5
管玉	3	0.4
	1	0.4
	3.1	0.4

計勾玉6個、管玉6個

である。氏は□《*尚?》時計鎖に2個勾玉 青瑯のもの灰褐色のものをこれも同様粘土棺中発見のものといひ この西隣に同様粘墳一基発掘があり、これと混同しているとの7であるが、これは同時代同一形式なる点に於て間違なく、且つその良質のものは当時之を売り、沼家両家に所蔵のものにはこの墳出土がある様である。氏は上記勾玉を一つにつまり小玉を混じているが、これは前山出土の物である7を後日の為附記して置く。

Ⅲ例

西隣1墳の粘棺でありそこから氏の言葉では黒□《小?水?》銀鏡一面の発掘があつたが、これは経《*徑》6寸のものであり、出土にあたつて破損し、これを接いで大阪に売却した。

【127頁】

昭和29.6.11日(金)午後5時

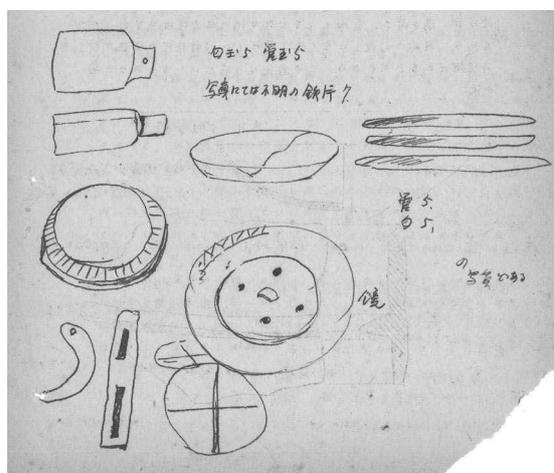
西和佐村岩橋 ××氏《*個人名》に行く 農繁ノ両後ですで田に出てをり 娘を遣いて話をなす□□《*交款?》すでに26年に1週間許りの患いに依り他界してをり、○○氏と共に我々はしばらく見ぬ間に これらの人を失つた7を遺憾とするものである。生前何かと古墳調査便宜を与えられた氏の□

《*実?》に謝するものである。

同氏の夫人が田に出ているのを呼んで来て 私の目的とする鏡鑑出土状況及びその地点について訊く。

夫人は昭和三年嫁した當時すでにあつたのだから、それ以前に発掘された7は明らかであり、地点は花山の同氏所持山林中 車坂頂墳の東方であるというが明瞭でない。写真一葉西和佐小学校寄進前に撮影したものがあつたので借用する。

この写真に依ると 大きさは不明であるが形状のみを記す。



【128頁】

宇田 ○○○○氏を訪ふ。娘二人あり 主人不在 隣家の老翁来りてこの人○○○氏と共に発掘に従7せる人

【129頁】

花山 鏡 二頭馬車 アチラ人二人乗る きれでつゝんでいた

頂土

墳から鏡 玉 管玉

(60) 太い 土器皿

1.56個

鏡径5、6寸 土を

はらはざにとの骨董

商の注文



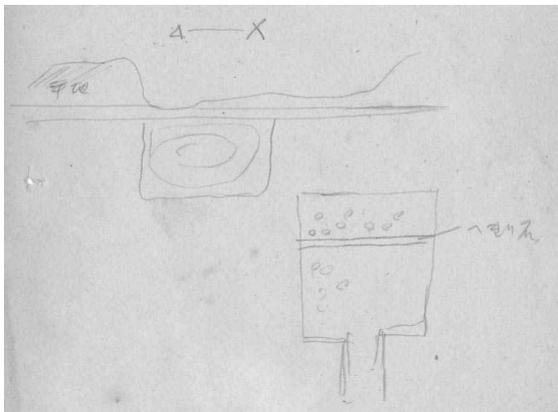
【134頁】

昭和29.5.30(日曜)

午後 ○○氏を訪ねたが同氏は28.10月すでに

他界しているヲを折から看取入中の家族よりずいた。同氏の死は云はゞ西和佐古墳発掘の唯一の生存者であつたため惜しいのである。私は発掘法の一応は書抄にとゞねているが 尚ゞきたいと思つたヲは花山古墳の個々についてどの程度の発掘がなされたものであるか 又 氏が生前に語つていた今一度掘つてみたい箇所というのはどこであるか。先ずこの経験者を失うヲに依り、その望みは断たれた形である。そこで×××××氏を訪ね折柄 氏は高橋神社前方の練瓦工場に行つているのをそのヲ務所に訪ねて、次の要頁を得たのである。

明治30年代 発掘當時 氏の所有地である鬼が池上方の山地



×印地点の古墳を掘らせた際、記憶するところ次の通りである。

鏡三面 径10cm 径15cm 径17cm 程度の三面 鏡背の紋様についての記憶はない

そのうち1面は保存よく□《*面?》うつる程であつた。これを西和佐小学校に寄附したのであるが、現在は保存されていない。同校は戦時中兵隊宿所《*だ》つたため 此の時紛失したのであろうか。

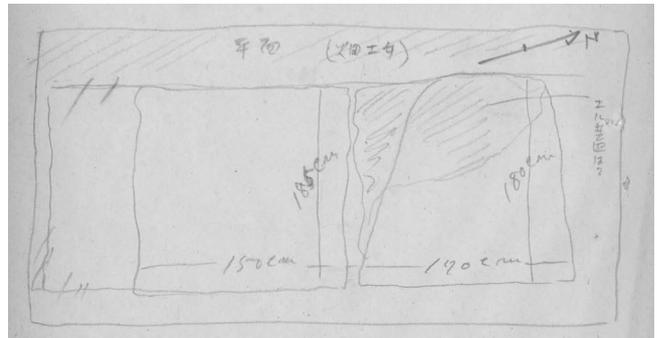
【135頁】

この他に勾玉 管玉 ノミ(滑石製模造品) カブト、刀 であつた。勾玉はヒスイの良質のものがあり これも 数日前まで時計の鎖につけていたものをおとしてしまつたとのヲであつた。

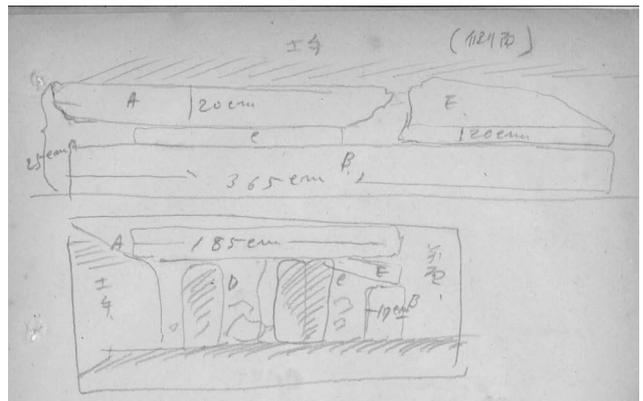
同氏よりのゞき得たところは以上のみであるが前山麓の土取場から出た壺は西和中学に寄附してあるから一度見てはとのヲに西和中学に行く 折柄日曜且ツ 農繁休暇中で 日直の女先生を通じ田井教

□《*論?授?》の報告を依頼して、西和佐小学校を訪ねてみたが遺物は一片も留めていない。

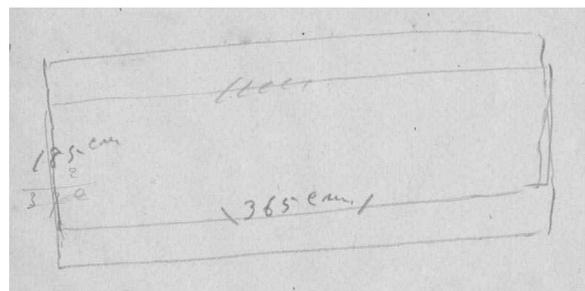
帰途、☆☆☆氏を訪ね 農繁期で氏は不在、家族より裏山の古墳を案内され 一応見取図を作製する。位置は岩橋□□西方地藏像のあるところから入つた人家の裏畑である。△△△である。



【136・137頁】

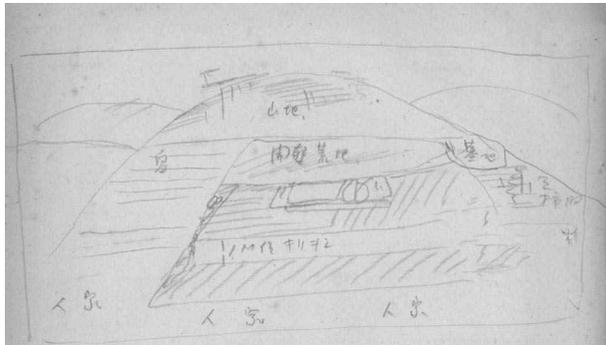


約4mに近い1枚の緑泥片岩Bが土中に深く埋まつてをり 発掘の際の変形に因るためか C、Dの石に支えられた様な形になつているEはA同様天井石であるがこれは傾斜している。玄室は大様Bの長さが長幅をしめているのであろうが 幅は矢張り185cmのがその限界をしめすとすれば、下記の形になる訳である。



且ツ A、B共に凡そ20cmの見ヲな緑泥岩の同厚

のものであり A は 左端をかきとり使用したものであるそうだから側壁をこうした板石で囲んだもので 現存中異例に属するもので 凡らく 羨道は南東についていたものであろう。

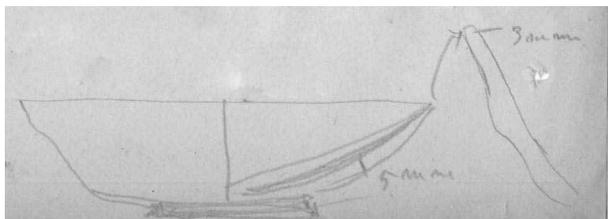


発掘は開墾に依るもので 穴があき 古墳であることを認め 翌日本格的に発掘したというから□□《*負傷?》古墳の発見条件と極めて類似している。

背後の五〇米はかりのなだらかな山の同谷中央中腹にあたり 此の古墳はこの1山を領した形に置かれている。前面は御殿山東麓に相對し 此からは前山の東半が視野に入り 徳川頼倫氏に依り発掘された(明治40年発掘)山頂墳とは正南北に相對する。東は高山の北端から少しは平地が見え 紀の川の上流への見通しが利く。勿論この間の平地は悉く視野に収まる、出土品は金環があつたそうで時価35円の賣値で 鉄製品は蜜柑箱に一杯位はあつた

附近に 径1cm—2cmの海浜の玉石(白)が無数に散乱である。

土器片も多数ある。復原出来る1片(調査して記す)



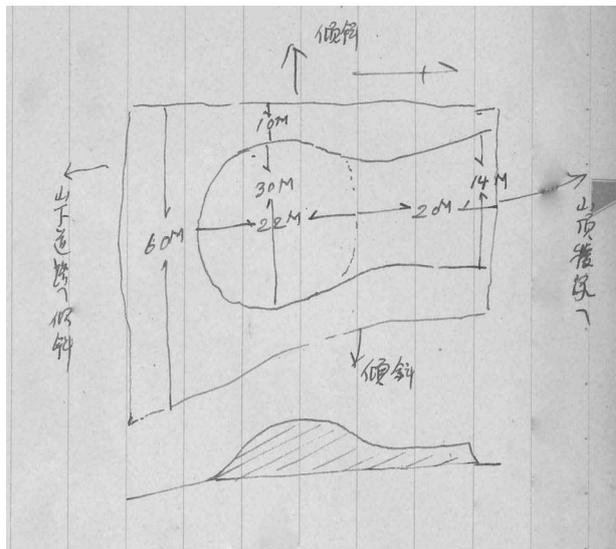
【150～158頁一部】

(一) 花山七号墳《*現花山10号墳》実測略図(□《*未?》掘前方後円)

写真に示す通り花山南向尾稜一丘を領す写真にも松の生育に合つて墳形が黒く出ている様に思いません。

封土南西面や、カーブある平坦部があり御殿山

(写真) 山頂墳と正対 この位置からは和歌山市南辺 写真——の山は 和歌浦です。すぐ近くに 日前宮 秋月、津秦 南鳴神 東方には紀ノ川南岸平地を一望にする。この墳は東方より二メートル許り発掘しかけていますが 少数では手におえなかつたのでせう。



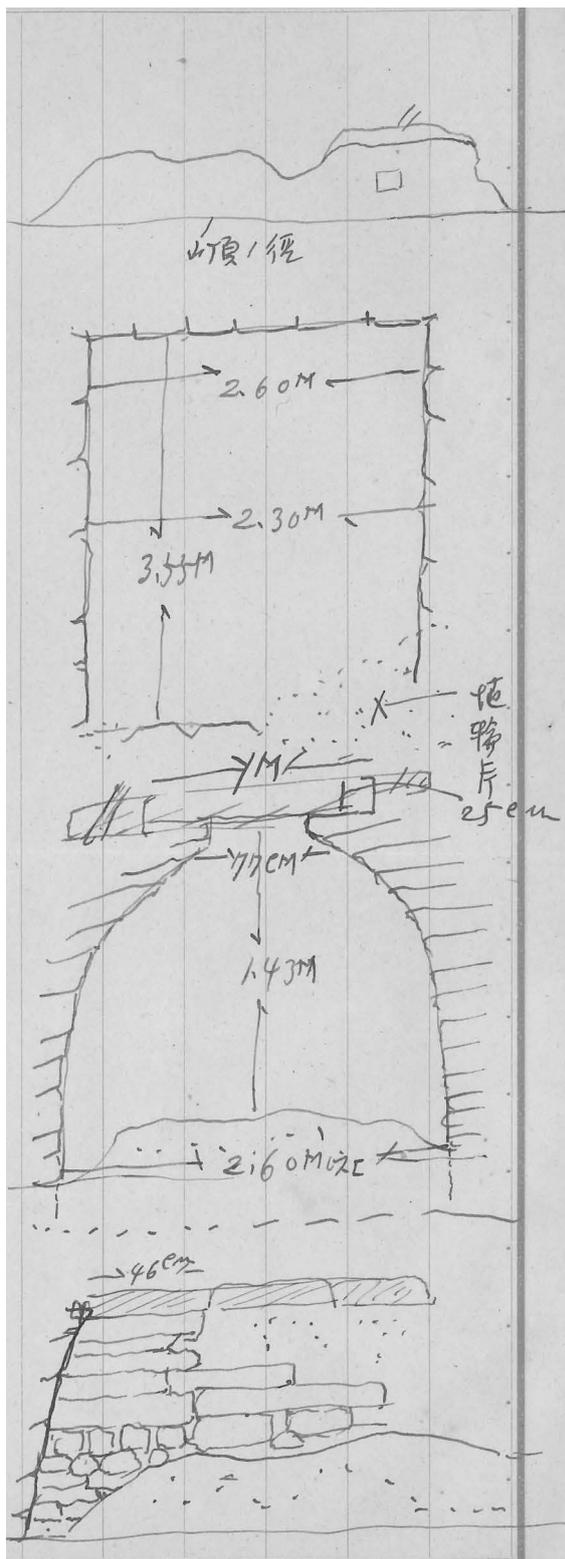
(二) 十二号墳《*現花山6号墳》

適当な距離とりがたきため写真は又の機会に譲ります。この程四六号より□遠望馬鞍の様な塚です 12号、13号《*現花山4号墳?》は共に類似の形をもちます。

前方形というのでなく瓢墳と見るのが適當でせうか。この墳北面に平坦部を持ちます。この形石槨は千塚中唯一例で石累墳の前に来る形ではありますまいか。床底土砂のためこの寸法よりはやゝ高くなると思います。

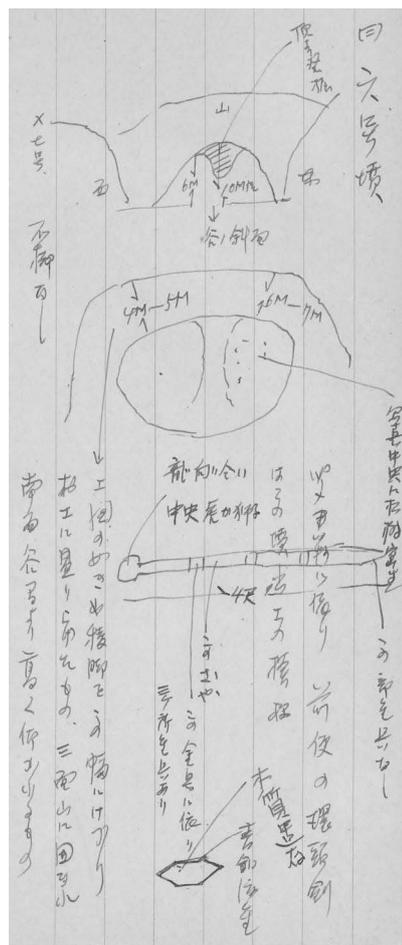
奥壁下より三〇糎高き位置の実測です。石□素材下部に小石 上部に大・・・とせねばこの形は保たないでせう。一種不気味な感を抱きます。埴輪のあつたと見え 破片あり。下床敷石は海浜白石混□《*用?》。

碁書に依れば 径六寸の鏡一面 土を払はずにとと大阪商人の希望に依り売却 玉六十個 土器十数個 とあります。



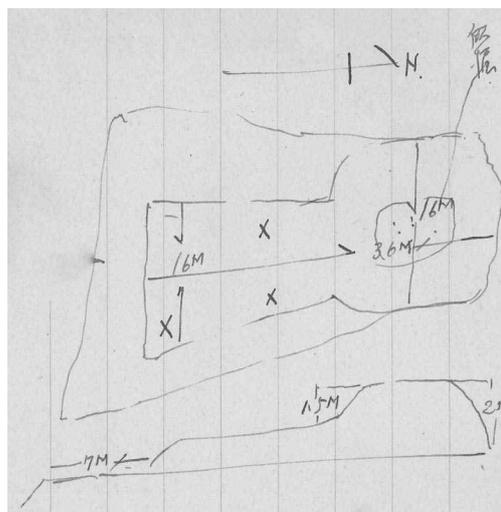
(三) 六号墳《*現花山9号墳》

字書抄に依り前便の環頭釦はこの古墳出土の模様。七号墳写真の手前の方に低く黒くなっているのは周湟凹部。



(四) 一号墳《*現花山20号墳》

花山稜頂西端丘利用 一見円塚の様ですが 後円部に□□《*崩落?》し 土流れのひどい形にて前方形をなす。



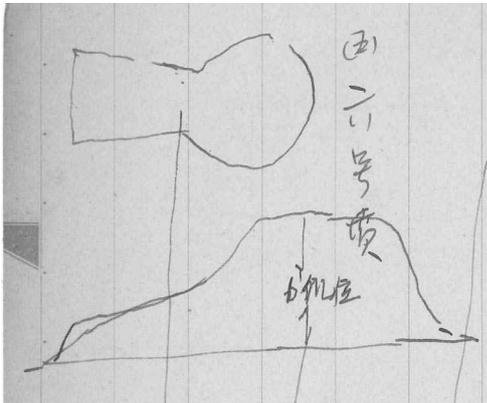
×印埴輪片

この位置よりは和歌山市 全部 鳴神貝塚を脚下

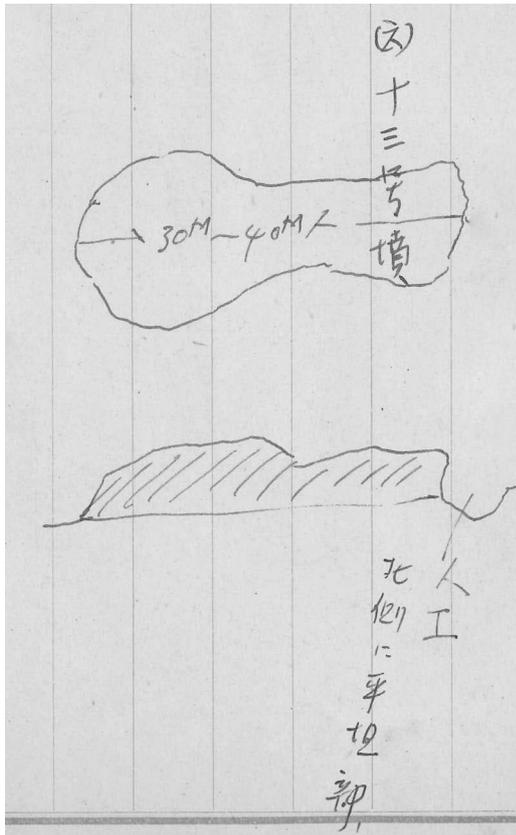
に瞰 西方斜面にも□《*尚?》二墳位ある?

(五) 六号墳《*古墳名誤記か》

後円部径二十メートル、東西主軸 前方部は地形利用の為低く□《*尚?》この形を保とうとする



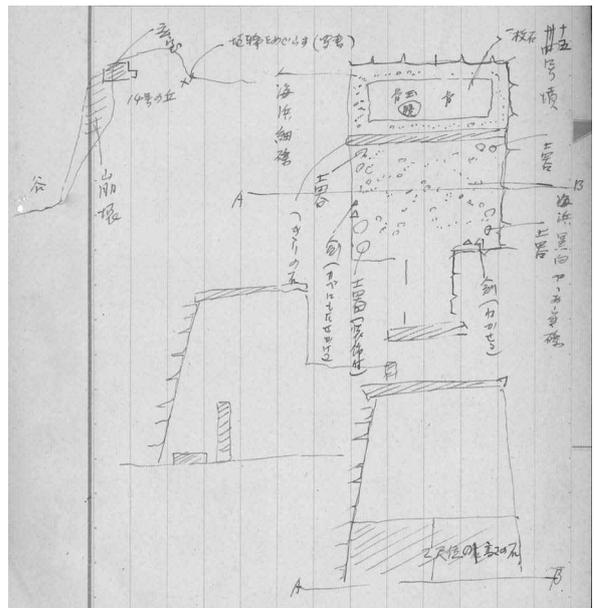
(六) 十三号墳《*現花山4号墳?》



十五号墳《*現花山2号墳》

○分布図の配置に依ると北方平地が注意に上ります。現況写真の通りですが、土器出土がありません。《*崩落時ということか?》川の影響かと思えます。

第三伸



古墳調査書書類□《*ホ?》整理の《*度?》、

本日出現□□《*致し》今更記憶不確実を反省□□《*仕候?》この分には三、四十年前のこと発掘者に訂し候も餘程印象深きでなき限り混同不確は免れ難きは當然尔て 且ツ老齡の記憶は輪郭を参考とするまでのこと、存じ上□□《*候者?》書は□□《*當時?》のメモにしたがい書く限りに於て確実 前□《*便?》放言所々抄録にしたがい訂正存じます

書抄 昭和二七.一.二日

古式古墳 粘土槨《*内容から当資料11号墳(現花山8号墳のこととみられる)》 ○○○○氏書(□《*藤?》本氏と書したる第一誤謬)本日午後降雪実調成り難し依而○○氏にづく この墳発掘者である氏は語る「普通の円墳であるけれども発掘にあつて一向に石槨なく南面より掘り初めて羨道の如き扉あらはれ それをとり除くと土の硬軟に依りて粘土槨であること知る。充満する土を除くにつれ青石片 槨中に折り重つてをり最初勾玉五個を発見 ついで径八寸の鏡の上に 径六寸の鏡が重ねてありその一つは馬車にのりたるアチラ人二人乗りの文《*様》をめぐらし最高価にて大阪商人に売却。前後是に比するなし。

更に八寸六寸 これは重ねずに発見す更に青瑯玕二個を発見。土色異なるに依りその線に沿つて掘りす、み北辺にて石製模造刀子 長さ七センチ許り幅二・五センチ程のもの十五個を発見す。この模造刀

子のあつたところで再び石を建て 南北両端を石で
囲んだ形であつた¹を知る。この墳に於て私は氏の
注意に感謝したいと思う即ち二個重ねた鏡（三個を
訂正す第二誤）その布片に細かい布痕をとゞめてい
たという¹は尊重したい。石製刀子は灰色のロー石
の如きものであつた 記憶する刀子の図

（この・・・の様なもの
と 記し皮の袋へ入れた様な格
好になつていた）



同墳発見の勾玉一部は氏
が所蔵する 勿論これは今
日まで我々の¹知しなかつたところである。 勾玉
実測左の通り計勾玉六個あり 管玉六個あり。

	長さ (cm)	厚さ (cm)
勾玉	3.1	1
	1.5	1
	1.8	1
	1.8	1
	3	1.5
管玉	3	0.4
	1	0.4
	3.1	0.4

氏は尚時計鎖に 勾玉二個 青瑯のもの灰白色のもの各一個也。これも同様 粘土槨中のもの云、この西隣に同様粘土墳一基発掘す。氏所持の玉はこの墳出土と混同し居る由也。且ツ良質のものは當時売却せり。沼氏両家所持のものゝ中にこの墳出土一部ある由也。氏は以上の勾玉を一つゞりとなし小玉を混えているが これは前山出土のものであることを記し置く。

私の¹書抄文面は以上の通りです。先般鏡三面重ね合せ と申したのは誤りで 都合四面となります。□《*尚?》箱に入れた形跡とは確かに¹いた様に思いますが書いていないから姑らく□《*措?》きます。尚又

西隣一基も粘土槨でありこの墳からは 径六寸の黒□《*小?水?》銀鏡一面発掘出土の際破損しこれは ¹いで、大阪へ売却（以上 ¹録のまゝ）

3 おわりに

以上のように、当資料には花山地区についてこれ

まで不明確であった重要な事柄が多く記載されている。最後に、主要な成果についてまとめておきたい。なお、古墳名は現在の名称で記載している。

(1) 花山2号墳

花山2号墳は前方後円墳で、かつて埴輪が採集されたことが知られるが、墳丘が大きく削平を受けており、これまで埋葬施設については不明確であった(関西大学文学部考古学研究室編1967)。しかし、当資料によると、埋葬施設が横穴式石室である可能性が高いことが判明した。聞き取りから、石室内部の状況も詳細に判明しており、そこから石室の構造もうかがい知ることができる。石室は、玄室中央に羨道がつくタイプで、羨門は閉塞されている。また、側壁は持ち送られ、上部には大型の石が設置されており、天井石まで残存していたようである。玄室床内には小礫が敷き詰められ、玄室中央よりやや奥側に仕切り石が南北方向に置かれている。仕切り石の奥壁側には板石上に北に頭部を向けた人骨、鏡1面が認められ、さらに仕切り石より羨道側の四隅には土器が、北東・南東隅にはそれに加え剣が2本が配置されている。当資料により、花山2号墳とみられる埋葬施設や副葬品の状況が判明したことは極めて重要で、当古墳がこのとおりでであるとすれば、石室構造から築造時期は6世紀中頃以降であろう。

(2) 花山6号墳

花山6号墳は6世紀初頭に築造されたと考えられる前方後円墳で、首長墓の1つである。埋葬施設は岩橋型横穴式石室として知られ、玉類、鉄鏃、須恵器、陶質土器など豊富な副葬品の出土で知られる(関西大学文学部考古学研究室編1967)。当資料では、それに加え、径6寸(約20cm)の鏡が一面出土していたことが判明した。文様などは定かではないが、鏡の出土はこれまで知られておらず、極めて重要な情報である。

(3) 花山8号墳

花山8号墳は、4世紀末の築造と考えられる岩橋千塚古墳群最古の前方後円墳として知られる。埋葬施設は後円部と前方部に粘土槨があったと推定されている。後円部の埋葬施設は、盗掘による攪乱を受けており、粘土塊が散乱する状態で、副葬品は不明であるが、過去の盗掘時に鏡が出土したとの伝

承がある（和歌山県立紀伊風土記の丘 2016）。一方、前方部の埋葬施設は粘土床が確認され、鉄剣や玉類が出土している（関西大学文学部考古学研究室編 1967）。当資料によると、このうち後円部の埋葬施設や副葬品について詳細に判明する。後円部の埋葬施設は南北両端に石をたてた粘土槨で、底に結晶片岩が敷かれていた。ここから、勾玉5個、青瑯玕（玉類か）2個、滑石製刀子15個、径8寸（約25cm）の鏡が2面、径6寸（約20cm）の鏡が2面出土したとされている。出土状況についても詳細に知ることができ、鏡は径8寸の鏡1面の上に径6寸の鏡1面が重ね置かれ、さらに径6寸、8寸の鏡各1面が重ねず配置されていたとある。鏡に布が残存しており、布に包まれていたと考えたことが記載されている。鏡のうち、馬車にのったアチラ人（仙人のことか）2人の文様をもつとある径6寸の鏡1面は、神獸鏡であろう。滑石製刀子は粘土槨北辺で確認されている。なお、この粘土槨の西隣にはもう1つ粘土槨墳があったとされるが、西隣に別の古墳は確認できない。方位は異なるが、前方部の埋葬施設をさす可能性がある。この粘土槨からは、勾玉2個、青瑯玕や灰褐色（玉類か）2個が出土した可能性があるほか、径6寸（約20cm）の黒水？小？銀鏡が1面出土したとある。

（4）花山9号墳

花山9号墳は、径30mにも及ぶ大型円墳で、6世紀末から7世紀前葉に築造されたものと考えられている。埋葬施設は横穴式石室で、出土遺物は鉄刀片2個、須恵器杯1個が出土している（関西大学文学部考古学研究室編 1967）。土取りの際に記録されたため、詳細については不明確であるが、当資料では、石室内部の情報や出土遺物について、より詳細に知ることができる。当資料によると、横穴式石室の玄室2/3あたりに板石による仕切り石が配置され、その奥壁側に接して長方形板石を敷いてその上に人骨が載せてられていたようである。また、副葬品は、玄室の羨道側2隅に多数の土器が配置され、羨道右壁に沿って環頭大刀1振が切先を西に向け配置されていたとされる^{註5}。また、釧についても、この古墳から出土したとされる。

以上のように、当資料により花山地区ではこれま

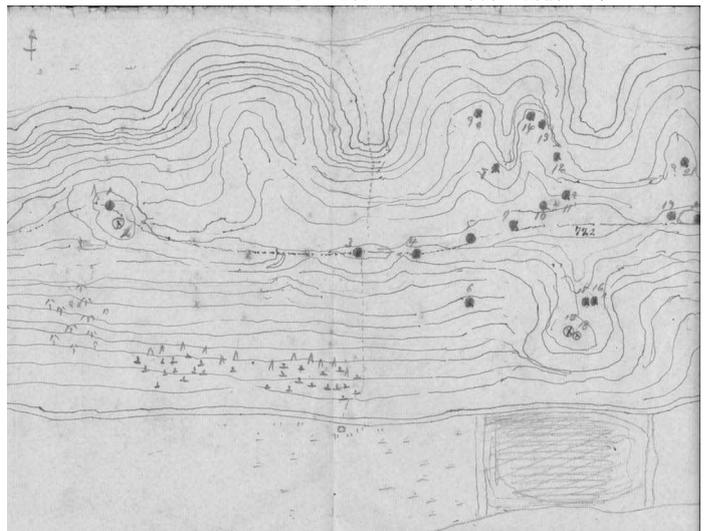
で知られていなかった極めて重要な事実が確認できた。今後、記載内容と古墳の埋葬施設や出土地不明遺物と照合を行うことなどによって、花山地区の古墳の実態を明らかにしていきたい。

【参考文献】

和歌山県教育委員会 2007 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
 関西大学文学部考古学研究室 編 1967 『岩橋千塚』
 和歌山県立紀伊風土記の丘 2016 『岩橋千塚古墳とその時代—紀ノ川流域の古墳文化—』

【註】

- 1 宮田氏の経歴などについては、中村貞史氏や前田敬彦氏、富加見泰彦氏からご教示いただいた。
- 2 頁数は資料上部に鉛筆書きで記載されていた。
- 3 旧字やくずし字などで特に難しいものについて、現代の日本語との対応を示す。「ㇿ」は聞、「ㇿ」は事、「后」は後、「>」「>」はひらがなを繰り返すときに用いる記号「々」、「當」は「当」に対応する。
- 4 頁間に挟まっていた地図は25頁掲載図と古墳の番号や位置が異なっているものがあるため、メモ書きとともに以下に掲載する。



メモ書き：

- 花山古墳
 ①合計29 再調査 決□《*実?》
 （未発掘、既発掘）
 ②古墳相互の距離測定
 ✓③古墳個々について実測
 ✓封土の高さ 直径 現状図示
 寸法
 ④1々古墳についての説明
 ⑤盗掘 年月日確定 資料聴~~ず~~
 （状況 遺物□□）
 ⑥現在資料集成
 ⑦特別資料についての聴~~ず~~

準備

- ①巻尺、□ンヤリ
 5 環頭大刀の形状や装飾をみると、熱田神宮に所蔵されている伝和歌山城出土品と類似点が認められる。今後、実見により細部について詳細に観察し、検討する予定である。

沖ノ島見学記

—踏査を終えての覚書—

河内 一浩

1. はじめに

和歌山市加太の沖合に浮かぶ友ヶ島は、地ノ島と沖ノ島、神島、虎氏島の4島を総称する。このうち沖ノ島は加太港から出航する定期便で渡島が可能である。

筆者はかねてから「加太・友ヶ島遺跡」として『和歌山県史考古資料』に報告がある友ヶ島地区の見学希望をしていた(和歌山県史編さん委員会1983)。その目的は、沖ノ島の4か所の島内遺跡の現状確認であった(注1)。

そこで有志数名と共に現地入りし、今回は一谷色遺跡、柏の浜遺跡の両遺跡の踏査を実施した(注2)。本稿は見学メモを覚書として報告する。

2. 沖ノ島の遺跡

沖ノ島の古代遺跡は現在のところ5か所で確認されている(注1)。遺跡の確認や調査は、昭和34年10月27日に田中敬忠氏が実施され、報告も出ている(田中1962)。以降、昭和36年5月20日に宮田啓二氏が実施している(宮田1962)。昭和37年に有孔円盤の紹介がある(古賀1962)。昭和42年6月には柏の浜遺跡、一谷色遺跡で伊喜利良信氏が遺物表採をされている(和歌山市教育委員会2012)。それらの遺物は、昭和43年2月3・4の両日に同志社大学考古学研究室が実測、そして現地踏査を実施している(同志社大学考古学研究室1967、和歌山市教育委員会1968)。伊喜利氏の採集遺物については、和歌山市教育委員会が遺物整理を実施し、報告書も刊行されている(和歌山市教育委員会2012)。昭和43年7月17～19日に和歌山大学考古学研究会で踏査している(今井1969)。

平成になり、平成6年8月10日には和歌山市教育委員会により垂水遺跡の試掘調査を実施している(前田1996)。平成7年4月には野奈浦遺跡で遺物が表採されている(前田他1995)。

3. 今回の沖ノ島の踏査

令和3年2月13日に実施することができた。以下踏査を実施した2遺跡の見学について報告する。

一谷色遺跡

亀ヶ崎の南に位置し、磯浜に浸蝕崖面が高さ1.5m、南北15m前後に遺存する。現地表面から5cm下まで表土で、その下に近世陶器を含む層を一部で確認した。現地表面から60cmに人頭大の焼けた砂岩質の石が水平に広がり、石の上に製塩土器の破片が存在する。水平に広がる石の下にはさらに製塩土器が包蔵された層が堆積し、その下に上記とは別の石が広がる。現状から石敷炉の一部と理解している。その状態から遺構が2時期に渡る可能性も指摘しておく。なお、断面や崖面下の崩壊土に須恵器は確認できなかった。



写真1 一谷色遺跡の現状

柏の浜遺跡

一谷色遺跡の南約100mに位置し、島の東側海岸の小海浜に位置する。磯浜に高さ2mぐらいの浸食崖面に南北10m前後の包含層を確認できる。表土以下に2層の堆積層が確認できたが表面の乾燥と風化のため土色を確認することはできなかった。断面観察で部分的に石の存在が認められる。上層のみ須恵器の破片が確認できる。下層は製塩土器と共に炭が混じる。



写真 2 柏の浜遺跡の現状

4. まとめにかえて

今回の見学は紀伊の製塩遺跡を考えるうえで重要な遺跡の現状確認である。踏査の結果、確認した2遺跡については、消滅した遺跡（遺構）では無かった。今後は、自然環境の中に埋もれていく文化財をどう後世に残すかが課題である（注3）。

最後になりましたが、踏査に際し山岡邦章さんに協力を得、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館の萩野谷正宏さん、瀬谷今日子さん、金澤舞さんが参加された。また、一般の方数名も製塩遺跡の状況を見ていただいた。記して感謝の意を表します。

【注】

1. 令和2年現在、和歌山県教育委員会が公開する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』によれば、一谷色遺跡、柏の浜遺跡、深蛇池遺跡、垂水遺跡、野奈浦遺跡が分布している。
2. 踏査方法は現状写真撮影、略測である。浸蝕崖面の断面精査、遺物の採集も遺構の破壊につながるため実施していない。したがって、土色を認識することができなかつた。また散布遺物も現状を保持し、一切の遺物は持ち帰ってないので土器の時代を確定できなかつた。
3. 過去の記録等の収集と現地の精査が必要と考えている。昭和43年の和歌山大学考古学研究会が踏査の際、沖ノ島北側の海岸2ヶ所で遺物の散布が確認されている（今井1969）。

【参考文献】

- 今井好和 1969 「友ヶ島海岸遺跡分布調査」『埴輪』1
- 古賀直樹 1962 「紀州友ヶ島遺跡出土の滑石製有孔円盤土製品」『熊野路考古』2
- 田中敬忠 1962 「a. 古代遺跡」『和歌山市文化財現地調査記録（第2集）』（社会教育資料16）和歌山市教育委員会（『友ヶ島特集』再録、社会教育資料23）
- 同志社大学考古学研究室 1967 『和歌山市北部海岸遺跡調査概報 - 大川遺跡・加太・西脇』（和歌山市教育）
- 同志社大学文学部文化学科 1968 『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』（同志社大学考古学調査2）
- 前田敬彦 1996 「12. 垂水遺跡確認調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査概報3』
- 前田敬彦・木建正宏 1995 「和歌山市友ヶ島・野奈浦遺跡採集の遺物について」『紀北考古学談話会会報』No.10（紀北考古学談話会）
- 宮田啓二 1962 「友ヶ島弥生遺跡」『和歌山市文化財現地調査記録』第2集（和歌山市教育委員会）（『友ヶ島特集』再録、社会教育資料23）
- 和歌山県教育委員会 2020 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500700/maizou/maizou.html>
- 和歌山県史編さん委員会 1983 「加太・友ヶ島遺跡」『和歌山県史 考古資料』
- 和歌山市教育委員会 1968 『加太・木本地区における古代漁業遺跡調査報告』（社会教育資料34）
- 和歌山市教育委員会 2012 『和歌山市加太地域の考古資料 - 伊喜利良信氏採集資料 - 』

東紀州踏査記（抄）

—踏査を終えての覚書—

河内 一浩

1. はじめに

本稿は、①令和2年11月14～15日と②令和3年1月6日～8日の2度にわたって実施した東紀州と伊勢志摩の踏査記録である。踏査は、収蔵施設での古墳時代の遺物を探すことと現地を訪ねて古墳や古代津（湊）の立地を確認することを目的とした。以下、今回踏査した各地の考古資料を記述し覚書としたい（注1）。

2. ①尾鷲～紀伊長島の見学先

A. 三重県立古道センター

同センターでは、三重県文化財センターが発掘調査を実施した道瀬遺跡の第2次調査で出土した須恵器の甕や蓋杯と土師器の杯を展示していた。特に展示資料の土師器杯は“須恵器模倣”土器で、駿河地域を経由もしくは間接的に搬入された可能性が考えられた。報告書では潟湖跡と思われる低湿地部があることに注目されていることから当遺跡は潟湖湊の可能性も視野に入れることにした（三重県埋蔵文化財センター2000）。

B. 紀伊長島郷土資料館

資料館のご配慮でガラスケースに展示されていた須恵器と収蔵庫に収められていた土器を見学できた。横瀬古墳出土の須恵器の器台を観察したほか、おもわき古墳出土の蓋杯の熟覧を実施した（紀北町教育委員会2012）。ここでは、紀北町における6世紀代の古墳の存在を確認できた。そのほか、道瀬遺跡や城の浜遺跡表採の須恵器を熟覧した。



写真1 おもわき古墳出土土器

C. 海山町郷土資料館

紀北町の海山地区にある資料館で、考古資料の展示はガラスケース2つであった。古墳時代に関する遺物には須恵器の坏身1点があった。口径12.2cm、器高4.2cmの法量をもつ。稜の存在や口縁端部の形状から6世紀前半の製作と考えられる。残念なことに出土地は不明である。また、大白出で採集された遺物のなかに6世紀末から7世紀の坏杯と坏蓋の破片が存在する。

海山地区には今のところ古墳の存在は知られていない。また、隣接する尾鷲市も古墳が確認されていない。市史では「式内社が分布していないことを傍証として、古墳を形成するほどの経済的基盤をもった集団が存在しなかった可能性」が述べられている（尾鷲市役所1969）。

D. 熊野市歴史民俗資料館

資料館には出土地不明の須恵器の坏身が展示されている。口径13.6cm、器高4.4cmの法量を呈する。稜はなく、口縁端部には面を持たない。天井部のヘラ削りの範囲も限定されていることから6世紀後半の製作と考えられる。

資料館の見学で観察した土器は以上であるが、遺跡、古墳見学は、尾鷲市曾根の飛鳥神社、紀伊長島の横城古墳跡とおもわき古墳跡、豊浦神社である。いずれも海岸沿いに立地する。

3. ②鳥羽～紀宝の古墳

E. 大紀町役場錦支所

かつて三重県北牟婁郡紀伊長島町にある錦小学校には3面の鏡が所蔵されていたが、今は支所2階の展示室にある。今回熟覧したのは仿製三角縁神獸鏡である。面径が23.6cmで三神と三獣が確認できる。この鏡が小学校に所蔵される経過は詳らかでない。1869年頃に字向井と称する岬より鏡と剣を発掘したという記録がある（注2）。なお、三宅米吉氏の報告によれば「向井を称する岬より明治11

年(1878)村民土を採る際・・・」とある(三宅1897)。

この三角縁神獣鏡の存在は、紀伊半島南部における畿内との交流を考える上で重要である。

ケースの一角には古式土師器の破片が20点余りあった。庄内期から布留式期の甕や高坏、小型丸底土器である。多くは名子遺跡の資料であるが出土地不明の資料も若干存在する。いずれにせよ錦地区の3世紀～4世紀の近畿中央部との交流をうかがわせる資料である。

支所に展示されている須恵器は出土地不明が多くなか船付古墳出土の資料があった。6世紀の坏身と有蓋高坏、そして壺である。同古墳からは提瓶がかつて出土しているという。支所には6世紀の提瓶が展示されていたが出土地不明の資料であった。

支所にて注視した資料として須恵器の器台と二重臚があげられる。

見学を終えてから三角縁神獣鏡が出土した古墳跡を訪ねた。鈴木敏雄氏が『錦邑考古誌考』には錦村の通称「イカズクラ」の尾根上に古墳が2基描かれている(森浩一1991)。その図をもとに現地で撮影したのが写真2で、矢印が古墳の跡地を示す。一方で古墳の詳細が不明なことから、穂積裕昌氏は「航海に伴う沖ノ島の祭遺跡などの可能性もないわけでない。」と考えられている(穂積2000)。



写真2 向井古墳の立地

F. 東宮資料保存館

資料館では展示されている畿内系の弥生中期の土器に注目した(田村陽一2004)。また、畿内系の弥生後期の土器が写真に残る。古墳時代の遺物は、出土地不明の須恵器が2点あった。1点は、坏身で

口径9.7cm、かえり径12.0cm。器高3.4cmを計測し完形品である。2点目は臚で、口縁部欠損するが胴部は完存する。最大胴径9.3cm、残存高6.7cmの法量をもつ。以上2点の須恵器は形態から6世紀後半から7世紀代の資料である。

G. 愛洲の館

この資料館では発掘で出土した宮山古墳の須恵器を中心に見学した。調査を実施した関西大学の『紀伊半島の文化史的研究』でも指摘している須恵器の多様性を確認するとともに非陶邑産の製品を確認した(関西大学文学部考古学研究室1992)。

また、展示ケースにある袖引古墳の6世紀中ごろの須恵器を熟覧した。南勢町では最古に位置づけられる資料であった。愛洲の館には『町史』等に記載されている恋路古墳や村島古墳の遺物が保管所蔵されていることを知った(関西大学文学部考古学研究室1992)。今回は、須恵器の蓋坏を中心に熟覧を実施した。村島古墳のコンテナには鉄製武器も収められていたがすでに『町史』に見える形状ではなかった(南勢町誌編纂委員会2004)。古墳は小島に築かれ、須恵器から築造は袖引古墳よりやや後出と位置づけできる。

資料館の見学まえに磯浦古墳群のうち、現存する宮山古墳、日和山古墳を訪ねた。また浅間山古墳については時間の関係で今回見送った。岬の先端に立地する前方後円墳であるが実見は次の機会とする(注3)。

宮山古墳の横穴式石室は、調査後は埋め戻されて

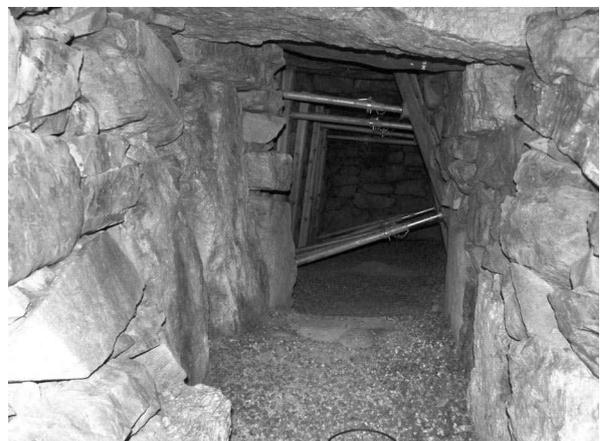


写真3 日和山古墳の横穴式石室現状

保存されていた。墳丘の遺存する部分の保存状況は良好で、尾根に残る掘割が観察することができた。

日上山古墳もまた横穴式石室を持つ古墳であるが、開口する石室石材がせり出した状況であった。写真3のように応急処置した現状を観察することができた。

H. 志摩市歴史民俗資料館

資料館での資料調査の前に“志摩古墳群”の立地とおじよか古墳(写真4)、上村古墳、塚穴古墳(写真5)の埋葬施設を見学した。いずれも横穴式石室で、築造時期と共に石室構造の系譜を興味深く観察することができた。



写真4 おじよか古墳の横穴式石室

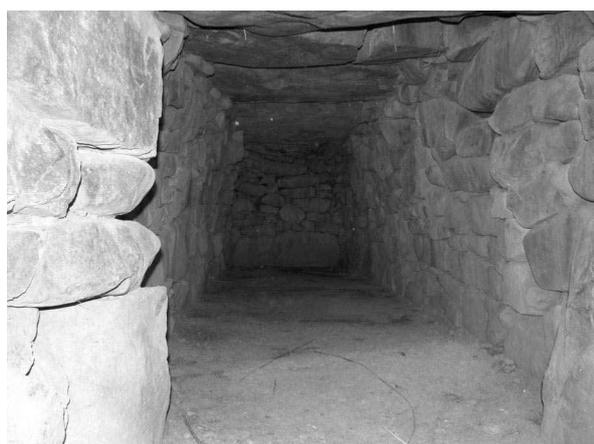


写真5 塚穴古墳の横穴式石室

古墳見学後は、志摩市歴史民俗資料館にておじよか古墳の埴輪と埴製枕の熟覧を行った。埴輪は『紀伊半島の文化史的研究』に掲載された資料の内、個人所蔵の資料1点を除いた6点が見学対象である(

関西大学文学部考古学研究室 1992)。円筒形埴輪のほか朝顔形埴輪の破片が存在する。B種ヨコハケを施す5世紀中葉の資料であった。筆者は30数年前に三重県教育委員会でおじよか古墳出土の埴輪を見学している(志摩市教育委員会 2018)。底部を欠損するが3条の突帯と口縁部が残存する円筒形埴輪であった。併せて最近調査が実施された泊古墳の円筒形埴輪も実見できた。

I. 鳥羽市立海の博物館

鳥羽市浦村町にある博物館の敷地内に大吉北(おぎつきた)古墳が存在する。入り江を望む丘陵先端に築かれた直径15mの円墳である。埋葬施設は結晶片岩の板石が存在するので竪穴系横口式石室の可能性も考えられている(本浦遺跡群調査委員会 1990)。調査後は写真6のような状況で復元され保存されている。

海の博物館では、大吉北古墳で発掘された埴輪を見学した。コンテナ3箱に収納された破片を熟覧し、埴輪の特徴をメモした。

観察した埴輪は、Bb種ヨコハケが外面調整として施される円形埴輪である。底部にも2次調整のヨコハケが施されるが、下端は省略していた。黒斑が確認できなかったので5世紀中葉で、先に見たおじよか古墳に先行する円筒形埴輪と評価できる。破片からは段構成を復元するには至らなかったが、口縁部高が11cm、突帯間隔、底部高いずれも11cm以上の規格であることが分かった。また、朝顔形埴輪の口縁部と肩部の破片も観察できた。しかしながら胴部、底部については円筒形埴輪との違いを明確にすることはできなかった。



写真6 博物館敷地内の大吉北古墳の現状

形象埴輪については家形埴輪があり、平成30年に開催された“三重のはにわ大集合！”で公開されている(鈴鹿考古博物館2018)。

観察した破片から今回明確にできたことは、切妻屋根に開口部を多く持つ身舎といった全体像であった。墳丘には家形埴輪を中心とした円筒形や朝顔形の埴輪群で構成され、須恵器の土器祭祀が行われていたことが推察される。

4. まとめにかえて

踏査を通じて東紀州から志摩にかけて分布する古墳や出土品をみてきた。

古墳の立地は湾内や外海を臨む丘陵先端に築かれている例が多いことを確認した。出土品については古墳が無いところでも古墳時代の須恵器等の存在が確認できた。出土地が不明な例も多くあったが、その地域での古墳時代の様相を明らかにしえたことは重要である。

なかでも東紀州から三角縁神獣鏡が出土していることが特筆できる。この鏡は紀ノ川下流域から伊勢の間をつなぐ材料としてその存在は大きい。鏡が出土した地域の古式土師器の存在からもあらためて紀伊半島の南辺を含めた古墳時代前期の交流を再考することが必要だと感じた。紀伊最南端の前期前方後円墳である下里古墳の存在と東伊勢や志摩の繋がりと、下里古墳築造後の前方後円墳である浅間山古墳や泊古墳、鳶ヶ浜古墳の存在も併せて検討課題である。

今回得た資料が地域史研究をするための材料となり、今後は現地を訪れて感じた事項を整理し、次のステップに活かすプランを実施し始めたところである。

最後になりましたが、本紀要の掲載にあたり和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員の金澤 舞さんにご配慮いただいた。また踏査に際し和歌山県立紀伊風土記の丘資料館の萩野谷正宏さん、蘇理剛志さんには大変お世話になった。現地見学においては各施設の皆さんに協力を得たこと、また志摩市教育委員会の三好元樹さんには未報告の埴輪観察の機会をいただいたことをここに記して感謝の意を表します。

【注】

1. 野帳の記録は①がNo.532からNo.534まで、②がNo.542からNo.544による。
2. 東京国立博物館に字向井出土の管玉、勾玉、変形文鏡残欠が所蔵されている。向井古墳については詳細が不明である。
3. 記録等の収集と現地の踏査が必要と考えている。

【参考文献】

- 尾鷲市役所 1969『尾鷲市史』上
関西大学文学部考古学研究室 1992『紀伊半島の文化史的研究』考古学編
紀北町教育委員会 2012『紀勢町の文化財』
志摩市教育委員会 2018『おじょか古墳と5世紀の倭』
穂積裕昌 2000「紀伊半島東岸部の古代港と海上交通」『Mie history』vol.11(三重歴史文化研究会)
鈴鹿市考古博物館 2018『三重のはにわ大集合!』
田村陽一 2004「度会郡南島町出土の先史時代遺物～アフラ遺跡出土資料を中心に～」『三重県史研究』第19号
本浦遺跡群調査委員会 1990『白浜遺跡発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター 2000『道瀬遺跡(第2次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財調査報告207)
南勢町誌編纂委員会 2004『南勢町誌』上巻
三宅米吉 1897「錦浦ノ古墳」『考古学会雑誌』第2号
森 浩一 1991「熊野と「イワレ彦東征の物語」」『海と列島文化』8(小学館)

子どもが描く未来の博物館と岩橋千塚

—西和佐小学校「紀伊風土記の丘 夢計画」の取り組み—

萩野谷正宏・竹内宥介

はじめに

和歌山県立紀伊風土記の丘と和歌山市立西和佐小学校は、令和元（2019）年度に、児童が紀伊風土記の丘の魅力や特別史跡岩橋千塚古墳群の価値について知り、新しい博物館像について思い描き作品にする学習活動を「紀伊風土記の丘夢計画」として実施した。これは、紀伊風土記の丘が実施している新博物館の計画づくりに関連したワークショップを、西和佐小学校の社会科学習を兼ねて、博学連携により実施したものである。

さらにこれに続いて、令和2（2020）年度には新たな教育普及プログラム開発に関連したワークショップ「紀伊風土記の丘 夢イベント計画」を実施し、児童が自らイベントを発案・計画して、試験的に実践した。本稿はこれら一連の事業のうち、前者の取り組みを報告するものである。

執筆は、紀伊風土記の丘主査学芸員萩野谷正宏と西和佐小学校教諭竹内宥介が分担しておこない、3・5を萩野谷が、4を竹内が執筆し、1・2・6を両者が協議して執筆した。

1. 実施に至る経緯

和歌山県立紀伊風土記の丘では、現在、考古資料及び民俗資料の保存と活用のための新しい博物館を建設するための計画づくりを進めており、平成30（2018）年度に基本構想を定め、さらに令和元年度から新博物館の基本計画を策定するための作業を行っている。目指すものは、開館後半世紀を迎えようとしている紀伊風土記の丘の長年にわたる活動を継承しながら、現資料館で収蔵する多くの文化財をより適切な環境で保存するとともに、質の高い各種博物館活動を継続するための施設である。また、これまでと同様に、園内にある特別史跡岩橋千塚古墳群や指定文化財の移築民家、豊富な自然などの貴重な文化資源をつなげる役割を担う。

基本計画においては、新しい館のコンセプトやそ

れに基づく事業活動や展示、施設、管理運営などの方針を定める必要があるが、こうした計画づくりの過程においては、さまざまな形で市民や地域住民から意見をいただく機会を設け、計画に反映させていく必要があることは言うまでもない。一方で、ウォーキングやイベントなどで日常的に利用する方々や、遊びや学校遠足などの様々な目的で訪れる子どもたちが、紀伊風土記の丘に対して日頃からどのようなイメージを抱き、利用し、そして新たにどのような施設が必要と考えるかを知ることは、この計画づくりにとって重要な情報であるばかりでなく、現在の紀伊風土記の丘の諸活動にとっても極めて有益であると考えられる。

一方、紀伊風土記の丘を校区にもつ和歌山市立西和佐小学校は、ここを校外学習の場として長年にわたり利用しており、児童たちも日常的に遊びや学びの場として利用してきた。そこで、令和元年度第4学年社会科学習の授業において、紀伊風土記の丘や岩橋千塚古墳群を題材に取り上げて、文化財の魅力、ひいては紀伊風土記の丘や岩橋千塚古墳群の魅力に児童が気づくことにより、地域への誇りをもつことへつながるような学習活動を行うことを検討した。

以上から、両者の連携により、児童たちが地域の宝である紀伊風土記の丘や古墳群、そしてこれらに関わってきた人々について深く知ったうえで、新しい博物館や未来の紀伊風土記の丘にとって、どのような施設が必要であるかを児童一人ひとりが考え、作品にする学習活動「紀伊風土記の丘 夢計画」（以下「夢計画」と呼ぶ）を、令和元年度に開催することとした。

なお、当学習活動は、西和佐小学校と紀伊風土記の丘の共催で実施した。

2. 「紀伊風土記の丘 夢計画」の概要

「夢計画」の実施スケジュールは、次のとおりである。

まず、事前の数回の打ち合わせを経て、第4学年社会科学習の時間に岩橋千塚を守る会(西本健代表)の会員及び紀伊風土記の丘職員が出講し授業を実施することとした。

令和2年2月18日には岩橋千塚古墳群の保存運動に携わってきた岩橋千塚を守る会会員による授業を、2月20日・21日に紀伊風土記の丘学芸員による出前授業(萩野谷、迫間素浩専門員)及び現地学習(対応者:萩野谷、迫間、佐々木宏治学芸課長、武部典和長期社会体験研修教諭)を実施し、その後2月下旬に西和佐小学校担当教諭(竹内)の指導により児童一人ひとりの「紀伊風土記の丘 夢計画」として作品を完成させた。作品は、画用紙に計画のイメージ図を描き、これにタイトルと解説文を添えている。

さらに2月27日には、第4学年1学級で「夢計画」の作品からテーマを選択し、山頂にある「大日山35号墳へだれもが行くことができるようになるためにはどうすればよいか?」をテーマに議論を行った。

なお、すべての作品については紀伊風土記の丘資料館ロビーにおいて3月21日から4月7日までの期間で作品展を行い、報道関係者へ資料提供を行っている。

当学習活動の参加者は西和佐小学校第4学年2学級の児童55名であるが、残念ながら新型コロナウイルス感染症対策による休校措置の影響から完成した作品は1学級分27作品であった。

しかし当学習活動の経験は、次年度の同じ児童たちによる「夢イベント計画」づくりへも継承され2学級とも作品として結実している。これについては別稿にて述べることとしたい。

3. 学芸員の視点からの「夢計画」の意義

(1) 出前授業・現地学習の概要

「夢計画」は、まず児童が紀伊風土記の丘や岩橋千塚古墳群についての理解を深めることからはじめた。これまで児童が抱いていた紀伊風土記の丘のイ

メージと、「夢計画」の実施過程でそれがどのように変化していったかについては次章で竹内が詳述するが、本章では理解を深めることを目的とした出前授業・現地学習の概要と、それらの体験を通じて児童がまずどのような反応を示したかについて述べる。

紀伊風土記の丘職員による授業では、5・6限目の90分間で、「学芸員の仕事」「岩橋千塚古墳群のはなし」「紀伊風土記の丘について」の項目で授業をおこなった。さらに、紀伊風土記の丘では新たに博物館をつくる計画があること、そのため児童たちに「どのような施設がほしいか」「紀伊風土記の丘で新たにどのようなことがしたいか」を考え、様々なアイデアを出してほしいことを伝え、児童からの質問に答えた。また、考古資料を観察する時間を設けて、園内の大日山35号墳から出土した両面人物埴輪(重要文化財)レプリカ、岩橋千塚古墳群周辺出土の馬形埴輪頭部や須恵器蓋杯、岩出市船戸箱山古墳出土の勾玉や切子玉を説明し、職員の立ち会いのもと一部は触れることも可能とした。

翌日の現地学習では、紀伊風土記の丘に来園して、9:30～11:40に資料館と園内の古墳群を見学し、学芸員が同伴して解説した。園内の約3kmの行程を歩きながら、前山A58号墳や將軍塚古墳、大日山35号墳などを見学した。

(2) 児童の質問・感想

出前授業及び現地学習を通じて、児童からは次のような質問や感想があった。

① 出前授業における質問・感想

【学芸員の仕事について】

「何歳から学芸員に興味をもちましたか?」

「岩橋千塚を守る会の活動の後に(天王塚古墳の特別史跡)追加指定が実現したときの学芸員としての気持ちは?」

【岩橋千塚古墳群について】

「造り出しの有無は、どのような意味がありますか?」

「石棚にはどのような意味がありますか?」

「古墳の形の違いはどのような意味がありますか?」

「埴輪にはどのような意味があるの？」
「本に（古墳の埋葬者が）『紀氏といわれている』
と書いているが、なぜ「いわれている」という
表現をするのですか？」
【紀伊風土記でどのような活動をしたか、新しい博
物館でどのような施設をつくりたいか】
「図書館をつくりたい」
「足湯をつくりたい」
「火起こしで、バーベキューがしたい」など
【考古資料を実見して】
（ガラス製勾玉について）「すごい、勾玉だ」
（水晶製切子玉）「これはなんでできているのか
な」
（馬形埴輪頭部）「すごく重たいだろうな」「骨な
の？」「これって本物ですか」

②現地学習における質問・感想

【資料館展示中の埴輪などの考古資料について】
「これは全部本物ですか？すごい。」
「埴輪の灰色（石膏で復原している箇所）の部分
は何ですか？」
「翼を広げた鳥形埴輪の小さい穴は何か？」
「埴輪の接合・復元は、どのくらいの時間がかか
りましたか？」
「ガラス玉はどうしたらこんなに丸くつくること
ができるのですか？」
【「翼を広げた鳥形埴輪」のモデルは何かの質問に】
「鳩（複数名の回答あり）」、「山鳥」、「鶏」など
【発掘調査で出土した埴輪の破片にはたくさんの種類
があるとの説明に】
「なんで破片なのに区別がつくの？」
（色、胎土、形で見分けるとの答えに）
「それば顕微鏡でみるのですか？」
【展示中の鉄刀について】
「刃はついているの？」（考古資料の鉄刀が錆で
腐食し刃の有無がわかりにため）
【將軍塚古墳の石室を見学して】
「なぜ石室を高くつくる必要があるのですか？」
「石室の石をひとつ抜いたら崩れますか？」
「石を積むときは土も使いますか？」（土を盛り
つつ、縦長の石材を小口積みにして石積をして

いるとの説明に、驚いた様子）
「青石っていっぱいあるのですか。これは青石で
すか？これも青石ですか？」
「このような大きな扉石はどうやって動かす
の？」
「石室をつくるのに、どのくらい時間がかかりま
したか？」
「古墳には誰が葬られたの？」
「石室に葬られたのは一人だけですか？」
「遺体を葬るとき真っ暗だったと思うが、どうし
ていたのかな？」
「追葬したときは、おびえていましたか？」
「遺体には、服を着せていたの？」
「石柵には、お宝を置いていたの？」
「石室から水が落ちてくるのはなぜ？」
「水が落ちてくるが、雨が降ったらどうなります
か？」
「石室をつくる時、夏は暑くて死にそうになる
のでは？」
【前山 A58 号墳・大日山 35 号墳等】
「古墳の造られる期間と、埴輪がつくられた期間
がずれているのでは？では天王塚古墳に埴輪は
なかったの？」
「山火事になったり、台風が来たら、埴輪はどう
なりますか？」
「大日山 35 号墳で、休日にお弁当をもってきて
食べたい」
「金龍神社まわりで帰りたい」
「天王塚にいますぐ行きたい」

(3) 学芸員による“気づき”

出前授業における質問内容からは、社会科で日
本の歴史を学習する以前の第 4 学年の児童たちが、
地域の文化財を学ぶために、古墳時代についての十
分な事前学習をしている印象を受けた。したがって、
学習で得た豊富な知識に基づく質問が多かったよう
である。

一方で、考古資料を実見し、また現地学習で資料
館の展示品を見学したときには、資料の形状や重さ、
材質、作り方などに対する疑問を素直に口にする児
童が多かった。観察による発見や驚き、素朴な疑問
に基づく質問や感想であった。

現地学習においては、高さ 4.3 m の将軍塚古墳石室について、その天井高や石積みなどの石室構造について関心を抱いた児童が多く、また古墳時代の埋葬時の様子や、石室から水が滴り落ちることへの興味をもつ児童も多かった。

石積みの石材が一つはずれると石室が崩れるのではと想像する児童がいたことや、石柵の下に遺体が安置されていた可能性を説明すると「こわい！」とつぶやく反応が多かったことが印象的である。これは、岩橋型石室の扁平な結晶片岩が高く積まれた独特な景観に強い印象を受けたことや、石室内の薄暗さや高い湿度、水が滴り落ちる様子など外とは異なる空間や雰囲気から古墳時代の埋葬時の様子を想像したためと推測される。

このほか、前山 A111 号墳の前で、周囲の複数の高まりがすべて古墳であるとの説明に、多くの児童が非常に驚いた様子であった。このことは、前山 A111・同 109 号墳などの石室が明瞭に視認できる古墳や、墳丘が復元整備された前山 A58 号墳を除いて、一般の見学者にとって周囲のマウンド状の高まりがすべて古墳であるとは理解しにくいことを教えてくれる。現状の整備では、多数の古墳が密集する岩橋千塚古墳群のもつ特色を十分に見学者へ伝えきれていないという課題があることに気づく。

また主園路の前山 A58 号墳から同 67 号墳へ続く途中に位置する眺望の良い地点では、児童の多くがそこから見える西和佐小学校の校区に関心をもち、学校や友人宅を指さし会話をしている様子を観察することができた。さらに大日山山頂の大日山 35 号墳からの、和歌山平野や紀ノ川、淡路島等を一望できる地点では、まず「和歌山城はどこか」と探していた。遠方にみえる景観よりも、むしろ自分たちの居住地や身近なランドマークに関心を寄せる児童が多いことは、大人と異なった意外な反応であった。

児童たちは、こうした新たな発見や驚きを体験しながら、園内の起伏のある斜面を 3km 以上歩きつづけ、疲労を感じた児童も多かったようであり、後述するように「夢計画」の作品において「足湯」や「休憩施設」、「園路整備」などの作品に反映される部分があったと考えられる。

一方、我々学芸員にとっては、園内の古墳を見学

した際の石室の暗さや雰囲気などに、古墳時代の臨場感を感じさせることのできる展示や活用のヒントが隠されていること、また、学芸員が当然見学者に伝わると考えていた視覚情報が意外にも伝わりにくい可能性があること、同じ風景に対して児童の興味を引く事柄は必ずしも大人とは同一ではないことなどの“気づき”を得ることができた。

課題として、出前授業や現地学習は時間が限られたため、民俗資料や移築民家、万葉植物園、園内の自然などについての説明が十分にできなかったことである。今後は、こうした古墳群以外の文化財や自然を対象とした同様の取り組みも必要と考えられる。

4. 教員の視点からの「夢計画」の意義

(1) 日常のなかの紀伊風土記の丘

つづいて順序は前後するが、出前授業や現地学習の実施以前と、実施後、「夢計画」の作品制作の過程で、児童の紀伊風土記の丘に対する認識がどのように変化していったのかについて、竹内より教員からの視点で述べたい。

はじめに、本学級の児童たちにとって、紀伊風土記の丘がどのような場所であったのかを、日常の会話や日記の中から、一部抜粋して紹介したい。

「今週の日曜日に、お父さんと一緒に紀伊風土記の丘でバトミントンをしました。」
「先生、陸上の練習で『(紀伊)風土記』にマラソンに行ってきます。」
「風土記にカブトムシ捕まえに行こう。」
「一年生のとき、風土記にどんぐりを拾いにいったで。」

以上の内容から、紀伊風土記の丘は児童たちにとって、遊びの場・運動の場として機能していることがわかる。また本校では、「にしわさ活動(異学年交流)」を教育計画の中に位置付けており、年に 1 回以上、紀伊風土記の丘を訪れオリエンテーリング等の活動を行っている。

本単元の学習の導入として、「西和佐にある宝といえは？」という議題で話し合った際に、最も多くの児童が候補に挙げたのが「紀伊風土記の丘」であった。この結果は、多くの児童がこれまでの学習・

経験の中で、紀伊風土記の丘に親しみをもち、その大切さを感じているからだと考えられる。

一方で、紀伊風土記の丘を、岩橋千塚古墳群のある「文化財」として認識する児童は少なかった。紀伊風土記の丘“で”学習してきたが、紀伊風土記の丘“の”学習をしてこなかったことによるものではないかと思われる。

そこで以下の「3つの出会い」を企画した。

(2)「3つの出会い」のねらい

児童たちが紀伊風土記の丘をよりよい場所にするための計画を考える上で、紀伊風土記の丘の「文化財」としての価値を理解することや、紀伊風土記の丘を守ってきた人・守っている人の思いを知ることが不可欠である。そこで大切にしたいのが、以下の「3つの出会い」である。

①「岩橋千塚を守る会」との出会い

岩橋千塚を守る会は、特別史跡の指定地外であった天王塚古墳と大谷山 22 号墳（一部既指定地）の追加指定を目標として平成 24（2012）年度に結成された団体である。署名運動など会の幅広い活動が大きき力となって追加指定は平成 28（2016）年度に実現し、現在古墳は紀伊風土記の丘の敷地となっている。児童らが、この岩橋千塚を守る会との「出会い」をつうじて紀伊風土記の丘を大切にしてきた人たちの願いを知ることがねらいである。

② 紀伊風土記の丘の「学芸員」との出会い

「学芸員」の方々は、岩橋千塚古墳群をはじめとした、紀伊風土記の丘にある文化財の保存と活用を進めている。そこで、前述のとおり学芸員を講師とする授業を実施した。児童たちには、この「出会い」から「文化財の魅力」や「考古学の面白さ」を感じて欲しい、というねらいがある。

③「紀伊風土記の丘」との出会い

学習活動の中で、紀伊風土記の丘に実際に訪れ、「自然」や「文化財」の魅力を見事に児童たちに再認識させることがねらいである。

これらの「3つの出会い」を大切にしながら、児童の興味・関心に応じて学習を展開した。

(3)「3つの出会い」から「夢計画」へ

では、「3つの出会い」を通して、紀伊風土記の丘に対する児童たちの認識が、どのように変容した

のかを、児童たちの感想文を一部抜粋して述べたいと思う。

①「岩橋千塚を守る会」との出会い

ここでは、「天王塚古墳」と「大谷山 22 号墳」を特別史跡に追加するまでの経緯について学習した。その中で、「一度失ったものはもう二度と戻ってこない」、「古いものを大切にすると今や未来のことがわかる」という話は、児童たちの心に残ったようであった。

児童たちの感想から

「小学生の頃から、古墳を大切にしようと考えられるのはすごいな。」

「この人たちのおかげで、今も古墳を残っているので、感謝しないといけない。」

「今度は僕たちが守る番だ。」

「岩橋千塚を守る会に入りたい。」

児童たちは、自分たちの「宝」である紀伊風土記の丘を守ってくれた人たちに、尊敬や感謝の気持ちを抱いたようであった。また岩橋千塚を守る会が、これほどまでに大切に守ってきた岩橋千塚古墳群に興味をもつようになった。

②紀伊風土記の丘の「学芸員」との出会い

ここでは、「学芸員の仕事」や「岩橋千塚古墳群」、「紀伊風土記の丘」について学習した。その中でも学芸員が熱く語った「特別史跡は国宝と同じ価値がある」、「君たちは実は凄い所に住んでいるんだよ」という言葉には、多くの児童が共感することができたようであった。

児童たちの感想から

「紀伊風土記の丘ってすごい所。」

「最初、紀伊風土記の丘って、あんまり面白くないと思っていたけど、だんだん好きになってきました。」

「学芸員さんの話を聞いて、紀伊風土記の丘が大好きになりました」

「もう一回紀伊風土記の丘に行きたい。」

このように紀伊風土記の丘を「文化財」として認識していなかった児童たちが、その価値を実感し、郷土の文化財への愛着を深めていることがうかがえる。

③「紀伊風土記の丘」との出会い

出前授業の後、現地学習として児童 55 名を引率して紀伊風土記の丘を訪れた。そこでは、園内の前山 A58 号墳や将軍塚・知事塚・郡長塚古墳、大日山 35 号墳や資料館をめぐりながら学芸員の解説を受けた。

児童たちの感想から

「自然と文化財の両方を楽しめた。」
「頂上からの景色が最高でした。」
「昔活躍した人の歴史を感じた。」
「石室の中に入って、学芸員さんの詳しい説明を聞くことができたのがよかった。」

児童たちは、出前授業で事前に学習をしていたこともあり、4 年生にとって難しい内容の説明にも、興味を示しながら聞いていたようであった。またこの現地学習の後、児童たちが放課後や休日に、ピクニックをするためなどに紀伊風土記の丘を訪れる機会が増えた。それは児童たちが、紀伊風土記の丘にある「自然」や「文化財」の魅力を改めて認識し、誇りに思うことができたからであると考えられる。

以上のような、充実した「3つの出会い」を終えた後、「夢計画」として新しい博物館や紀伊風土記の丘に必要な施設についての構想を考えた。学芸員の「君たちの計画が実現するかもしれない」という一言で、心に火のついた児童たちは、自分たちの「宝」をより理想のものとするために、一生懸命に計画を立てることができた。その計画からは、自分たちが学んだ紀伊風土記の丘の良さを、より多くの人に知って欲しい、という児童たちの思いをうかがうことができた。

そして現在も、児童たちは自分たちの計画が実現される未来を心待ちにしている。

以上の取り組みをつうじて、紀伊風土記の丘を守ってきた人や守っている人の思いを知り、「夢計画」の作品をつくるなかで、児童たちは地域社会に対する誇りや愛情をもつことができたように思う。

5. 「夢計画」の作品とその特色

以上の過程を経て、西和佐小学校第 4 学年児童による「紀伊風土記の丘 夢計画」の作品が完成した(表 1 及び図 1・2)。

全作品 27 点については、紀伊風土記の丘資料館ロビーにおいて「和歌山市立西和佐小学校 4 年生作品展『紀伊風土記の丘 夢計画』」を開催し、令和 2 年 3 月から 4 月までの期間に展示を行った(図 3・写真 2)。

作品は、園内や、新しい博物館に必要な施設などをイメージ図として描き、タイトルや解説を添えたもので、様々な種類を含んでいる。

これらを大別すると、①レストラン・カフェやメニュー(9 作品)、②足湯・休憩施設(5 作品)、③古墳関連グッズ開発やミュージアムショップ(4 作品)、④園内の園路整備や移動手段(3 作品)、⑤古墳解説板におけるバリアフリー化、⑥遊具の整備(2 作品)、⑦図書館、⑧園内の時計設置、⑨自動販売機設置であった。

特にユニークと感じられる点は、足湯などの休憩施設のアイデアが多いことで、現地学習で児童たちが長時間園内を歩き、疲れた足を癒すためにほしいと自身が感じた施設をデザインしたのではないだろうか。

また、階段を設置する「お年よりもあんぜんにのぼる計画」や、園路を改修して高齢者や車椅子利用者の通行を容易にする「お年よりもらくちん!安心!バリアフリー計画」も、園路を歩いて現状を観察した自身の経験から見出したアイデアとみられる。ユニークな意匠の時計や自動販売機も、園内に設置されれば来園者へ利便性を提供するのみならず、その心を和ませてくれるだろう。

ミュージアムショップやレストラン・カフェ、図書室などは、現在の資料館には備わっていない設備であり、新博物館の施設計画においてその必要性を検討すべき重要な要素である。アイデアには各考古資料を模した魅力的なメニューやグッズが並ぶ。また、「はにわ公園で楽しく遊ぶ計画」などにおける前方後円墳や埴輪を意匠に取り入れた遊具は、未就学児を対象にした学びの要素を含みつつ遊ぶことのできる設備やハンズオン展示を検討する必要があることを感じさせる。

古墳説明板におけるバリアフリー化も、現在、岩橋千塚古墳群の整備で園内に設置している各解説板には備わっていない「音声ガイド」機能などについて

て触れられており、実際に現地で児童が必要と気づいた内容であろう。

以上の作品は、児童が紀伊風土記の丘の資料館や古墳群について十分に学習したうえで、さらに現地を歩く過程で必要と考えられる設備を見出し、子どもの視点から創造したアイデアであり、大変ユニークな作品が多い。さらに、これらは児童自身が楽しめる施設として創造されたものであることはもちろん、未就学児、高齢者、障害のある方、外国人などの様々な来園者や来館者の利便性に配慮した内容も少なくなく、計画の目的の明確性に驚く。

これらの作品群は、新しい博物館建設に向けた計画づくりのみならず、現在の紀伊風土記の丘の整備や運営にあたって、職員が学ぶことの多い提案であると感じている。

6. おわりに

以上、令和元年度に実施した「紀伊風土記の丘夢計画」の取り組みについて紹介するとともに、学芸員と教員の双方の視点からその意義について述べた。

今回の学習活動を通じて、現在の紀伊風土記の丘が、児童たちにとって日常的な遊びや学びの場として機能しており、大変身近な存在であるように、この場所が決して地域社会からは切り離された存在ではないということを再度認識することができた。

地域の多くの人々によって支えられてきたからこそ、半世紀の歴史を歩むことができたこの紀伊風土記の丘が、これからも地元の子どもたちにとって“宝物”でありつづけ、そして次の世代に貴重な文化財や自然が継承されていく。そのフィールドミュージアムの中核となるべき新博物館が、いつの日か完成したとき、彼らの思い描いた「夢計画」の構想が、一部でもかたちとなっていることを願ってやまない。

末筆となりましたが、本学習活動にあたり、西和佐小学校の教員や児童の皆様、岩橋千塚を守る会会員の皆様、作品展をご覧になりたくさんのご意見を賜りました皆様をはじめ、多くの方々にお世話になりましたことを感謝申し上げます。



教員による社会科授業風景

(「大日山 35 号墳へ誰もが安全に行くためには？」)



出前授業（埴輪に触れる）



出前授業風景（学芸員による説明）



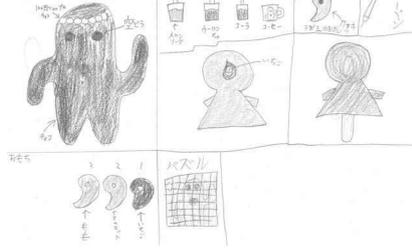
現地学習風景（前山 A58 号墳の説明）

写真1 開催状況写真

1	古墳を学ぼうカフェ	15	紀伊風土記のおかげんていショップ
2	おなかがすいたらハニワレストラン計画	16	紀伊風土記の丘限定ショップ計画
3	何回もいきたいレストラン計画	17	みんながもらったうれしいグッズコーナー計画
4	観光客に「おいしい」ってしてもらおう計画	18	グッズで楽しく勉強計画
5	料理で古墳にきょう味をもってもらおう計画	19	らくらく山のぼり計画
6	おなかがすいたらはにわラーメン計画	20	お年よりもあんぜんにのぼる計画
7	つかれた人におすすめレストラン計画	21	お年よりもらくちん！安心！バリアフリー計画
8	インスタ映え両面人物埴輪ケーキ計画	22	はにわ公園で楽しく遊ぶ計画
9	はにわや古墳について学ぼう計画	23	小さい子たちが安全に遊べる計画
10	足湯で山のぼりのつかれをとる計画	24	目と耳のバリアフリー計画
11	足湯でつかれをとってゆっくりしよう計画	25	紀伊風土記の丘を知ろう！古墳形図書館計画
12	足湯でつかれをとってホテルでゆっくり計画	26	古墳時計で時間バッチリ計画
13	足湯をしながら屋台のものが食べれちゃう！！計画	27	古墳がたの自動はんばいき計画
14	足は足湯でやすらぎ頭は勉強計画		

表1 「紀伊風土記の丘 夢計画」 作品名一覧

古墳を学ぶカフェ



おなかかすいたからレストラン計画

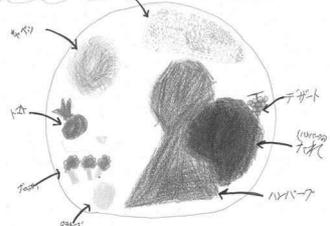


何回もいきたいレストラン計画

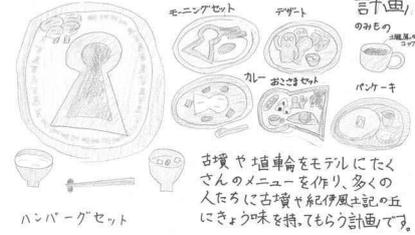


ハンバーガーの店員のかたちになっているスペースにはやさしいものを。

鑑見光客にのびいてゆつてもらう計画



料理で古墳にきょう味を持ってもらう計画



ホトナカがすいたりにはお茶の計画



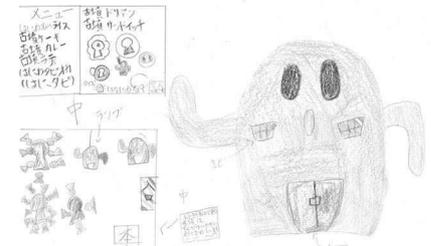
つかれた人におすすめレストラン計画



インスタ映え両面人物直輪ケーキ計画



はくわやお漬物について学ぶ計画

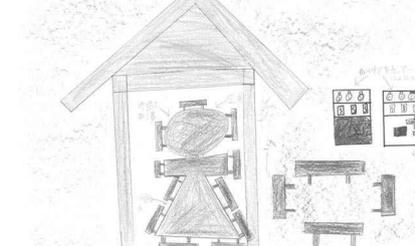


足湯で山のほりのつかれをとる計画

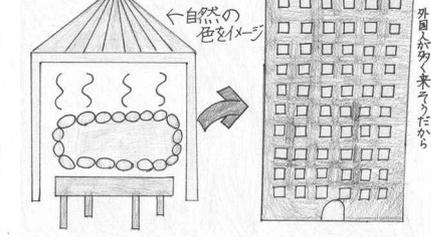


足湯の中にはトクダスがあります。

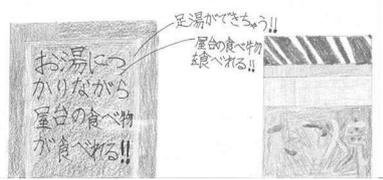
足湯でつかれをとってゆっくりしよう計画



足湯でつかれをとってホテルでゆくり計画



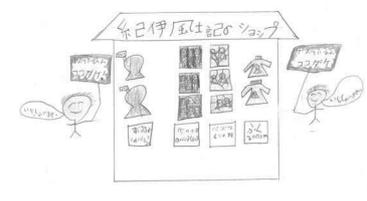
足湯をしながら屋台のものが食べれちゃう!!計画



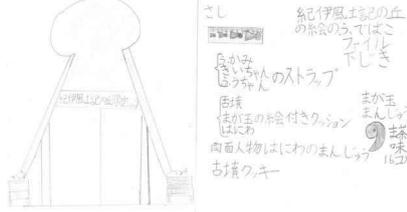
足は足湯でやすらぎ頭は勉強計画



紀伊風土記のおかげんていショップ



紀伊風土記の丘限定ショップ計画



みんながもらおううれしいグッズ計画



グッズで楽しく勉強計画

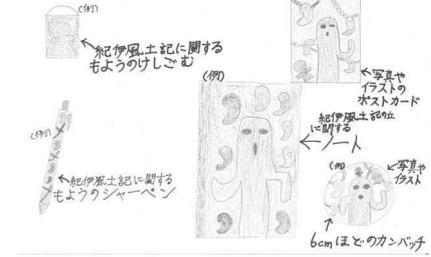


図1 「紀伊風土記の丘 夢計画」の作品①

前山 A13 号墳及び大日山 35 号墳の排水溝発掘調査報告

第 1 章 発掘調査に至る経緯

特別史跡岩橋千塚古墳群内にある前山 A 13 号墳及び大日山 35 号墳の横穴式石室は、雨水等の影響による滞水が原因で、石室公開の中断、盛土の流出など特別史跡の保存と活用に深刻な影響が生じており、早急な対応をしなければならない状況にある。雨水の流入場所、排水の状況などについてモニタリングを実施してきた結果、各古墳の現状と課題が明らかになり、原因の推定が可能となったため、令和 2 年 11 月 1 日から令和 3 年 2 月 28 日まで排水溝の構造と排水状況を把握するため発掘調査を実施することとなった。

現地調査及び出土遺物等整理作業は当館職員の富加見泰彦が担当し、本報告は富加見泰彦と佐々木宏治が執筆した。なお、調査は考古学及び史跡整備の専門家で構成された特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議の指導・助言を受け実施した。

第 2 章 前山 A13 号墳の調査

1. 現状

前山 A13 号墳は園内の東部に位置する前山 A 地区の北斜面中腹に築造された直径 18m の円墳で、西側に開口する横穴式石室をもつ。公園入口から最も近くにある石室公開古墳である。横穴式石室の内部まで自由に見学できるが、滞水時は安全に配慮し立ち入り禁止としている。

樹木は松枯れのため数十年前に伐採されている。現在は墳丘上に笹等が繁茂するが、年数回除草している。また、墳頂には平成 22 年度の整備事業で雨水の浸透を防ぐため遮水シートを設置している。

これまでの経過と現状を正確に把握することは今後の発掘調査及び整備方法を検討する上で重要であるが、平成 18 年度以前の何時から何が原因で滞水が始まったかについてははっきりしない。また、現状の雨量と滞水量との相関関係を探ることも容易ではない。土の乾燥状態、降雨の時間、方向などにも



図 1 対象古墳位置図

影響するものと考えられる。また、参考にする計測雨量も古墳上のデータでないことによる誤差も大きい。これらに注意しながらモニタリングを重ねた結果、乾燥状態で40mm程度の雨量までは滞水しないことが確認できた。ただし、諸条件の差によりこれより少ない雨量で滞水する場合もある。これ以上の雨が降ると玄室に最大深さ30cm程度雨水が溜まり、羨道部にまで及ぶ。排水はほとんどされず、ポンプで排水しなければ少なくとも1週間程度石室内に入ることができない状況にある。また、溜まった水は土砂を若干含み濁っている。



写真1 前山 A13号墳 シート設置状況

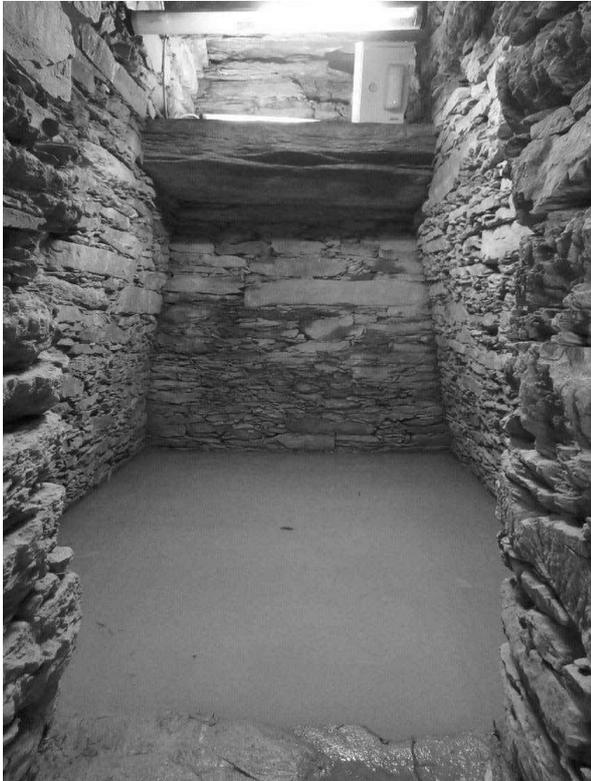


写真2 前山 A13号墳滞水状況

2. 既往の調査

(1) 大正7年(1918)調査(第1期調査)

和歌山県が黒板勝美・田沢金吾・岩井武俊に委嘱し、前山A地区の27基の古墳を対象に実施した岩橋千塚第1期調査で前山A13号墳が調査されている。当時玄室及び羨道は板石閉塞されており、羨道扉石の外側から須恵器、羨道内堆積土から馬具が出土した。

玄室及び羨道入口から西側の山腹にかけて主軸に沿った1条の排水溝が検出されている。玄室と両地点で溝の幅と深さが記載され、羨門外では溝断面図の記載もあることから一部溝底まで掘削したのと考えられる。

(2) 平成18・20年度調査

石室内の排水機能が低下したためか、大雨のたびに石室内が滞水し、史跡の保存及び活用上支障が生じたため、和歌山県では平成18年度及び平成20年度に排水溝の機能回復を目的として玄室、羨道部、前庭部及び墳丘外の発掘調査を実施した。

平成18年度の調査では、当時羨道壁面に立てかけられていた玄門扉石は倒され、羨道部にすっぽりと挟まった状態で見つかった。当時の調査ではこれを持ち上げ、搬出することができず、玄室前道基石の下部、羨道部については機能回復のための調査を断念した。

玄室排水溝は一部土層観察用アゼを残して掘削し、羨道部は倒れた扉石周辺を掘り下げ岩盤まで確認した。また、羨道仕切り石付近の排水溝について蓋石上面まで掘削後、前庭部については羨道仕切り石から3.5m～5.7mの範囲の排水溝を掘削、一部を断ち割りその構造を確認した。なお、玄室内は排水溝にたまった土砂を取り上げ、玉石はすべて洗浄した。須恵器や玉類が出土している。調査後は砂により養生し埋め戻した。

平成20年度の調査では、墳丘外まで延長し排水溝を確認している。しかしながら、排水溝の発掘調査は行わずプランの確認に留めた。

以上の結果、排水溝は、玄室では岩盤を断面V字形に彫り込み玉石を充填していた。奥壁及び玄室前道基石付近には側石が設置され、玄室前道基石付

近では蓋石が確認されていることから、当初から側石や蓋石がなかったかどうかは判断できない。これに対し、羨道部は明らかでないが、羨門から外側は岩盤を掘削した底付近に側石をV字状に設置、玉石を充填後蓋石で覆う構造であることが確認された。

この調査では、羨道部に置かれた扉石のため、排水機能を回復するよりも石室上面から侵入する雨水を防ぐことが有効と判断し、平成22年度に石室上の墳丘上面47.5㎡を遮水シートで覆うなどの整備を行ったが、問題の解決に至らなかった。

(3) 平成29～31年度モニタリング

横穴式石室への雨水の流入箇所を特定するため、条件を変えて石室の滞水状況をモニタリングした。

平成29年度には、過去の盛土により羨道入口部分の床面形状が石室側に傾斜していたことによる雨水の侵入が考えられたため、盛土を墳丘外に傾斜するよう成形したが、顕著な効果は確認できなかった。

平成30・31年度には、シートの設置場所を石室上から徐々に増やし墳丘全体を覆うまでモニタリングを行った。土の乾燥状態、雨量による影響もあり、はっきりした傾向は確認できていないが、墳丘全面を覆った場合でも、滞水量はやや減少するが一定量は認められた。

3. 原因についての検討

一旦滞水すると排水がほとんどされない現状から、排水溝の目詰まりが直接的な原因であることはほぼ間違いないと思われるが、ここでは、現況やモニタリング結果をもとに目詰まりが生じた原因について考えてみたい。目詰まりが生じる原因は排水溝を流れる水に含まれる土砂が堆積する場合と溝の上部から土砂が流れ込む場合が考えられる。

前者については、前山A13号墳は北西側に傾斜する斜面上に位置し、墳丘上面にシートを設置しても雨水が流入することから、雨水の流入しやすい地形である。このためあらゆる方向から土砂が水とともに流入し、徐々に目詰まりしていった可能性がある。また、近年のゲリラ豪雨等降水量の増加に伴う石室への雨水の流入量の増加、樹木伐採に伴う地面

到達雨量の増加や保水力の低下等的人為的な環境の変化に伴う雨水の流入量の増加が墳丘の土砂の流入量の増加に繋がり目詰まりを加速させた可能性もある。

後者についても、水量の増加とともに土砂の堆積も増加する点で同じであるが、溝の蓋石の隙間の大きさなども影響を与えるものと考えられる。

前山A13号墳の場合、発掘調査前に排水溝を流れる水に含まれる土砂が堆積したのか溝の上部から土砂が流れ込んだのかの判断は困難であるが、雨水に伴い流入する細粒土の量はわずかであることから発掘調査や樹木伐採の結果、近年急速に進行したとは考え難く、長い年月をかけて徐々に目詰まりが起これ機能不全に陥ったものと思われる。

4. 発掘調査の方法

(1) 調査手順

今回の調査は、排水溝の機能回復が主目的であることから、機能が回復した段階で調査は完了となる。このため、調査は玄室から開始し、羨道、前庭、墳丘外へ調査を進めた。調査区ごとに排水溝の蓋石の除去、内部に充填されている玉石の除去を行い、その都度排水機能の回復の確認を行ったため、調査区を細分しながら調査を実施することとなった。調査区は、玄室を調査区Ⅰ、羨道部を調査区Ⅱ、前庭部を調査区Ⅲ、Ⅳ（調査区Ⅳは平成18年度掘削範囲）、墳丘外を調査区Ⅴに分けて実施した。

(2) 調査区の地区割

調査は、今回新たに設定した石室奥壁のP5 ($x=-196,829.604, y=-70,554.053$)とP6 ($x=-196,825.530, y=-70,565.157$)を調査区基準点として実測図の作成等を行った。また、P1とP5を結ぶ直線にそって地区割を行った。過去の調査では、羨道部からは雲珠、轡、鍍金金具破片出土等が報告されているため、羨道部上面堆積土については、図3に示すようにAからJ区に分割し、排水溝埋土については、1から22区に分割して土砂をすべて取り上げ、状況に応じて調査後洗浄し遺物等の有無を確認することとした。

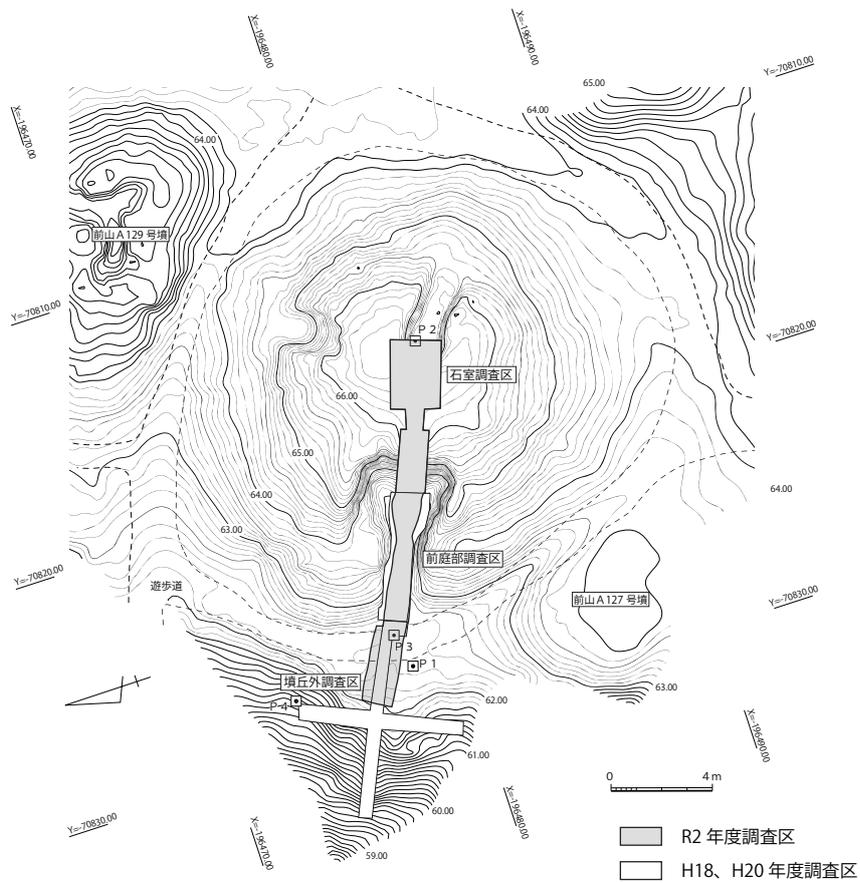


図2 令和元年度 調査区位置図 (S=1/300)

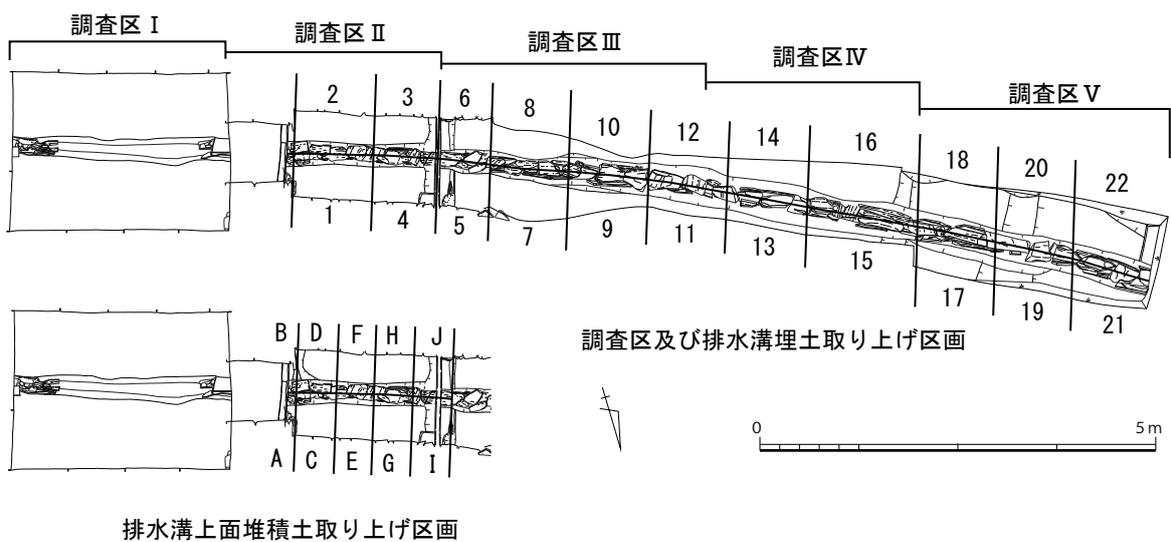


図3 前山 A13 号墳 排水溝地区割図

5. 発掘調査の成果

(1) 調査区Ⅰ（玄室）

平成18年度に1箇所土層観察用アゼを残して完掘している。今回は完掘後再充填した玉石を取り除き、アゼを取り外した。

(2) 調査区Ⅱ（羨道）

初めに床面に置かれた扉石をチェーンブロックを用いて慎重に搬出した。

扉石の下には後世に堆積したと考えられる橙色系の粘質土（3層）が薄く堆積しており、その下が岩盤となる。排水溝は岩盤から掘り込まれている。玄室前道基石は排水溝の蓋石設置後置かれているが、岩盤が溝の南側が高く北側が低いいため、南側にのみその掘方を検出した。玄室前道基石の設置埋土と溝蓋石上面の埋土が同一（c-1層）であることから両者の設置後同時に埋設されたものと考えられる。一方羨道西端にある羨道仕切り石については、羨道壁面に組み込まれ、排水溝の埋土を切り込んで設置されていることから、溝の埋戻し後、羨道の石積み時点で設置されたことがわかる。

また、玄室前道西側で南側の玄門化粧石下端から北側へ延びる溝状の遺構を検出した。浅い皿状の断面形状で埋土は褐灰色の粘質土で礫を多く含む（a層）。化粧石下端につながることから、石室築造当初のものであり、その位置関係から石室の閉塞に係る遺構の可能性がある。

排水溝の断面形状は玄室ではU字形で、部分的に蓋石、側石が残る程度であったのに対し、羨道部ではV字形を呈する。壁面に沿ってV字状に側石を設置した後、玉石を充填し蓋石で覆い、c層で埋め戻している。蓋石は縦長で不揃いな大小の結晶片岩の板石を溝の主軸方向に敷きならべる。玄室前道基石の下については、排水機能を確保するためやむを得ず玄室及び羨道側から溝の埋土を除去した。溝の構造は羨道部と同様であったが、一部深く掘り込まれている部分が確認された。

溝の蓋石を除去すると下には粘質土が一面に堆積し玉石間にも及んでおり、排水できる状況ではなかった。第1期調査で羨道部の排水溝まで掘削されているかどうかについて報告書からは読み取れな

いが、前庭部の蓋石に比べ隙間なく設置されていることや仕切り石の設置状況から判断すると未調査であると考えられる。

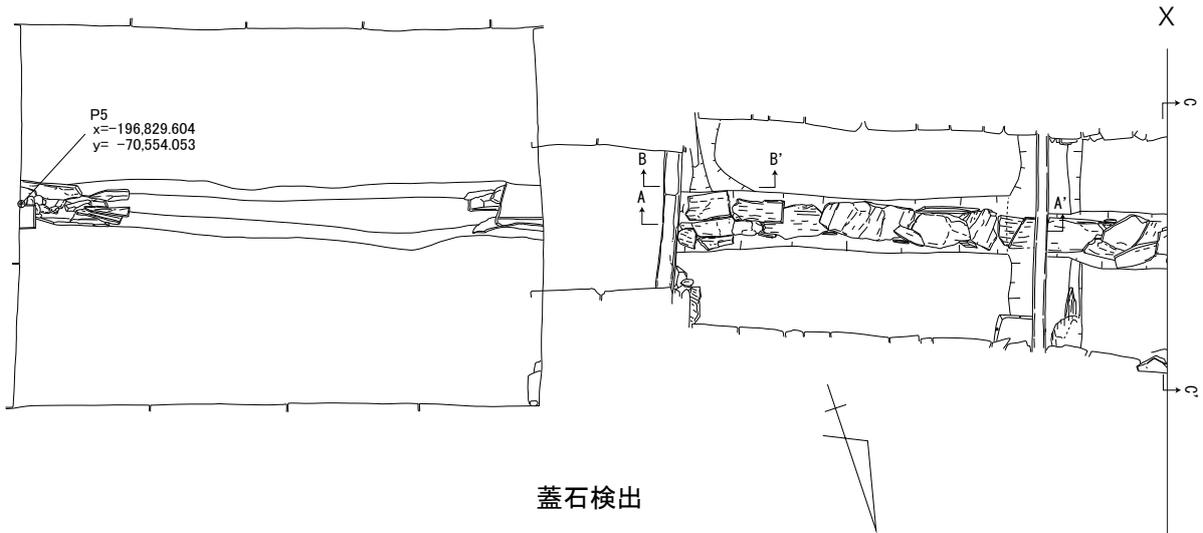
(3) 調査区Ⅲ・Ⅳ（前庭部）

前庭部も羨道部と同様、岩盤をベース面として排水溝が掘り込まれている。羨道部は石室設置の際岩盤を掘り下げているため前庭部の岩盤面は高くなる。一方で排水溝は徐々にレベルを下げ始めるため、溝の深さは最も深いところで1m程度となる。排水溝の構造は羨道部とほぼ同じで、蓋石は縦長で不揃いな大小の結晶片岩の板石を溝の主軸方向に敷きならべるが、蓋石は乱雑に置かれ隙間が大きいところが目立ち側石の乱れもあることを考えると原位置を保っているとは考え難い。第1期調査の記録を見ると排水溝は前庭部の一部に断面図が記されている。このことから、排水溝の一部が当時調査されていたことが想定され、発掘調査の結果とも整合することから、少なくとも前庭部についてはすべて蓋石が外され内部が調査されているものと判断される。調査後、排水溝は埋め戻されているものの蓋石は乱雑に復されているため経年変化により土砂が流入し目詰まりを起こし慢性的な滞水状態に陥った可能性もある。

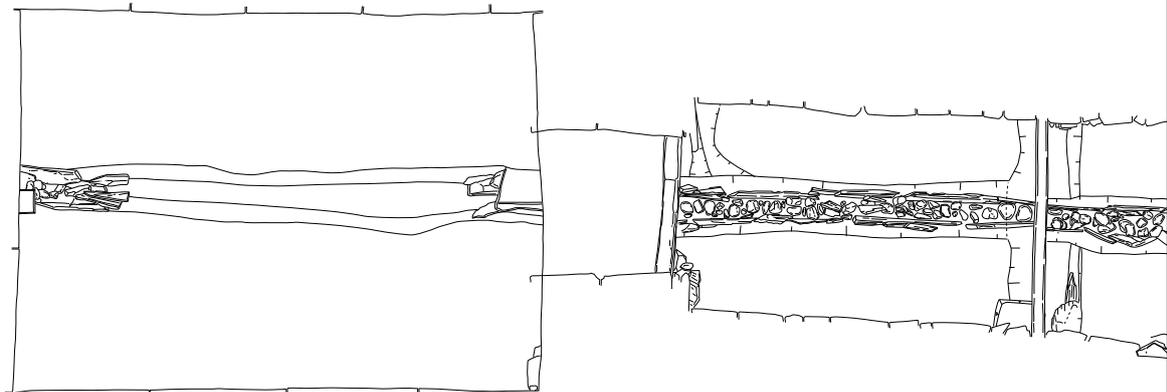
(4) 調査区Ⅴ（墳丘外）

墳丘外の堆積土層は、地山を含め大きく5層に分割できる。1層は平成20年度の調査時またはそれ以後の堆積土、2層は墳丘盛土を掻き出したと考えられる攪乱土、3層は排水溝上面の堆積土、4層は古墳築造以前の堆積土、5層は岩盤である。

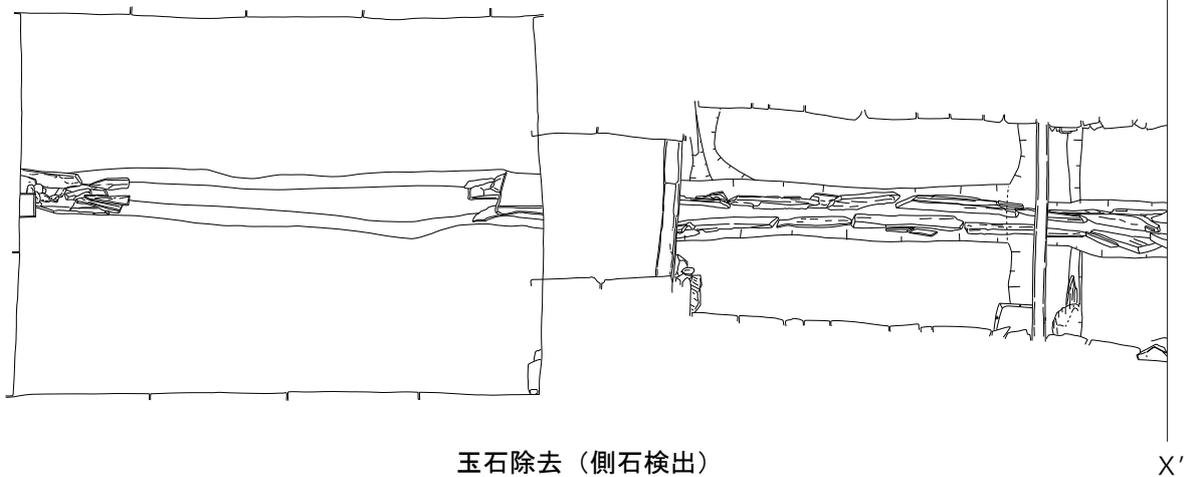
排水溝は、4層上面から掘り込まれ、徐々に北側にカーブしている。排水溝の構造は前庭部と同じであるが、ベース土の高さが急激に低くなるため、溝の深さは前庭部に比べ小さくなる。また、墳丘外の溝についても3層から須恵器や玉石が出土する点や排水溝の蓋が乱雑に設置されている点などから、前庭部同様、第1期調査で掘削されている可能性があるが、溝上面に堆積する3層がきめ細かく均質な層であることや、第1期調査の実測図に曲線を描く排水溝の形状が反映されていないことから、築



蓋石検出



蓋石除去（玉石検出）



玉石除去（側石検出）

* 玄室実測図はH18年度調査図面を使用

図4 前山 A13 号墳 排水溝平面図① (S=1/40)

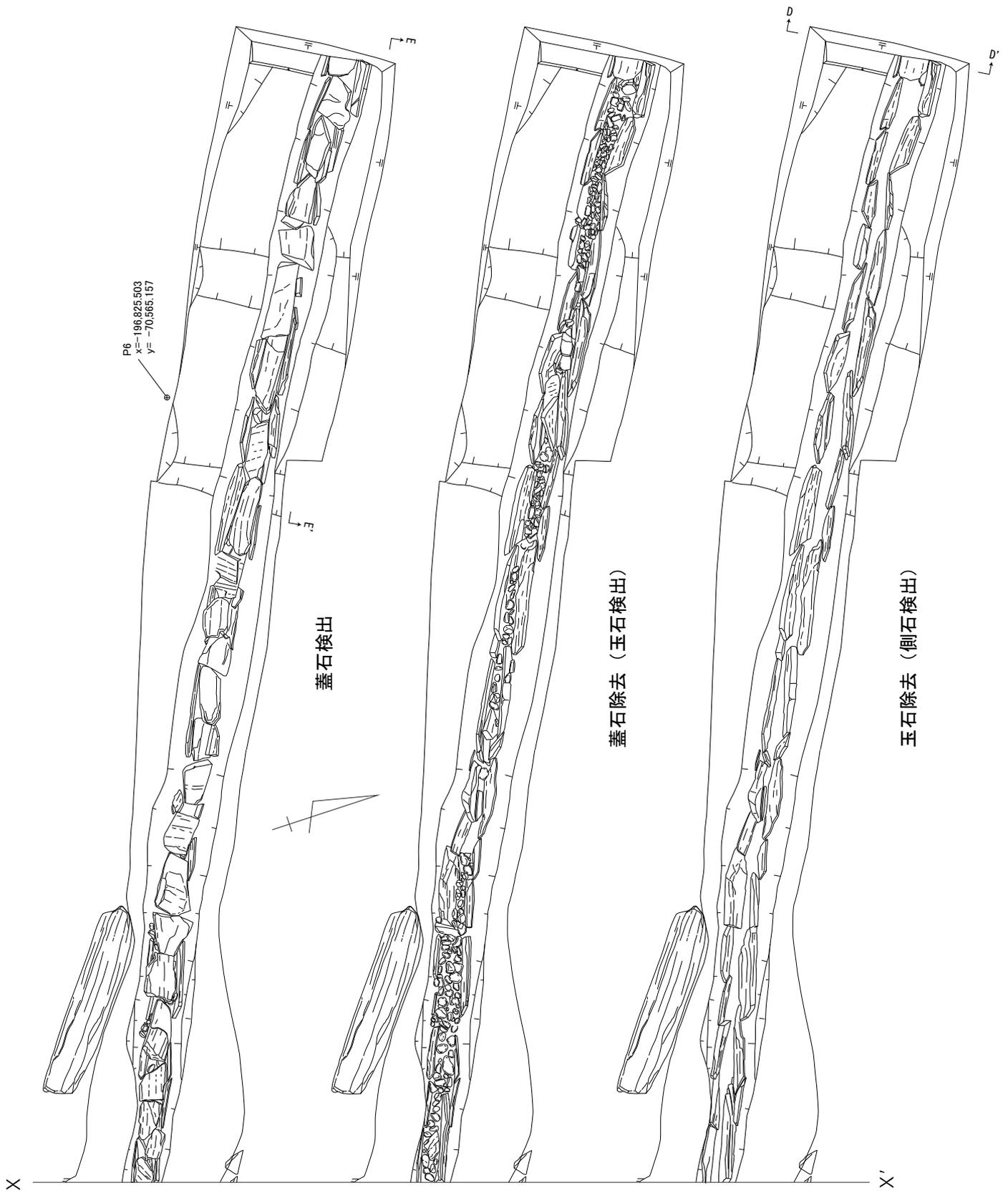
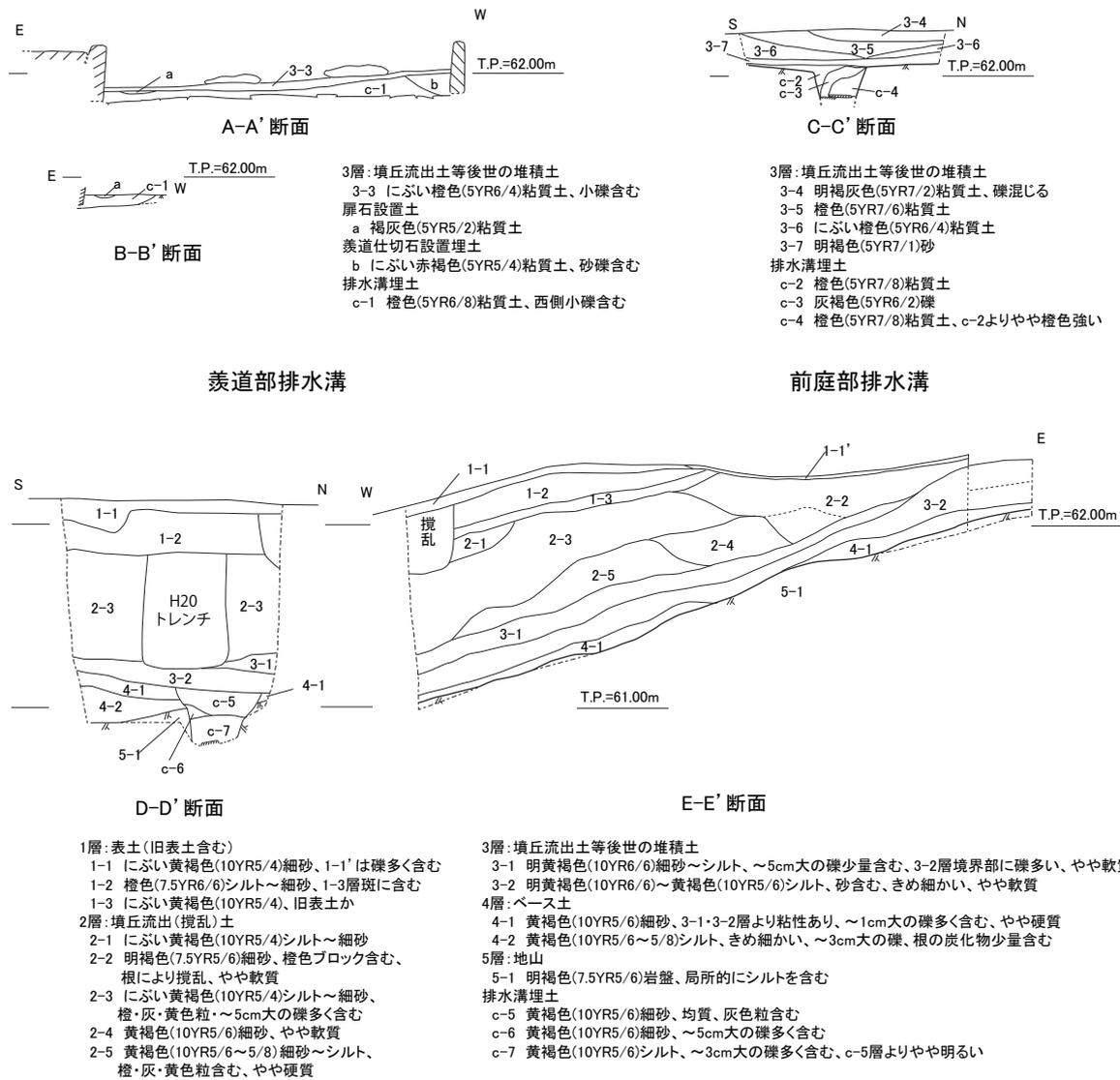


图5 前山 A13号墳 排水溝平面図② (S=1/40)



墳丘外排水溝

図6 前山 A13号墳 排水溝 土層断面図 (S=1/40)

造時の状態を保っている可能性も残される。

排水溝石底のレベルは奥壁で標高 61.7m、玄室前道手前では 61.7 m と玄室は水平である。羨道部の仕切り石でも 61.8 m を測り、玄室、羨道部ではほぼ水平であることが明らかとなった。前庭部は仕切り石外側からやや高さを減じ、墳丘外では 10 m 付近で 61.3m、11m 付近で 61.2m、12m 付近で 61.0 m、13m 付近で 60.9m、14m 地点で 60.7m となりやや傾斜を増す。この調査区でも排水溝は機能しない状態であったが、遺構を保存しながら排水機能を回復する整備が可能と判断し、調査を終了した。

7. 出土遺物

古墳の開口部は第 1 期調査で大きく「ハの字形」に開かれ、その盛土は西側斜面に掻き出されてた可能性がある。このことは斜面の等高線の乱れからそのことを読み取ることができる。今回の調査では、羨道部、前庭部からの遺物の出土はないが、調査区 V の 2, 3 層からは須恵器甕の口縁部の破片、胴部の破片、短頸壺の破片が出土している。多くは 3 層からの出土で、一部は排水溝埋土 (C-5 層) 直上からの出土もある。

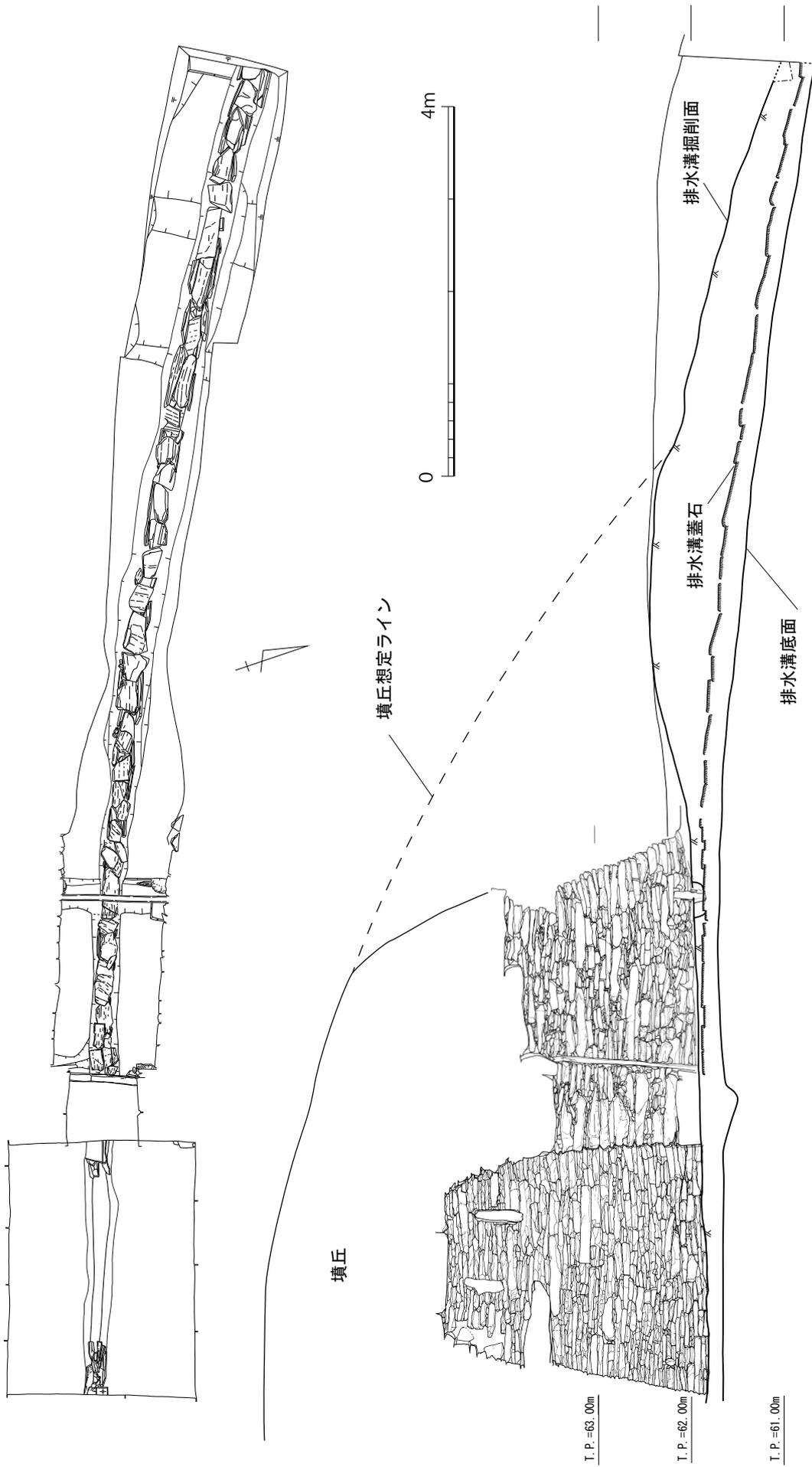


図7 前山 A13号墳 排水溝全体図

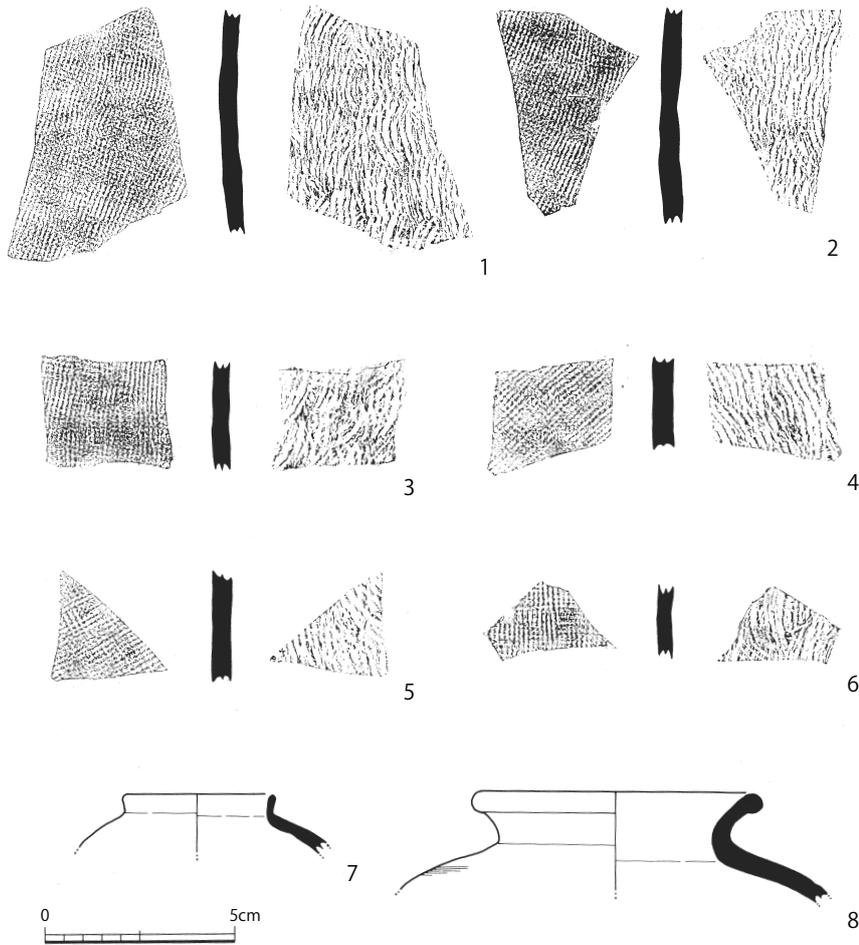


図8 前山 A13 号墳 出土遺物実測図 (S=1/4)

第3章 大日山 35 号墳の調査

1. 現状

大日山 35 号墳は園内の西端、大日山の山頂に位置する 6 世紀前半に築造された県内最大級の前方後円墳である。埋葬施設は後円部にある西側に開口する横穴式石室で、石室入口は鉄扉で閉塞しており通常非公開である。年に 1 回程度イベントで限定

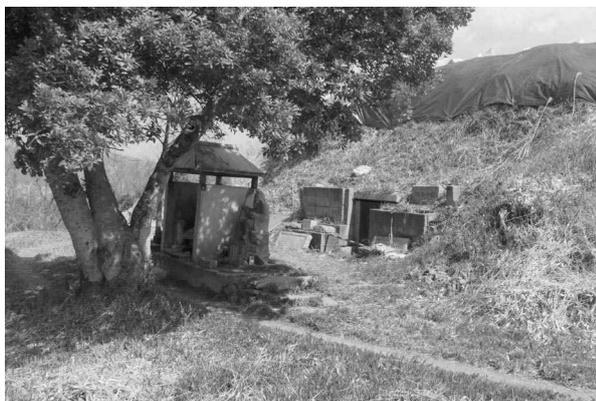


写真3 大日山 35 号墳 石室前の状況

公開していたが、近年は石室石材の亀裂が目立つため公開を見合わせている。また、鉄扉の前には大日如来が祀られており羨道から外側の発掘調査は困難な状況にある。

墳丘上の樹木は平成 15 年度の発掘調査時に伐採した。現在は笹草が繁茂するが、年数回除草している。

平成 15 年度の発掘調査時までは滞水はなかったようであるが、それ以降、降雨の後滞水するようになり深さ 80cm 程度溜まることもある（羨道進入口が床面から 80cm 程度高いため、ほぼ満水状態）。ほとんど排水しないため、ポンプで排水しなければ長い期間、石室内に水が溜まった状態となる。平成 30 年 8 月には羨道床面に設置していた土嚢約 20 個を撤去したが、滞水状況に変化はなかった。

なお、平成 15 年度以降、石室下部の石材の劣化が進行し、玄門下の石材が一部割れる状況が発生している。また、羨道及び玄室（特に玄室）側壁の表面に細粒土が付着し、玄室床面にも堆積していることから、墳丘盛土が石材間から流れ込んでいるものとみられ、盛土の空洞化及び石積みの孕みの増加等が懸念される。

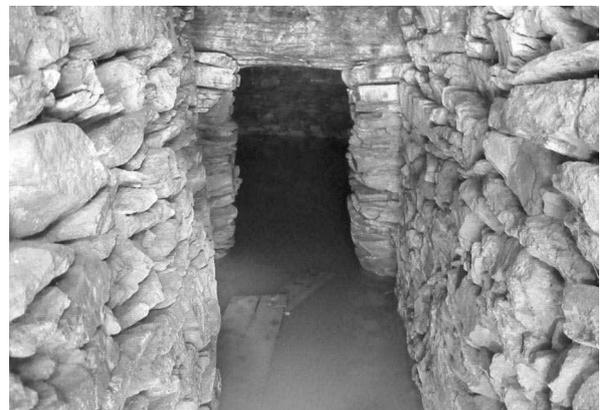


写真4 大日山 35 号墳 滞水の状況

2. 既往の調査

(1) 平成 15～17 年度発掘調査

特別史跡岩橋千塚古墳群第 1 期整備に伴う発掘調査を実施した。平成 15 年度に第 1 次調査、翌年に第 2 次調査、翌々年に第 3 次調査を行い、第 1 次調査で石室床面及び排水溝の確認を行うとともに石室の実測図の作成を行っている。玄室内の排水溝は岩盤を掘りくぼめ、「キ」の字状に敷設され、溝中に玉石を敷き蓋石で覆ったものと推察される。その痕跡の一部が残存した状態で見つっている。羨道部については部分的に排水溝の調査を行ってその存在を確認した。平面プランは羨道の南側に偏していることが判明している。

なお、調査前は羨道入口から玄門へ高さ最大 80cm 程度の土砂が傾斜堆積していたが、調査時に除去している。

(2) モニタリング（～令和元年度）

雨量と滞水量の関係、排水速度について引き続きデータを取得しながら、シート設置による流入量の変化、流入箇所の特特定などを目的にモニタリングを行った。シート設置により滞水量は減少したが、石室上全面に設置した場合でも一定量の流入があることから、周囲からの流れ込みが一定量あるものと考えられた。

また、2 箇月毎に石室内の写真記録を取得するとともに、孕み出し、細粒土の流出、石材の劣化等に変化がないか記録した。

3. 原因についての検討

前山 A13 号墳と同様、一旦滞水すると排水がほとんどされない現状から、排水溝の目詰まりが直接的な原因であることはほぼ間違いないと思われ、目詰まりが生じた原因についても同様である。

大日山 35 号墳の場合、平成 15 年度の発掘調査と樹木伐採を契機に滞水が始まったとされることから、前山 A13 号墳のように長い年月をかけて徐々に目詰まりが起これ機能不全に陥ったものではなく、発掘調査後に急激に土砂が堆積し目詰まりしたものと考えられる。また、石室内に流入した細粒土の量も非常に多いことが確認できることから、溝の

上部から土砂が流れ込んだのではなく排水溝を流れる水に含まれる細粒土が目詰まりを起こした可能性が高い。

この他、滞水期間が長引く原因として、羨道入口に設置されている鉄扉の影響が考えられる。鉄扉が石室内の水分の蒸発を妨げ、滞水量の減少を妨げている点も考える必要がある。

4. 発掘調査の方法

(1) 調査手順

調査は、玄室排水溝の再発掘の後、羨道排水溝の検出及び掘削を行った。玄室については、平成 15 年度に掘削済であることから、再充填された玉石を除去し排水溝を再発掘した。羨道部は蓋石を検出後、玉石を除去することとした。前庭部及び墳丘外については前述のとおり大日如来が祀られているため、調査を実施することはできなかった。

(2) 調査区の地区割り

平成 15 年度調査時の基準点を復元し図面等を作成した。また、出土遺物の取り上げについては、羨道を南北 2 等分したうえで、玄室前道西端から西に向かって主軸に沿って 50cm ごとに 8 等分に区割りし堆積する土砂を取り除くこととした。この土砂からは当古墳に伴う遺物が採集されることが予想されたので土砂はすべて取り上げ、調査後洗浄し遺物等の有無を確認することとした。

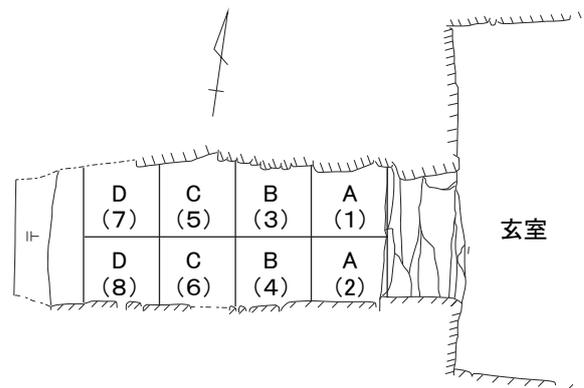


図9 大日山 35 号墳 羨道地区割図

5. 発掘調査の成果

玄室排水溝の再発掘後、羨道部の調査は堆積する土砂の撤去から行った。羨道部の堆積土層は、1

層が灰色の礫混粘質土で岩盤上に厚さ約 10cm～15cm 堆積する。排水溝は岩盤上面から掘り込んで造られており、2 層と 3 層が溝の埋土である。2 層は灰白色の小礫層で約 10cm の厚みがあり、排水溝蓋石上に堆積する。第 3 層は淡黄色の粘質土で排水溝蓋石上面に部分的に遺存する。

この 3 層を取り除くと蓋石が現れる。蓋石は溝に対して長辺を直交するように懸架するものが多い。排水溝は素掘りで内部にやや大きめの玉石を充填する。溝に側石が据え置かれた痕跡はない。溝幅約 25 cm、深さ 28 cm を測る。また、玄室前道基石の西側では溝に対して直交する南北方向に延びる扁平な板石を検出した。板石の隙間から観察すると内部には空洞があり玉石が充填されていることから、主軸に沿った排水溝以外に玄室前道基石の外側に沿うような排水溝の存在を確認することができた。この直交する排水溝は主軸沿いの排水溝と同時に埋設されたものと考えられる。なお、この溝については排水機能の回復に関係しないため、主軸に沿った排水溝の掘削に支障のある最低限の蓋石を除去し、それ以外は現状を保存した。

6. 出土遺物

発掘調査中に遺物の出土は確認されなかった。今後、持ち帰った土砂を洗浄して遺物の有無を確認する予定である。

第 4 章 まとめ

(1) 排水溝の構造について

今回の発掘調査により、前山 A13 号墳と大日山 35 号墳の排水溝の構造が明らかとなった。

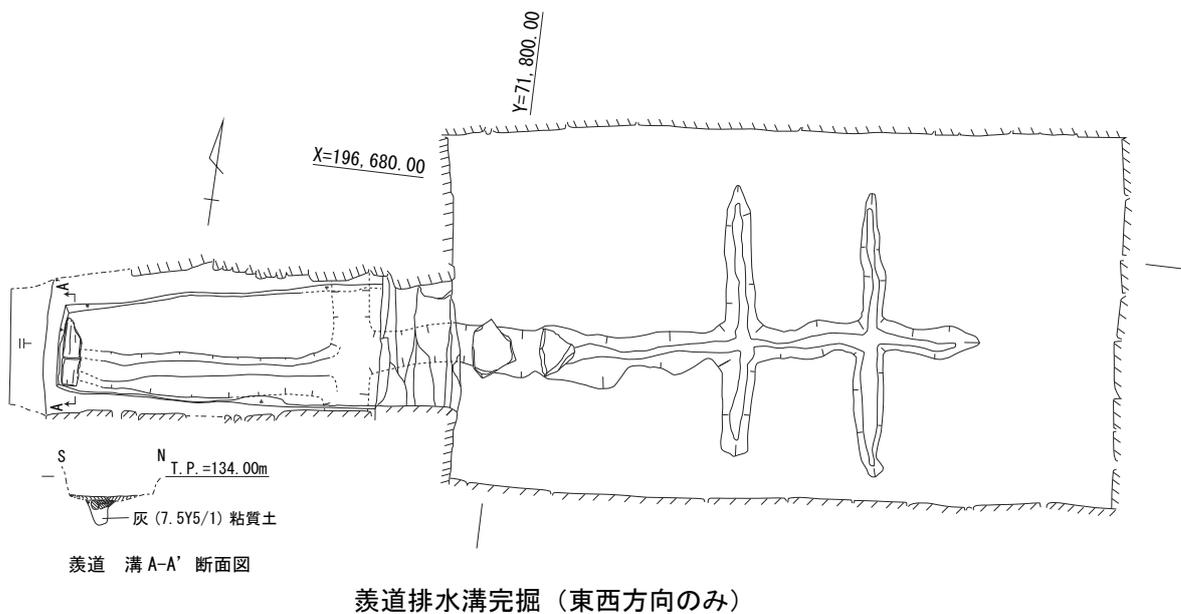
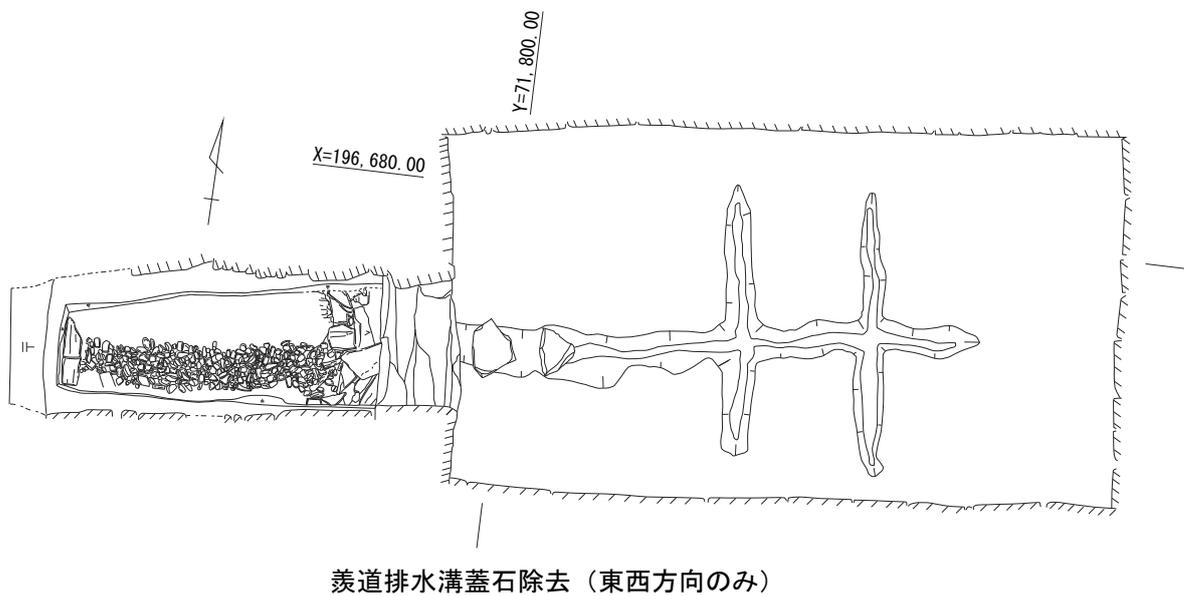
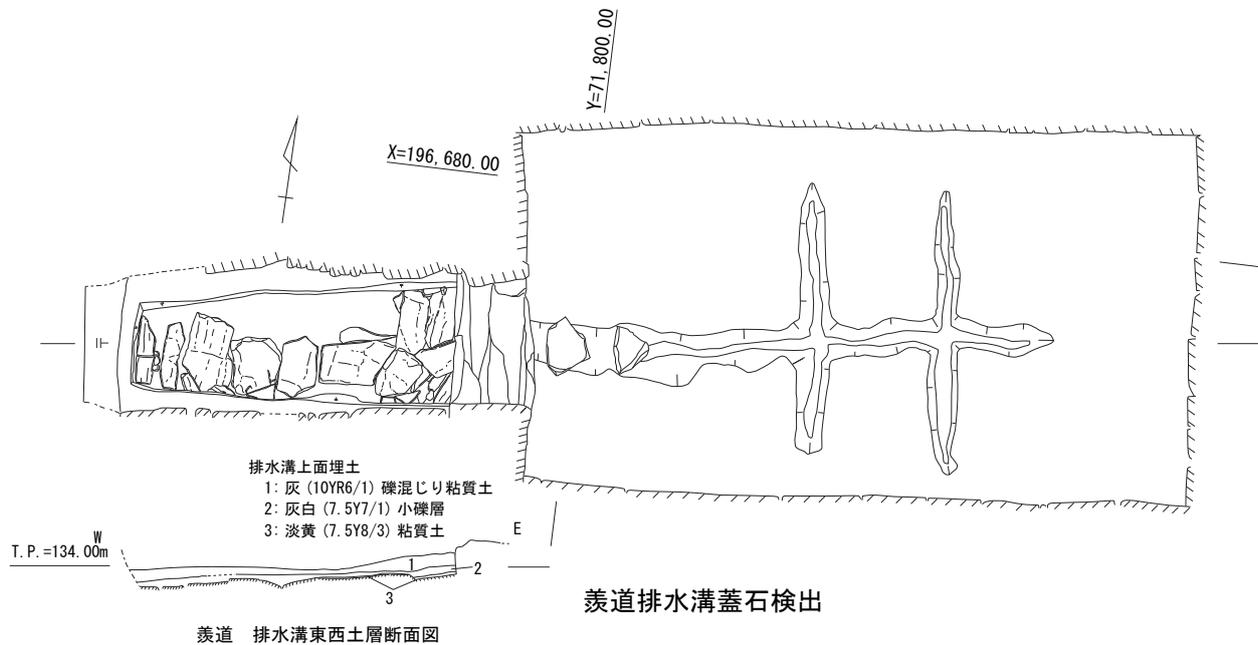
前山 A13 号墳の排水溝は断面 V 字形で内部に玉石を充填、蓋石で覆った後上部を土で埋め戻している。初めに石室を構築するため岩盤を掘り込み平坦面を造った後排水溝を設置するが、一部羨道側の岩盤を掘り込んで玄室前道基石を据えた後同時に埋設している。一方羨道入口にある羨道仕切り石については、両側壁に組み込まれて排水溝埋土を切り込んでいる。羨道石積みの構築時に埋設が完了した排水溝を蓋石上面まで再掘削し設置していることが明らかとなった。平面形態は、玄室奥壁中央から主軸に

沿って延びるが、谷への排水を意識するためか前庭部からやや北側にカーブを描く。玄室前道下も確認したが溝が分岐する地点は確認できないことから石室の四周から主軸に合流する排水溝は存在しないものと考えられる。

大日山 35 号墳の排水溝は断面 V 字形で、内部に玉石を充填し蓋石で覆うが、前山 A13 号墳と異なり側石を設置しない。羨道部までの調査であったが、排水溝が石室主軸からやや南側に傾きを持って造られていることが判明した。岩橋千塚古墳群における 6 世紀前半までの首長墓の石室平面形態は、出現時は右片袖傾向が強く新しくなるにつれて両袖に近づいていくとされる。築造が古い順に大谷山 6 号墳、花山 6 号墳、大谷山 22 号墳、大日山 35 号墳の羨道及び排水溝と玄室の位置関係を見ると、排水溝のない又は簡易的な排水溝を持つ大谷山 6 号墳と花山 6 号墳は羨道又は排水溝の延長が玄室奥壁中央付近に達する。一方この後に続く大谷山 22 号墳と大日山 35 号墳は羨道の延長はずれるものの、排水溝の延長は玄室奥壁中央付近に達する。このことから、排水溝は玄室のプランを設定する際に同時に位置決めされている可能性がある。

また、大日山 35 号墳では、主軸方向の排水溝に直交する溝が新たに検出された。玄室石積み下に巡る排水溝の可能性が高いが、玄室前道基石の外側を巡る溝は岩橋千塚古墳群では初めての事例である。ただし、玄室前道基石の下に設置される溝と比べても石室の構築中での位置づけは本質的には変わらないため、玄室の石積み下の溝と同じ分類で良いものと考えられる。

岩橋千塚古墳群の排水溝は横穴式石室の導入時から、両袖や左片袖式の石室に採用される、玄室四周を巡り玄門で羨道主軸溝に合流する排水溝（大谷山 28 号墳、大谷山 27 号墳等）と、首長墓で右片袖傾向の石室に採用される羨道部から玄室方向に徐々に延びていく主軸沿いの排水溝（花山 6 号墳、大谷山 22 号墳、大日山 35 号墳等）の 2 形態が存在し、6 世紀中頃にこれらが融合した天王塚古墳のような形態の排水溝が出現すると考えていた（参考文献 6）。今回の調査で、全体の様子は確認できていないものの、天王塚古墳の前の首長墓である 6



* 玄室実測図はH15年度調査図面を使用

図10 大日山 35号墳 石室内排水溝平面図・断面図 (S=1/50)

世紀前半の大日山 35 号墳で両者を取り入れた形態の排水溝が採用されている可能性が高くなった。羨道部など部分的な発掘のみで平面形態が推定されている事例には注意する必要があるが、紀ノ川の北岸に 6 世紀前半に造られた両袖式の晒山 10 号墳では前者の形態が採用されている。県内の他事例を含めても同じ傾向を示すことから、両者の排水溝が融合する時期は前後しても、大きな流れに変化はないものと考えられる。

一方で県外の事例を見ると、岩橋千塚古墳群ほど設置される割合は多くないが、6 世紀前半頃から主軸に沿った排水溝の事例が徐々に増加している。岩橋千塚古墳群における主軸に沿った排水溝は大谷山 6 号墳、花山 6 号墳から徐々に発達する過程が確認できているが、県外の排水溝の出現との関係を明らかにするにはより詳細な検討が必要であり、今後の課題としたい。

(2) 滞水の原因について

前山 A13 号墳については、溝内の土の堆積状況をみると堆積土に流水の痕跡がなく、埋土である地山土と類似することから、溝内を流れた土が堆積したものではなく、上部の埋土が溝内に流れ込んだものと考えられる。蓋石間の隙間が大きいことが原因の一つとしてあげられるが、前庭部等については第 1 期調査で蓋石を除去したことが大きく影響している可能性もある。

大日山 35 号墳については、溝内の堆積土は前山 A13 号墳ほど密でなく、壁面から流れ出した細粒土と類似することから、石室内に流入する水量の増加などが原因で石積み裏の細粒土が流出した結果、目詰まりを起こした可能性が高い。

(3) 今後の整備に向けて

大日山 35 号墳、前山 A13 号墳ともに排水溝の目詰まりの原因となる土の流入を防ぐ必要があるが、近年、ゲリラ豪雨などにより一度に降る雨量が大幅に増加し、その頻度も多くなっている。これに伴い流入雨量も多くなり、本来の排水機能を回復しても対応できなくなる可能性がある。このため、排水機能の回復だけでなく石室内への雨水と細粒土の

流入を防止することにより排水機能を維持できるように整備を行う必要がある。なお、後者の措置は墳丘盛土の流出を防ぎ石室構造を安定化させる点においても重要である。

a. 排水機能の回復

前山 A13 号墳については、溝内または溝蓋石上に配管を設置し積極的に排水するか又は蓋石上に透水性の高い材料を充填し、溝以外で浸透排水するなどの方法を検討する。

大日山 35 号墳については、羨道より外側の調査・掘削ができない状況での排水機能の復旧に課題がある。現状の排水溝を使った排水とともに、これ以外の排水路の掘削・設置やポンプなどを使った機械的な排水も検討すべきである。

b. 雨水の流入防止

長期的な目で見ると、大日山 35 号墳だけでなく前山 A13 号墳についても排水溝の目詰まりの原因となる雨水の流入を防ぐべきである。発掘調査後の整備設計において、盛土量の増加、根の除去、遮水シートの設置、古墳周辺部への排水溝設置など、石室への流入量を減少させる対策の有効性について検討する必要がある。

【註】

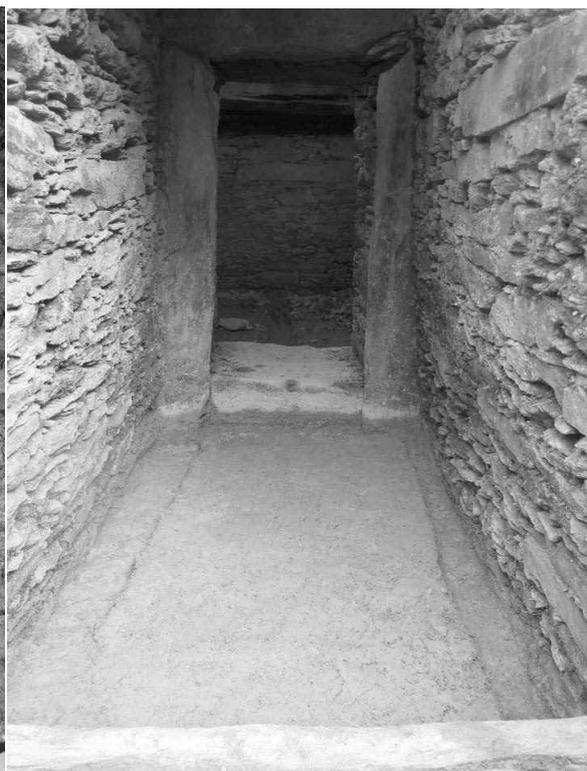
- 1 遺構実測図の基準線は、平面直角座標系（世界測地系）に基づき、図示した北方位は座標北を示す。
- 2 標高は東京湾平均海面（T.P.）の数値であり、単位はmを使用している。
- 3 発掘調査時の土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』（平成 26 年度）を使用した。
- 4 本事業で使用した調査コードは、以下のとおりである。21-01・185-379（2021 年度－和歌山市－岩橋千塚古墳群－前山 A 13 号墳）、21-01・185-132（2021 年度－和歌山市－岩橋千塚古墳群－大日山 35 号墳）出土遺物及び記録類はこのコードを用いて管理している。

【参考文献】

- 1 和歌山県 1921 『和歌山縣史蹟調査報告第一』
- 2 猪熊兼勝 1967 「横穴式石室の排水溝」『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室（関西大学文学部考古学研究室紀要第 2 冊）
- 3 横穴式研究会 2007 『近畿の横穴式石室資料集成』
- 4 和歌山県教育委員会 2013 『大日山 35 号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 2－』
- 5 和歌山県教育委員会 2015 『特別史跡岩橋千塚古墳群発掘調査・保存整備事業報告書 3－大日山 35 号墳・前山 A 13 号墳・前山 A 58 号墳発掘調査報告書－』
- 6 佐々木宏治 2020 「岩橋千塚古墳群の横穴式石室構造と雨水対策」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 8 号、和歌山県立紀伊風土記の丘



1 玄室排水溝〔調査区Ⅰ〕再掘削状況(西から)



2 羨道〔調査区Ⅱ〕扉石除去状況(西から)



3 羨道排水溝〔調査区Ⅱ〕検出状況(東から)



4 羨道排水溝〔調査区Ⅱ〕玄門付近検出状況(西から)

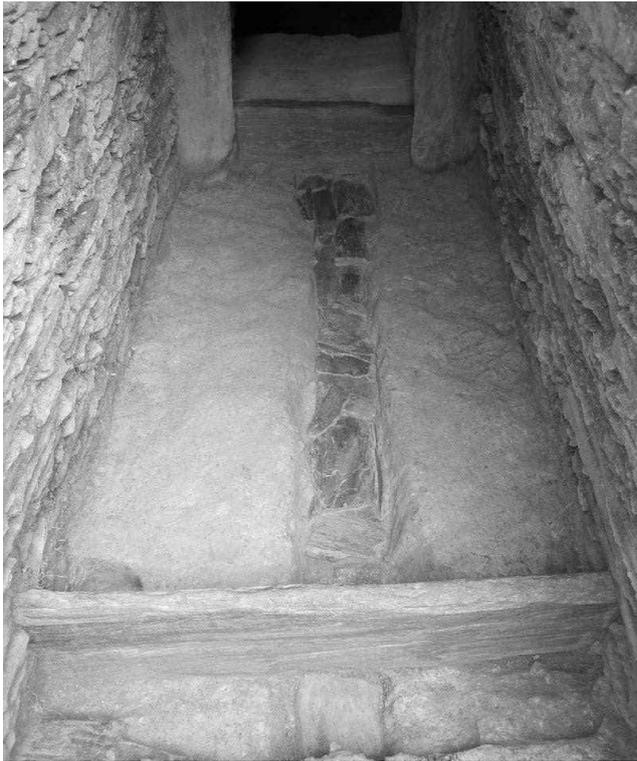


5 羨道排水溝〔調査区Ⅱ〕
玄門付近蓋石上土層断面(西から)



6 羨道排水溝〔調査区Ⅱ〕
羨門仕切石掘方検出状況(西から)

前山A13号墳



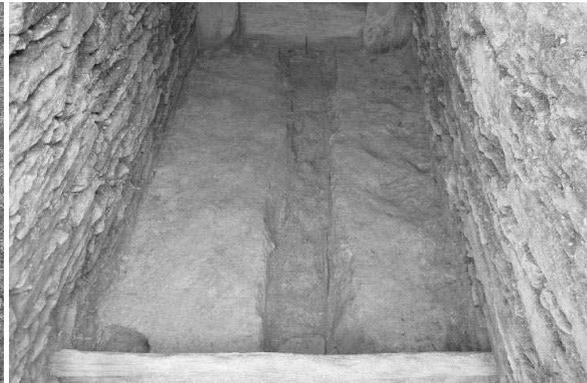
7 羨道排水溝[調査区Ⅱ] 蓋石検出状況(西から)



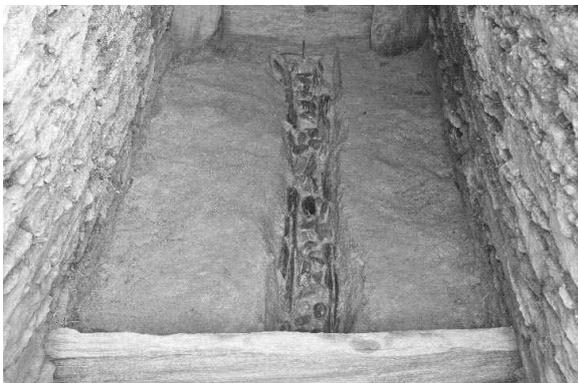
8 羨道排水溝[調査区Ⅱ] 蓋石検出状況(東から)



9 作業状況(西から)



10 羨道排水溝[調査区Ⅱ] 蓋石除去状況(西から)

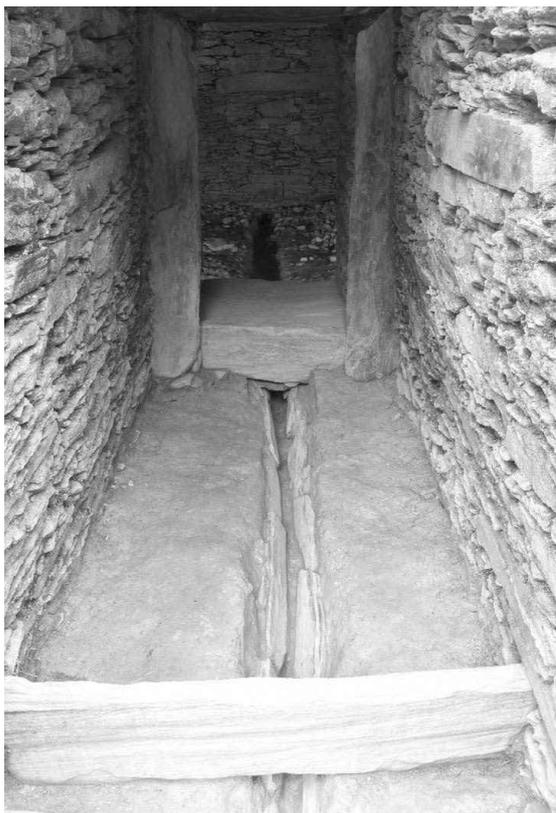


11 羨道排水溝[調査区Ⅱ] 玉石検出状況(西から)



12 羨道排水溝[調査区Ⅱ] 玉石検出状況(東から)

前山A13号墳



13 羨道排水溝[調査区Ⅱ] 玉石除去・側石検出状況(西から)



14 前庭排水溝[調査区Ⅲ] 蓋石上土層断面(東から)



15 前庭排水溝[調査区Ⅲ] 蓋石検出状況(東から)



16 前庭排水溝[調査区Ⅲ] 蓋石検出状況(西から)

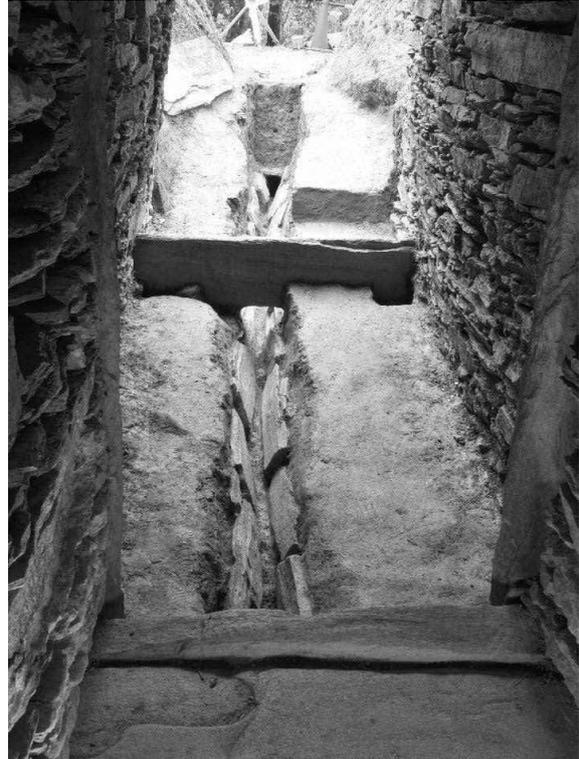


17 前庭排水溝[調査区Ⅲ] 玉石検出状況(西から)

前山A13号墳



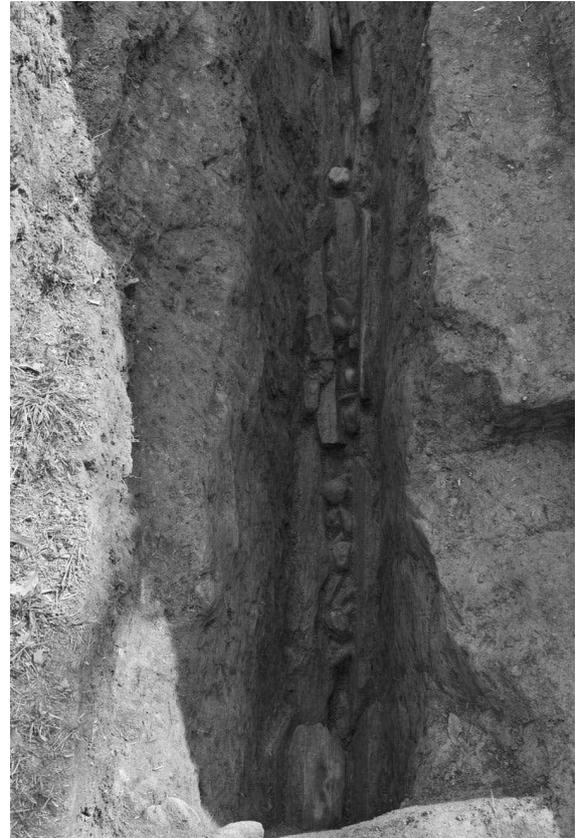
18 前庭排水溝[調査区Ⅲ]
玉石除去・側石検出状況(西から)



19 羨道・前庭排水溝[調査区Ⅱ・Ⅲ]
玉石除去・側石検出状況(東から)



20 前庭排水溝[調査区Ⅳ] 蓋石検出状況(西から)



21 前庭排水溝[調査区Ⅳ] 玉石検出状況(西から)

前山A13号墳



22 墳丘外排水溝〔調査区V〕 蓋石検出状況(西から)



23 墳丘外排水溝〔調査区V〕 蓋石検出状況(東から)



24 墳丘外排水溝〔調査区V〕 玉石検出状況(西から)

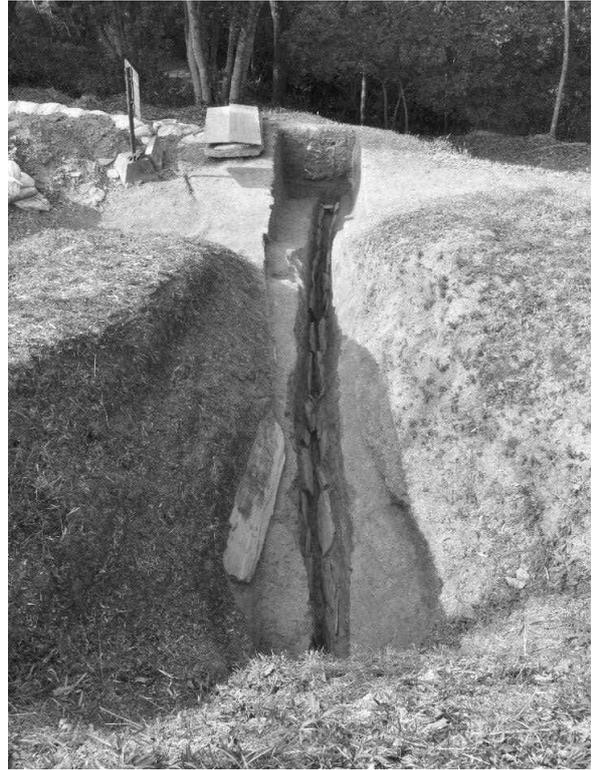


25 墳丘外排水溝〔調査区V〕 玉石検出状況(東から)

前山A13号墳



26 墳丘外排水溝[調査区Ⅴ]
玉石除去・側石検出状況(西から)



27 前庭・墳丘外排水溝[調査区Ⅲ～Ⅴ]
玉石除去・側石検出状況(東から)



28 排水溝 玉石除去・側石検出状況(東から)

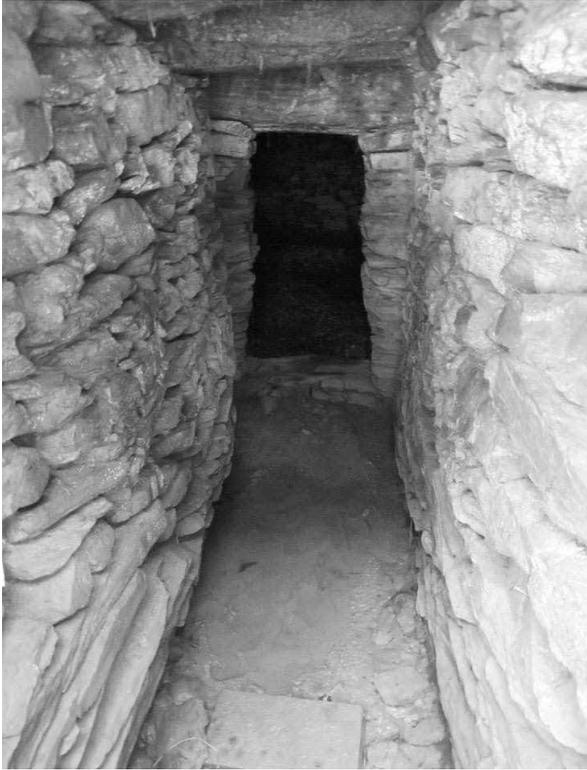


29 墳丘外排水溝[調査区Ⅴ] 西壁土層断面(東から)



30 玄室前道基石下排水溝[調査区Ⅱ]
玉石除去状況(東から)

前山A13号墳



31 羨道 発掘調査前状況(西から)



32 羨道排水溝 蓋石検出状況(西から)



33 羨道排水溝 蓋石検出状況(東から)



34 羨道排水溝 玄門西側蓋石検出状況(東から)



35 羨道排水溝 玄門西側蓋石一部除去状況(東から)

大日山35号墳



36 羨道排水溝 玉石検出状況(西から)



38 羨道排水溝 玉石除去状況(西から)



37 羨道排水溝 玉石検出状況(東から)



39 羨道排水溝 玉石除去状況(東から)



40 羨道排水溝 西端断面(東から)

大日山35号墳

【資料紹介】 柳川コレクション資料目録（２）

—漆器類を中心に—

蘇理 剛志

本稿は、平成 27 年度に海南市黒江の柳川和一郎氏と柳川泰彦氏のご厚意により当館に寄贈いただいた同家の生活用具及び商い用具の中から、現段階で整理の終わった資料の目録と写真の一部を掲載するものである。

なお、本稿はさきに平成 27 年度『紀伊風土記の丘研究紀要』第 5 号において藤森寛志が報告した「柳川コレクション資料目録（１）」の続編であり、目録の資料番号もこれに継ぐ形で、ID [柳川—166] 以降の経過を別表のようにまとめた。

とくに今回は、コレクションのうち江戸時代に黒江漆器の製造を生業としてきた柳川家にゆかりの深い漆器関係を重点的に整理し、目録（１）の成果を含めた漆器資料の概要が紹介できるようにした。

1. 柳川家旧蔵の漆器類

現在整理中である柳川家旧蔵の生活資料の点数はおよそ 300 点前後とみられるが、そのうち漆器類の総計は前回・今回の整理で 143 件あることが確認できた。これは、柳川コレクションの一括資料全体の中でも主要な群をなしており、黒江漆器の製造・卸を営んでいた柳川家の資料を特徴づけるものだといえる。それらの漆器の数を便宜上用途別に分類すると、次のようになる。

・ 椀物類	47 件	
・ 折敷・膳類	42 件	
・ 重箱類	25 件	
・ 酒器類	9 件	
・ 盆類	10 件	
・ 皿類	6 件	
・ その他	4 件	合計 143 件

このうち最も多いものは、江戸時代以来、黒江でさかんに製造された椀物類（47 件）で、八十椀（四つ椀）のほか、菓子椀、吸物椀、吸笠、木井などの

種類がある。

その大半は、江戸時代後期から昭和時代にかけて柳川家の日常生活や行事の場面で使用されたものであるが、会津塗（福島県）、加賀塗、輪島塗（石川県）、越前塗（福井県）など他地域の漆器も含まれる。また、椀物の商品を納めた木箱が 9 件あり、当地で製造された八十椀を紙や布に一袋にまとめ、概ね 10 袋を 1 セットとして梱包していた。

次に多い折敷・膳類（42 件）も、黒江の地で古くから製造された当地との縁が深い道具である。

これらは柳川家代々の暮らしに合わせてその都度購入・使用されたとみられ、折敷のほか、足打折敷、木具膳、吸物膳、宗和膳、猫足膳、蝶足膳などの種類がある。これらは家庭の日常生活や来客時のもてなし、慶弔の諸行事など場面ごとに使い分けされたと考えられ、多くは 10 点ずつ木箱に収納されている。

重箱類（25 件）は、正月などの行事で用いた重箱や重台、婚礼の披露などに用いた栄重（七つ入子重）、茶席などに用いた食籠、収納箱に手持ちのついた小型の弁当重箱などがある。

とくに重箱は、大きさが六寸～八寸、四段～五段の重厚なものが多く、丸に三つ葉柏の家紋入りのほか、会津塗の伝統技法である蠟色金虫食塗や、金蒔絵や沈金で松竹梅など吉祥文様を施した豪華なものも含まれる。

酒器類（9 件）は、盃、盃台、塗猪口、徳利台、酒宴台などで儀礼や行事に用いたほか、盃は記念の贈答品にも用いられた。

盆類（10 件）は、銘々盆、茶碗蒸台、丸盆、平盆、広蓋などがある。

皿類（6 件）は、銘々皿、茶津、吸血などであり、これらは主に行事や来客の際に用いられたとみられる。

このほか、その他（4 件）として、文箱、家紋入りの陣笠などがある。

2. 注目されるもの

柳川コレクションの漆器類には、納められた木箱の一部に内容物の名称のほか年号が墨書されたものがあり、生活用具の変遷をたどるための歴史資料としての価値も持っている。また、箱書に年号がない場合も、江戸期の柳川家の屋号である「岩出屋平兵衛」が墨書されたものは、近世まで遡るものである可能性が高い。

(1) 江戸時代の漆器

年号のある漆器のうち、最も古いものは天明8年(1788)箱書銘のある銘々盆〔柳川—201〕で、青漆で縁取られた盆の見込みに朱漆を塗り、その上に色漆でシンプルな金柑の模様絵を意匠に描いた小盆が19枚と、後に混入したとみられる黒塗盆1枚が収められていた。その蓋箱には「天明八年申九月吉日／岩出や平兵衛／金柑絵銘々盆貳拾人前」の墨書があり、もとは20枚あったことが確認できる。

その次に古いものは、寛政3年(1791)銘のある盃台〔柳川—097〕で、全体に朱漆が美しく塗られているが、ほとんど使用していないためか状態が極めて良好である。

この頃は、柳川家三代目にあたる初代・平兵衛(?～1791年没)がいた時代にあたる。同家は、この三代目から「岩出屋平兵衛」を名乗り、椀や折敷などの漆器商いを始めたことが、同家文書「日家栄」(文政14年、五代目平兵衛記)に記されている。

現在、紀伊風土記の丘に移築保存される重要文化財の旧柳川家住宅は、四代目平兵衛時代の文化4年(1807)に建てられたものだが、この銘々盆や盃台はそれより以前、柳川家が漆器商売をはじめた時代を物語る資料として歴史的価値のあるものと言えよう。

このほか、近代以前の年号のある箱入りの漆器類は、いずれも19世紀の年号を箱書銘にもつもので、小計で盃台、椀、盆、重箱など12点を数える。ただし、箱書の無いものの中にも資料の状態からみて江戸時代の品と思えるものがまだ数点存在する。

(2) 椀物商品

前記の椀物商品〔目録(1)柳川—012、058、121～123、125～128〕は、明治前期～30年代ごろのものと思われ、大半は当時黒江において盛

んに製造されていた八十椀である。柳川家は、明治の初め頃には漆器商いを止めていたが、家庭で使用するなど何らかの理由で残されたか、購入したものであると思われる。

八十椀は「四つ椀」とも呼ばれ、飯椀・汁椀・平椀(煮物椀)・壺椀(吸物椀)で構成され、椀と蓋8つの器が一揃えになり、椀のほか蓋や取り皿にも使える機能的な器である。これらの椀蓋を商品として販売する際には8種の器を組み合わせ、一揃えを和紙や布の堅袋に入れて包装し、さらに必要数を木箱に梱包して出荷した。

本資料は、明治期前半の黒江漆器の売れ筋商品を知るとともに、その販売の様子がうかがい知れる資料にもなっている。

3. まとめにかえて

以上、今回は柳川コレクションのうち漆器類について小括したが、これらの資料は黒江という江戸時代以来の漆器の町に相応しい内容をもち、かつ時代ごとの町場の暮らしの変遷を知ることができる貴重な資料群となっている。今後も、各資料を詳しく調査することによって、時代ごとの漆器の流行や流通、家人の趣向や好みなど、黒江商人(あきゅうど)の暮らしぶりが窺い知れるようになるだろう。

なお、同コレクションには、このほか陶磁器類や衣食住の生活用具、商い関係の道具が残される。今後も、継続的にそれらを種類別に調査・整理・報告をしながら、柳川コレクションの民俗資料としての価値づけと、資料に関する保存と活用について考えていきたい。

参考文献

藤森寛志「【資料紹介】柳川コレクション資料目録(1)」『紀伊風土記の丘研究紀要』第5号 2017

和歌山県漆器商工業協同組合編『紀州漆器のあゆみ』1986

和歌山県文化財研究会編『重要文化財 旧柳川家住宅(主屋・前蔵)／旧谷山家住宅移築修理工事報告書』1971

表 柳川家資料目録

ID	名称	素材	点数		時代	西暦	備考
			件	点			
柳川-166	吸物椀（会津製総朱吸物椀）	漆	1	10	-	-	
柳川-167	吸物椀（黄丸石州形）	漆	1	10	-	-	
柳川-168	吸物椀（小吸惣朱お多福）	漆	1	10	-	-	花之丸画入り
柳川-169	丸盆（洗朱六寸丸盆）	漆	1	9	-	-	入れ子盆
柳川-170	重箱（六寸四段重）	漆	1	4	慶応3年	1867	持ち手付き箱入り
柳川-171	重箱（蠟色金虫喰六寸四段重）	漆	1	4	-	-	会津塗
柳川-172	黒塗文箱（家紋入）	漆	1	1	-	-	
柳川-173	酒宴台	漆	1	1	安政6年	1859	
柳川-174	広蓋（会津製蠟色広蓋）	漆	1	2	-	-	会津塗、松竹梅蒔絵金縁
柳川-175	重箱（惣朱六寸四段重）	漆	1	4	-	-	
柳川-176	蝶足膳（食初め椀付き）	漆	1	5	昭和61年	1986	越前塗
柳川-177	木具膳（蓋・組箱付き）	漆	1	7	-	-	
柳川-178	木具膳（本堅地宗真臺）	漆	1	1	明治4年	1871	
柳川-179	茶津（真茶津）	漆	1	50	明治3年	1870	
柳川-180	黒塗重箱（八寸五段家紋入り）	漆	1	5	-	-	
柳川-181	会席椀（溜内艶消塗駒形会席椀）	漆	1	10	-	-	製造人松本豊吉
柳川-182	会席椀（溜内艶消塗駒形会席椀）	漆	1	10	-	-	
柳川-183	銘々盆（会津製銘盆）	漆	1	22	文久2年	1862	会津塗、沈金塗皿1枚混入
柳川-184	吸物膳（黒）	漆	1	10	-	-	
柳川-185	吸物椀（青内朱形砧形）	漆	1	10	-	-	
柳川-186	吸物椀（浅朱花鳥蒔絵椀）	漆	1	15	-	-	箱と内容物に相違
柳川-187	菓子椀（浅朱菓子椀）	漆	1	15	-	-	
柳川-188	弁当重（御膳）	漆	1	3	嘉永2年	1849	「楊柳亭主人」の墨書
柳川-189	菓子椀（惣朱菓子椀）	漆	1	11	文政6年か	1823	
柳川-190	菓子椀（惣朱菓子椀）	漆	1	10	文政6年	1823	189と一組
柳川-191	菓子椀（惣朱菓子椀）	漆	1	6	明治10年	1877	155と一対、他種椀混在
柳川-192	銘々盆（加賀楓製朱銘々盆）	漆	1	20	-	-	
柳川-193	菓子椀（川貞製惣朱菓子椀）	漆	1	10	-	-	3種の菓子椀が混在
柳川-194	菓子椀（惣真菓子椀 松竹梅吹寄）	漆	1	10	-	-	
柳川-195	弁当重（青内朱弁当重 沈金絵入り）	漆	1	5	-	-	
柳川-196	吸物膳	漆	1	10	-	-	
柳川-197	二の椀（惣真二ノ椀、引盃入）	漆	1	37	-	-	

ID	名称	素材	点数		時代	西暦	備考
			件	点			
柳川-198	重箱（黒内朱八寸重箱、家紋入）	漆	1	4	明治10年	1877	
柳川-199	重箱（木目内朱八寸重箱）	漆	1	4	-	-	蓋に破損
柳川-200	吸物椀（黒内朱見山）	漆	1	10	-	-	一組分椀なし（蓋のみ）
柳川-201	銘々盆（金柑絵銘盆）	漆	1	20	天明8年	1788	うち1枚黒塗盆
柳川-202	重箱（黒内朱四重）	漆	1	4	明治9年	1876	
柳川-203	木具膳・折敷・重箱	漆	1	10	-	-	
柳川-204	弁当重	漆	1	3	-	-	
柳川-205	盃・小箱類（箱入）	漆	1	19	-	-	
柳川-206	吸物椀（亀波黒内朱吸物椀）	漆	1	10	-	-	
柳川-207	会席膳（溜塗会席膳）	漆	1	5	昭和57年	1982	大丸購入品か
柳川-208	会席膳（溜塗会席膳）	漆	1	5	昭和57年	1982	大丸購入品か
柳川-209	会席膳（溜塗会席膳）	漆	1	5	昭和57年	1982	大丸購入品か
柳川-210	重箱（蠟色紋付五段重箱）	漆	1	5	明治36年	1903	大澤紋四郎作
柳川-211	重箱（沈金松竹梅絵五段重箱）	漆	1	5	明治4年	1871	輪島塗
柳川-212	会席膳	漆	1	10	-	-	



【柳川-170】重箱（慶応3年）



【柳川-173】酒宴台（安政6年）



【柳川-183】銘々盆（文久2年）



【柳川-188】弁当重（嘉永2年）



【柳川-190】菓子椀（文政6年）



【柳川-201】銘々盆（天明8年）

和歌山県立紀伊風土記の丘の植物について（概要）

松下 太

はじめに

2019年4月から2020年11月までの期間に、園内の通路沿い、管理された花壇や広場、移築民家周辺など、来園者が比較的容易に観察できる範囲で確認できた植物を報告する。

別表に示すように、この期間に確認されたものは木本が233種(品種を含む)草本が397種(同)シダが37種、合計で667種であった。ただしこれらは同定できたもののみであり、未同定のものを含めるとさらに多くなる。これらについては、同定でき次第、機会をみて報告する予定である。

園内には、古墳を巡りながら散策するための園路が設けられていて、脚力の個人差はあるものの、約1時間で一周できる。さらにそこから、脇道が整備されていて、来園者はそれぞれの目的に応じたコースを歩く。そして健康保持、体力増進を図り、史跡に古代のロマンを求め、自然に浸ることによって心を癒している。

道沿いで目に付く自生の木本

大きな木ではクヌギ、アベマキ、コナラ、アラカシ、シラカシ、シイノキ(ツブラジイ)、ヤマザクラ、カスミザクラ、ケヤキ、クスノキ、カラスザンショウ、ヤマモモ、ナナミノキ、キリなどが目立つ。

次いでハゼノキ、カクレミノ、アキニレ、ヤブニッケイ、サンゴジュ、ヤブツバキ、ネズミモチ、クロバイなどが多く、さらに小さなものではムラサキシキブ、イヌビワ、ヒサカキ、ヌルデ、モチツツジ、ガマズミ、カマツカ、林床にはコウヤボウキ、ヤブコウジ、フユイチゴなどが繁茂している。

道沿いで目に付く植栽された木本

大きなものではシナサワグルミ、ケヤキ、ポプラ、トチノキ、ユリノキ、イチョウ、ソメイヨシノ、トガサワラ、フウなどが遠くからでも目に付く。道沿

いにはサンゴジュ、ハナゾノツクバネウツギ(アベリア)、トウネズミモチなどが植えられている。花木園にはハクモクレンとコブシが植えられていて、花期には来園者の目を楽しませている。

また、駐車場から資料館に通じる進入路にはサトザクラの一品種であるカンザンと、ヤマモモやクスノキが植えられている。また、それに並行してケヤキも植えられている。

園内の草本

園内では、自生するもの、植栽ののち自生状態になったとみられるもの、そして栽培しているものなど、多くの草花を觀賞できる。次にその代表的なものを季節ごとにあげてみる。

春

ヒトリシズカ、キバナイカリソウ(写真1)、アマドコロ、アミガサユリ(写真2)、ウマノアシガタ、ウラシマソウ、オオジシバリ、エンコウソウ、ギンラン、アサザ、アヤメ、カラスビシャク、キシヨウブ、シバザクラ、シラン、ソクシンラン、タチツボスミレ、トウカンゾウ、フタリシズカ、

夏

アガパンサス、オカトラノオ、キキョウ、キキョウラン、コ克蘭、ササユリ(写真3)、ネジバナ、ヒメヒオウギスイセン、ヤブガラシ、ユウスゲ、ユキノシタ、オニユリ、オミナエシ、カノコユリ、カワラナデシコ、ナツズイセン、ヒオウギ、ヤブカンゾウ、ヤマユリ、ウバユリ、キツネノカミソリ(写真4)、タカサゴユリ、ノカンゾウ、ヤブミョウガ、メハジキ

秋

アキノタムラソウ、アメリカセンダングサ、アリアケスミレ、ヌスビトハギ、アレチヌスビトハギ、オケラ(写真5)、カクトラノオ、キツネノマゴ、クズ、コナギ、ツリガネニンジン、ツルボ、ナンカイギボウシ、ヒガンバナ、ヒメジソ、フジバカマ、ワレモコウ、アキノキリンソウ、コセンダングサ、コルチ

カム、センブリ（写真6）、セイタカアワダチソウ、
台湾ンホトトギス、ツワブキ、ミゾソバ、キッコ
ウハグマ、コウテイダリア、ヨメナ、イナカギク、
シラヤマギク、リュウノウギク

同じく木本についてもあげてみる。

春

ヤブツバキ、サンシュユ（写真7）、カマツカ、ク
ロバイ、シナレンギョウ、ジンチョウゲ、ソメイヨ
シノ、ヤマザクラ、カスミザクラ、ドウダンツツジ、
ノダフジ、ハナズオウ、モチツツジ、ヒラドツツジ、
クルメツツジ、ミツバアケビ、アケビ、ガマズミ、
センダン、トチノキ、ナンテンハギ（写真8）、ナ
ンテン、ネジキ、ネズミモチ、テイカカズラ、バイ
カウツギ、ハクチョウゲ、ハコネウツギ、マルバウ
ツギ

夏

アカメガシワ、キササゲ、クチナシ、クリ、ケンポ
ナシ（写真9）、シイノキ、シャシャンボ、タブノキ、
トウネズミモチ、ナツフジ、ナツメ、ネコハギ、ネ
ムノキ、ヤブコウジ、クサギ、ヌルデ、ビナンカズ
ラ、サルスベリ、ムクゲ

秋

キンモクセイ、ゴンズイ、ツクシハギ、ニシキハギ、
マルバハギ、フユイチゴ、フヨウ、メドハギ、コウ
ヤボウキ、サザンカ、チャノキ、ナワシログミ、ハ
マヒサカキ、ヒイラギ

冬

ビワ、ウメ、シキミ（写真10）、ロウバイ、ヤブ
ツバキ

万葉植物園の植物

万葉植物園は、園内の西に向かう園路沿いに、約
1650平方の斜面を利用して造られている。

そこには自生の植物のほかにも、万葉集に歌わ
れた植物（以下万葉植物）を植栽し、歌碑とともに
万葉植物も観賞できるように整備されている。それ
で散策しながら植物をゆっくり観察出来る場所とし
て、来園者に親しまれている。

万葉集には植物を歌った歌が1700余首あり、
植物は150余種を数える。

万葉植物園では、木本97種、草本188種シダ
20種を確認しているが、そのうち万葉植物は木本
43種、草本29種、シダ2種である。合計で74
種なので、万葉植物全体の半数程度は植栽または自
生していることになる。

主なものをあげると、木本ではネズミサシ（むろ
のき）ネムノキ（ねぶ）ウツギ（うのはな）エゴノ
キ（ちさ）ビナンガズラ（さなかづら）ミツマタ（さ
きくさ）ヤブコウジ（やまたちばな）アセビ（あしび）
アジサイ（あぢさい）ウメ（うめ）センダン（あふ
ち）モミ（おみのき）イロハカエデ（かへるで）ヌ
ルデ（かづのき）サクラ類（さくら）コウヤボウキ（た
まばはき）ハギ類（はぎ）ハゼノキ（はじ）ホオノ
キ（ほほがしわ）など、

草本ではオケラ（うけら）ツユクサ（つきくさ）ヤ
ブカンゾウ（わすれぐさ）ヨシ（あし）ショウブ（あ
やめぐさ）ヨメナ（うはぎ）ヒトリシズカ（つぎね）
ヒオウギ（ぬばたま）ハマオモト（はまゆふ）などで、
シダではオオタニワタリ（みつがしは）が数株植栽
され、ノキシノブ（しだくさ）が自生している。

（ ）内は古名

外来植物について

園内では、これまでに85種の外来植物を確認し
ているが、そのうちとくに目立つものは、ウラジロ
チチコグサ、メリケンカルカヤ、ツボミオオバコ、
アレチヌスビトハギ、コセンダングサ、セイタカア
ワダチソウ、ナルトサワギク、ナギナタガヤ、ナヨ
クサフジ、ヒメジョオン、ハルジオン、ホソムギな
どである。

風土記の丘周辺で普通に見られる、例えばアレチ
ハナガサ、アメリカセンダングサ、オオキンケイギ
ク、ヒメツルソバ、ホソアオゲイトウ、シナガワハ
ギ、アレチウリ、メマツヨイグサ、ヒルザキツキミ
ソウ、イヌコモチナデシコ、マツバゼリ、ユウゲシ
ョウなどはほとんど、またはまったく見られない。

普段から除草作業などの整備が十分になされてい
ることがその理由かもしれない。

新しく造成した場所では、よそからの土砂の搬入
があったためか、ヘラオオバコ、シャクチリソバ、
アメリカスズメノヒエほか、何種類かの外来植物が

確認できている。

ナラ枯れの被害について

ナラ枯れは、カシノナガキクイムシ（以下、略称カシナガ）によって、細い若木ではなく、大きなコナラやシイノキなどが枯死する被害である。これまで和歌山県でも多くの地域からその被害の状況を聞いていたが、本園でも被害が顕著になってきている。

被害にあった木の幹には3mm程度の穴が無数にあき、そこから木の粉が出て、木の根元にたくさんたまっているのですぐに判断できる。枝は先から枯れ始め、葉は茶色に変色し、やがて落葉する。秋になって葉が茶色になる際の健全な色とは明らかに色合いが異なるので、それも判断材料となる。

今の時点では、本園で被害が見られるのはコナラ、クヌギ、アベマキ、シイノキ（ツブラジイ）、アラカシの5種である。そのうち最も顕著なのがコナラである。

広大な園全体を調査できていないが、2020年9月16日に万葉植物園周辺で調べた結果、コナラ30本中13本、クヌギ18本中5本、アラカシ6本中3本に被害がみられ、完全に枯死している木も少なからず確認できた。

2019年は、主に資料館より西側の木に被害が見られたが、2020年には徐々に東側にも広がってきている。資料館の北東に位置する大池の周辺や、南側の前山A地区周辺でも次から次に大きな木が被害にあっているのが現状である。

倒木による事故を防ぐために何本かは伐採していたのだが、まさに焼け石に水の状態である。カシナガの侵入を防ぐことは物理的に不可能だと思われる。そして、すでに被害にあっている木を健全な状態に戻すことも不可能であろう。

カシナガには何の罪もないことである。彼らはただ自らの生命の存続と種の保存のためにブナ科の木の幹に侵入しているだけに過ぎない。

よって、人間には現状を静観し、大きな木が枯れ、そのあとに若い苗木が育つことを期待するしかなく術はないと考える。

森林が遷移し、生まれ変わっていく過程を長い目で見つめることで、環境保全の意識も高揚するも

のと思われる。

(写真資料)

写真1 キバナイカリソウ



写真2 アミガサユリ



写真3 ササユリ



写真4 キツネノカミソリ



写真8 ナンテンハギ



写真5 オケラ



写真9 ケンポナシ



写真6 センブリ



写真10 ヒトツバハギ



写真7 サンシュユ



写真11 シキミ



2019年4月から2020年11月までに確認した植物（草本）

種名	科名	種名	科名
1 アイノセイタカハハコグサ	キク	58 ウマノアシガタ	キンポウゲ
2 アオイゴケ	ヒルガオ	59 ウマノミツバ	セリ
3 アオカモジグサ	イネ	60 ウラシマソウ	サトイモ
4 アオスゲ	カヤツリグサ	61 ウラジロチチコグサ	キク
5 アオツツラフジ	ツツラフジ	62 ウリクサ	アゼナ
6 アオミズ	イラクサ	63 エゾノギシギシ	タデ
7 アカカタバミ	カタバミ	64 エノキグサ	トウダイグサ
8 アカザ	アカザ	65 エノコログサ	イネ
9 アカネ	アカネ	66 エビヅル	ブドウ
10 アガパンサス	ユリ	67 エビネ	ラン
11 アキカラマツ	キンポウゲ	68 エンコウソウ	キンポウゲ
12 アギナシ	オモダカ	69 オオアマナ	ユリ
13 アキノエノコログサ	イネ	70 オオアレチノギク	キク
14 アキノキリンソウ	キク	71 オオイヌタデ	タデ
15 アキノタムラソウ	シソ	72 オオイヌノフグリ	オオバコ
16 アキノゲシ	キク	73 オオオナモミ	キク
17 アキメヒシバ	イネ	74 オオジシバリ	キク
18 アサザ	ミツガシワ	75 オオニシキソウ	トウダイグサ
19 アシボソ	イネ	76 オオブタクサ	キク
20 アゼガヤ	イネ	77 オカトラノオ	サクラソウ
21 アゼナ	アゼナ	78 オケラ	キク
22 アブラガヤ	カヤツリグサ	79 オッタチカタバミ	カタバミ
23 アブラスキ	イネ	80 オトギリソウ	オトギリソウ
24 アマチャヅル	ウリ	81 オニウシノケグサ	イネ
25 アマヅル	ブドウ	82 オニタビラコ	キク
26 アマドコロ	キジカクシ	83 オニノゲシ	キク
27 アミガサユリ	ユリ	84 オニユリ	ユリ
28 アメリカアゼナ	アゼナ	85 オミナエシ	オミナエシ
29 アメリカイヌホオズキ	ナス	86 オモト	キジカクシ
30 アメリカキンゴジカ	アオイ	87 オヤブヅラミ	セリ
31 アメリカスズメノヒエ	イネ	88 オランダカイウ	サトイモ
32 アメリカセンダングサ	キク	89 オランダミミナグサ	ナデシコ
33 アメリカタカサブロウ	キク	90 カエデドコロ	ヤマノイモ
34 アメリカフウロ	フウロソウ	91 カキツバタ	アヤメ
35 アヤメ	アヤメ	92 カクトラノオ	シソ
36 アリアケスミレ	スミレ	93 カスマグサ	マメ
37 アリノトウグサ	アリノトウグサ	94 カゼクサ	イネ
38 アレチヌスピトハギ	マメ	95 カタバミ	カタバミ
39 アレチハナガサ	クマツヅラ	96 カナムグラ	アサ
40 イ	イグサ	97 カノコユリ	ユリ
41 イガトキンソウ	キク	98 カモガヤ	イネ
42 イタドリ	タデ	99 カモジグサ	イネ
43 イチハツ	アヤメ	100 カヤツリグサ	カヤツリグサ
44 イナカギク	キク	101 カラスノエンドウ	マメ
45 イヌガラシ	アブラナ	102 カラスビシャク	サトイモ
46 イヌコウジュ	シソ	103 カラムシ	イラクサ
47 イヌコハコベ	ナデシコ	104 カワラナデシコ	ナデシコ
48 イヌタデ	タデ	105 カンサイタンポポ	キク
49 イヌビエ	イネ	106 カンツワブキ	キク
50 イヌムギ	イネ	107 カンナ	カンナ
51 イノコズチ	ヒユ	108 キキョウラン	ススキノキ
52 イワニガナ	キク	109 キキョウ	キキョウ
53 インドハマユウ	ヒガンバナ	110 キクムグラ	アカネ
54 ウシハコベ	ナデシコ	111 キシュウスズメノヒエ	イネ
55 ウスアカカタバミ	カタバミ	112 キショウブ	アヤメ
56 ウド	ウコギ	113 キッコウハグマ	キク
57 ウバユリ	ユリ	114 キツネアザミ	キク

	種名	科名		種名	科名
115	キツネガヤ	イネ	173	シナダレスズメガヤ	イネ
116	キツネノカミソリ	ヒガンバナ	174	シバ	イネ
117	キツネノマゴ	キツネノマゴ	175	シハイスミレ	スミレ
118	キヌゲチチコグサ	キク	176	シバザクラ	ハナシノブ
119	キバナイカリソウ	メギ	177	シマスズメノヒエ	イネ
120	キバナガンクビソウ	キク	178	ジャーマンアイリス	アヤメ
121	キバナコスモス	キク	179	シャガ	アヤメ
122	キュウリグサ	ムラサキ	180	シャクチリソバ	タデ
123	ギョウギシバ	イネ	181	ジャノヒゲ	キジカクシ
124	キヨスミギボウシ	キジカクシ	182	シュウカイドウ	シュウカイドウ
125	キランソウ	シソ	183	ジュウニヒトエ	シソ
126	キンエノコロ	イネ	184	シュウメイギク	キク
127	キンミズヒキ	バラ	185	シュンラン	ラン
128	ギンラン	ラン	186	ショウブ	ショウブ
129	クグガヤツリ	カヤツリグサ	187	ショカツサイ	アブラナ
130	クサナギオゴケ	キョウチクトウ	188	シラー	ユリ
131	クサヨシ	イネ	189	シラスゲ	カヤツリグサ
132	クズ	マメ	190	シラヤマギク	キク
133	クリスマスローズ	キンポウゲ	191	シラン	ラン
134	クルマバザクロソウ	ザクロソウ	192	シロザ	アカザ
135	クルマバナ	シソ	193	シロツメクサ	マメ
136	クログワイ	カヤツリグサ	194	シロバナサクラタデ	タデ
137	クワイ	オモダカ	195	スイセン	ヒガンバナ
138	クワクサ	クワ	196	スイバ	タデ
139	ケキツネノボタン	キンポウゲ	197	スイレン	スイレン
140	ケタガネソウ	カヤツリグサ	198	スカシタゴボウ	アブラナ
141	ケチヂミザサ	イネ	199	ススキ	イネ
142	ゲンゲ	マメ	200	スズメウリ	ウリ
143	コウテイダリア	キク	201	スズメノエンドウ	マメ
144	コオニタバコ	キク	202	スズメノカタビラ	イネ
145	コ克蘭	ラン	203	スズメノテッポウ	イネ
146	コゴメガヤツリ	カヤツリグサ	204	スズメノトウガラシ	アゼナ
147	コジキイチゴ	バラ	205	スズメノヒエ	イネ
148	コスミレ	スミレ	206	スズメノヤリ	イグサ
149	コセンダングサ	キク	207	スベリヒユ	スベリヒユ
150	コナギ	ミズアオイ	208	スミレ	スミレ
151	コナスビ	サクラソウ	209	セイタカアワダチソウ	キク
152	コニシキソウ	トウダイグサ	210	セイタカハハコグサ	キク
153	コハコベ	ナデシコ	211	セイヨウカラシナ	アブラナ
154	コバナツツナミソウ	シソ	212	セイヨウジュウニヒトエ	シソ
155	コヒルガオ	ヒルガオ	213	セイヨウタンポポ	キク
156	コブナグサ	イネ	214	セリ	セリ
157	コマツヨイグサ	アカバナ	215	センニンソウ	キンポウゲ
158	コミカンソウ	トウダイグサ	216	センブリ	キキョウ
159	コメツブツメクサ	マメ	217	ソクシンラン	キンコウカ
160	コメナモミ	キク	218	タイワンホトトギス	ユリ
161	コメヒシバ	イネ	219	タカサゴユリ	ユリ
162	コモチマンネングサ	ベンケイソウ	220	タケニグサ	ケシ
163	コルチカム	イヌサフラン	221	タチイヌノフグリ	オオバコ
164	ササクサ	イネ	222	タチツボスミレ	スミレ
165	ササユリ	ユリ	223	タツナミソウ	シソ
166	サジガンクビソウ	キク	224	タツナミソウ（白花）	シソ
167	サフランモドキ	ヒガンバナ	225	タネツケバナ	アブラナ
168	サルトリイバラ	サルトリイバラ	226	タマガヤツリ	カヤツリグサ
169	サンカクイ	カヤツリグサ	227	タマスダレ	ヒガンバナ
170	サンカクヅル	ブドウ	228	タンキリマメ	マメ
171	シオン	キク	229	ダンドポロギク	キク
172	シソ	シソ	230	チガヤ	イネ

	種名	科名		種名	科名
231	チカラシバ	イネ	289	ハハコグサ	キク
232	チゴユリ	ユリ	290	ハマアザミ	キク
233	チチコグサ	キク	291	ハマエンドウ	マメ
234	チチコグサモドキ	キク	292	ハマオモト	ヒガンバナ
235	チヂミザサ	イネ	293	ハマスゲ	カヤツリグサ
236	チドメグサ	ウコギ	294	ハラン	キジカクシ
237	チョウジタデ	アカバナ	295	ハルジオン	キク
238	ツボクサ	セリ	296	ハルノノゲシ	キク
239	ツボミオオバコ	オオバコ	297	ヒエガエリ	イネ
240	ツメクサ	ナデシコ	298	ヒオウギ	アヤメ
241	ツユクサ	ツユクサ	299	ヒガンバナ	ヒガンバナ
242	ツリガネニンジン	キキョウ	300	ヒゴスミレ	スミレ
243	ツルアリドオシ	アカネ	301	ヒデリコ	カヤツリグサ
244	ツルボ	キジカクシ	302	ヒトリシズカ	センリョウ
245	ツルマメ	マメ	303	ヒナギキョウ	キキョウ
246	ツワブキ	キク	304	ヒナキキョウソウ	キキョウ
247	トウオオバコ	オオバコ	305	ヒメウス	キンポウゲ
248	トウカンゾウ	ワスレグサ	306	ヒメオドリコソウ	シソ
249	トウバナ	シソ	307	ヒメガマ	ガマ
250	トキワハゼ	ハエドクソウ	308	ヒメカンゾウ	ワスレグサ
251	トキンソウ	キク	309	ヒメクグ	カヤツリグサ
252	ドクダミ	ドクダミ	310	ヒメコバンソウ	イネ
253	トゲチシャ	キク	311	ヒメジソ	シソ
254	トボシガラ	イネ	312	ヒメジョオン	キク
255	ナガバナタチツボスミレ	スミレ	313	ヒメスミレ	スミレ
256	ナギナタガヤ	イネ	314	ヒメチドメ	ウコギ
257	ナギナタコウジュ	シソ	315	ヒメドコロ	ヤマノイモ
258	ナキリスゲ	カヤツリグサ	316	ヒメハギ	ヒメハギ
259	ナツズイセン	ヒガンバナ	317	ヒメヒオウギスイセン	アヤメ
260	ナツトウダイ	トウダイグサ	318	ヒメブタナ	キク
261	ナヨクサフジ	マメ	319	ヒメミカンソウ	トウダイグサ
262	ナルトサワギク	キク	320	ヒメムカシヨモギ	ツク
263	ナンカイギボウシ	キジカクシ	321	ヒメヤブラン	キジカクシ
264	ニオイタチツボスミレ	スミレ	322	ヒメヨツバムグラ	アカネ
265	ニガナ	キク	323	ヒメリュウキンカ	キンポウゲ
266	ニワゼキショウ	アヤメ	324	ヒヨドリジョウゴ	ナス
267	ニワホコリ	イネ	325	ヒヨドリバナ	キク
268	ヌカキビ	イネ	326	ヒロハホウキギク	キク
269	ヌカボ	イネ	327	フキ	キク
270	ヌスビトハギ	マメ	328	フジバカマ	キク
271	ネジバナ	ラン	329	フタリシズカ	センリョウ
272	ネズミノオ	イネ	330	フトイ	イグサ
273	ノアザミ	キク	331	フモトスミレ	スミレ
274	ノガリヤス	イネ	332	フラサバソウ	オオバコ
275	ノカンゾウ	ワスレグサ	333	ヘクソカズラ	アカネ
276	ノギラン	キンコウカ	334	ベニバナポロギク	キク
277	ノコンギク	キク	335	ヘビイチゴ	バラ
278	ノチドメ	ウコギ	336	ヘラオオバコ	オオバコ
279	ノビル	ヒガンバナ	337	ヘラオモダカ	オモダカ
280	ノボロギク	キク	338	ホウズキ	ナス
281	ノミノフスマ	ナデシコ	339	ホソアオゲイトウ	ヒユ
282	ハシカグサ	アカネ	340	ホソバツルノゲイトウ	ヒユ
283	バショウ	バショウ	341	ホソバナチチコグサモドキ	キク
284	ハタケニラ	ネギ	342	ホソムギ	イネ
285	ハナイバナ	ムラサキ	343	ボタンヅル	キンポウゲ
286	ハナカタバミ	カタバミ	344	ホトケノザ	シソ
287	ハナヌカススキ	イネ	345	ボントクタデ	タデ
288	ハナハマセンブリ	リンドウ	346	マスクサ	カヤツリグサ

			2019年4月から2020年11月までに確認した植物（木本）	
種名	科名	種名	科名	
347	マツバウンラン	オオバコ	1	アオキ
348	マツバゼリ	セリ	2	アカマツ
349	マメカミツレ	キク	3	アカメガシワ
350	マメゲンバイナズナ	アブラナ	4	アキグミ
351	ミズヒキ（斑入り）	タデ	5	アキニレ
352	ミズヒキ	タデ	6	アケビ
353	ミゾイチゴツナギ	イネ	7	アジサイ
354	ミゾソバ	タデ	8	アスナロ
355	ミソハギ	ミソハギ	9	アセビ
356	ミチタネツケバナ	アブラナ	10	アベマキ
357	ミツバ	セリ	11	アメリカデイゴ
358	ミツバツチグリ	バラ	12	アラカシ
359	ミドリハコベ	ナデシコ	13	イタヤカエデ
360	ミミナグサ	ナデシコ	14	イチイ
361	ミヤコグサ	マメ	15	イチョウ
362	ミョウガ	ショウガ	16	イチヨウ
363	ムシクサ	オオバコ	17	イトヒバ
364	ムラサキカタバミ	カタバミ	18	イヌザンショウ
365	ムラサキケマン	ケシ	19	イヌツゲ
366	ムラサキサギゴケ	ハエドクソウ	20	イヌビワ
367	ムラサキニガナ	キク	21	イヌマキ
368	メハジキ	シソ	22	イボタノキ
369	メヒシバ	イネ	23	イロハカエデ
370	メマツヨイグサ	アカバナ	24	ウツギ
371	メリケンガヤツリ	カヤツリグサ	25	ウバメガシ
372	メリケンカルカヤ	イネ	26	ウメ
373	ヤエムグラ	アカネ	27	ウラジロガシ
374	ヤナギタデ	タデ	28	ウリカエデ
375	ヤハズソウ	マメ	29	ウリハダカエデ
376	ヤブガラシ	ブドウ	30	エゴノキ
377	ヤブカンゾウ	ワスレグサ	31	エノキ
378	ヤブタバコ	キク	32	オオシマザクラ
379	ヤブタバコ	キク	33	カイヅカイブキ
380	ヤブニンジン	セリ	34	カキノキ
381	ヤブマオ	イラクサ	35	カクレミノ
382	ヤブミョウガ	ツユクサ	36	カスミザクラ
383	ヤブラン	キジカクシ	37	カツラギグミ
384	ヤマアイ	トウダイグサ	38	カナメモチ
385	ヤマノイモ	ヤマノイモ	39	ガマズミ
386	ヤマムグラ	アカネ	40	カマツカ
387	ヤマユリ	ユリ	41	カヤ
388	ユウスゲ	ワスレグサ	42	カラスザンショウ
389	ユープリウスデージー	キク	43	カラタネオガタマ
390	ユキノシタ	ユキノシタ	44	カワズザクラ
391	ヨウシュヤマゴボウ	ヤマゴボウ	45	カンヒザクラ
392	ヨシ	イネ	46	キイシモツケ
393	ヨメナ	キク	47	キササゲ
394	ヨモギ	キク	48	キツタ
395	リュウキュウヤブラン	キジカクシ	49	キハダ
396	リュウノウギク	キク	50	ギョイコウ
397	ワレモコウ	バラ	51	キョウチクトウ
			52	キリ
			53	キンモクセイ
			54	クコ
			55	クサイチゴ
			56	クサギ
			57	クスノキ

	種名	科名		種名	科名
58	クチナシ	アカネ	116	タブノキ	クスノキ
59	クヌギ	ブナ	117	タラノキ	ウコギ
60	クマノミズキ	ミズキ	118	タラノキ (メダラ)	ウコギ
61	クリ	ブナ	119	タラヨウ	モチノキ
62	クルメツツジ	ツツジ	120	チャノキ	ツバキ
63	クロガネモチ	モチノキ	121	チャンチンモドキ	ウルシ
64	クロチク	イネ	122	ツガ	マツ
65	クロバイ	ハイノキ	123	ツクシハギ	マメ
66	クロバナエンジュ	マメ	124	ツゲ	ツゲ
67	クロマツ	マツ	125	ツルウメモドキ	クロウメモドキ
68	クワ (ウンリュグワ)	クワ	126	ツルニチニチソウ	キョウチクトウ
69	ケケンポナシ	クロウメモドキ	127	テイカカズラ	キョウチクトウ
70	ゲッケイジュ	クスノキ	128	テンダイウヤク	クスノキ
71	ケハギ	マメ	129	ドウダンツツジ	ツツジ
72	ケヤキ	ニレ	130	トウネズミモチ	モクセイ
73	ケンポナシ	クロウメモドキ	131	トガサワラ	ヒノキ
74	コウヤボウキ	キク	132	トチノキ	トチノキ
75	コウヤマキ	コウヤマキ	133	トベラ	トベラ
76	コナラ	ブナ	134	ドロノシモツケ	バラ
77	コノテガシワ	ヒノキ	135	ナギ	マキ
78	コブシ	モクレン	136	ナツフジ	マメ
79	コマユミ	ニシキギ	137	ナツメ	クロウメモドキ
80	ゴンズイ	ミツバウツギ	138	ナナミノキ	モチノキ
81	サイカチ	マメ	139	ナワシロイチゴ	バラ
82	ザイフリボク (シデザクラ)	バラ	140	ナワシログミ	グミ
83	サカキ	モッコク	141	ナンテン	メギ
84	サカキカズラ	キョウチクトウ	142	ナンキンハゼ	トウダイグサ
85	サザンカ	ツバキ	143	ナンテンハギ	マメ
86	サツキツツジ	ツツジ	144	ニシキハギ	マメ
87	サルスベリ	ミソハギ	145	ニツケイ	クスノキ
88	サワラ	ヒノキ	146	ニワウメ	バラ
89	サンゴジュ	ガマズミ	147	ニワウルシ	ニガキ
90	サンシュユ	ミズキ	148	ヌルデ	ウルシ
91	シイノキ (ツブラジイ)	ブナ	149	ネコハギ	マメ
92	シキミ	マツブサ	150	ネザサ	イネ
93	シナサワグルミ	クルミ	151	ネジキ	ツツジ
94	シナレンギョウ	モクセイ	152	ネズミサシ	マツ
95	シマトネリコ	モクセイ	153	ネズミモチ	モチノキ
96	シャクナゲ	ツツジ	154	ネムノキ	マメ
97	ジャケツイバラ	マメ	155	ノイバラ	バラ
98	シャシャンボ	ツツジ	156	ノグルミ	クルミ
99	シャリンバイ	バラ	157	ノダフジ	マメ
100	シュロ	ヤシ	158	ノブドウ	ブドウ
101	シラカシ	ブナ	159	バイカウツギ	アジサイ
102	シラハギ	マメ	160	ハクウンボク	エゴノキ
103	シロダモ	クスノキ	161	バクチノキ	バラ
104	ジンチョウゲ	ジンチョウゲ	162	ハクチョウゲ	アカネ
105	スイカズラ	スイカズラ	163	ハクモクレン	モクレン
106	スギ	ヒノキ	164	ハコネウツギ	タニウツギ
107	スホウチク	イネ	165	ハゼノキ	ウルシ
108	スモモ	バラ	166	ハナズオウ	マメ
109	セイヨウバクチノキ	バラ	167	ハナヅノツクバネウツギ	アカネ
110	センダン	センダン	168	ハナノキ	ムクロジ
111	センリョウ	センリョウ	169	ハナモモ	バラ
112	ソテツ	ソテツ	170	ハマヒサカキ	ツバキ
113	ソメイヨシノ	バラ	171	ヒイラギ	モクセイ
114	ダイオウショウ	マツ	172	ヒイラギナンテン	メギ
115	タチバナ	ミカン	173	ヒサカキ	ツバキ

種名	科名	種名	科名		
174	ヒトツバハギ	ミカンソウ	232	リョウブ	リョウブ
175	ピナンカズラ	マツブサ	233	ロウバイ	ロウバイ
176	ヒノキ	ヒノキ			
177	ヒメウツギ	アジサイ			
178	ヒメコウゾ	クワ			
179	ヒメナンテン	メギ			
180	ヒメズリハ	トウダイグサ	2019年4月から2020年11月までに確認した植物 (シダ)		
181	ヒラドツツジ	ツツジ			
182	ビワ	バラ			
183	フウ	マンサク	1	イヌシダ	コバノイシカグマ
184	フジウツギ	フジウツギ	2	イノモトソウ	イノモトソウ
185	フユイチゴ	バラ	3	ウラジロ	ウラジロ
186	フヨウ	アオイ	4	オオイタチシダ	オシダ
187	ホオノキ	モクレン	5	オオタニワタリ	チャセンシダ
188	ボケ	バラ	6	オオハナワラビ	ハナヤスリ
189	ボタン	ボタン	7	オオバノイノモトソウ	イノモトソウ
190	ポプラ	ヤナギ	8	オニヤブソテツ	オシダ
191	ホルトノキ	ホルトノキ	9	カタヒバ	イワヒバ
192	マサキ	ニシキギ	10	カニクサ	フサシダ
193	マダケ	イネ	11	キジノオシダ	キジノオシダ
194	マテバシイ	ブナ	12	クマワラビ	オシダ
195	マユミ	ニシキギ	13	クラマゴケ	イワヒバ
196	マルバアオダモ	モクセイ	14	ゲジゲジシダ	ヒメシダ
197	マルバウツギ	アジサイ	15	コハシゴシダ	ヒメシダ
198	マルバハギ	マメ	16	シシガシラ	シシガシラ
199	マンリョウ	サクラソウ	17	スギナ	トクサ
200	ミツデカエデ	ムクロジ	18	ゼンマイ	ゼンマイ
201	ミツバアケビ	アケビ	19	タチシノブ	ホウライシダ
202	ミツマタ	ジンチョウゲ	20	タマシダ	ツルシダ
203	ミヤギノハギ	マメ	21	トクサ	トクサ
204	ムクゲ	アオイ	22	ノキシノブ	ウラボシ
205	ムクノキ	アサ	23	ハコネシダ	ホウライシダ
206	ムベ	アケビ	24	ハシゴシダ	ヒメシダ
207	ムラサキシキブ	シソ	25	ハリガネワラビ	ヒメシダ
208	メギ	メギ	26	ヒトツバ	ウラボシ
209	メダケ	イネ	27	フユノハナワラビ	ハナヤスリ
210	メタセコイア	ヒノキ	28	ベニシダ	オシダ
211	メドハギ	マメ	29	ホシダ	ヒメシダ
212	モウソウチク	イネ	30	ホラシノブ	ホングウシダ
213	モチツツジ	ツツジ	31	マメヅタ	ウラボシ
214	モチノキ	モチノキ	32	ミゾシダ	ヒメシダ
215	モッコク	モッコク	33	ミツデウラボシ	ウラボシ
216	モミ	マツ	34	ミドリヒメワラビ	ヒメシダ
217	ヤツデ	ウコギ	35	ヤブソテツ	オシダ
218	ヤドリギ	ヤドリギ	36	ヤワラシダ	ヒメシダ
219	ヤブコウジ	サクラソウ	37	ワラビ	コバノイシカグマ
220	ヤブツバキ	ツバキ			
221	ヤブニッケイ	クスノキ			
222	ヤブムラサキ	シソ			
223	ヤマザクラ	バラ			
224	ヤマハギ	マメ			
225	ヤマハゼ	ウルシ			
226	ヤマブキ	バラ			
227	ヤマモモ	ヤマモモ			
228	ユキヤナギ	バラ			
229	ユズリハ	トウダイグサ			
230	ユリノキ	モクレン			
231	ラカンマキ	マキ			

令和元年度 紀伊風土記の丘 年報 第47号
紀伊風土記の丘 研究紀要 第9号

発行日	令和3年3月31日
編集発行	和歌山県立紀伊風土記の丘 和歌山市岩橋1411 TEL 073-471-6123 / FAX 073-471-6120
印刷	株式会社 おかだプリント